

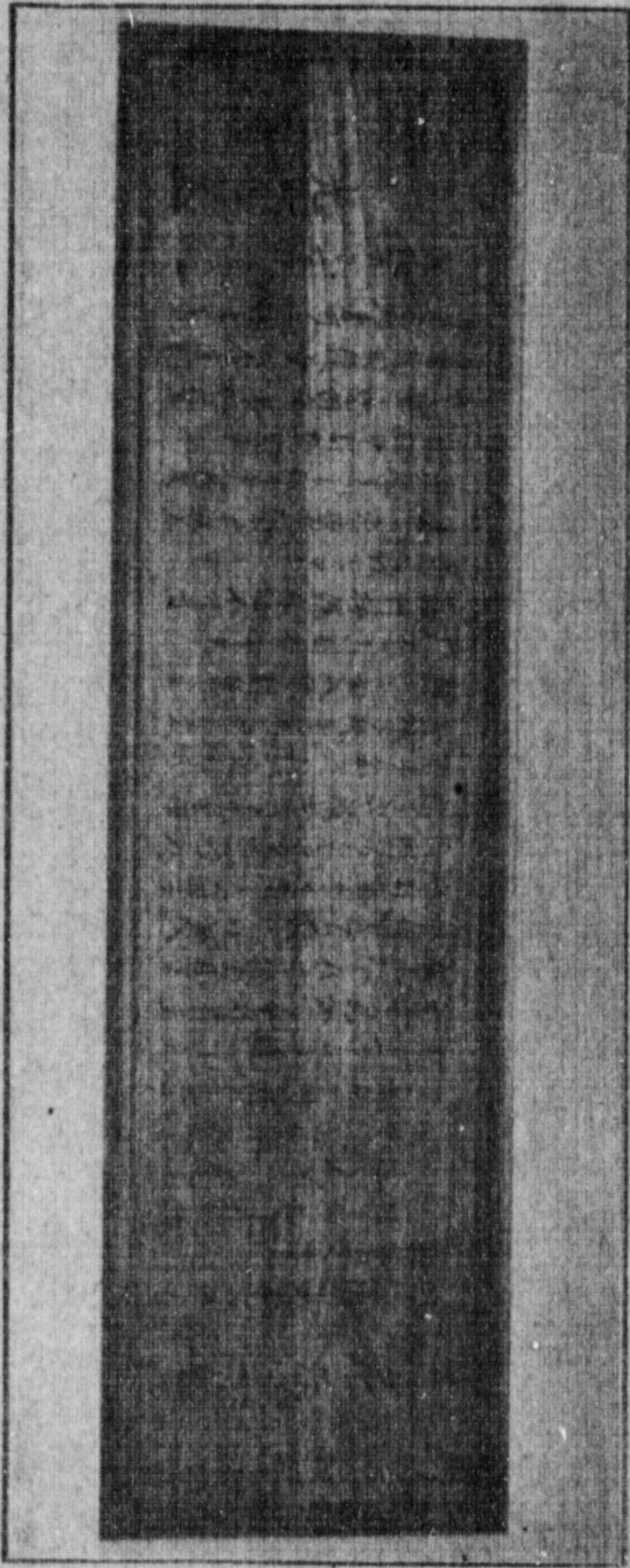
324-200

法岸法洲法道三師遺稿

大日比三師講說集

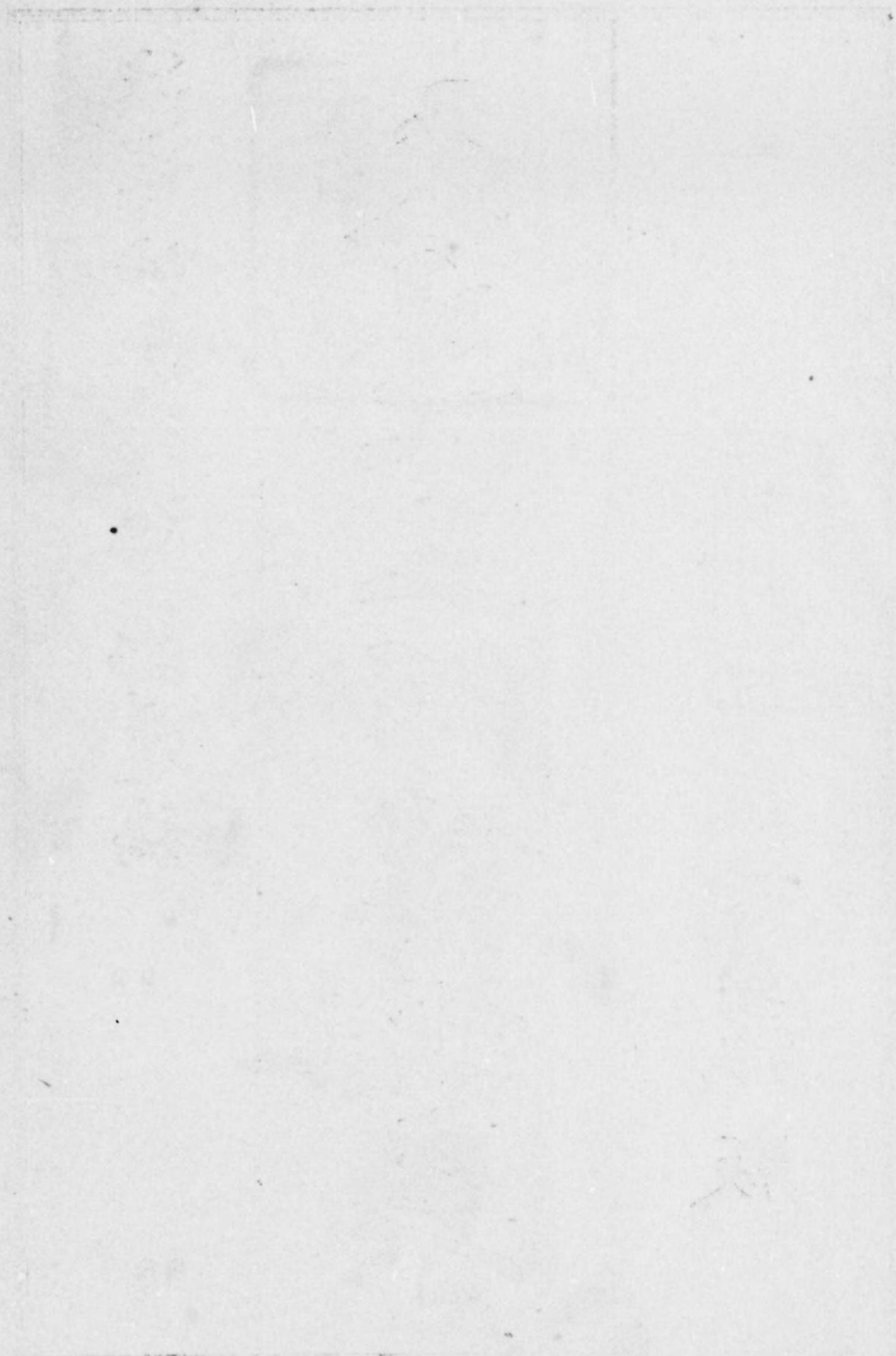
明治
43. 9. 29
内交

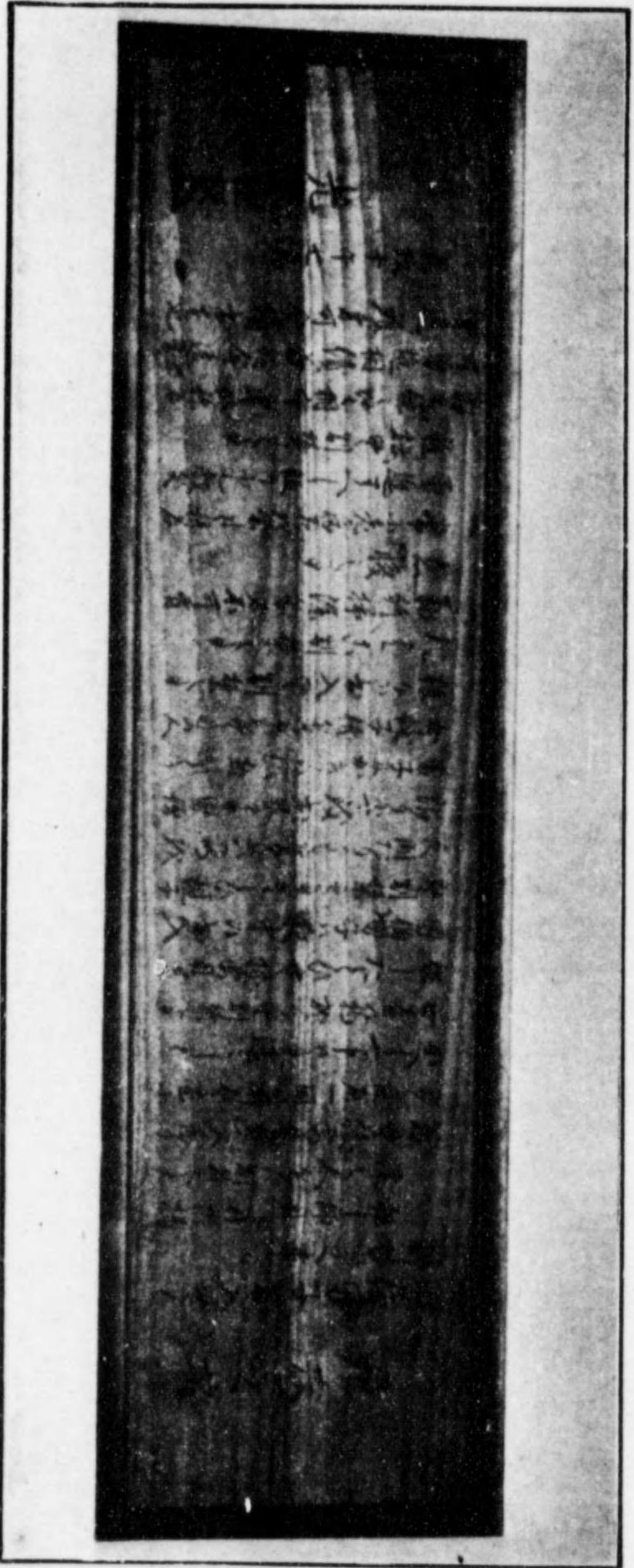
長州西園寺藏版



老師光譽法岸上人御眞筆

(法船庵之船頭)

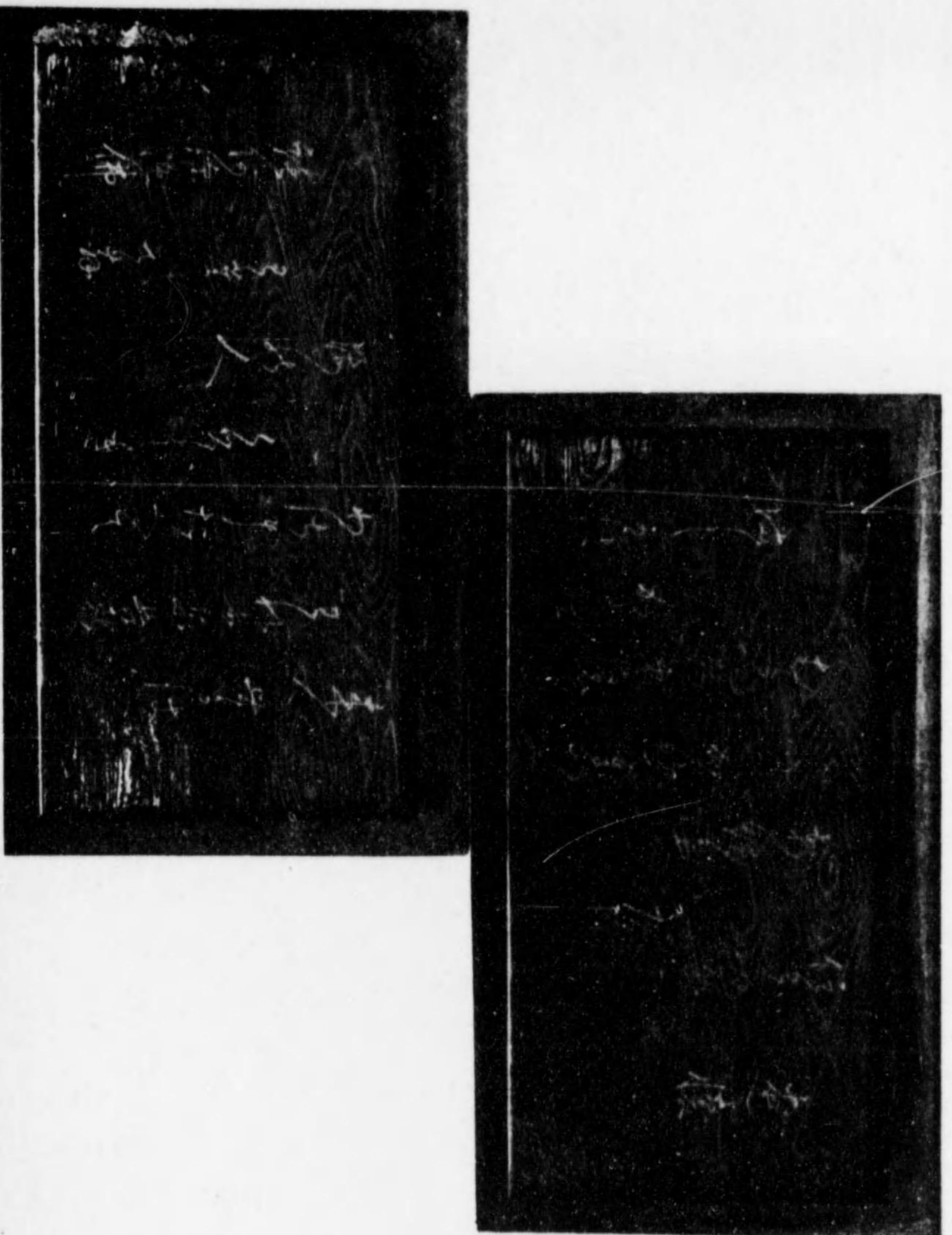




老師光譽法岸上人御真筆

(法船庵之扁額)

先師承譽法洲上人御眞筆



(西圓寺隱室袋柳之戸面)

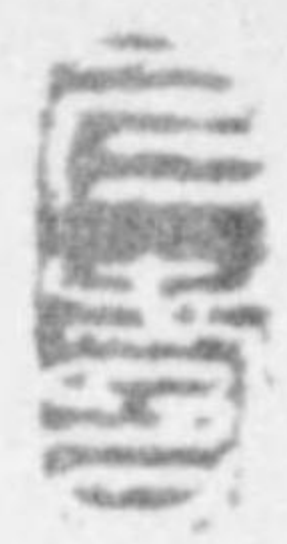


尊師元譽法道上人御真筆

(西園寺書藏之扁額)

天 下 靡 其
德 令 道 化
作 其 教 法

天 下 靡 其
德 令 道 化
以 其 教 法



善導大師の御自贊



善導大師、信機信法の妙釋は
浄土宗意の故實なり

人なみに

世を捨ててし

すみ衣

うしや

ころろに

かつけ

かねぬる



(法洲上人老年斜古溪(大日比)に隱遁の
日、牛身に墨染の衣を纏ひつゝ、念佛
せる圖を畫かしめての御自贊)

向譽關通上人より弟子光譽法岸
上人へ夢定中に賜はりし御詠

唯としいふ

唯としいふ字そ

唯なれや

唯としいふ字も

はや唯の唯

御垂誠

我人常に心に係て用心すべきは、憍慢高擧の心にて候、遺教經に云、憍慢を増長することは、世俗白衣の宜しき所にあらず、いかに況や出家入道の人にて於てをや等、又元祖大師曰、憍慢の心發りぬれば、彌陀も諸佛も護念し給はずなりぬれば、惡魔の爲に惱さるゝなり、恐るべし慎しむべし等と云々。是等の佛祖の遺誠を警策として、能々慎むべき事に候、よきに就ては、我よしの心出るが凡夫の常の習ひなり、其よしとおもふが、とりも直さず惡心なるをや、又惡きに就ては、其際限をしらず、兎にも角にも取どころなきが、我等が身や心の有さまなれば、只「淺ましとわぶるばかりを手向にて、となふる外のこゝろあらじな」、嗚呼助け給へ南無阿彌陀佛。(已上老師法岸上人の御垂誠)

(1) 愚老謹で御垂誠の義趣を熟思し奉るに、一往再往の二義あるべし、一往の義とは、謂く十使は共に通佛法の惑障の根本なりといへども、是を割判するときは、五利使は破石にたとへられて、易斷の頼みあり、五鈍使は藕絲に譬せられて、難斷の煩惱なれば、しはらく易斷の五利を閑きて、難斷五鈍の慢過を擧て、これを抑制し給へるか、されども是は一往の淺義、恐らくは御垂誠の本意にはあ

(2)

らざるべし、次に再往の義とは、謂く難斷煩惱の中にて、貪瞋癡疑の四鈍を閑きて、殊に慢過を擧給へるは、夫慢には七九十二等の合離分別の多種ありといへども、畢竟自恃輕他の心を出されば、別して我淨土門に大害をなす事、自餘の及ぶ所にあらず、其故は慢は既に自恃輕他の心なり、争か信機信法を安心の極致とし、三佛大悲の教意願に隨順するを、極則とする宗義に相應せんや、其違逆する事水火黑白も猶比類にあらず、これによりて往生成佛の大利益をうしなはしむ、さるから尊師の悲懷、はじめに經釋の明文を掲げ、次に生涯受用の蘊奥を盡し、懇々垂誠し給へるが、是再往の深義にして、御垂誠の本意こゝに在べし、嗚呼たどひ哉尊師の垂誠、愚老をして邪路に陥入せしめず、順次に樂邦に往詣せしめ給ふこと、全く尊師の賜なり、既に尊師は慈念深重にして、不請の愚老にすら此恩賜ありし、然るに汝は敬慎にして懇請をなす、愚老も亦木石にあらず、如何ぞこれを耳外にせん、故に生涯又なく信受せし、尊師御垂誠の一條を拜寫して汝に與ふ、愚老今年世壽六十七歳、識力ともにおとろへて、揮筆も杵をあぐるが如し、謝世既に旦暮に逼れば、これをもて又遺囑の語とす、語も語にあらず、文も文にあらずるをもて、等閑の看をなさず、尊師御垂誠の妙所に悟入して、自利々他せよ、さらば遠からず愚老と汝と共に、尊師の誘引

に隨ひ、樂邦の中臺に入り、彌陀慈父に隨侍し、百法妙門六通自在、自他兼濟の大利益を得んこと、掌を指が如し、豈快にあらずや、至囑々々。

天保二年十月末の五日、吉水正流の遠裔、託阿彌陀佛法州、老眼を拭ひてこれをしるし、弟子西圓寺現住權上人法道に授與し畢(已上先師法洲上人の御垂誠)

夫正月元三は年月日の元にて、一年の因等起に當る、萬の事始なればこそ、一年の籌は正月にありといへり、さて心を正すべき月なれば、一月とはいはずして正月といひ、心神を改むるの義より、改神の年ともいへり、されば誰々も心を正して萬事を慎み、舊き弊を改むべき事なり。先第一親に孝行を盡すべし、夫孝は百行の本なれば、衆妙の門といふ、故に三道一致にこれを教ゆ、佛教には孝名爲戒の金言あり、神教には父母を内外兩宮と仰がせ、儒教には忠臣を孝子の門にもとむといへり、鳩に三枝の禮、鳥に反哺の孝とて、禽鳥すらかく孝をせなり、今人として不孝なるは、彼鳥類にも劣りて、所謂人面獸心なるべし、後世は報土に往生するもの、今世に於て人面獸心の汚名を蒙りて可ならんや、よくよく思惟すべし。又身の程をしること至て肝要なり、されば吾身の分際を能々知り、衣食住をはじめ、一切の交際に至るまで、牛は牛連れ、馬は馬づれがよきなり、萬事につきて儉素を守り、かならず上見て交際せず、隨分下を

(8)

(4) 見倣ふべきなり、「上みればたらはぬ事の多かりし、かききてしのべたのが身のはど」。又身持心持は常に正しく、日月のすなはにめぐるが如く、晝夜こゝろに懈怠なく、それ〴〵家業を出精すべし。又貪欲の凡夫の常色とは申ながら、強欲なる事をよく〴〵慎むべし、林際に鹿を逐ふ獵師は山を見ず、市中に金を攫む偷兒は人を知らず、狐は鼠を貪りて竹筴に死し、猩々は酒の爲に命をうしなふ、今強欲に耽りて、屬饜ことなき人を見るに、彼狐や猩々にも過たり、又蠅は膠黏に死し、蚊は燈蓋に投ずるが如く、強欲のために家を失ひ身を亡す者、世間勝て計べからず、強欲をはたらき金銀を積で子孫に遺すは、慈悲に似たる無慈悲なり、子は其金ゆゑに驕奢に長じ、終に其家を泯滅するに至り、親は強欲の造罪に墮獄して、永劫苦報を免れざるにいたらん、豈淺ましき限にあらずや、故に司馬温公の曰、積金遺子孫子孫未必守、乃主不如積陰德於冥々之中、以爲子孫長久之計、已上これ實に後人の龜鑑なれば、誰々も此語を肝に鏤め、なるたけ強欲の所業を慎みて、陰徳をこそ積たき事なれ。又正月には福引寶引など號けて、博奕の手習する者あり、凡て博奕の類は、天下一統の禁制なり、されば博奕に類せる事をなすは、全く政令に背ける罪人なり、かゝる惡しき遊びを禁せざれば、終に大戾たる心を長じ、穿窬などをなさんもはかりがたければ、

能々これを慎むべし。又圍碁象碁小謠或は三絃淨瑠璃流行歌曲等、總じて遊藝と號くるものは、其技をもて生業とせる者は、制外なれども、道を守り家業を勤むる者の、學ぶべき事にあらず、皆自を損じ他を損する、遊治郎の業なれば、ゆめ〴〵之を學ぶことなかれ。又浮世一偏の人は左まれ右まれ、出離生死を願ふ念佛の行者は、一際吾身を省て、身の行ひ心の居やう、總て倫理禮節にかなふやうにすべし、畢竟は無常をわすれぬを第一として、念死念佛すべし、朝暮身の起臥には、必ず十念を唱へよ、「阿彌陀佛と十聲となへてまゐるまゐ、なきねむりになりもこそすれ」、又「このねぬる朝はまづそおもふべし、夜のはせにしも死なでありしと」、又「あけぬらん加茂の川原に千鳥鳴、けふも空しく暮むとすらん」、又先師上人は「いぬるとき御名よばふのはやすけれど、覺るたゞちに繼はかたけれ」、又「夢さむるかねの響にうちそへて、十たびの御名をとなへつるか」等、よく〴〵翫味すべし。又御忌會彼岸十夜等、其他祖師祖先の忌日には、必ず速夜より在家の信者は酒肉五辛を禁じ、唯念佛して懇に回向すべし、其時にあたりて婚姻元服、すべての賀筵等、必ず〴〵用ふる事なく、精進を盡すべし、故に古徳は、精進せざれば柱の根を斬が如しと誠め給へり、夫上は佛天の罰を被り、下は先祖諸靈の怨を受け、其家の斷絶することを謂へるなり。又當村中

(6) に新亡あらば、老幼まで残らず打集ひて、長き線香五炷の定めなれば、高笑雑談を堅く慎しむ、念佛回向叮嚀に勤むべし、總て命終の時より中陰の間は、最大切に追善を營むべき等、其制に背くべからず。又總じては專修念佛の行者、別しては當村中の者、男女を他へ結親せんに、先專修の家を撰ぶべし、必ず貧福に拘泥することなかれ、宗旨に依て往生の得不を定むるにはあらざんめれど、諺にいふ朱に交はれば赤くなる、墨に混ずれば黒くなるの理にて、終には邪説に誑惑せられて、邪見に陷溺するもの世間に多し、正見なれば往益を得、邪見なれば必ず墮獄す、これ祖々の論釋、青天白日の如し、故に自身は報土の樂報を極め、子孫を火坑に陷むこと、豈無慈悲の極と謂ざるべけんや、父母たらん者豫て心得おくべき事なり。又正しく歸ける期に臨まば、祖先の墳墓、檀那寺の本尊及び祖師前等三拜し畢り、寺主より十念を拜受すべし。又妊娠五箇月にいたらば、胎兒の爲に日課十稱を代受せよ、生後必ず利益あらん、又産後百日にいたらば、又日課十稱を加倍し、兒三歳までは母これを代修し、四歳にならば課號を授與し、兒の進みて唱ふるやうに、勸めこしらへて、必ず兒に自修せしむべし。又月足らずの兒を産せし時、寺へもしらせず埋葬する者あり、こは甚た不實にこそ、上にもいふごとく、家滅亡の基なれば慎むべし。又鬼門

金神方位方角地相家相の吉凶禍福等、世人のやかましくいふて、狼狽さわぐ事なれども、專修念佛の行者には、毫もその祟りある事なし、其理を能々信知して、ゆめ／＼陰陽家者流の言に惑さるゝことなかれ、其鬼門金神等の事を略して示さん、夫鬼門の事諸説紛々たれども、其源天竺にあることなり、天竺の良にあたり崑崙山あり、其石窟に青赤等の鬼住て出入す、これを鬼門といふ、其鬼はもと餓鬼の種類にして、卑き者なり、金神もまた卑き神なり、其故は先この世界を主宰し給へるは、梵天王なり、梵天王の命を、帝釋天に下し、帝釋天これを四天王に命じ、四天王これを五行の神に命せらる、されば金神は五行の一たる金を司どり、金氣殺伐の權を執りて、惡人を罰し給へる最あら／＼しき神なり、しかるに願王阿彌陀如來は、三千界の至尊なれば、其梵天王より尊きことはいふも更なり、其本願名號は即萬善の妙體なり、かく萬善の妙體本願の名號を、口々に唱ふる行者なれば、至尊の勅命を信受する、即ち法王子なりといへり、かゝる善行を修する法王子へ、金神いかで罰を加ふることを得んや、況や金神等の尊重する、梵天帝釋四天王諸天善神圍繞して、念佛の行者を護念し給ふを、鬼門金神的殺等、上司の命を犯して、善行を修する法王子へ、祟をなす理あらんや、此理をよく／＼信受すべし、滔々たる不安心の者に倣ふて、い

(8)

らぬ鬼門金神的殺と狼狽、攝取の光明中を飛出ることなかれ。又五月早乙女サトメ中は、かならず念佛を申々植付すべし、念々不捨の意樂を忘るゝことなかれ、且つ日輪煦育の餘光により、漸々早苗も生長し、終に實のりて米となるなり、殊に日輪は阿彌陀の垂跡なれば、不求自得の利益ならん、かの智明房の念佛をもて田歌とせられし、賢き餘風を學ぶべし。又當村は田圃少き海濱なれば、殺生を家業とせざることを得ざれども、意樂起惡正見、意樂起惡邪見といふ事あり、かく殺生を生業とするは、固より意業は惡なれども、かゝる惡業をなす事よと詫るは正見なり、生業なればと許すは邪見なり、此正邪の際をよく辨知せざれば、往生の得不到關係する一大事なり、彼「罪きゆる誓の船に乗るとして、かつにのりたる火の車かな」といへる、本願はこりとなることなかれ、恐るべし慎むべし、又已ことを得ずして爲す殺生なれば、なるたけ殘忍なる殺生は禁すべき事なり、彼大敷網、撒網、夜漁ノリの類、(夜分、魚の寝たるを擇て取を、方言にこれを夜ぶれといふ)、又は鳥銃獵等は、皆すまじき殘忍なる殺生なり、世教にすら殘忍の殺生を誡めて、釣而不網、弋不射宿といへり、況や出世無上の大教を信受せる念佛の行者に於てをや、譬は今罪もなきに、當村の四面を圍住し、一人も逃るゝ所なく、攻殺する人あるか、又は晝の稼に疲勞て、よく寢入たるを

りかゞひ、夜に乗じて吾を刺殺す者あらば、誰々もわが心に於て、彼等を怨みざる者あらんや、世の諺にいふ、我身を爪研て、人の痛さをしるといふ、近き譬をとりて、ゆめ／＼殘忍なる殺生を爲すことなかれ。又當村中の者は、皆家業に暇なき身なれば、閑時日を俟て念佛せんとおもはゞ、生涯念佛する期はなきなり、故に老師これを洞察し給ひ、日々暮の六ツ時より五ツ時まで、初夜念佛といふを創おかれしなり、僅に一時の(舊の一時を云ふ)間なれば、相互に誘引して參詣し、日々の課佛を修すべし。

かくの如く數々嚴誠せば、さぞかしうたてく思ふらんかし、されども先師の御臨末に、予が手を執て遺囑し給へる一大事、各々が往生の得不到關係するけぢめにして、且つ予も亦先師へ誓言にまで及びし事なれば、豈嚴誠せではあらざるべきや。(已上尊師法道上人の御垂誠)

(9)

化他御誓願文

至心ニ歸命シ奉ル、西方願王阿彌陀佛、教主釋迦牟尼佛、六方恒沙證誠諸佛、觀世音菩薩、大勢至菩薩、諸菩薩清淨大海衆、光明善導大師、圓光東漸大師、尊師向譽上人等、願クハ慈愍ヲ以テ攝取護念シ玉ヘ、弟子(法岸)今當ニ佛祖廣大ノ慈恩ヲ報シ奉ラシガ爲ニ、利他ノ願ヲ發起ス、仰ギ願クハ佛祖ノ大悲、我ヲ捨テ給ハズ、哀愍納受證明護念シ給ヘ。

我今誓願ス、佛ノ願力ニ乗ジテ、安養界ニ到リナバ、速ニ如來ノ記莂ヲ蒙リ、直ニ生死ニ還來シ十方無量ノ衆生ヲ利益セン、爾ノ時必圓光大師ノ化導ニ隨順シテ、如來ノ本願唯口稱ノ名號ヲ演說シ、十方法界ノ衆生ヲ、悉ク極樂世界ニ引導シ、共ニ無上道ニ至ラン、我此願念成就スルマデハ、誓テ永ク佛果ヲ證セシ、此願終ニ尅果スル事アラバ、常ニ諸佛ノ護念ヲ蒙リ、行住坐臥稱號念ラズ、自然ニ疾ク口稱三昧ヲ發得シ、心眼即開ノ大益ヲ得テ、此報命アラン内、大師ノ隨自意本願唯稱ヲ勸誘シ、諸ノ衆生ト共ニ安養界ニ到ラン、上ノ誓願空シカラズシテ、世々ヲ經テ終ニ成就スル事アラバ、今世ニ於テ自然ニ無量ノ利益アラシ、若シ又勝他名聞、渡世誑惑、財欲不淨ノ念ニ住シテ此法ヲ弘通シ、演說スル

法、本願ノ正意ニ違ヒ、大師ノ隨自意ニ背キ、異ヲ顯シ衆ヲ惑ハス等ノ事アラバ、直ニ現罰ヲ蒙リ、極重惡病ヲ受ケ、未來永劫惡趣ニ墮在セン、若シ又佛祖ノ正意ニ契ハズ、速ニ有緣ノ依處ニ至ラセ給ヒ、如來大悲ノ加護ヲ蒙リ、自行化他共ニ諸ノ障ナク、日々勇進稱名シ、唱フル所ノ大悲本願稱名ノ功德ヲ、平等ニ法界ノ一切衆生ニ施シ、普ク大慈ノ光益ニアツカリ、三途ノ衆生モ悉ク解脱スル事ヲ得、乃至人間天上ノ衆、皆專修ノ門ニ歸入シ、極樂界ニ到ラン、某モトヨリ愚鈍無智ノ身ナリ、爭カ本願ノ深意ヲ演說スル事ヲ得ンヤ、仰ギ願クハ如來ノ大誓願力、弟子ガ少志ヲ憐ミ給ヒ、マサニ此法ヲ演說セント欲スルトキハ、如來終窮無極ノ大悲、弟子ガ舌頭ニウツリ入ラセ給ヒ、大悲ノ梵音聲ヲモテ、本願ヲ演說セシメ給ヒ、暫モコノ法筵ニ蒞マン者ハ、立ドコロニ本願稱名ニ決心シ、常ニ諸佛ノ護念ニアツカリ、現證現瑞正念往生無窮ナラン、若シ又誹謗不信ノ輩ハ、忽チ現罰ヲ蒙リ、邪ヲ捨テ正ニ歸シ、專修稱名ノ行者トナリテ、順次ニ往生ノ望ミヲ遂ン、仰ギ願クハ如來ノ大悲我ヲ捨給ハズ、常ニ哀愍覆護シ給ヒ、三業ニ障リナク、一期口稱三昧退慢ナク、兼テ死ノ至ルヲ知り、最後命終ノ時諸ノ障リナク、身ニモ心ニモ諸ノ苦痛ナク、身モ心モ快樂ニシテ、禪定ニ入ルガ如ク、阿彌陀佛ト聖衆ト共ニ迎接シ給ヒ、如來ノ本願ニ乗ジテ、

(12)

上品上生ニ往生シ、速ニ大願ヲ成就シ、諸ノ衆生ト共ニ、阿耨多羅三藐三菩提ヲ得ン。

告

安永五丙申九月十五日

京都獅子吼山ノ別房別行道場ニ於テ誓願シ奉ル、

佛子法岸敬白

世壽三十三歲

大日比三師講說集上卷目次

書目	冊數	一部ノ頁數	頁
講說大意	一	一一	一三
阿彌陀經講說	五	二五九	三五
和語燈錄觀經大意釋講說	一	三五	二九五
淨土十樂講說	一	五三	三三一
二十五菩薩迎接曼荼羅講說	五	一六〇	三八五
歸命本願鈔講說	七	二九一	五四五
淨土要略抄講說	二	一三八	八三七

發願文講説……………	一一	九七五
二河白道講説……………	三五	九八七
自信教人信偈講説……………	五	一〇二三

大日比三師講説集 上卷

(三) 師 遺 稿

講説大意

謹で初學の講者に告す、凡そ佛門度生の本意は、機の樂欲に隨ふて、相應の法を示すを肝要とす、故に釋尊衆機の爲に、八萬四千の法門を説き玉へり、されば佛弟子たる者は、専ら指南とすべきことなれども、此は是れ、御在世及び正法の世を表とし、傍ら像法の世に至るの教法なり、既に末法の世に下りぬれば、説者みな凡僧にして、觀機三昧を得ざれば、應病與藥の識見なく、聽者も亦、皆十惡にして、三學無分の劣機なれば、假令ひ、自力修行の法門を聞といへども、もとより其器に

非れば、修行に堪へず、誰か其益を得ることを得んや、故に釋尊時機を觀じて、説法度生すべしとて、末法の世に、聖道自力の法を説くは、乾薪を摧きて、水を求め、濕木を折きて、火を取んとするが如しと、誡め玉へり、然れば今時偏に淨土他力の法門を説くこと、全く釋尊の遺勅に隨順することなれば、たとひ偏執なりと、他門の誹りを聞とも、決して些少も恐慮すること勿れ。

一、他方往生の法門に、二あり、一に雜行往生、二に正行往生なり、二行同く往生を許すといへども、雜行は選捨、非本願の行にて、阿彌陀佛に、疎遠の行なれば、上機すら、百時一二、千時五三

(13)

(14)

の往生にして、下機は、千中無一の失あれば此を勸めず、唯阿彌陀佛に、親近の得ある、正行を勸むるなり、而して此正行に、讀誦、觀察、禮拜、稱名、讚嘆供養の五種ありて、皆阿彌陀佛に親近の得あれども、前三後一は、本願の行に非れば、強て勸むる所に非ず、唯専ら勸むるは、超世大悲の、本願念佛一法にあり、是則阿彌陀佛の本願に契ひ、釋尊の經説に契ひ、善導元祖兩大師、御開發の宗意に契ふ故なり、若し此勸誘を非なりと謗るは、説者を誘ふに非ず、兩尊兩祖を謗る人なれば、争でか此必墮無間の獄人に伴ひて、佛祖の御本意に背くべきや、既に元祖大師は、たとひ斬罪に遇ふとも、一向専修、云はずんばあるべからずとの玉へり、苟も此大師の流れを汲む者、たとひ故障留難ありとも、退屈の心を生ずべけんや、淨教を弘通せんとならば、先斯く心地を堅め、而して後に講説せよ、若爾らずして、是をなさば、たとひ言辭玉を展べ、辯説懸河の如きも、名にあらずんば、必利、豈其益なきのみならんや、却て大

罪を積累するのみ。

一、淨土の法門多しと云へども、要中の要は、三心の法門なり、既に釋尊は、具三心者必生彼國と説き、導師は、若少一心即不得生と釋し玉へり、されば生と不生は、全く三心の具不具にわかれれば、元祖大師、此の經釋の意を述して、淨土宗の肝要は、三心の法門にあるなりとの玉へり、爾れば淨教弘通の人は、専ら此法門を演説すべし、たとひ重説に聽衆厭怠の色をなすとも、是は宿業深重にして、因縁未熟の機なれば、更に心にさしはさむことなかれ、或人問て云、大師三心の法門を、肝要との玉へども、本願所被の正機をば、愚鈍念佛第一と定め、又よくも知らぬ三心きたして、往生や仕損じぬらん、とも誠め玉へり、斯く二説、反轉するはいかなる故にや、答、疾前無藥機前無教の理りなれば、大師三心の勸誡も、所對の機に隨ふて、差別するなり、されば此ことを、舜昌法印の評せられたる、勅修御傳に出たれば、披讀すべし、今其大意を云は、無智無病の人に對して、

ことぐしく、三心きたすれば、かへりて志をみだることもあれば、無益なり、又有智有病の人の三心具せざるも、聖教を學すれば、三心の發ることもあれば、此人の爲には、三心のきた肝要なれば、大師兩様の御勸進あり、此意を知るべしとなり、盡理極成の評、仰ぐべし、又問、大師兩様の御勸進、應病與藥の理り、實に爾るべし、さらば今何ぞ、三心の法門をさたすべきことのみを勸めて、三心無益の義趣を示さるは、云何、答、應病與藥は、一機に對するの教諭なり今は衆機に對する、講説の大意なり、所對既に一多の別あり、教諭何ぞ全同ならん、しかして、衆機に對する中にも、愚鈍無病の機は至て少く、照智有病の機は甚多し、故に無病の少機を傍らにして、有病の多機を教諭すること、祖々傳々、講説の故實なるのみ、怪むこと勿れ。

一、或先哲の云、今時澆末の弊風、説法講談する者、我は是聽徒に正法を教示し、往生の大果を得せしむる爲の、佛使ぞと云ことを思はずして、す

二

べて思惟工夫もなさず、口より出るまゝに、亂説をなす者あり、恐るべく、痛むべく、悲むべきの窮りなり、予は説法するに、其説く下を、兼て草稿し置しを、又三遍已上勤學し、此所斯く説かば、聽者の能聽して、安心を決着すべきや否と、或は説者となり、或は聽者となりて、思惟工夫せずして、説きたることなし、汝等、僧は佛の使にして、至ての大任ぞと云ふことを忘れて、世の弊風にならひ、龐心に説法すべからずと、徒弟を勸誡し玉へりと、嗚呼金言なる哉。往年京師九條西福寺主に、辨譽忍貞上人と云へるありしが、智道兼備にして、毎歲極月大盡日より、七日別行に入り、八日の日中には、淨教開講を、例式とせられけるが、一年其時刻に至りし故、講説に及ばんとせらるゝを、弟子中より、未だ參詣一人もなし、今暫く待玉へと云ふに答へて、我説法は、唯人間を所對とするに非ず、凡そ正法を説く所には、佛菩薩影向し玉ひ、諸天冥衆は空中に雲集して、法益にあづかり玉ふと、經説顯然なれば、疑ふべき理なしと

(15)

(16)

て、常の如く説法をはじめられたるとなり、げにかゝるをぞ眞の佛使と云ふべし、講者必ず此心操にならひて、聽徒の増減を意とせず、唯正義を説くを證とすべし。

一、又云、淨教講説の肝要は、勸誡二門の作略にあり、若し勸門に偏なれば、一念義の如く、本願に誇りて、惡無過の邪見に墮し、如法修行の人を見ては、自力執情にして、他方の安心に暗しと謗り、若し誡門に偏なれば、聖道偏信の徒の如く、戒は佛法の地盤なれば、たとひ念佛するとも、惡人争か往生を得んと、自力を執して、他方大悲の本願を破る、さらば勸誡二門、等分に説くべきやと云ふに、爾らず、念佛すれば、惡人も往生と云ふの法門は、釋尊一代の説教中に、唯淨土一教に説きて、諸經に此説あることなく、又念佛すれば、惡人女人も、順次に生死の苦界を出離し、報土に往生遂ぐると云ふは、唯淨土一宗の所立にして、諸宗にすべてなき法門なれば、勸誡二門等同に説きては、先入の疑執抜けずして、本願所被の正機

となり難き故、超世本願の講説は、勸門七八分に誠門二三分を加説するなり、かゝれば勸門多き故に、聖道自力の固執を抜て、淨信を立させ、誠門少分を加ふる故に、正見を立て、惡無過の邪見に墮さず、是則三祖祖主禪師の、專信本願、兼信因果の、相傳の意也。此意を得て説かざれば、過不及の失を生じて、正信直往の益を施すこと能はずとなり、實に淨教講説の肝要は、勸誡二門の作略にあれば、講者専ら此指南に隨ひて、鍛鍊すべきなり。

一、又云、淨教講説の時、聽衆百人あらんに、十九人は、隨他の説を好むとも、一人の爲に、隨自意の法を説くべし、結縁の益と、順次往生の益と、高卑同日の談にあらざればなり、若し又、百人ながら、皆隨他を好みて、隨自の機一人もなくば、因縁未熟を察知し、講説を止めて、度生は還來を期し、孜孜として自行を策進すべし、而して其功德を、法界の有情に回向すれば、此世の利他も亦闕ることなし、若し此決着なくして、聽衆の

増減によりて、專修の操をみだし、隨他の説をなすときは、自然と自の安心もつかれて、順次往生を遂げ損じ、自他俱溺の大失を生ずるなれば、能能決心すべきなりと。

一、宗門の初學講説の大事は、自讃毀他と、破邪顯正の、區別を知るにあり、其自讃毀他は、梵網經に、波羅夷罪と戒め玉ふ、波羅夷は極惡と翻じ、死して必ず地獄に墮するとなり、又破邪顯正は、涅槃經に、見壞正法、置不阿嘖、當知此人、佛法中怨、非我弟子、と嚴誡し玉へり、凡そ宗々建立に、一抑一揚、種々の義趣ありといへども、爰に盡し難ければ、唯其一端を云は、聖道淨土對待の時、捨聖歸淨の義を説くに、他宗の淺學は、是を自讃毀他のやうに、心得違へるものあり、若し華天密禪等の法は、劣りて利益なく、唯淨土一門のみ、大益ありと云は、自讃毀他とも云ふべし、聖道の諸宗、何れも法は甚深なれども、三學を地盤とする、自力の修行なる故、末世下劣の機に應せざれば、是を捨て、時機相應の、淨土他

力の門に歸入し、生死を過度し、往生成佛の、大果を得べしと教るに、何のあやしむことあらん、既に元祖大師、淨土宗門別開の本書、選擇集の初章段に、委しく此義を述べ玉へり、次に破邪顯正とは、彼日蓮黨が、念佛無間と罵り、一念義徒の、念佛自力と嘲る類ひは、誹謗正法の大邪義なれば、須く是を破して、彌陀の本願、釋尊の經説を顯はすべし、しからざれば末世の凡夫、出離生死の益を失ふ、大害を生ずる故に、講者必涅槃經の遺勅と、祖師代々の化儀にならひ、務めて邪義を拂ふべきなり。

一、或人問て云、獅谷忍微上人の諺論に、一枚起請文を講するに、五重の分別をなし、初重はもとより、大師を信する、男女に對して談するに、唯安心起行を勸めて、滅後の邪論に及ばず、第二重よりは、小黯き人、或は他宗、或は背宗等に、云妨げられ、正義の相承に、疑ひを發す人等に對するに、唯妨難のみを通じて、いたく彼等が邪義を難すべからずとあり、さらば講説には、唯顯正の

(17)

(18)

みして、破邪はすまじきことなるにや、答、對機の教諭と、説法講談の差別は、既に上にも論せし如し、忍微上人に此分別あれども、是は一人一人に對するの、教誡にはなるべけれども、諸人に對する講談には、用ひ難し、其故は、參詣の諸人、其機一樣ならずして、千差萬別なればなり、又他宗及び背宗の邪義を、難破せざれどあるは、いかにも麁言惡口の高聲は、尤忌むべき事なれども、他宗背宗の者の、正義を破する邪難をば、心を用ひて辨斥せざれば、未妨を防ぎ、已妨の者を引かへして、正義の安心を立しむることを得ず、謹で我宗の講者に告す、宗義に害をなさざる、他宗の義を、猥りに難破することなく、若し宗義に害をなすときは、心を用ひて破邪顯正すべし、唯怖畏縮首して、邪正の辯をなすこと能はずんば、斷として登座することなかれ。

一、淨教講説の肝要は、正見と邪見の別を、教示するにあり、今四句をもて分別せば、一善人邪見、二惡人正見、三善人正見、四惡人邪見なり、此中

第三第四の二人は、取捨論をまたず、世人第一善人の邪見と、第二惡人の正見とを、對待しては、通塗因果の道理に泥みて、邪見にても罪なきを取り、正見にても罪あるを、劣れりと、思ひ違ふるなり、若し心中惡無過の邪見を生ずれば、假令日百千の善事をなすとも、其利益あることなし、又煩惱惡業深重なりといへども、始終慚愧の思ひ絶えず、超世の悲願を仰ぎて、念佛すれば、往生の大益を得るなり、故に大師此事を釋して、罪を造れば、決定して地獄に墮つべし、然るに本願の名號を唱ふれば、決定往生せん事の嬉しさよと、喜ぶ時に、本願に乗するなりと示し玉へり、今此正邪二見によりて、佛法に入不入のわかれを、一の譬をもて示さば、正見は四民の如く、邪見は穢多の如し、たとひいか程貧窮なりといへども、士農工商の四民の内なれば、其列を省かんと云者はなき如く、たとひ惡業深重なれども、正見を壞せざれば、佛法中を省かるゝことはなきなり、たとひいか程財寶に富みたりとも、穢多は四民の列に

(19)

加はることを得ざるが如く、たとひいか程善事をなすとも、心中邪見なれば、佛法中に入ることならざるなり、既に佛法外に出る者、いかでか佛法内の利益を得んや、譬に合せて考ふべし、されども此四句は、一往の分別、尅して論ずるときは、今時は既に盡大地の衆生、皆悉十惡と定まる惡世なれば、眞の善人と云べき者あることなし、されば善人の正見なるはもとより、善人の邪見なるさへもなく、唯惡人の邪見なるのみ、世間に充れば、機法二信の釋意によりて、惡人に正見を立しむるの外なき故、爰に心を用ひて、教誡すべきなり。

一、淨教を講説するには、機教の應不知ることを示すと、誹謗正法の邪義を拂はざれば、聽衆うまく本願を信受すること能はざる故、心を用ひて辯示するときは、其意を得て、專修の行者となる者多し、されども夫が中に、また生顯しき機分ありて、小を知りて足れりとする慢心より、他の講説に於て正不を評し、或は異見に對して諍論に及ぶ等の、過ちを生ずることあるものなれば、法の

邪正を辨別することは、僧者すら至て難し、況や在俗に於てをや、よくも知らぬ法門ざたして、自損々他の大罪を造らんより、唯わが乘佛本願、順次往生の爲のみに、聽法すべしと、毎々誠示すべきなり。

一、又若輩の講者、譬喻事實に、男女の情欲にわたる義を談すべからず、勿論佛道に入るの縁、種々あれば、頻呼三小玉の艶詩によりて、徹悟せし禪師もあり、又岩にも松はの戀歌につきて、佛願の大悲に歸入せし行者もあれば、老功の上にては、とまれかくまれ、往昔若年の僧の、姪心を伏せん爲に、不淨觀をなせしに、却て欲心増長し、終に墮落せし人もあれば、尤も用心すべきことなり、又瀧山大善寺貫首讚譽上人の、説法式要に云、少年の詩歌を作るには、懷舊の意ろ、老を嘆くの詞をつかはす、是れ故實なり、今も亦然なり、或は能く聽け、或は耳に入たるか等の詞、初心若輩の説法には、許すべからずとなり、(附て云、初心の講者は、彼式要を見て、講者の用意を知るべし、

猶安心起行の間の指南も、至て懇懇なり、又京師盤察老人の、求道集、南針鈔は、要文を廣く集めて、誤りなき書なれば、座右に置いて、引用すべきなり。

一、今時念佛を勧進するに、不正の勧め三等あり、一人は、無病息災富貴延命の爲に、申せと勸む、是は出離生死往生成佛の妙法をして、流轉苦界の縛繩となすなれば、是れ最も邪勸なり、又一人は現當兩益二世安樂の爲に、申せと勸む、是も亦總別二種の安心に背く、若少一心、即不得生は、導祖の決判、擧げる舟に棹さす如しとは、問師の誠文、爾れば是も亦邪勸なり、又一人は、念佛は往生の爲、此世の祈りには、各々司る法にて祈れと勸む、たとひ念佛にて祈らすとも、餘法をもても祈る時は、娑婆執著の外ならんや、さらば總別二種の安心立たざること、上の人に同じければ、是も猶邪勸の罅を出す、今此三説の失を一つの譬を以て示さば、厭穢欣淨は藥の如く、娑婆執著は毒のごとし、されば最初の祈念祈禱と云は、娑婆執

著の毒のみなれば、邪勸なること論をまたず、次に現當兩益と云は、藥と毒と合劑にして服し、後の念佛は往生の爲、現世の祈りは餘行各主と云は、藥と毒とを兼劑にして、代りくりに服するが如くなれば、結縁の遠益には厚薄ありとも、近く往生成佛の大益を失ふことは、三説等同にして、差別あることなし、思ふて知るべし、或人此説を聞いて、服膺せずして云、尊者の此論偏僻なり、既に導師は御疏の終りに、祝禱の文あり、元祖も七難消滅の爲にも、公達の御祈りの料にも、念佛が目出度しとの玉ひ、又宗門賜香の綸命にも、香衣を著し參内せしめ、寶祚延長を祈るべしとあり、又知恩寺の善阿上人は、勅命を奉じて、百萬遍の念佛を修し、疫災を驅除し玉ひし故、其功を顯して、寺に百萬遍の號を賜はれり、然れば延命除災の祈禱すら、猶宗意に背かず、況や現當兩益の廻願に於てをや、尊者強て今論を主張せば、兩祖に背き、違勅の科人となり、念佛の廣益を損減するの罪業、通れ難からん等と、云云予此説を聞いて、不慮にして

失笑し、而して又悲涙を生じ、漸くにして答て云く、公は淨家の僧にして、斯くまでに宗意に暗く、通別二軌の法門をさへ知らざるや、夫れ通軌は釋門の通法にして、譬へば四民すべて式日に禮服を用ゆるが如く、別軌は宗々別局の法にして、士農工商各々の職分をつとむるが如し、されば導祖の廻願、及び寶祚延長等の祈願は、佛法の通軌、諸宗の通法にして、今論する所の別規安心、出離の法にあづからず、又大師の御法語は、高貴の初心を誘引し玉ふ、一往の隨他意にして、別局隨自の御法語にはあらず、又善阿上人の疫災を鎮め玉へるは、祈禱としても、通軌なれば、障りあることなけれども、實は此事通軌祈禱の法にあらずして別軌廻向の得益なり、例せば往時文明七年、三州井田野の古戰場にて、軍死の幽魂祟りをなせしに、御當家徳川の御先祖、岡崎の城主親忠公の命に依て、大樹寺の開山、勢譽愚底上人、彼處に至り、一七日念佛別行を修して、亡魂離苦得脱の廻願し玉ひければ、其祟り頓に鎮まりたるに、合せて思

ふべし、附て云、彼の疫災の發りし時、諸寺諸山の碩徳に綸命下りて、各々丹誠を抽で、大法祕法を修せられたれども、一向に鎮らざりしに、善阿上人は、唯やすらかに口稱念佛一行をつとめて、廻向し玉ひしに、頓に鎮りたるは、いかなる所由ぞと云に、彼疫災は、多く戦死及び飢饉等にて死亡せし、無怙の幽魂のなす業なり、然るに祈禱は其靈の摧伏驅除を、表とするの法にして、幽魂脱苦の利を得ること、疎かなる故、鎮り難く、廻向は、偏に彼れが苦惱をあはれみ、援濟慈悲を證とすれば、幽魂法潤の益を得る故に、鎮り易し、猶祈禱と廻向の勝劣を論すること、委悉別書に記す、尋て見べし、或人又問て云、尊者の云如く、唯別軌の安心のみ講説しては、其益狭少なるべし、凡夫はすべて現世にのみ執著して、後世を意とすることなければなり、故に大師の軌轍に習ひ、祈禱兩益の隨他をもて誘引し、而して後漸々に、隨自の正意を教示せば、利益廣大なるべし等、云云答て云、此をなすこと、公のみに非ず、宗門に於

て甚多し、然るに此説に得あり失あり、而して得は至て少く、失は最も多し、其所由は、先大師にたまふ、此化儀あるは、本地は等覺の大士、垂迹は智慧第一の譽れを得て、而も三昧を發得し玉へる御事なれば、今一往現益隨他の鈎をもて引入すれば、後に厭欣隨自の正機となることを、了々分明に前知し玉ふ上にて、施し玉ふ活手段なり、故に其する力らある、祐天觀徹等の師の、高貴を化するに、此手ぶりあるは可なり、若し我人の如き凡愚にして、此教跡に倣ふ時は、東施が西施の鬢をまねて、彌醜を倍せしが如く、隨他の機を引て、隨自の機とならしむる益はなくして、却て隨自本願の正機となるべき人を、隨他不應本願の人となす、大失を生ずる也、先斯く隨自隨他の、説不説得失の區別をしらべて、而して今時祈念祈禱現當兩益の勸めをなす、其人云何んと考へ見るべし、宗義を委知し、厭欣念佛する人なりや、若し宗義を知らば、争でか宗義を破らん、若し厭欣念佛する人ならば、なごて衆生を苦界に繋ぐことをせん、さ

れば利益廣しと云ふは、醜を覆ふの遁辭にして、心は全分名利に貪著すればなり、既に佛祖は此人を、獅子身中の蟲と呵し、蝙蝠僧と貶し玉ひ、別して三祖記主禪師は、假名佛法、偏求名利者、佛法中旃陀羅と、嚴責し玉へり、されば隨自專修の正義を説きて、隨順佛教、隨順佛意、隨順佛願の、眞の佛弟子と稱嘆を蒙らん歟、又祈禱兩益の隨他を、名利の媒として、獅蟲蝙蝠佛法中の穢多なりと、呵噴を受ん歟、乞ふ講説者、能々熟思すべし。

一、今時宗門の中に、一種の邪見僧を生じて、是を不淨説法人と名づけ、世俗は是を談義坊主と云ふ、(談義説法講釋は、大概一體の異名なるに、世俗談義と云ふを以て、彼れに名くる故、説法講釋と云ふには異にして、打聞にはや、いやしくあさましきことに、思はるゝなり)。此者負氣なくも佛前の高座に昇り、最初少許の經釋の文を訓讀せしみにて、一向に文義をも辨せず、唯軍書恠談千百鄙猥の醜態をなして、些少も三寶の知見を怖れ

ず、偏に愚夫愚婦に銜ひて錢財を貪る、こは上の旃陀羅僧よりも、亦一等を下れば、名くべきやうなし、かやうの賣僧ある故に、少し心ある俗人は、爪はじきして、宗門を賤しむるなり、實に宗敵法敵の大惡大罪、未來は必定無間の巢守、憐むべく、又悲むべきは、この談義坊主と云ふ者なり。一、或人又云、諸宗一統祈禱法ありて、災難魔障等を除く、然に宗門に於て、一向に其設けなくば、災難魔障等ありて、念佛をも退墮すべしと云ふ人あり、此こと云何ん、答て云、諸宗總じて祈禱法あることは、具縛の凡夫、自力修行のことなれば、力用弱し、故に天魔惡神の障礙、横難横死の災に妨られて、退墮に及ぶこと多ければ、是を除くの設けなくんばあるべからず、故に佛除災却魔の、祈禱法をあたへ玉へり、爾るに我宗門に、修する所は、超發無上別願他力の法なれば、力用至て強く、而も阿彌陀佛は、光明をもて攝取護念し玉へば、大光明中、決無魔事とて、天魔波旬は跡をけづり、横難横死の怖れあることなし、此大益ある

上に、釋尊及び一切諸佛、一切諸菩薩、一切諸天善神は、前後左右を圍繞して、加被守護し玉ふことなれば、何の爲に祈禱を用ひん、諸宗に用ゆるは、災害魔障を遁れんにこそなせ、されば災害ある者のなすを見て、災害なき者の、是れをならふは、譬へば病身の者の、服藥するを見て、無病の人の、藥を服するが如し、又無病の服藥、たゞ益なきのみに非ず、却て大害をなす如く、魔障災害なき、念佛の行者の、祈禱をなすも、たゞ其無益のみならんや、總別二種の安心欠けて、たとひ頭燃を拂ふ如くにつとむるも、現世に於ては、攝取護念の益を蒙らずして、魔障にあひ、未來に於ては、報土往生の大益を失ひて、惡趣に墮す、(此惡趣に墮すると云ふは、祈禱せし故に、惡趣に墮すると云ふにはあらず、祈禱せし故、本願に背く、本願に背く故に、罪業を蒙らず、攝光護念の益を得ざるが故に、罪業を滅せず、罪業を滅せざるが故に、墮獄すと云ふことなり、此意を得ずして、誹謗することなかれ、)見つべし、祈念祈禱と

(24)

狼狽れば、却て護念にあづからず、唯往生の爲と志せば、攝取護念の益にあづかる、是を求時不得、不求自得の法門と云ふ、哀れなる哉、朝夕誦する光明遍照の文意をも知らず、怖れ氣もなく、大聲を發して、祈念になる、祈禱になる、現當兩益、二世安樂と勸説する、實に一盲衆盲を牽て、深坑に墮せしむるとは、此人の爲の針砭なるをや、又云、餘宗は云はず、王侯貴人の、淨土を宗とし玉ふには、不求自得と云ふことなれば、御祈願所などは、あるまじきことなるに、其御設けあるは云何ん、答て云、たとひ王侯貴族なればとて、御自らは心行具足ましますとも、行業果報不可思議と云ふ、あらゆる臣民をして、悉く信者となし玉ふことあたはんや、故に臣民を覆護し、魔燒災害を攘ふ爲に、此御設けあることなり、君上の臣民を撫育し玉ふことは、父母の子孫を憐れむに、異なることあることなし、何の不審ことかあらん、又問、たとひ貴賤上下の差別はありとも、王侯貴人の、臣民を覆護の爲に、祈願所を設け玉ふも、御

十二

自らの往生を礙へすと云は、諸氏の行者、自の爲にさへ祈らずば、親子兄弟眷屬朋友等の爲に、眞實愛憐の志より、魔燒災害をあらせじと、祈念立願をなすも、自の往生を礙へすと云べしや、答て云、世間出世間の萬事、一概には定め難し、されば王侯の政事は、世教を以て表とし、出世の佛法をば傍らとす、故に火付の焚、不孝の磔、盜賊人殺しは斬罪と云の制定はあれども、無道心は入牢、邪見は死刑と云如きの命令はなきなり、されども冥に王法を扶助すること、佛法にしくものなければ、國豊民安の爲に、祈願所等の御設けあるなり、此は是れ政事の通法にして、御自らの爲には、總別の安心を立玉は、何ぞ往生し玉はざらんや、此王侯の御上へを以て、下賤の身に引合しては不應なり、若し自身順次往生の志たば、云何んぞ親族朋友等に、同生淨土の法門を、勧めざらんや、人命は無常、我に恩分因縁ある人の、今死なば今惡道に落入て、出る期もなき苦聚に沈むをば、餘所にして、夢幻泡影にたとへられたる、

(25)

はかなき此世にある内の、災を拂ひ幸を得させんとて、彼に代りて祈念祈禱に心を用ゆる人、いかで乗佛本願の安心を立得る事を得ん、若し又正義を勸れども、肯はざる故にと云は、正理眞實の勸誘を、肯はざる邪見人の爲に、いかばかり神にねぎ佛に祈るとも、なごて加被護念し玉はん、もし祈ればとて、此者に幸を與へ玉は、邪見に荷擔し、惡業に培ひ玉ふと云ものなれば、かけてもふれても、利益を得べき理りなきのみ歟、かゝる非義の祈念をなし、佛神を瀆慢する罪をかさねんより、なご分々に利を與ふる、捨邪歸正、滅罪生善の願をなさるや、思ふて知べし、又問、或云、彌陀の大悲は、五逆大罪の者をすら助け玉ふ、爾るに祈念祈禱は、善惡二業を分別すれば、善事なり、何ぞ往生の障りとならんや、と云人あり此義云何ん、答ふ、他力本願往生の法門は、機の善惡にて、往生の得不得を定むることには非ず、昨厭欣心ありて念佛するもの、本願に引立られて往生を遂ぐ、五逆大罪の惡人なれども、獄火來現

に怖畏して、娑婆の著心少しもなく、唯救拔を頼む心のみありて、念誦せし故往生す、爾るに祈禱の人は、たとひ兇強の罪惡なしといへども、厭欣心立すして、娑婆に粘著するものなれば、争で往生することを得ん、此事譬へば、千石二千石の船も、碇をとり風帆に任すれば、彼岸に到り、十石二十石の小船も、碇をとかざれば、此岸を離ることなきに、準へてしるべし、又問、從來現世祈願の人は、往生ならずと成立せらるれども、諺に論より證據と云如く、現に我知る念佛の行者に、祈念祈禱をなしたるが、臨終正念にして、大往生遂たる人あり、されば祈禱に往生の害なきに非や、答ふ、此は是れ臨終廻心の往生と云ものなり、平生の中、祈念祈禱の爲、或は現當兩益と志したる念佛にて、往生せしと云は、既に上に云如く、具三心者、必生彼國の經文、若少一心、即不得生の釋文、及び安心僻越すれば、萬行徒らに施すと云如きは、皆悉く虛妄となるなり、されば此人の往生は、平生不具安心の念佛にて、往生せしには

あらず、病氣のうけやうよく、所詮此度は、本服ならじと決著せしより、祈念祈禱の念を断ちて、唯往生の爲に、唱へしもの故、此念佛が本願に叶ひて、往生の益を得たるなり、此義委しく、三祖の決疑鈔(五之卷^{四十})に出たれば、擧示すべし、問若有^三行者^二志^三求淨土^二兼祈^三延年^二亦得^三往生^二答若自念^三延壽^二者^一即成^三不^レ厭^三穢土^二若無^三厭穢之心^二何有^三欣淨之思^二厭欣若無^三何生淨土^二但機類萬品^一可有^三平生之時^二兼祈^三一世^二臨終時^一偏期^三往生^二遂^三其本意^二之人^一已上、文の意は、問若有行者已下、何生淨土と云迄は、二世兼祈の、往生することを得ざる義を釋し、但機類萬品已下、終りに至る迄は、臨終廻心の人の、往生を得る義を述べ玉へり、能く文の起盡を見て、其意を得べきなり、又問て云、同じ隨多の説に於ても、元祖大師は、現世祈願に念佛を許し、三祖禪師は、用意問答に於て、餘の佛神に申て、阿彌陀佛に申すことを誡め玉へるは、いかなる故にや、答て云、此會通いまだ指南を得ざれば、決答はなし難し、されども

僅に思ひ得たる一義あれば、試に是を宣べし、凡そ法門の教示に、一機に對すると、衆機に對するとは、左右あることあり、今大師の念佛にて、二世兼祈を示し玉ふは、初心高貴の、一機へ對し玉ふ故なり、すべて高貴の人は、娑婆執著殊さら強くして、現世祈禱に心よるもの故、念佛は現世の祈禱、公達の御祈りの料にもと、先念佛の一門に引入して、而して後、總別二種の安心を教示し、往生極樂の大果を、得せしめん爲の御設けなり、知る勢は、既に初め現世祈りの爲にもと示し玉へる御方へ、念佛御歸入の後に、進せられたる御文には、「よくよく按じても御覽候へ、極樂往生に過たる御大事何事かは候べき、此世の名聞利養は、申ならぶるも、いましく候、乃至廻向發願心とは、自他所修の善根を廻向して、かの國に生れんと願するなり、もし此理りを思ひさだめざらんさまに、此世の事をも祈り、あらぬ餘の方へ、廻向したる功德どもを、皆とり返して、いまはことごとく往生の業になさんと、廻向すべきなり、」等と示し玉

へるをもて、考へ知るべし、又三祖禪師の、此世の祈りは餘の佛神に申して、阿彌陀佛に申すべからずと、仰せられたるは、所對一人に非ず、衆に對し書に筆するの御示しなればなり、其所以は、此世の祈りをも、彌陀に申せとあるときは、現世祈りも往生をさへすと、思ひ誤ると多かるべし、されば又現世のことを、彌陀に申さざれと誡め玉へば、たとひ下機にて現世祈りを止め得ずとも、彌陀の御心に、叶すと云ふことを知る故、臨終に廻心し、往益を得ること多かるべき故に、殊に念佛にて祈ることを、誡め玉へるなるべし、是しかなしながら、胸臆の愚案なれば、取捨は見る人に一任す、若し此會通に根據を得、又よき者へもあらば、爰に補入し玉はんことを希ふのみ、又問て云ふ、從來破斥の祈念祈禱は、さもあらばあれ、現當兩益は、經釋に根據あり謂く大經には、普濟諸貧苦、廣濟衆厄難、觀經には心光攝取、阿彌陀經には、諸佛護念の明文あり、善導大師は、現世護念を釋し、元祖大師亦此義を祖述し玉へば、宗義

に背くことなきにあらずや、答て云く、擧る所の經釋は、みな悉く不來自得とて、佛より與へ玉へる現益にして、行者の祈求する所にはあらず、此こと底に徹して知らんとならば、明證を示すべし、導師觀念法門に釋し玉はく、護念經意者、亦不^レ令^三諸惡鬼神得^二便^一、亦無^三橫病橫死橫有^二厄難^一、一切災障、自然消散、除^三不至心^二已上、この不至心とは、至心に對す、その至心とは、豎の三心にては、至誠心にあたり、横に云へば、唱ふる所の念佛を、皆往生の爲と志すを云ふ、此人は總別二種の安心立て、本願に隨順する故、順次に報土に往生し、自利利他圓備すべき、至て大切の人なれば、故障なく此大益を得させん爲に、横難横死横に厄難魔撓なきやうに、佛菩薩諸天善神の、加被護念に與かる、是を不來自得と云ふ也、若し是に反轉して、唱ふる所の念佛を、現當兩益二世安樂と廻向すれば、總別二種の安心たらず、本願にかなはざれば、淨土に往生することを得ず、三惡四趣の苦處に沈む者を、何の故に加被護念し玉はんや、是を求時不

得の損失と云ふなり、此導師の除不至心の、御釋を以て照せば、佛説祖釋の現益は、みな悉く不求自得の義なること青天に白日を見るよりも明かなるに、何ぞ宗義に暗くして、求時不得の邪義を主張する人、少なからざるや、實に是をも哀れまらずんば、又何をか哀まん、苦なる哉、又問て云ふ、專修念佛の行者は、さの如く諸佛菩薩諸天善神の、加被護念を蒙らば、すべて惡事災難はあるまじきことなるに、世間の念佛者を見るに、まゝ不可意のことあるは云何ん、答て云く、世の念佛の行者に、うち見る所は如法に見て、而も内心不調三心不具にして、本願に契はざれば、魔燒災難等あるべし、是は今論する所に非ず、三心具の行者に、惡事災難等の如きことあるは、決定業の宿報を償ふことなれば、たとひ念佛者といへども、是を遁ること能はず、況や三心不具の人、いか程心力を盡して、禳災祈禱をなすとも、都に其益あることなし、されば決定業に至りては、祈念祈禱に走る、三心不具の者も、唯往生の爲と志す、三

心具の人も、等同なりやと云ふに、是に又差別あり、三心具の人の業報には、轉重輕受の利益とて、未來決定墮獄の報を、現在の病苦に轉じ、未來餓鬼道の定業を、現在の貧困にかへ、現世に受くべき極惡大病を、輕病にかへ、現世に受べき飢渴の報を、不如意のことに轉じ玉ふ等、是を轉重輕受の利益と云なり、されば因果の道理に關く、無理に祈りて、定報を遁れんとし、種々身心に罪業を累ね、果ては佛神を迄恨むる如き、大邪見を發するも、少なからず、爾るに專修の行者の如きは、不可意のことあるは、皆是宿惡の報ふ所と、是に付ても厭欣心を進む、此正見に罪報も輕まる上に、殊に佛意に契ふ故に、鄙しき世の諺に、百貫の方に編笠一蓋とやらん云如く、ほんの因果の道理を破らぬ迄に、轉重輕受の利益を與へ玉ふなり、此道理を識得せば、三心具足、專修一行の宗義を弘通せずして、餘事に口を開くを、淨土宗門の人と云はんや、思て知るべし、或人又云、定業受報遁ることなくば、何ぞ佛神に祈禱法ありや、答ふ、

業に付て二あり、謂く決定業と不定業となり、決定業は、上に云如く、遁るゝことなけれども、若し横災横難の不定業なる時は、如法に修すれば、祈禱法にて遁るゝことあり、此衆生の苦厄を抜く爲に、祈禱法あるなり、又問、若し爾らば、なごて又不定業ならば祈るべし、決定業ならば、祈るに益なき義を示し玉はざるや、答ふ、佛神顯露に、斯く示し玉はざるに、是に又一往再往の二義あり、一には定業不定業に、祈不祈の義を示し玉ふとも、隔生即忘無神通の凡夫、争でか是は定業、是は不定業と、識別することを得んや、故に是を示し玉はざるなり、これはは一往の義なり、次に再往の義とは、佛神の御本意は結縁にあり、所以云何となれば、一切衆生佛道に入り、出離生死往生成佛の法を修せんことをこそ、詮に欲し玉へども、無始已來生死に流轉し、唯生を貪り死を怖るゝの執深く、後世と云をば、名を聞くをも忌むことなれば、慈濟の益を施し玉ふに由なき故、據なく迂廻なれども、現世祈禱の法を説き、彼の欲の釣をも

て牽て、法に入るゝの方便をなし玉ふなり、されば往生に望みなき人は、唯あらんよりは、定業不定業の穿鑿せず、或は經文陀羅尼を誦じ、或は佛神の御名をとらへ、或は他を頼みても、すゝみて祈念し、勵みて祈禱すべし、されども出離の爲に修せざれば、近き益を得ず、猶六道に輪廻して、無量の苦毒を受けけれども、生々世々、遠生の後の後には、この祈禱の微善よりして、終に正信修行の人となりて、往生成佛の果報を得べければなり、されば我門初學の講者、此義趣を委知して、假りにも隨他の法を説ずして、唯隨自專修の正義を講説すべきなり、さて專修念佛を講説せば、每席必ず日課念佛、十遍已上を勸むべし、元祖大師の、在家は一萬已上、出家は三萬已上とは、修行の本意に付ての玉へるなり、知る勢は、祖々相傳して、安心落居の入眼は、惡人女人の臨終に、十聲一聲唱へし迄も、ゆるぎなく往生と、決心するにありとの玉へば、下機の日々十遍宛も、定課とするを、嫌ふべき道理あらんや、思て知るべし、

さて日課念佛を勸進するに、從來歸依の佛神等ありて、誦する所の經陀羅尼等を闇くときは、御怒りにふれて、御罰あらんかなど、恐るゝことあるものなれば、若し専修一行に、決歸する人あれば一切の佛菩薩諸天善神は、御怒りなきのみか、至て歡喜踊躍して、加被護念し玉ふなり、先づ一切諸佛の歡喜し玉ふことは、阿彌陀經に、念佛往生をば、不可思議功德と讚歎し、舒舌證誠なし玉ふにて知るべし、又一切諸菩薩の歡喜し玉ふことは、念佛の行者をば、二十五菩薩を上首として一切の諸菩薩、晝夜莫廢、加被守護し玉ふとは、隨願往生經の證なれば、疑ふべからず、又一切諸天善神の歡喜し玉ふことは、梵天帝釋等はもとより、吾朝の宗廟、天照皇太神宮は、慧心の僧都に對して、末世の得脱は、偏に念佛の法にありと託宣し玉ひ、祇園牛頭天王は、現世祈願の人を誡めて、「長き世の苦しきを思へかし、かりの宿りを何なげくらん」と、告玉へる等、如し此の夢想靈告、擧つてすべき限りにあらず、されば些少も恐慮するこ

となく、後世往生の爲に誓ふ、日課念佛一行に決し、諸佛、諸菩薩、諸天善神の、哀愍覆護にあづかり、魔燒災害の退縁なく、順次極樂往生の、大益を得べしと示すべし、若し又未入淨土門のさきに、或は自の邪智にほこり、或は惡友及び異學異見の徒に従ふて、誹謗罪を造りし人あらば、此は是順次無間獄に墮して、大地微塵劫を経て、出る期なき苦報を受けることなれば、速に前非を懺悔し、日課誓ひて念佛すべし、善導大師の御釋に、辨法闡提廻心皆往とあれば、決して往生を疑ふべからず、猶又淨土の高祖天親菩薩は、初め小乘にありて、大乘を誹謗し、五百部の論を造り給ひしが、無著菩薩の教誡により、捨小歸大の後に、亦大乘讚嘆の論、五百部を造り、初めの謗罪を償ひ給ひし跡にならひ、念佛讚嘆日課勸進するときは、彌々可なる由を示すべし、又在家の初心は、佛に對し誓ひし、日課を怠らば、御罰を受くべければ、誓はずして申し、或は少しく誓ひて、其餘は申さるゝほど申すべし、など云ふが定りなれども、誓

はざるはもとより、少しく誓ふも、定課をみつれば、心ゆるまりて、進みがたき故に、是は佛祖の御心に叶はず、さればなるだけ多く誓ふべし、少々退屈の心生じて、佛に誓ひ奉りしものをと云ふに、心をすゝめてつとまるなり、若し據なきことありて不足せば、翌日及び追々にも申し入るべし、是が佛祖の御意に叶ふぞと、教示すべし、又所授の日課、平日は怠るまじけれども、病氣のときはいかゞせんと、潛る人あるものなり、此事は大師御在世に、瘡病を煩ひ玉ひし時、六萬遍の御日課を、五萬減じ、一萬遍をつとめ玉ひしこと、御傳に出たり、是則ち日課は平生の懈怠を防ぐ用心にして、病氣の時に怠るは、恐慮することなかれと云ふ義を、御身を以てさとし玉へる、是を身業說法と云ふぞと示すべし、又世教にすら、其喜びを獨りするは、君子の愧る所なりといへり、況んや佛門に入、僅にも唱ふれば、定りたる地獄を遁るゝのみか、快樂無窮の極樂に、往生を遂ると云ふ教法を、聞ながら、其喜びを獨する理あらん

や、大恩ある主君兩親等は、(目下の者へは勸め易けれども、目上への主親へは、勸めにくきものなれば、先づ佛祖に加被護念し玉ひて専修念佛の人となし玉へと願ひ、猶自らもすゝみつとめて、業滅の廻願をなし、其機嫌をはかりて、勸むべきやうを、示すべし、)もとより、あはれむべき妻子眷屬よりして、其たよりあるには、いかやうにも方便して、日課念佛を勸むべし、其人に往生の大果を得せしむるさへあるに、勸めし我は佛祖廣大の慈恩の一分を報するとなり、又病身及び今日の活業に追はれて聽法に障りあるには、代受して勸むべきことを、示すべし、初心は多く勸むることも、後に懈怠せばと、怖るゝことあるものなれば、後の進退は勿論、凡夫の知るべきことならねば、夫れに心を用ひず、唯日課を勸むべし、若相續すれば順次往生、たとひ中止懈怠に及ぶとも、一往信受し唱ふれば、佛の加被によりて、臨終に廻心往生すること多し、たとひ又廻心せざるも、無窮の生死を縮めて、三生及び四生五生には、必らず往

生を得るの義趣を、さとすべし、さて此日課の義につきて、思ひ出たる一話あり、予往年東武の學林にありし時、學頭某の宗脈再傳せらるゝを聽たるに、彼師衆に對して云く、往昔自分宗脈相承せし時、資縁の家へ行たるに、一家残らず賀辭を述べ、而して主人の云、今は、や一分化他を許され玉へる御身となり玉へば、家内にいまだ日課を受けざる者もあり、我等も加増すべければ、御作法なし下されよとありしに、自分日課の作法を暗誦せざりし故、赤面に及びしことあり、銘々は兼て其心得あるべけれども、若作法暗誦なきあらば予が覆轍の如き、不饒益もあらんかと存する故、略作法を示授すべしとて、(已下の作法、略懺悔、三歸 三竟、誓辭、授與十念と、記して可なることなれども、彼再傳師の婆心にならひ、初學の忽忘に備へんとて、委悉に書す)。

○我昔所造諸惡業

皆由無始貪瞋癡

從身語意之所生

一切我今皆懺悔

○歸依佛兩足尊

歸依法離欲尊

歸依僧衆中尊

(三説)

○歸依佛竟 歸依法竟 歸依僧竟(三説)

○弟子等、今日より命畢るまで、極樂往生の爲に、日課稱名、(若干遍)誓て中止せじ、如來大悲、哀愍護念、證明知見し玉へ。

○南無阿彌陀佛(十念)

如是繰り返し、已上七返授けられたり、而して再傳畢り、衆僧退散する中、一僧の云、從來傳法中の疲勞あるに、一返にてすむことを、七返まで授けられては、甚だ迷惑なりと云ひければ、又一僧の云、吾子は實に痛ましき朽林頑石なる哉、再傳師の愍念にて、自らの過ちを擧て、人々を覆護の爲に、數返口授せられたるをば、いか計り歎隨喜感戴すべきことなるに、却て毀謗の言ばを吐き、毒を他にまで及ばさるゝことは、いかにぞや、少しは思慮あれかしと、藥言を施したるに、同行の衆僧、皆感心せしことありしなり、此餘教示すべきの要、數多なれども、爰に盡すべき限りに非ず、講者常に熟思すべきなり。

上來初學の爲に、講説の意樂を論ずるに、餘は皆枝葉にして、詮に祈禱二世安樂の説を驅除することは、既に上に云へるが如く、淨土の法門、要中の要は、三心の法門にして、三心具すれば往生し、若一心を欠けぬれば、往生を得すとなれば、此法門に於ては、殊に心を用ひて學び、別して心を用ひて、講説せずんばあるべからず、今時此三心を欠きて、往生を得ざる中に、虚假不實にして、至誠心を欠きて、往生を得ざると、又身心の罪惡につき、念佛の少きにつき、疑心を生じて、往生を得ざるとは、さのみ多からず、唯至て多きは祈念祈禱の餘事廻願なり、裝婆執著は凡夫の持前なれば、此心至て發り易きに、猶他宗になすを見習ひ、別して自宗の僧者に、此勧誘をなす者少なからざれば、彼れにつき是につき、總別の安心を欠きて往生を得ざる者のみ、至て多ければなり、譬へば醫の病根を探り得れば、偏に其療治をなす如く、今時不往生の病根は、十に八九は皆餘事廻願裝婆執著の病なり、此痼病を療するは、回向發願心の

靈藥なる故、餘の法門に轉せず、ひたすら唯往生極樂の爲の一向專修念佛を偏勸すべし、此勸進に隨ふ人は、總別二種の安心を具する、本願所被の正機なれば、平生の中は、攝取護念の光中に游泳し、魔燒横難の怖れなく、臨終の砌には、報佛の來迎にあづかり、觀音掌上の寶蓮に乗じ、彈指の間に、極樂の上品に往生して、地上證眞の薩埵となり、身を百億の世界に分ち、八相成道を遂げて、衆生を濟度す、既に釋尊一佛出世し玉ひしより已來、其化にあづかり、生死を出離せしもの、無量無邊にして、算計すべからず、されば隨自の法を説きて、一人を度し得れば、一佛出世の門戸を開く、隨他の法をもて、百千萬人に、結縁せしむるに比するに、無量無邊不可計倍の、大利益を得るとなれば、衆人口を揃へて誇るとも、少しも是をかへり見ず、唯一筋に宗義を守り、專修念佛を弘通すべし、さすれば彌陀釋迦二尊、一切の三寶、善導大師、元祖大師、總じて三國傳燈の、諸大祖師に、實に汝は佛の使ひ、眞の佛弟子、最勝人と、

(34) 讚嘆慰諭せられ奉らんは、豈に貴きに非ずや、喜ばしきに非ずや、吉水正流を、汲得たるの本意、是を除きて亦何をか云はん、請ふ初學の講者、必此正軌をきしりて、邪路に奔走すること勿れ。至屬至屬。

長門大日比前西圓寺

託阿彌陀佛法洲識

講説大意終

佛説阿彌陀經講説卷一

第一席

玄談ニ總じて講談の例として、文に就て説く前に、玄談といふて其一部始終の大脉を談するなり、今此の阿彌陀經は、古來より諸師の御釋數多ある故、玄談も又まろくにして、或は十門を立て、談じ、或は四門を立て、或は六門七門を立て玉ふも有て、各々意樂に隨て玄談を設け玉ひし者なり、細かに談じては盡きぬと故、此中にて隨分在俗の所得ある御釋を撰び出し、四門を立て、辨するなり。其四門とは、一、教起所因、二、所説大猷、三、宗脉定判、四、藏教所攝、此四門を辨すれば此經の大脉が知れることなり、先づ教起所因を談す、第一教起所因とは、此經は如何なる故あつて、説き給ひたるぞといふ、わけを談するをいふなり、(物には、すべてどういふ事で出来たと云ふ、わけのあるもの)是を談するに、善導の御釋に依て談すべし、般舟讚

云、釋迦如來眞報土、淨土莊嚴無勝是、爲度娑婆二分化入、八相成佛度衆生、或説入天二乘法、或説菩薩涅槃因、或漸或頓明空有、入法二障遣雙除、根性利者皆蒙益、鈍根無智難開悟、云々、(この註に依て辨すべし) この經を説き給ひたる釋尊は、本來無勝莊嚴の淨土に在す如來ぢやとなり、其事は涅槃經第二十四云、西方去此娑婆界、度四十二恒河沙等諸佛國土、有世界名曰無勝、彼土何故名曰無勝、其土所有嚴麗事、悉皆平等無高下、猶如西方安樂世界、亦如東方滿月世界、我於彼土出、現於世、爲化衆生故、於此閻浮提中、現轉法輪、(文意を撮て辨すべし) 爲度娑婆二分化入とは、かの土に於て衆を化益し玉ふ御身を分けて、此娑婆の衆生を化益に來り玉ひしとなり、八相成佛度衆生とは、佛が人界に出玉ふ時の例なり、八相とは上天相、(兜卒天へのぼり玉ふ) 下天相、(欲界へ下り玉ふ) 託胎相、(胎内をかり玉ふ) 出胎相、(生れ出で玉ふ) 出家相、(城を踰へて出家を遂げ修行し玉ふ) 降魔相、(成佛の前に魔

障礙をなすを降伏し玉ふ成道相、(成佛し玉ふ)轉法輪相、(說法度生し玉ふ)入涅槃相、(死して見せ玉ふ)是を八相を現じ玉ふと云なり、此通りに次第を経て八相を現し、衆生に應同し玉はざれば、度生の事成じ難し、例へば西明寺入道の、民を憐みて供をも運れず、修行者の牀となりて、諸國を巡回せられし如く、又春朝阿闍梨は、盜賊を化せんが爲に、盜賊と成りて化を施されたるが如し、故に八相示現云々、或説天人二乘法、(五戒十善四諦十六行相十二因縁等)或説菩薩涅槃因(六度萬行)とは、是五乗の法を説き玉ふ事を擧げ玉ひたるなり、或漸或頓明空有とは、其五乗の法に漸と頓とあるなり、漸とは小乗より大乘に入り、或は久しく劫數を重ね、修行して成佛に至る法を、漸教と云ふ、頓とは凡夫から直に大乘一實圓融の理に入り、速かに悟りを開くを、頓教と云ふ、四箇(華天密禪)實大乘等の如く、自身即佛と悟る杯を皆頓教と云なり、此漸頓の教の中には、或は空と明し、或は有と明し玉ふ所もありて、種々に教

化し玉ひたるとなり、人法二障遣二雙除とは、人法二障は人執法執の事にて、一切衆生此二執に迷ふて輪廻を離れざるなり、故に如來は空と説き、有也と説き衆生教化し玉ふ、是れ二執を拂ふて人空法空の道理を悟らしめ玉はんが爲也、偕て人執とは、「引よせて結べば柴のいほりなり、とくればもこの野原なりけり」といふ歌の心にて、此身元來我物に非ず、世界の五蘊を集めたる物に、暫く我心が寄り添ふて居る計なり、歌に「よしもなき地水火風をかり集め、我と思ふぞ迷ひなりけり」と、死に際に、五蘊を法界に返して見たれば、我といふ物は更に無いのに、我と認めたるは迷ひにて、之を人執といふ、此趣きを七賢女經に譬をもて示し玉へり、譬へば雀を瓶の中へ入れ、穀を以て其口を覆ひ、其穀が破るれば、其雀やがて飛び去るが如し、此身は借物にして瓶の如く、心は雀に似て、命は口を覆ひたる穀に譬ふ、命の穀破れざる間は、此心が、此身の瓶に宿りてあれども、命の穀が破るゝと同時に、心の雀は飛び出でゝ、

六道の内何れの身になりとも移りかわるなり、されば瓶は雀の物に非ず、此身は全く我物でない、爾を我と思ふ故、人ぢや、悪い奴ぢやといふ隔が出来、賞むれば悦び、謗れば腹を立てる、我夫を我妻をと、我他彼此差別の隔てより、種々に罪を造る、之を人執といふ、此迷を離れたるを、人執を斷じて人空を得たりと云、次に法執とは、「引よせて結べる柴の庵をば、とかねどもこの野原なりけり」と云ふ心にて、一切の萬法實ある物と見る、之を法執といふ、萬法皆空也この世界も二十増減すると悉く滅するなり、其中の萬法なれば、實ある物は無き筈なり、既に實無きものなれば、惡むべきも愛すべきもなきなり、夫を此は惡いと思ひ、彼は好いと愛着して、無量劫の紐を結ぶ、この迷を離れたるを法執を斷じたといふものなり、「引よせて結べる柴の庵」を執して庵といふ物體に有ると思ふは甚だ迷なり、「とかねどもこの野原なり」で、柱も椽も繩もクサビも、元より無き物也、人も又其如く、今有る體も宛然空くして無きもの

也、然るを有と思ふは迷なり、此迷を離れたるを、法空を證りたりと云ふ、元なき物の後に又なくなるは何物ぞ、有と認めたものは影法師なり、併し此空と云ふを、心得違ふ者、まゝあるなり、夫れは空理を僻解して、地獄なし極樂も無しと、因果を撥無するの類、是等は空に執するの空、無斷無の惡見にして、外道所計の迷なり、夫れでは空といふものが又一物出來る譯なり、其空も又非空と拂ふ故、十界の萬法歷々然として空也、是を真空と云ふ、空にして有、是を妙有と云ふ、此真空妙有の道理を覺りたる人を、二障を除きし人といふ、此二障を除かせんが爲に、或は空と説き、或は有と説き玉ひたるものなり、依て或漸或頓明空有、人法二障遣二雙除と云へり、是れ如來一代御化益の姿なり、根性利者皆蒙益とは、利根上智の人は、是れを悟りて生死を離るゝなり、鈍根無智難開悟とは、これ則ち我等が身に當る也、鈍根とは、のみこみの悪しき者を云ふ、其姿は、昔時あほうな爺があつたが、家内の者より勸めて、説教

參りをさせられたれば、聽聞して歸ると直に、佛壇の戸を開き、本尊を引出し奉り、滅多無性に打擲する故、是は何事ぞ勿體なやと制すれば、さればの事、今日寺で御説法を聞けば、牛馬をむごくすると、後世で牛馬になると云はれた故、佛をむごく致せば、佛に成るであらう、と思ふて云ふた、今我々が鈍根なる事も亦其通りで、空と聞けば、善趣も惡趣も無しと、因果撥無の邪見に落入り、有と聞けば、一切法に實ありと僻見を起す、依之いつ迄も、真空妙有の理を開悟する事ができぬなり、故に鈍根無智難開悟と宣へり、萬劫修功實難續、一時煩惱百千問とは、一時半時の中にさへ百千の煩惱惡念が起る、況や千劫萬劫の長き劫數に、心を散らす修行一枚の心にならるべきや、依之魚子と、菴羅菓と、菩薩の初發心との三は、因は多くして、其果に至るは少しと云へり、若待娑婆證法忍、六道恒沙劫未期とは、斯の如き鈍根なる我等が身の上には、逆も此世に於て悟を開く事難かるべしとなり、驗此貪瞋火燒苦、不如

走入彌陀國とは、我等常に貪瞋をたこして、地獄の火をたきつけ、此身を焼く謀のみにて暮す、其苦を通る、道は外に無し、所詮極樂へ往生せざれば、遁れぬ事ぢやとなり、是故、釋尊慈悲憐重障而説此經、以勸往生遙潤退代、種々貴き法門はあれども、其法門で開悟する事のならぬ、鈍根無智の障多き、末代の衆生の爲に、此阿彌陀經を説て極樂往生を勧め給ふが、此經の興起ぢやといふ事也、此れが導師の御釋に依て談する、此經の教起所因也、爾れば今時の人は、我等が爲に説き玉ひたる、阿彌陀經ぞと心得て、此經の教に可隨なり、其此經の教に隨ふとは、畢竟じて云へば、一心に往生を願ふて、諸行を閑き念佛の一行を勤むる事なり、之を此經の教に隨ふと云ふ、彼土へさむ往けば、江南の橋を江北に植れば根となる如く、人法二障自然に除き、真空の一理を悟り顯はし、六識縱横自然悟とて、安樂自在の境界に成るに疑ひなき事、猶ほ委くは、追々明かに知れる事云々、上來に就て一つの寓談を出して、此土にて

二障を離るゝは難けれども、彼土へ往生すれば、自然に覺れるといふ義を演説すべきなり。

無鏡國(托、事實之部卷之二)

是れ無鏡國故の事なり、此國などへ持て來らば、此論は早く片付くべし、是れ争ふべき物に非ず、我と我顔を見て苦しむ、鏡の中なるは影像と云ふ事を知らぬ故なり、我等常に貪瞋を起し、火燒の苦を受くるも此通り、大圓鏡智の一心法性の鏡にうつる、影を實と見る故なり、是れ人法二執の姿なり、然るに此争の止め難きは無鏡國の故なり、争を止めさせんと扱ふ人も、同じく鏡の事を知らぬ人なり、故に彌々つまらぬ事になる、今此娑婆の有様も又如此、悟りたる人なき故、教ゆれば教ゆる程、彌々二執の迷を重ねる也、(今時の安さとり、口頭三昧なる事)斯く鈍根の上に、正信の教をさへ得ぬ者ゆゑ、若待娑婆證法忍、六道恒沙劫未期と釋し玉へり、然れ共、彼の夫婦も、鏡の有る國へ來らば、喧嘩は致すまじき、今此國には此夫婦より愚かなる者、いくらもあれども、鏡を見て喧嘩する者はなし、是れ此處に鏡ある故なり、今

我々も又其如く、今は此の相互に人法二執に迷ふてたれども、極樂へ往生だにすれば自ら證る也、是其國が元來、阿彌陀如來の證悟より顯はれたる淨土なれば、土徳として證れる也、(座時即得無生忍、十地願行自然彰、悟り開きし人計の中なれば、友づれてもさこれる云々) 是に依て人々を、淨土の證り深き、大菩薩となし玉はん爲に、此經を説き給へる也、されば此事を導師の御釋、訓讀の教起所因の文に、驗此貪瞋火燒苦、不如走入彌陀國、とあれば、起れば起れと振り捨て、日課稱名相續が肝要。

第一一席

前席より小經の玄談、四門を立て、講するに、教起所因已りて、今席は第二所説大猷を談する、偕て大猷の猷の字、訓は道也、(玄應音義第七、大部補註一丁)則ち一經の大綱にして、大道筋を述ぶるを所説大猷と云ふ、此段は幸ひに、元祖大師の語燈錄の最初に、三經の大意を釋し玉へる中の、

彌陀經を釋し玉ひたる、下を讀めば、其意知れ易し、是を聞て、先づ大鉢を得心してたくべき也、

さすれば、文に就て辨ずる時は、又格別に聞易かるべし、和語燈錄一五丁、次に阿彌陀經は、先づ極樂の依正の功德を説く、これ衆生の願樂の心をすすめんためなり、(鹿談)小經に爾時、佛告長老舍利弗、從是西方等、是よりが正宗分なり、元祖大師依正の等と宣ひたるは、正宗分の始より、有世界名曰極樂、迄が、依報を總じて擧げ玉ひたるなり、すべて生あるは正報、生なき物は依報なり、今此處で云へば、人が正報、家ぢや道具ぢやと云ふ類は、依報なり、今依報の總標を擧げ玉ひて、極樂の途程、並に世界の極樂の、依報の名義を擧げ玉ひしなり、正報とは、其土有佛、號阿彌陀、今現在說法、是が正報の總標、阿彌陀如來は極樂の教主、正報の根本也、これで、依正の總標がすんで、次が依報の細釋、舍利弗彼土乃至故名極樂、これが名義略釋とて、極樂と名くる譯を説き玉ひ、是より次が、廣く彼土の勝れたる相を擧げ

玉へる文、**又舍利弗、極樂國土、七重乃至其佛國土、成就如是、功德莊嚴、**迄が、依報の細釋也、

(七重欄楯等より、文に付て鹿談、其中に鳥は生あり、依報とは云ふべからすと云ふ不審あり、是の文に就て委く辨ずべし)次に正報の細釋とは、舍利弗於汝意云何、乃至阿僧祇劫說、(文に就て鹿談)是までが語燈錄の、阿彌陀經はまづ極樂の依正の功德を説く、とあるの意、斯く經に依正の功德を説き、次で念佛往生の義を説き玉ふに、先づ發願を勸めて、舍利弗、衆生聞者、應當發願、願生彼國、所以者何、得與如是、諸上善人、俱會一處(鹿談)是が語燈錄の、これ衆生の願樂の心を勸めん爲なり、とある意なり、「後に往生の行を明すに、少善根を以て、生るゝ事を得べからず、阿彌陀佛の名號を執持して、一日乃至七日すれば、往生する事を得とあかせり、是は經の舍利弗、不可以下少善根、福德因緣、得生彼國、とあるより以下に當る、此意は、如是大菩薩と一處に會し友達と成るのには、中々少善根位では往けぬ、

と説き給ひたれば、一會の大衆は御尤の事ぢや、上來承る通りの結構なる極樂へ往き、直に大菩薩と肩脊ならべる事は、中々少善根では往けぬ筈ぢや、定めて身を切り肉を割き、骨を砕いての修行ならんと思ひ、其大善根を説き出し玉ふを、耳をすまして待て居らるゝ所へ、舍利弗、若有善男子善女人、聞說阿彌陀佛、執持名號、乃至、極樂國土、と男にもあれ、女にもあれ、阿彌陀佛の功德を説きて聞て、名號を唱ふる事一日乃至七日すれば、其人の命終の時には、阿彌陀佛諸の聖衆と共に、現に其人の前に在す、故に病者の心顛倒せず、臨終正念にして阿彌陀佛の極樂淨土へ往生を遂ぐるぞよと、口拍子で往ける法を説き給ひたる故、一會の大衆がのつけにそりかへつたとなり、此事佛の金句なれば、決して偽りのあるべき筈はなけれど、どう云ふ道理で其様な不思議な事のある事かと、不審がる大衆の顔付を見玉ひ、佛の知見を證據に立て、舍利弗、我見是利、故說此言、不審に思ふな見て説く法ぢや、扱て上來の譯を聞

いた者は、願ふて彼土へ往生せよ、若有衆生、聞是說者、應當發願、生彼國土、と勸め玉へり、

「衆生これを信せざらん事をわされて、六方に各各恒河沙の諸佛ましく、大干世界に舌相をのべて證誠し給へり、此御釋は、經文の六方諸佛證誠の段に當るなり、舍利弗、如我今者、讚嘆阿彌陀佛、不可思議功德、東方、乃至、南西北下上方、恒河沙數諸佛、各於其國、出廣長舌相、徧覆三千大千世界、說誠實言、汝等衆生、當信是稱讚不可思議功德、一切諸所護念經、此文の意は、上の如く佛自證の知見を述べ玉へども、若し無理に疑ふ者が有つてはと、六方の諸佛、御舌を三千世界に覆ひ、今釋尊の説き給ふ通り、彌陀の名號を執持する事、一日乃至七日する者の、若し一人でも往生せずば、我等が今のべ出す舌は、腐れ爛れて再び口へは入るまいと、證據に立ち給ふたが、是れ南無阿彌陀佛の一行なり、勿躰ない佛の方から我等が疑を恐れ玉ひて、如是濱の眞砂の數々の如來様の證誠なり、之を信じない筈はなき事也、猶

此除疑生信の事を、語燈錄に、「善導釋して云く、此證によりて生る、事を得ずば、六方如來の玉へる舌、一たび口より出でわたりて、ながく口に還りいらすして、自然に壞爛せんとの給へり、然ればこれを疑はんものは、彌陀の本願を疑ふのみに非ず、釋尊の所説を疑ふなり、釋尊の所説を疑ふは、六方恒沙の諸佛を疑ふなり、即ち是れ大千の玉へる舌相を壞爛するなり、是迄が疑の失を擧げ玉へり、疑を生ずると、諸佛の御舌を破るに當る、諸佛の御方には間違なき故、破る、事はなけれど、譬へば、あの者は此れを盗だそうなど思へば、盗みもせぬ者に疵を付けると云ふもの、今も其如く、諸佛の方に相違ないとして、證據の爲に出し玉ふ舌を、夫れを虚言の様に思ふは、是れ破るに非ずや、能々思ふべし、勿體なき事なり、已下生信の徳を擧げ玉ふ、又是を信せば、唯彌陀の本願を信するのみに非ず、釋尊の所説を信する也、釋尊の所説を信するは、六方恒沙の諸佛の證を信するなり、一切の諸佛を信するは、一切

の法を信するになる、一切の法を信するは、一切の菩薩(菩薩は一切の法を修行し玉ふ僧寶なり)を信するになる、これ則一切の三寶を信する也、この信ひろくして廣大の信心なり、又導師の云、六方如來舒舌證、專稱名號至西方、到彼花開聞妙法、十地願行自然彰、心々念佛莫生疑、是れ又た今の意なり、恒沙の諸佛の證誠を信じ、南無阿彌陀佛と唱へて往生を遂ぐと、直に極樂の蓮華が開くや否、阿彌陀如來の御説法を承り、初地二地三地と次第を経ず、直に十地の願行を圓滿する事ぢや程に、信心念佛して疑を生ずる事莫れとて、信の徳を擧て勸め玉へり、偕て此十地願行に就て、大師一所の御釋に、「無明の煩惱が萬の障礙をばなすなり、念佛の一行は此煩惱にも礙へられずして、往生を遂げ十地を究竟する也、他宗には、實教にも權教にも密教にも顯教にも、十地を究竟する事は、漸頓を論せず、きわめたる大事なり、然るに、念佛の一行によりて往生を遂げ、十地の願行自然に成就する事は、誠に甚深殊勝の事也、

已上此文の意は、報土に往生する事は、初地の菩薩ならでは成り難きを、一毫未斷の凡夫が、僅か唱へた斗で、他宗で至て難しとする十地の願行を、我知らず自然に成する事は、心にも詞にも述べられぬ程難し有事なれば、誠に甚深殊勝の事なりと信せられたる也、此事を聞ては、人々我志のあるだけ仰信して、簡程の利益を得るは、偏に念佛の功に依ると、云ふ處に心を止めて、已入の者は益々進み、未入の方は早く唱へにかゝるべし、先づ是で、元祖大師の大猷の釋文畢れり、時に此御釋全備せざるに似たり、其故は此御釋は、六方段迄の大意を釋し玉へども、經文には序分もあり、勸進流通分もあるに、夫を釋し玉はねば、小經一部の大意釋とは云ひ難かるべしと云に、元祖大師の御釋には此體多し是通途の諸師の及ばざる所なり、所詮大師の御意は、出離の事のみを一大事とし玉ふ、故に釋文に至りても其意ありて、肝要なる事のみを専ら釋して、聞く者見る者をして、出離の要道に趣き易からしむる様に釋し玉ふが、大師の

極意なり、此の所に心が付と、元祖の御釋は諸師に超過して、格別に貴き事が知れるなり、今此大意釋の肝要は、聞く者の疑を除き信を進むる事を專とし玉ひたる也、人々是を聞て、信と疑との得失を能く知るべし、疑へば彌陀の本願を疑ふ計りでない、釋尊の所説、諸佛の證誠云々、一切三寶云々、爾れば、佛法中には取り付く所はなく、(三途のすもりが定まり) 信すれば三佛の本意に叶ひ、一切三寶を信じて、此信廣大信なりとある徳を具へて、順次往生能々決心すべきなり云々。上來勸め玉ふ信とは、疑のなき事なり、然るに人毎に信心と云ふものは、身の毛の豎ち涙のこぼれる事と心得違ふ也云々、信とは善導の御釋に、深心者、即是深信之心也、と釋し玉へり、(信は忍許微淨之義云々) 元祖此義を詳に釋し玉ふて、「深心とは、深く念佛を信する心なり、深く念佛を信するとは、餘行を捨て、一向に念佛になるなり、少しにても餘行を加へぬれば、深心かけた行者といふ也」と宜へり、爾れば念佛の一行に不足の思ひなく、

(44)

餘行を交ぬぬを、深心具足の行者と云ふ、(信の字訓は、まかせると讀む、身を本願に打任せざる事なり、既に任せば、一行にて不足なし、譬を出さば、客問篇の小者の如し云々)然れば念佛の一行に成るが信者、交ぬるが不信者云々、此得失の譬を示さば大公望、妻不貞(托事辨事實之部卷之二)然れば、上來の如く大きな事故、疑はしかるべきも、此元祖の大意釋より窺ひ見れば、少しも疑ふべき事なし、依て諸佛證誠の舌頭に、一心不亂と決定して、早や往生は手に握つた如くに落著して、喜び勇み退轉なく稱名相續せられよ。

第三席

上來、小經の玄談に、四門を立て、辨する内、是迄に第一教起所因と、第二所說大猷とを擧て、今席は第三宗體定判と、第四藏教所攝との二門を談する也、先づ宗體定判とは、此經は如何なる事を宗とし、如何なる事を體とするぞといふ事を、判じ定むるを云ふなり、宗とは、尊也、一經の

崇ぶ所を宗と云ひ、體とは、法體にして、一經の所詮を體と云ふ、即ち宗の所趣也、所趣とは落著所の事也、此宗體を別に譬へて云へば、扇子の如し、扇の骨に紙を合せたは體と云ふもの、夫れに要をうつて扇の體をしめて居る、此要が宗なり、此要がよいとて澤山には入らぬ、澤山はいらぬもの、一つは是非なくてならぬが要なり、宗に此義り、下に至て知るべし、偕て今經の宗體とする所は、何ぢやと云ふに、導師の釋は小經には無れば、觀經の御釋に依て辨すべし、三經は一轍なれば相違する事なし、導師觀經の宗體を明し玉ふ、文に云、以觀佛三昧爲宗、亦以念佛三昧爲宗、一心回願往生淨土爲體、已上觀經には定散二善の諸行が並説してなれば、觀佛をも宗と判じ玉へども、本願正因は唯念佛なるが故、釋には上來雖說定散兩門之益、望佛本願意在衆生、一向專稱彌陀佛名、と結釋し玉ひ、經には阿難尊者に附屬して、汝好持是語、持是語者、即是持無量壽佛名と結勸し玉へり、故に尅實すれば念佛三昧を

(45)

宗となし玉ふこと明なり、淨土宗意は念佛を以て宗とし、往生淨土を以て體となすなり、當知念佛爲宗往生爲體なることを、今此經は、諸行と云ふては少しの交りもなく、唯念佛して往生する義のみを説き玉へば、宗は念佛、體は往生なる事論を待たず云々、然れば此經を縱横に學でも、往生を願はざれば體なし、又往生したいと思ふても、念佛申さねば要のなき扇と同じ事、益は無きなり、たとひ又愚痴文盲の人たりとも、此經を聞て願生の心を起し、其往生は念佛一行にて不足ないと云ふ心が堅まらば、宗體欠けず願行具足し、順次上品往生の人と云ふ者なれば、從來所說の趣に依順し、必ず宗體を失ふまじき也、云々是で第三今經の宗體定判の下畢ぬ云々。

第四藏教所攝とは、(是は此經の位定めなり、之を教相と云ふ)是をば善導釋して此經は、菩薩藏に收め頓教の攝と定め玉へり、此教相と云ふものは、宗々に立て、其差別あり、天台は藏通別圓の四教を立て、一代經を判じ、華嚴は初始終頓圓の五教

を立て、一代經を判する也、今宗も又其通り也、其教相と云ふに、二藏二教と立るが我宗の教相なり、(導師の教相に約して云ふ)二藏とは聲聞藏菩薩藏なり、二教とは漸教頓教なり、是で如來の經が收る、譬へば道俗男女と云ふ四字に、參詣の人が皆收ると同様なり云々、偕て其二藏中の、聲聞藏とは小乗の事、菩薩藏とは大乘の事なり、二教の中の漸教とは、斷惑取證の次第を立て、劫數を経て佛と成る教、(成佛の果報を得ること、わそきを漸教と云ふ、三論法相等の如し)、頓教とは頓に佛に成る道理を明すを云ふなり(次第階級を經ず、即身成佛と立るを云ふ、四箇大乘の如し)是を二藏二教とて一代の教相と云ふ、其中に於て此阿彌陀經は、何れの内に收むるぞと云ふことを明すを、藏教所攝と云ふなり、時に此經を導師の御釋に依て定むれば、菩薩藏收頓教攝と定むるなり、菩薩藏收とは、此經は大乘小乗の中では、至極の大乗と定め、頓教攝とは、漸教頓教の中では、頓教の中に攝めて早く佛になる教と定むるなり、こ

れが導師の判釋なり、偕て此れに就て古來より段々論のある事なり、實に如是位を高く定むる事がなりにくい事なり、故に元祖大師も、御苦勞なされた中に於ても、洛北大原で三百餘人の諸宗の碩學と問答し玉ひしは、元と淨土宗を頓教と定め玉ふ事に就てのこと也、(元祖大師も、淨土宗を漸教ぢやと立て玉へば、諸宗と論じ玉ふ事も無れども、元とより頓教の淨土宗なれば、至極の頓教と立て玉はねば、佛意に背きて、人情に隨ふ失に落る故、極頓の義を募り玉ひし也、是に依て御在世の中、種々の御苦勞ありし也、實に本願念佛の法燈、此師なくんば争か熾んに末世を照さん云々)、偕て右の如く、元祖と諸宗と、大原立禪寺に集會して、教限の論判ありし時、此問答の發起天台の座主顯眞法印、眞先に進み出で此事を問ひ玉たる也、顯眞問曰、速疾離生死一得解脱、眞言止觀(天台の事)華嚴等以四箇實大乘爲最上至極如何、是れ此阿彌陀經(實は三經なり今は聞き易き故云)阿彌陀經を頓教と名くるに就て、他宗から起す

不審なり、いかさま此の不審はあるべき筈ぢや、其故は天台では煩惱即菩提生死即涅槃と明し、眞言では父母所生身即證大覺位、華嚴では初發心地便成正覺、禪宗では直指人身見性成佛と談するなり、是等の大乘は何れも、此土に於て速疾に成佛する道理を明す、之を諸宗共許の頓教と云ふ、爾れば是等をこそ至極の頓教と云ふべけれ、淨土門の如きは、此土に於て念佛し來世の淨土を願ひ、往生を遂げて其後佛果菩提に至ると云ふ所立なれば、此世計ではすまぬ、此を捨て、彼を願ふは廻り遠い法なれば、頓教とは云はれぬ、是れ漸教ぢやが、夫れを頓教と立つるはどういふ道理ぢやと云ふが、顯眞法印の難問の意なり、大師答云、法門無盡論其急要以淨土法門爲最、諸教廣多、探其肝心、以他力頓教爲勝、(不假斷證直入報土、是れ他力の頓教也、)此則易修而功高、易行而理深故也、と答給ひて、夫より盧山等の古師の釋を引て、他力頓教の義を仰せられた所が、段々問答の上で終に此義を成立し果せ玉ひしかば、三

百餘人の碩學皆一同に悦伏して、專修念佛の法門に歸入し玉ひ、紛れもなく淨土門が至極の頓教に定つたる也、猶此上に淨土の頓教は諸宗の頓教に勝ると云ふ、元祖大師の御釋あれば示さん、(大經私記)天台眞言皆雖名頓教、斷惑故猶是漸教也、已上なる程天台で煩惱即菩提生死即涅槃と立て、眞言では父母所生身即證大覺位と明す、是れ頓教と云ふに相違もなし、されども悟れば、成程煩惱即菩提なれども、悟られねば、現に煩惱に苦められてわらねばならぬ、娑婆即寂光是心即佛と云ふは、成程頓教なれども、其場に至るには、斷惑證理せねばならぬ故劫數を経る、此斷證の所を押へて、我宗よりは猶漸教ぢやと落す也、煩惱即菩提の意を、佛には成られぬものと思ふなよ、しぶ柿を見よ甘干と成る、此しぶ柿の澁を去りもせず、甘味外より來るものにも非ず、澁即ち日數を経て甘ばしとなる也、甘味外より來らず澁が即甘味と成ると雖も、直に喰て見れば澁くて喰はれぬ、いやでも日數を経ねばならぬ、生死即涅槃煩惱即

菩提なれども、此場處に至るには、世間名利の皮をむき、釣りて日に干す修行をせねば、悟りの甘味の場へは出られぬ、自力の頓は、斷惑證理に暇がとれる故、名は頓なれども漸教と云ふものぢやと押へたものなり云々、又眞言では父母所生身即證大覺位とて、此父母より貰うた肉身即ち佛大覺位ぢや立つる也、此佛と云ふにも二つが有りて、在纏の佛出纏の佛と云ふ、出纏は悟つた佛で、在纏の佛とは、成程佛は佛なれども縛り繩の付た佛ぢやと定むるが、眞言の所立なり、縛られたもの、役に立たぬ事は、囚人を雇ふて煤拂して貰いたいと思ふても、縛られて居るものなれば、何にも爲る事のならぬと同様ぢや、各々や我等は正因佛性とて、佛になる性は備へて居る故、此身即大覺位とは云はるれども、在纏の佛にして、惜しい欲しい惡や腹立の三毒の、とり繩に占めあげられて居る佛なれば、神通も無ければ光明もなく、元より人を助くる事もならねば、我身すらとりまわす事さへならぬ、佛とはいへども作りし業の繩にひかれ

て、三途へ行は在經の佛故の事なり、此惡業の縛り繩を解くには修行がなければならぬ、修行するに否でも生々世々を経ねばならぬ、いか様に詮議しても、自然の釋迦もなく、天然の彌勒もあるべき道理はない、理で云へば、至極早く成佛する教なれども、其身其儘では叶はぬなり、依て其迷を斷じて悟る迄に暇ざる故、天台眞言等の教は、法相三輪等の權大乘に比ぶれば、頓教といはるれども、淨土教に比ふる時は、猶是漸教ぢやと云ふ意で、天台眞言皆雖名頓教、斷惑故猶是漸教也、と釋し玉へり。

扱て又今經の頓教は如何にと云ふに、明未斷惑凡夫、直出過三界長夜者、偏是此教也、故以此教爲頓中之頓也、文の意は、迷の凡夫唯一生、遅きは臨終際の十念一念の力に依て、直に報土へ往生を遂げ、阿鞞跋致不退轉の位に至る也、已に果報を得る事、是より速かなるはなき故、元祖大師は押出して頓中頓と釋し玉へり。

斯く云ふ道理故、導師は、此經を菩薩藏收頓教攝

と定め玉へり、是で此經の玄談、藏教所攝の義も辨じ已る、先づ是で此經の位が定りたる也、人々難有可思也、唯さへ佛法に逢ひ奉りしは難有に、其佛法の中に於ても、頓中頓の此教に逢ひ奉りしは、曠劫の大慶に非ずや、眞言止觀の法門等、紛れなき頓教なれども、果報を得るに至るは、容易ならぬ事なればこそ、已に元祖大師の御師範、皇圓阿闍梨の如く、叡山三千の碩學と許されし智道兼備の御方でさへ、順次解脫の覺なしとて、遠江國は櫻ヶ池に於て、蛇身を受けて彌勒の出世五十六億七千萬歳の後を待ち玉ふに、各々や我等が如き愚痴罪惡の凡夫が、本願名號唱へる様に成た計りで、臨終の際には御來迎に預り、目出度往生を遂ぐるなり、決定地獄に落つべき身が、打て替つて極樂とは、頓中頓の妙法に逢ひ奉りし故なれば、返すもく、此事を喜び、受けた日課を怠りなく、進んで相續せらるゝが肝要。

第四席

從來講説は阿彌陀經を談を畢り、今席より釋名と云ふて、此經の佛說阿彌陀經と云ふ題號を辨するなり、題は一部の總標と云ふて、一經の大鉢皆此中に含んである、商ひする看板の如く、經の中の貴き事を此題號の中に残らず含んでゐる、依て之題號の義を委しく談せば、席を重ねて講せねばならぬ事にて、甚だ多き事なり、さればこそ天台大師は七種立題と云義を以て題號を解釋し玉ひ、賢首大師は能詮所詮の義を立て、題名を釋し玉へり、學生の爲には是等の義に依て委しく談するがよけれども、各々の聽受あるには夫れでは、却て事が多くなつて所詮が聞へ難かるべし、依て隨分事少なに省略して、聞き取り易き様に談すべし、云々總じて經の題號は、聞く内にも功德利益を得る事なれば、心を止めて聽受し一經の大鉢を得心せらるべし。佛說阿彌陀經之を訓點すれば、佛阿彌陀を説き給ふ經と讀む、此六字に能所通別の二義あり、能所の能とは能説、則ち釋迦如來にして説人なり、則佛説の二字を云ふ、所とは所説、則ち阿彌陀如來

にして被説人なり、則阿彌陀の三字を云ふ、通別とは佛說阿彌陀の五字は別題なり、(此五字は、此經に限り、餘の經に通せざる故に、別題と云ふなり)經の一字は通題なり、(一切の諸經皆經と云ふ、故に通題と云ふ)偕て佛とは諸尊の通號なれども、此土の教主なれば唯佛のみ云へば釋尊の事となるなり、佛とは梵語で、唐にては覺と翻する也、覺はささるさめると訓ず、之を導師釋して、自覺々他覺行窮滿名之爲佛已上、故に佛を三覺圓滿とも稱し奉る、菩薩は二覺、二乘は初覺、皆や此方はさしづめ無覺、其ささるさめると云ふ覺の義はない筈、生死長夜の眞くら暗に、迷ひの夢ばかり見て居る耻かしき身の上なり、はや二乘は一分覺めて灰身滅智し、無餘涅槃には至れども他を益する事なき故、是を自覺と云ふ、菩薩は四弘誓願あつて自覺は素より、覺他の饒益人をも覺らせ玉へども、佛の様に覺行窮滿の場には未だ至り玉はぬ故、佛には及び玉はず、二乘には立超へて、自覺々他の二を具し玉へり、佛の自覺とは三阿僧祇百

大劫に無量の身命を捨て、無邊の功德を満足し、
 所_レ有煩惱を斷盡して正覺を成し玉ふを自覺と云
 ふ、覺他とは衆生を憐み玉ふ事親の子を祝るが如
 く、方便して教導し迷情を離れ流轉の苦を抜い
 て、涅槃常樂の都に歸せしめ玉ふ御徳まします、
 是を覺他と云ふ、覺行窮滿とは菩薩も大悲心を以
 て衆生を化導し玉へども、たとひ等覺の菩薩と雖
 も、未だ無明と云ふものが一分残てある故、佛の
 如く廣大の利益を施し玉ふ事叶はせられず、佛は
 自覺々他覺行圓滿し、無明を悉く斷し玉ひて自在
 に衆生を濟度し玉ふ、是れ則ち覺行窮滿と窮め滿
 ちて在すと云意にて、佛を覺と翻す、上來唐土で
 覺と翻する義は辨じ已る、又日本で佛をほとけと
 和訓する意は、ほとけたると云意なり、何がほど
 けたぞと云ふに、萬の迷ひ煩惱の縛り繩の解けた
 る事を云ふなり、(或は云く、ほとけは火解なり、ヒ
 とホは通音、トケはきゆると同じ、雪トケといふも
 雪消と云ふも同じきを以て知るべし、ほとけは火
 きなり、煩惱惡業の火消へたと云ふ事なり、

今時死人をほとけと云ふも、強て笑ふべき事に非
 ず、其故は死人は暖氣去りて冷になる火大の去る
 を以て、ほとけと云は、其理あるに似たり云々、
 此辨用否隨三時宜云々さすれば皆や此方はほとけ
 ぬ、思ひと思ふ事、なしとなす事皆惡業惡思惟な
 れば、煩惱の荒繩で縛られて居るのぢや、一り子
 の縛られてゐるを見る親の心は、どれ程にか悲し
 からん、されば是れに百倍まさつて、皆や此方が
 煩惱の縛り繩を受けて、六道生死を引まわさる、
 を、彌陀釋迦二尊の見そなはしては、青蓮のまなじ
 りに大慈大悲の御涙を流し玉ふとは知らざるや、
 さればこそ彌陀如來五劫の思惟に肝膽を碎き、兆
 載永劫に苦修難行して本願を成就し玉ひ、釋尊は
 五濁惡世に出現して此經を説き給ひて、我等煩惱
 に縛られながらも、南無阿彌陀佛と分々に唱へさ
 へすれば、臨終の期に望めば縛りからめし煩惱の
 大繩を、名號功力の利劍を以てすつかり斷ち切り、
 速に往生を遂げ無累解脱の身の上となし、自覺々
 他覺行窮滿せる佛となしてやらうとあるが、誓願

なり、先づ是で佛といふ字はすむ、是れ計り聞て
 も往生遂ぐる身の上とならるゝ、難_レ有事に非ず
 や、説とは善導大師、口音陳唱故名爲説と釋せり、
 總じて佛の説法は六根通説也、然るに此土は耳根
 利なる故に、御説法が都て音聲の御説法なり、是
 故に説とある、然れば佛説とは釋迦如來の説き玉
 ふと云ふ事と可_レ得心也、先づ是で能説の佛説の
 二字を辨じ已る、阿彌陀とは梵語、此方の言に翻
 するに、二字翻三字翻と云ふ事有て、天臺大師は
 無量と二字に翻じ玉ひ、導師は無量壽と三字に翻
 じ玉へり、此事に就ては古來論のある事なり、然
 れども何れも正義にして不正の義には非ず、今此
 二義を委しく考ふれば、二字翻は三字翻に勝れて
 正當を明し、三字翻は二字翻に勝れて利益廣しと
 云ふべし、云々先づ二字翻の義を辨せば、阿彌陀を
 無量と翻する事は、大經にも往觀無量覺とあり
 云々、又十八通の意に依るに、阿彌陀と云中には、
 無量の名、無量の體、無量の義、無量の用、無量
 の智、無量の光、無量の定、無量の通、無量の形、

無量の色、無量の相、無量の貌、無量の身、無量
 の壽、所_レ有一切の事を此佛悉く成就し玉へり、故
 に無量佛と云ふ、然れば一切の名ある者は、皆阿
 彌陀なり、名として體を詮せざる者なし、體ある
 者は皆阿彌陀なり、體あれば義あり、義ある者は
 皆阿彌陀なり、義として用を施さずと云ふ事なし、
 用ある者は皆阿彌陀あり、智光定通形色相貌等皆
 阿彌陀なり、無量と云ふ言は、はかりなくと云ふ
 事なれば、萬法皆無量覺の所具に非すと云ふ事な
 し、五千餘卷も是れ阿彌陀經也、(天台、八萬の法
 藏妙肝心、一代聖教の結經、平等覺經云、陀字八
 萬諸聖教)三世の諸佛も皆阿彌陀也、(般舟經云、
 三世諸佛依三念佛三昧一成等正覺、又平等覺經云、
 阿字十方三世佛)故に阿彌陀と云ふは、如此無量
 なるを以て阿彌陀を無量と翻す、是を二字釋翻と
 云ふなり、是れ難_レ有事なり、何故に此の如く名を
 付け玉ふたぞと云ふに、其故は元來法藏因位に、
 衆生を助けんと思召つかれて淨土を構へ、其上に
 我等が勤むべき行を選び玉ふに、三學は一つも勤

め得べき器量なき故、所詮彼等が身や心では埒の明かぬ事ぢやと思召し、我則ち十方衆生になりかわりて無量の功德を我體に備へ、夫れをば我名を唱へさせて衆生に譲り、各體不離の道理を以て衆生の功德とし、罪障を消滅させて引とらうと思召つき玉ひし也、依之不可思議永劫の修行して無量の徳を御身に備へ、書を見る臺を見臺、茶を入る器物を茶碗と名くる如く、直に御名を梵語では阿彌陀、此方の言葉では無量と付玉ひたる也、然れば南無阿彌陀佛と唱ふる時は、我等に無量の徳が具はる也、夫れが則名體不離と云ふものなり、梅と云へば口に唾が溜る、此の道理に依て唱れば無量の功德が具はるなり、故に、大經には一念大利無上功德と説き、元祖大師は大原問答の序分に、萬善妙體即名號六字、(即すとは、仕込んであると云ふ程の義)恒沙功德具三口稱一行と釋し玉へり、實に頼母敷ことなり、萬徳所歸ともあり、萬徳を衆生に譲與するともあり、爾れば唱ふれば直に萬徳を我々へ譲り與へ玉ふ云々、先是で阿彌陀を無量

と翻する義は辨じ畢る、次に是より三字翻の義を辨せば、導師の御釋に、阿者是無、彌者是量、陀者是壽と翻じて、阿彌陀の三字を無量壽と釋し玉へり、是れ一と通り聞ては御尤に聞への様なれども、此義至て利益弘し、先づ一通りですみにいと云ふは、上の如く無量と云ふ時は事廣し、然るに壽の一字を加へ玉ふ時は、壽命ばかり無量なる様で、却て事が狭くなる様に聞へるなり、依之古來より善導の御釋文は、未盡理にして無量と釋するがよいと云ふ説もあれども、夫れは學文の机はなれがせぬと云ふものなり、善導大師が壽の一徳を擧げ玉ふたは、甚深の譯のある事なり、(次に委く辨すべし)先此の三字翻の義は、導師初めて釋し玉ふたかと云に、已に大經の題は無量壽經と云ひ、觀經の題は觀無量壽經と云ふ、佛自稱の題には、觀極樂國土無量壽佛、觀世音菩薩、大勢至菩薩とあり、又下品下生の文には、汝若不能念者、應稱無量壽佛とあり、又大經十二光佛の名義を説き玉ふ、前後僅かの文の中にも四箇所あり、

其外數々あり云々、佛の自稱、譯者の立題皆三字翻なり、故に天台大師も小經の義疏には、阿彌陀佛者天竺梵音、震且譯言無量壽と云ふ、然れば三字翻、導師の自己に非すと知るべし、云々、導師已に彌陀の化身として二字翻を知り玉はざらんや、(正依に己に往觀無量壽とあり)爾れば導師二字翻三字翻の中に於て、三字翻を用ひ玉ふが甚深の譯あると云ふは、義寂の云へる如く、壽命世人所寶重、故順世云壽已上、先づ我々の大切なる者は何かと云ふに、命ほど大切なものはない、如何にも生靈の重する所壽命に過ぎたるはないで、生とし生ける者の命を惜まぬものはない、聊かの事にも驚くは皆壽命を大切に思ふ故也又大切にもする筈の事なり、命は連持の義とて珠數の糸の如し糸が切れば珠はばらばらになる、何れの願が叶ふても壽命が無ければ詮はなき也、是に依て大切にするなり、依て導師は無量の徳ある中より、此一徳を擧げ玉へり、此上をまだも詮議せば、夫れ尙御尤に聞への、なせなれば唯無量と云ふ中には、壽

命無量の義もあり、其上に外の無量の徳のある事も顯るゝなれば、矢張二字翻が勝れるではないかと云ふに、此處が利益弘き故にと云ふ譯のある所なり、今耳近く示さば、總じて物を廣く聞ては心の寄り難きもの也、譬へば聲入するに先きは如何と尋ぬる時、何もかもあると云へば、其中に洩れるものはなければども、其何も蚊の中より、金壹千圓ある田徳が五百石と云ふ様に云へば、夫れでは何卒世話して下さいと云ひ、何もかもと云ふ時は、先づ思案してわきませうと云ふが如し、何もかもの中には、田地の事も金子の事も道具の事等、其外残らず收つて有れども却て心が寄せにくい、金が何程田地が何程と云へば、事は狭けれども好もしく思ひ易きなり、思ふて可知焉、今も又其の如く、無量と計りでは言は廣けれども、小智の衆生は却て心が寄せにくいなり、然るを生ある者として、一人も大切にせぬと云ふ事なき、至極貴き壽命が無量ぢやと聞けば、事は狭けれども、心に好ましよう思ふて慕ひ易からん、依之、實は阿彌

陀の正翻無量なれども、能々衆生の機欲を鑑みて、壽の一徳を擧げて無量壽と釋し玉ひたる也、正翻でも親しうても、機欲の爲に疎ければ利益は薄く、壽の一徳を擧げては、狭い様盡されぬ様に聞ゆれども、機欲に叶ひて利益弘し、衆生利益の爲の經なれば、一人なりとも化を蒙り易く往生し易い様に釋し玉ふ、此が善導は彌陀の化身、大慈大悲の勝れさせ玉ふ所なれば、能々信受し奉るべきなり云々、先是で佛說阿彌陀の五字を解釋し已りて、別題の上はすむ、次に通題、經の義を辨せん、經とは梵に修多羅と云ひ、此に翻じて經と云ふ、又は線とも云ふ、是にも種々の義あれども、善導大師の御釋に依るに、序分義曰、言經者經也、經能持・緯、得・成・匹・丈、有・其・丈・用、經能持・法、理事相應、等と有て、此意は、經とは機の縱系の事なり、此たて糸が能く緯と云ふ横のぬき糸を持ちて、一丈二丈と織り續けて其用を成す如く、經が能く法を連續して、退代へ傳へる所が能く似よつてたる故、修多羅を經と翻じたもの也、此經に先づ依正

の莊嚴を説き、極樂の結構なる由を顯はし、此淨土へ往くには少善根では往けぬ、誰にもあれ、或は一日或は七日南無阿彌陀佛と申せば往生に違ひない、夫を疑はせぬ爲に、六方の諸佛が證誠なされたと云ふ法を説き給ふたは、三千年に垂んとする已前なれども、夫を今日の我々迄も、唱ふれば往生すると云ふ事の、續いてあるは何ぢやと云ふに、たて糸の經卷の力で横系の往生の法が、今の世迄傳はつたと云ふもの也、爾れば經卷は大切にせねばならぬ、先是で題號の佛說阿彌陀經と云ふ六字を辨じ已る、(此外にも、種々の義あれども、事多くては、却て心得わけ悪い故略す)然れば是にて經卷の貴きを知て、(三寶の中法寶第一、佛の師なる故なり)法を敬い貴ぶべき也、敬い貴ぶと云ふ肝要は、教に隨ひ一向專修となるなり、(いかほど恭敬供養すとも、教に隨はずは、眞の供養に非ざる也)今此の經緯の義に因て、念佛修行を中絶せず連續すべき道理を示さん、人々機を織るに中から切つては益にたぬものなり、つゞいて一反な

ければ衣裳とならぬ、念佛も其通り、中絶せず命終まで續いて唱へねば、往生のはれ着にはならぬなり云々、是に就て一つの事實を云は、

孟母斷機

第五席

前席に續き、尙題號を解釋すれば、此題號に就て通題別題の二義あり、其別題とは佛說阿彌陀の五字を云ふ、今經に局つて餘に通せざる故、下の經の一字は通題なり、諸經に通ずる題號なればなり、其義具に前席に辨するが如し、云々茲に一つ詮議せねばならぬ事あり、(前席長座となる故辨じ殘せり)今經題號に二通りあり、其二とは一に佛自稱の題號、二に羅什三藏譯者所立の題號なり、一に佛自稱の題號とは、六方位に稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經とある、是れ此經の本題なり、二に譯者所立の題號とは、今經の外題佛說阿彌陀經とある是なり、爰に難あり、若し今經に佛自稱の題號なくば、譯人題名を立つべし、已に自稱の題名あるをさしおきて、譯人題名を自立するは如何と云

ふに、本題を隱略して譯人が此經題を立てられしには五意あり、略題佛意にそむかざる趣きを辨せん、其五義とは一には上符三經旨、この經の所詮は南無阿彌陀佛を唱ふるが肝要なり、是信願持名の一法也、故に極樂の依正を聞て往生を信樂せよ、其往生する行餘の少善根ではならぬ、唯一筋に南無阿彌陀佛と唱へよ、南無阿彌陀佛と唱ふれば往生に違ひはないと、諸佛の證誠是を信じ是を願ふ、其の驗はと云ふに、南無阿彌陀佛と云ふ持名の聲に顯るゝなり、依て阿彌陀と云ふ三字で經の極意が顯るゝ故に、此題號が經の旨に能く叶ふ也、二には下適三機宜、下とは前の上符三經旨と云ふ上と云ふ字に對す、佛經の主旨に叶ふ故上と云ふ、今は衆生の機に叶ふ故下と云ふなり、此適三機宜とは、元來法藏因位の願に、名聲超十方(十七願)とて、我名十方に聞へんと誓ひ玉ふ、本願御成就ありし故、是に報ふて所々有衆生が聞たがるなり、(中には、いやがる者もあれども、夫はよくくくの業人にして、是等の人は已に歸入三惡の人と、釋尊の

記前を受たる輩なり、さもなき人は聞たがる也) 現に斯く説法すれば用事を閑きて參詣云々、又樂んで聞く利益廣大也、其故は靈芝(元照律師)の釋に我彌陀以名攝物、愛を以て耳に聞き口に誦すれば、無邊の聖德誠心に攬入す、(無量恒沙の功德が、八識心王へ流入して、速に成佛に至る云々)斯る廣大の利益故、衆生に我名を聞せ様と云ふ本願、其本願に報ふて衆生が聞きたがる、其願ふて聞たがる南無阿彌陀佛なれば、今の題名を立られたるなり、三には理自包含、本題の稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經と云ふ義が、自ら此阿彌陀經と云ふ略題の中に含んである、其故は諸佛の稱讚と賞め玉ふも、護念と守り玉ふも、阿彌陀佛と唱ふるに付ての事なり、然れば阿彌陀經と云ふ中には、稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經といふ意が含まんである也、依て本題を略して此題を用ひられたるなり、四には義存便易、阿彌陀は天竺の言也、梵語は多含にして義理を多く含む故に、功德の勝る上に簡易なれば憶持易し、本題の稱讚不可思議功

徳一切諸佛所護念經と云ふ如きは、長き故憚なる人には耳に止り難く、阿彌陀と聞けば覺へ易きなり、五には語從簡要、佛說阿彌陀經と唯六字の題號は、簡略と約まやかにして持ち易し、末代下根の人は長き退屈を生ず、爾るに短くて下根の者も受持するに仕易き故に、此題號を置き玉ひたる也、如是五義ある故に、什公本題の稱讚等の長きを隱略して、此略題を置き玉ひし也、是が佛意に叶へばこそ、古來の學匠抄疏を作り玉ふにも、皆什公の所譯に據り玉ひて、専ら此經が流通するなり、是に就ても人々唱ふる名號を貴ぶべし、此題に上の如く、五つの徳が具つて道理に叶ふと云ふも、阿彌陀と云ふ三字ある故なり、爾れば人々唱ふる中にも、自ら無量の徳の具る事は明白なり、是れで題號に就てのあらく辨じ畢る。 諸て是より譯者の事を談すべし、譯とは天竺の語を唐土の語になをすを譯と云ふ、具には翻譯と云ふ、錦の文表裏の事云々、爾るに此經に前後四譯ある事は、梵本は一種なれども、譯する人に依て其言

がかわるなり、丁度日本の内でも國々で言葉のかわる如く、別して唐土は大國なれば、時代と譯人とに依て、變り目のあることで前後四譯あるなり、一者秦の弘始四年二月八日羅什譯今經是なり、(滅後一千三百四十九年日本の十八代履仲帝の治世三年なり)二者宋の元嘉年中求那跋陀羅譯、三者永徽六年唐玄奘三藏於慈恩寺譯、稱讚淨土佛攝受經と云ふ、四者後秦の世に阿彌陀經偈を譯す、(一紙あり譯主を失)第二譯は今傳はらず云々、今經外題の次に譯人を擧ぐ。 姚秦三藏法師鳩摩羅什奉詔譯、姚秦の姚は、後秦の王の氏なり、唐土は日本とは違ふて、天子が他姓にわたる故、夏の世、殷の世、周の世、秦の世漢魏晋宋梁陳隋唐と云ふ様に更る故、其時代を知らせる爲に其世を書くなり、此秦に前後あれば、前秦でない後秦ぢやと云ふ事を知らせん爲、王の氏の一字を加へて姚秦とあるなり、三藏とは、經律論に通じ兼て天竺と唐土との音を能くするを云ふ、法師とは傳譯弘通の人を云ふ鳩摩羅什(法相

宗の學者)とは梵語、此には童壽と云ふ也、(幼年にて長の様なとなり)三藏の傳を考ふれば、元と什公の親は天竺の人にて其名を鳩摩羅琰と云ふ、其位はと云へば世々攝政關白の位なり、爾るに其家を捨て、佛法修行しながら諸國を巡歴するところ、龜茲國に至り玉ふ、此國は天竺と唐との中間にある國なり、國王をば白純王と申せしが、此王元より琰の大名を聞き及ばれし事なれば、殊の外に悦び、遠く出迎へて宮中に請じ入れ、恭敬供養大方ならず、何卒長く此人を我國に止めたいと思はる、餘り、王の妹を以て無理無體に琰の妻とし玉ふ、什公則此腹に依り出生し玉へり、什公胎内に宿られしより早や不思議なる事共ありしが、生れ出で、傑拔靈明比倫なかりし、然るに七歳の時琰は命終せられたり、其頃什師母に隨ふて寺に入られしが、あたりに鐵鉢ありしを戯に頭の上にあげられしが、此鉢は重いもの故、我力では得上げぬ筈ぢやがと思はれたれば、此鉢忽ち重くなつて暫くも堪へられぬ程苦しく成た所で、成程佛の

説き玉ふ如く、一切唯心造ちやと云ふことを證悟し玉へり、夫より段々學文し玉ふに多才強記、國中に一人も及ぶ者なし、此趣天竺唐土へも聞へて沙汰する様になり玉へり、時に什公、三藏(經律論)に通じ玉へる事なれば、龜茲王殊の外喜び玉ひ、金獅座を設けて是に居らしめ給ふ、其頃唐土は前秦の世にて、大王を符堅と云ふ、時に此王の臣下の中に天文に通じたる大史、奏問するには、臣昨夜天文を考るに、天竺西域の分野(西天)に異星現はる、是れ正しく大德智人の我朝へ渡り玉ふ兆なりと、符堅王大に悦び、西域の智人我國へ来る前兆とは、定めて龜茲國の羅什ならん、爾らば早く迎へ度もの也、夫れには誰ぞ大將を遣はして、一と合戦させて迎へんとの玉ひて、呂光將軍に兵七萬を授けて云く、汝龜茲國に至りて羅什を奪ひ來れ、此度兵を用ゆるは、全く此事なれば必ず地を貪る事勿れと、呂光畏りて軍兵を引率して龜茲國へ渡り攻れば、龜茲王大に驚き防ぎ戦ふと雖、俄かの事なれば軍勢少く、呂光が多勢に駈け立られて敗

北す、呂光は遂に什公を奪て歸る、半途にて本國の様子を聞くに、呂光が留主の中に、姚萇(後秦王)と云ふもの地を貪り、符堅を殺せし由を聞きければ、呂光大に驚き半途にて城を構へて立籠る、萇王呂光に什公を迎へんことを乞ふ、呂光大に怒り、汝は我主人を殺すの盗人なり、何ぞ盗人に大徳を渡さんやと返答す、其後程なく萇王死す、其子興王又使を以て什公を乞ふ、呂光允がはず、興王怒り兵を遣はして呂光をむ攻るに、光敗北して秦に降る、什師此時漸く唐土へ渡り玉ふ、此間十八年なり、偕て秦に至り玉へば、興王敬つて國師とす、夫より前に渡りし梵本に、已に翻譯の出來たるもあり、(されど誤りも多くあり)未だ譯せざるもあれば、則ち沙門僧肇僧叡等八百餘人を集めて、經論を譯し玉ふ事、其數三百九十餘卷なり、夫より遷神の期に臨み玉ひ、大衆を集め遺言し玉ふに、汝等勉めて我譯する所の經卷を世に弘通せよ、若し誤りあらば、我死體を茶毘する時残りなく焼けん、若し誤りなくば、舌ばかりは残るべし、是を

以て證據とせよとて、弘始十一年八月二十日安祥として寂し玉ふ、後に茶毘するに果して舌根儼然として焼け残り、師の舌根壞せざると諸佛の舌證とを合せて之を見、彌々信すべし、是で什師の傳を擧る、奉詔譯とは詔は上命、則ち姚秦の主興王の詔を承りて翻譯すると云ふ事なり、是より此傳記を以て勸進せば云々、此傳を聞て佛法に値ひ難き事を知るべし、羅什三藏唐土に渡らせ玉ふ事は、天文に顯はれて明かなり、去れども半途に滞り玉ひし事、十八年の春秋を経たり、外の者には例令此障ありとも、什師は佛法弘通の人なれば障はなき筈なり、然るを斯く障あるは何故なるぞ、什師渡つて佛法を弘通し玉へば、多くの衆生利益を得る、利益ある事故に、天魔と衆生の業力とが一つになつて礙へる故、斯く滞りが出來たるなり(佛力も業力には勝たず、強き業力に又勝たんの魔力あり云々)總じて此裝裝は皆障りがある云々、然るに我等求法の爲に、強て心を用ひし事も無かりしに、如何なる過去の善因ありてか、頓中頓の妙法

なる、此阿彌陀を聞き、口稱念佛の一行にて順次往生堂をさす身の上となりしは、能々時節到來の大慶と云ふもの也、必ず容易に聞ける事と思ふべからず、若し因縁が熟せぬと云ふ段になれば、菩薩の上でさへ心の儘に聞き玉ふ事はならぬと、釋尊は大經に説き玉へり、聞きさすれば勤むる事は行住坐臥の撰びも、身の淨不淨、心の散る散らぬと云ふにも、選り嫌ひのなき念佛なれば、至て勤め易けれども、聞き得る事が甚だ難いなり、其難きを聞き乍ら勤め易き行を勤めまい道理はない事なれば、怠りなく相續せらるべし、其相續せらるゝ内には、制する様に云ふ人があるもの、是は天魔が其人に託して云はせる者なれば、決して之に傳へられまい、若し又我から懶くならば、業力が地獄へ行くぞ知りて、其業力に争ひ勝ち強て相續せらるべし、魔力や業力の引くに任せて怠り果て、聞き難き此經を聞く事を得ずして、宿善の因縁を水泡にして仕舞はぬ用心が肝要云々、偕て又此什師の御舌の残りしは、總じて此師の翻譯に通達

(60)

し玉ふ現證なれども、別して此阿彌陀經に取ては難し有なり、其故は全體の御經が諸佛の御舌を舒べて、申すものは必ず往生と云ふを證し玉へり、然るに譯者又我翻譯した阿彌陀經の申せば必ず往生と諸佛證し玉ひしと云ふ事に、相違ないと云ふ爲に舌を残して證據とし玉へり、爾れば何とも疑ひ様のない清淨明白きつすぬ(生粹)なは此經の説相なり、是程慥かなる事はなき程に、返すくも此經の教に隨ひ往生の素懷を遂げらるべし、此經の教とは上に大意を辨じた通り、不可以少善根福德因縁、餘法餘行の修行では所詮往けぬ極樂なれば、男も女も一筋に助け給へ南無阿彌陀佛と唱へよ、唱へだにすれば往生に違ひないと云ふのが三佛大悲の御自意此經の教なれば、此經に隨ふて餘法餘行に眼をかけず、稱名一行に結歸して相續せらるべし、さすれば追付け往生を遂げ、阿彌陀如來、釋迦如來、六方證誠の諸佛方、觀音勢至舊往の聖衆、善導元祖、此經の譯者羅什尊者に拜謁して、よう我本願を信行した、よう我所説を信じ

二十六

た、よう我證誠を信じた、よう我宗義を信受した、よう我翻譯を信じて一向專修に相續して、よう此大菩薩と成つて呉れたと、聲々に讚嘆し玉ふ御言葉聞き、歡喜踊躍し身の置き所もなき程喜びをなすは、遠からの事なれば、專修一行意りなく相續せらるゝが肝要。

第六席

前席に於て題號を已り、今席より入文解釋なり、總じて一經の始終に大科三段あり、其二段とは序正流通是れなり、(此事一通りの書簡にもあり云云)而して其正宗分流通分の事は、其處に至りて談すべし、今席は序分の始めなり、序分とは即此の如是我聞より大衆俱と云ふ迄の間なり、此序分の中に、信聞時衆處主の六成就と云ふ事あり、(後に至て辨すべし)先づ如是我聞の四字を言釋せば、如是我聞之を證信序と云ひて、まづ此經を信すべき義を顯はし玉ひたる語なり、此四字を釋するに、雲棲大師の指南に依らば、統括釋と離釋と云ふ二

(61)

つありて、其統括釋とは、四字を統べ括り一つらねにして解する義なり、離釋とは一字づゝ離して解するを云ふ、諸經の始に總て此四字あり、如是我聞々々如是と、上下に置くかわりめはあれども、其意は全く同なり、是れ阿難の言也、然れども源は佛の御遺言なり、(其事は後に辨せん)偕て之を阿難の語と云ふは、佛滅後に多聞第一(憶持不忘の德を具ふ)の阿難を高座へのほせ、千人の羅漢が集り、如來一代に御説きなされし法を、説かせて聞書し玉ひて末代へ殘し玉ひしが一切經なり、故に阿難の言なる事明かなり、されば如是の法を我佛に隨ひ聞き奉つたと云意なり、まづ是が大意にして一つらねに説く統括釋と云ふものなり、是より離釋と云ふを談せん、まづ此四字に就て委しく云へば、三義あり、其三とは雲棲大師の疏抄に云、如是我聞有三義、一斷疑故、二息諍故、三棟邪故等云々第一斷疑故とは、先づ此の如の字は法を指す語にて、如は常なりと訓じて、つねと云ふ意なり、常とは變らぬ事を云ふ、變らぬをば信と

云ふてまことなり、信とは約束に違はぬ事を云ふ、例へば人の付合も身上のよい時と悪い時と變るは、信のなき故なり、何れの法にも此信あり、變らぬが信なれば、日の朝毎に東より出で、西に没し、月の上十五日は次第に滿ち、下十五日は漸々に缺け、星の曉に必ず北に向ふ、是れ常にして違はず、之を三辰の信と云ふ、春暖に夏暑く秋冷に冬寒しと、變らぬ所は年の信なり、立春日より霞たなびき夏の夕立秋の風冬雪霜の降るは、天の信、春風には雁は北に向て去り、燕は南を指して渡る、秋風には雁は南に來り燕は北へ歸る、又鶯は春の林に轉り、郭公は夏の雲井に鳴く、秋霧分る雁、冬の河原の千鳥など、木のが其時を違へず鳴くは、鳥の信なり、春は花咲き夏は繁り秋は紅葉し冬は落葉するは、樹木の信、水の低きに下り炎の高きに上るは、水火の信なり、蓮の葉は圓く松の葉は細く、皆是れ自然の理とは云へども、其約束の違はざるは信なり、斯うした信の中に住みながら、人として信なきは實に耻しき事なり、隨分偽

(62)

りを致さぬ様にすべきなり、如^レ是一切の萬法常に約束の違はぬ所を、信と云ひ、如と云ふなり、如々實相と云ふが此義なり、然れば今經で如と云ふ義は、此經の中に説き玉ひたる、一日七日執持名號の法の、教の如く約束の違はず、臨終には御來迎に預るとある説に、少しも相違なく往生するは、法の信と云ふものなり、其信を指して如と云ふ、故に如は即ち斷疑の義なり、如^レは一切の萬法でさへ約束は違はぬ、況や佛が之を信せよ、來迎せんと約束して構へ玉ふ、大悲誓願の名號の一法が、何しに疑はれようか、信せずしては叶はぬ道理なり、されば古人が、「春になれば必ず花の咲くものを、唯まかせばや南無阿彌陀佛」と詠せられたる如く、已に春になれば必ず花は咲くと信じ居る如く、此南無阿彌陀佛の一行にて、如何なる惡人女人も往生すると、ひら信じに信じ打ち傾きて念佛すべし、先づ如の一字を已る、次に是とは是れ非に對するの言なり、誤りありて理に背くを非と云ひ、誤りを離れて理に叶ふを是と云ふ、

今是と云ふは、此經は如來の所説にして、一點の錯り無しと云ふ義を顯はし玉ひしが、是の字にて是れ息^レ諍の義なり、非と云ふ誤りがあれば此諍がある、然るに非を離れ切りたる無慮妄の金言 一點の誤りもなく皆是なれば、此義に諍ふべき事はなき也、(爾れば、佛がそうはかつしやれたれども杯と、諍をせぬがよき也) 然れば如是と云ふ意は、此經の所説の執持名號の法を信せよと説き玉ひたる理、毛頭一點の誤りもないと云ふ道理を指して、如是と宣ひたる也、故に肇師(什師の上足)如是と云ふは、信願の辭なり、故に世人允可するにも亦曰^レ如是とありて、世間でも能く理に叶ふた事を云ふを聞ては、そうぢやくと云ふ也、(此そうじやくと云ふが、如是の言に當る也) 是に依て序分に六成就ある中、此二字(如是)を信成就と云ふなり、已に經の最初に、先づ法の眞實を顯はし玉ひたるは、聞く人の信を成立させんが爲め、佛法大海以^レ信爲^レ能入と、疑ふては益なきなり依^レ之人々も信じて聞くべし、其信とは疑はぬ事な

(63)

り、先是で如^レ是の二字を辨じ畢る、(此如是我聞の旨趣をば知らず、和訓に迷ふて、徂來等がたはごと云ひしは、抱腹に堪へず云々)次に我聞とは阿難自身を指して我れ親り佛に聞き奉て、外より傳聞した事ではない、佛口より直に承つたと云ふ義を顯して、我聞と置き玉ひしなり、六成就の中の聞成就なり、偕て此我と云ふ字を置き玉ふたに付て、詮議があるなり、故は我と云ふ思は迷ひなり、實に我と云ふものはない、此體は法界より借り集めたる五蘊ぢや、故に命終の時地水火風を皆空に返せば、我と云ふものは無くなる、爾るを經の初に我聞と置き玉ひたはいか、佛法の禁忌ではないかと云ふ義あり、時に此の我とあるは、世流布の我と云ふて苦しからず、其の故は大論云、復次世界語言、有三根本、一邪、二慢、三名字、是中二種不淨、一種淨、(文)此釋の意は、凡そ我に三種あり、一には邪見我と云ふあり、謂く假和合の法を認めて我とし、妻子財寶等皆我物と思ふ等は、是れ邪見の我なり、二には我よしと思ふて人を見

ろし高ぶる心あるは、慢我なり、三に名字の我と云ふは、自身を假りに名けて我と云ふを、名字の我と云ふ、實に我無しと識つてはかれども、我有りと思ふて居る人へ知らせる爲に、假に我と云ふ譬へば小兒に對しては、夫れわんく、が來たと云ひ、牛の事をもうが來たと云ふ如く、親はわんわんではない、犬と云ふ事は知つて居れども、知らぬ小兒に、犬と云ふては合點が行かぬ故、わんわんと云如く、今も我自身に於ては無我と知れども假りに我と云ふを、名字の我と云ふなり、此邪慢名字の三の中、初め二つは不淨なり、後の一つは清淨なり、今阿難の我は、後の名字の我故に妨にはならざるなり、種々の義あれども是で一と通りすむなり、聞とは耳根に機を發し聲に觸れて理を決着して、心に持もつを聞と云ふ、夫れ故に聞くと云ふが信の根本となる也、念佛するので往生すると疑はぬ所が信、其信は物の道理を聞くより起る、爾れば聞は信の根本となるなり、故に隨分法は聞くべき事なり、善住意天子經曰、文殊告^レ舍利弗

曰、聞法生謗者、雖墮於地獄、勝於供養恆沙佛(可解)「聞ならず奈落の底に入りぬとも、必ず法の道を聞くべし」、爾れば法を聞くといふは、信の根の出来た者なり、謗る者すら聞た徳に依りて遠果を得る、況や聞て謗らば其徳莫大なり、又其上に信願持名の故を聞く通りに修行する身の上になるは、生死を離るゝ事今度に極つた驗と云ふものなり、爾れば我等此深法を聞く根本は、此如是我聞と云ふより開けし事なれば、此一句をうつかりと聞なさぬ様にすべし、うつかりと聞なさぬとは、此四字は證信序と云ふものなれば、次第に念佛を信する心の募る様にする事なり、まづ是で如是我聞の四字は終れり、斯く一字でさへ廣大の徳あり、經文の字は皆此の通りなれば、此心を末へ運んで聞くべし、如と云ふ字には法の信が顯はれて、疑を斷つ徳あり、是の字には佛の所説に誤りのなき道理が顯はれて、諍をやめるの徳あり、我の字には邪見我慢とて、私の迷執を離るゝの徳あり、聞の字には聞法の徳の勝るゝ事を顯はすの

徳ありて、一字も無益なる文字なく至極甚深なる事なり、蓋し此四字一と通りでは阿難の自語の様なれども、元來佛の御遺言なり、是より其根源を指示せん。

涅槃像隨文聞略讚上(五十六中三丁)取意して辨すべし、四要、一には如來滅後に一切經を結集せん時は、經の始に如何なる言を置くべきや、二には如來入滅の後には、誰を以て師とすべきや、三には末世の佛弟子は、何れの處に住すべきや、四には惡口の車匿をば、如何治すべきや、佛の答には、四念處(身受心法、不淨苦無常無我)に住せよ、波羅提木叉を師とせよ、默摺を以て治せよ、如是我聞と置くべしと、此の四問の中、今席の所用は御答の第四が入用なり、如是の二字は所聞の法の略せざる事を表はし、我聞の二字は能聞の違はざる事を顯はすなり、是に依て此四字は阿難が自ら置き玉へる語なれども、實は佛の御遺言也、夫れ故種々の貴き事が含んである、先づ是で證信序は畢れり上來の説を聞き如來の御慈悲の深きこと、佛説の

慮しからざる道理を信じ奉るべし、譬へば(佛は父、金子預る長者は阿難、他國に居る子は末世の衆生、金子は經説)佛は我々を他國に居る一子と思ひ玉ひ、阿難を長者に譬へて此法を附屬し玉へり、既に一子と憐み玉ふ大悲の佛が、唱へて往けぬ事を我見是利と宣ふべきや、長者に譬へられて、預り玉ふ阿難尊者が争か鹿相に御傳へなさるべきや、如是慥かなる事故、道俗男女唱ふる人に往生せぬは一人もなきなり、長者はぢよさいなく譲つても、其子にして之を守らずば不孝の惡子なり、阿難の尊者は既に如是我聞とことばつて此法を傳へ玉へり、受けて守ると守らぬは衆生の方にある程に、必らずなをざりに聞きなして、不孝の惡子とならぬ様に、心あらん人は此等の親切なる佛の思召を、空しくすべき筈でない、深く信じ取て、彌々願生の心を勵まし、退轉なく稱名相續が肝要

第七席

前席より入文解釋にして、序分の始め如是我聞の

四字を畢れり、總じて今經に六成就と云ふ事のある中、信成就と聞成就と云ふがすむ、此四字の心を一貫して云へば、如是法を我佛より直に聞くこと云ふ事なり、又一字々々離して解すれば、如の字には法の信を顯はして、衆生の疑を斷除し玉ふの徳義等ありて、下の三字も字々に其徳義ある事、委くは前席の如し、(之を此經の證信序と云)偕て今席は、一時佛在舍衛國祇樹給孤獨園と云ふ迄を辨せん。

一時とは六成就の中の時成就なり、先づ此一時とは常に和訓にては、あるときと訓するなり、日本紀にも例あり、先づ此二字は一經の始終に通ずる言なり、實は何月何日よりとあるべき事なれども梵漢兩土の相違ある故、諸經ともにある時と記し玉へり、孟蘭盆經疏(宗密作)明三時成就有二義、一謂說教不一、謂方土不定也、何故に何月何日よりと記しにくいなれば、天竺では一年を三際に分け、十二月十六日より四月十五日迄を春分とし、四月十六日より八月十五日迄を秋分とし、八月十六

(66)

日より十二月十五日迄を冬分とす、又二月十六日より六月十五日に至るを熱時とし、六月十六日より十月十五日迄を雨時とし、十月十六日より二月十五日迄を寒時とす(諸乘法數)一月を二に分けて、月の初十五日を白月と云ひ、後の十五日を黒月と云ふ、唐では一年を四時に分ち、子の月を正月と定むるもあり、丑の月を正月と定めしもあり、周は子、殷は丑、夏は寅、を正月と定むる如きなり、斯様に梵漢の異なる故、何月何日と記さずして一時と記し玉ふ、今經は一時、此時を得て佛は説き玉ひ、大衆は此時を得て聞き玉へり、此れが時成就と云ふものなり、説くも聞くも時の成就したからの事で、今我々が説いたり聞いたりすると云ふも、是れ全く時の成就したと云ふもの也、若しこれ迄に此經を聞いた事があれば、今は生死に居らぬ筈なり、現に迷ふて居る所から押せば、是れ迄此經を聞く時が至らざりし故ならん、爾るを此度かく聞く事を得たるは往生すべき時節到來と云ふものなれば、此時を失ふべからず。

佛とは釋迦牟尼世尊の事なり、三千界に唯一佛あるのみ、天に二の日なく地に一人の王なきが如し、此經は他の所説に非ず、佛の所説なりと云ことを擧げ玉ひたる也、是れ主成就なり。
 舍衛國とは舍衛とは城の名なり、國は橋薩羅國と云ふ、大經觀經所説の耆闍崛山とは、餘程隔たりし國なり、時に橋薩羅國に南北の別あり、日本で東江州西江州と云ふが如し、南薩羅國と聞違はぬ様に如來の此經を御説きなされたのは、北橋薩羅國であると云ふ事を知らしめんが爲に、北橋薩羅國に在る城の名を以て、舍衛國と顯はしたるもの也、此舍衛國は天竺十六大國の中に、勝れし大城六の中の隨一なり、舍衛は梵語、新譯には豐徳と翻す、豐の訓はゆたかなり、此處四つの豐なる事あり、一者財物豐徳云云、二者欲塵豐徳(世人の好み慰み事多きなり)三者多聞豐徳(國中に學者物知り多し)四者解脫豐徳(生死を厭ふて悟りを開く人多くあり、是れ佛の位し玉ふ故なり)此舍衛に佛在す事二十五年間なり、時に此精舍の中に奇特あり、

(67)

毎日佛の御説法の時を知らせるを鍵椎と云ふ、其物を叩けば皆參詣する、其上に狐狸犬猫等鳥類迄が數千萬來つて説法を聞き、互に害する心なく寂然として聞く、御説法畢れば歸り、翌日も又其通りなり、何故に畜類は殘害殺戮なるに、人をも恐れず相ひ害する心も忘れて、來集するぞと云に、佛は云に及ばず集まる聽衆の心にも惡念なき故に、鳥獸も人を恐れず來りて法を聞く故、相害心を離れたるなり、此通りに地を走る獸も、空を飛ぶ鳥も慕ふて法を求むるは、所謂仁及於鳥獸也と云ふものか、仰で佛慈の深きを信すべし、又鳥獸の人を恐るゝは、人々我々所の念強く害心を懷く故近づかぬなり、加之今時五濁増の悲しさ、人の陰言を云ふに、憎くや恨めしやと争ひ、甚しきは殺害にも及ぼさんとするの、淺間しき身の上になり下りたる、實に嘆はしき事なり、此世からの修羅道、後の世の惡趣は定つてある、然るを今度此法に信賴したる人は、必ず極樂往生を遂げ補處の菩薩となり、諸上善人俱會一處と、互に悟り深

き菩薩仲間の美しき付合をするも、遠からぬ身の上となりしは、何んと末頼母しきには非ずや。
 祇樹とは林の事なり、祇園精舍の樹木に就ての名なり、舍衛城の王波斯匿王の太子を祇陀太子と云ふ、此樹林は祇陀太子の所領なりしを、精舍建立に付寄附せられしもの故、佛祇樹とよび玉ふ、(祇陀の樹林の略也)天竺は暑さ強き故に、往來の人木の蔭によりて暑を凌ぐ様にせしもの也、木は自然と水氣を含んでたるゆへ、日蔭となる斗りではなく別して暑を避ける徳あり、(往來に並木松ある事)。
 給孤獨園とは孤獨に給ふと書た文字にして、須達長者の名なり、須達は梵語此に翻して善施と云ふ、此須達長者は貧しき者を憐み財寶を施して、仁慈深き人なり、故に時の人給孤獨と德號を付たり、幼にして親なきを孤と云ひ、老て子なきを獨と云ふ、如是哀れなる者があれば、先づ救ふて困窮を助け、其仁心を稱して給孤獨とつけし也、如來に歸依せぬさきから如是の善人なり、其上如來を置き

(68)

奉る精舎を建る、此須達給孤獨の建てし精舎なる故、釋尊の在す寺を給孤獨園と名け玉へり、園とは梵語、僧伽藍摩と云ふ、略して伽藍と云ふ、翻じて園と云ひ又衆園とも云ふ、衆僧を安する所なり、然れば祇樹も給孤獨園も共に施主の名を以て付け玉ひしなり、是處成就なり、偕此序分に於て、正宗分の利益を祇樹給孤獨園と云にて顯し玉ふ義あり、是を表し釋と云ふ、此れは我宗のみ云ふ事に非ず、今禪宗の高僧雲棲大師の釋に依て示す、——舍衛國とは、天竺六大城の隨一舍衛城なり、此舍衛城を説處と定め玉ふにて、正宗の利益を顯すとは、正宗分所説の極樂へは、少善根では往けぬ、大善根の南無阿彌陀佛の一行で往生すると云ふ、法の勝れたる事を、舍衛國の勝れたるを以て知らしめ玉ふなり、祇樹とは先き程も申通り、暑さを避けるには樹木の下大に宜し、暑き時は木蔭に依り苦を遁るゝなり、今も亦その如く、我々は生々世々の惡業煩惱故に熱惱せられ苦しむ處に、此阿彌陀經の木蔭に依れば、三毒の熱惱次第にさめて冷風

身にしみわたるは、そも何故なるぞと云ふに、大善根の名號を唱ふる故、六方如來の護念に預り、阿彌陀如來の光明に攝取せられ、觸光柔輭の徳力にて、自然と三毒の熱も去りて涼しくなる也、欣求以前の我には似るべからずで、此法に逢はぬ先きは、惡む事も恨む事も底もなければ邊際もなし然るに法を聞て順次往生と思ひを定むると、腹が立ても嗚呼追つ付け死に行く我身、やがて菩薩になる者がと思へば、餘計な腹をも立たす思ひも惡みも淺くなる、是れ此世から此經の木蔭に依り、唱ふれば三毒次第に滅する御利益に預つて居るなり、此趣きを序分の祇樹と云を以て顯はし玉ふなり、給孤獨園とは即祇園精舎の事にして寺なり、今衆生が念佛すれば、三毒の熱醒めて臨命終の時報土へ順次往生する、其往生する極樂は、給孤獨園の餘方の寺に勝れたる如く、十方の淨土に遙に超へ勝れたる淨土ぞと云ふ事を顯はし玉へるなり、尙此上に再應の表示釋あり、祇樹とは波斯匿王の太子祇陀の樹林と云ふ事如上、此太子は大王の

(69)

後繼者となり玉ふ御方なり、今我々も此經の教に依り、一向專修の行者と成りたれば往生極樂に違ひなし、往生すれば正宗分に説き玉ひたる、一生補處の菩薩となり、法王阿彌陀如來の法王子となるぞと云ふ事を顯し玉ひたるなり、給孤獨とは須達長者の德號なり、孤獨を憐む仁心深き人なり、今我々は善根とては少しもなく、法に於ては貧窮無福慧孤獨と云ふも不足なき罪人なり、然るに此經に依り、一向專修の身の上となれば、一遍々々に無上大利の功徳を給はり、地上無垢の菩薩となり、三明六通無碍自在の身となれば、長者の貧窮孤獨の者を救ふ如く、一切衆生を思ひの儘に助くる身となると云ふ、正宗に説きたる一向專修となりし人の得益を、今此序分に給孤獨と云を以て顯はし給へり、是で表示釋を已る、——今此上にて能く思ふべし、今迄は佛法の中に有ても、貧窮無福慧決定墮獄と定まりし身が、今此經に逢ふて見れば、勤むる法は萬法の中で超へ勝れたる南無阿彌陀佛、利益を云へば諸佛の淨土に勝れたる

極樂淨土に往生を遂げ、祇陀太子の天地の跡を繼ぎ玉ふ如く、十地を究竟し等覺補處の大菩薩となり、還來穢國の其時には須達長者の孤獨貧窮を救ふが如く、思ひの儘に衆生濟度をする事なれば、往く末の果報を思ひ廻らし、悦び勇んで稱名相續せらるべし。從是祇園精舎の傳來を談せん。世尊は、舍城靈鷲山に在して説法し玉ふ頃なりしが、北橋薩羅國に須達長者と云ものあり、此長者に男子あり、此に嫁を求むるに、先方も同じ位の家よりと望めども、身の上相應の家には娘なく、偶々あれば不器量と云ふ様に、近國には相應の者なかりしに、摩竭陀國の王舍城に珊檀那長者の娘ありと聞き、器量も勝れ年頃も相應と云ふ事故、人頼みよりは直應對と須達自身に遙々と王舍城の珊檀那の處に行く、此所に至り案内云々、一間へ入置云々、須達此家の様子を見聞すれば、客來ると見えて、勝手のお音座敷庭前の掃除など叮嚀にする内に、亭主の長者らしき人も交りて掃除するを見て、是は能々大切の來客ならんと思ふに、追つ付け客人

(70)

も入來の様子、人柄わるうのぞかれもせず、窈かに休息して居りしが、來客も歸り夜に入つて、漸く亭主の長者座敷へ來て挨拶云々、須達云く、今日は御來客の様子なり云々、亭主云く、されば大切の招待故、早速に對面も得仕らず失禮云々、其貴き御客とは、國王でも御尊來にやと云ふに、亭主いや大王來り玉ふとも、某何ぞ自分に掃除迄を仕らんやと云ふ故、須達いよく不審に思ひ、大王の外に尊き方とはと問へば、亭主云く、貴殿は未だ御存じなきか、此國には大聖世尊釋迦牟尼如來と申佛在すゆへ、今日其無上世尊を請じ奉りしなりと云ふを聞いて、須達は終に是迄知らぬ事なれども、佛と聞けば何となう有難くなつて、身の毛もよだち信仰の念を惹起せり、然れども知らざる事故に其佛とは如何なる御方ぞと問へば、亭主未だ御存じなくば御咄申さんとて云く、佛と申奉るは迦毘羅衛城の大王、淨飯大王に太子あり、其名を悉達と名く、爾るに太子十九歳の時、位を捨て、出家し、苦修練行して三十の御年に悟を開き、釋迦牟尼

如來と云ふ佛になり玉ひ、専ら多くの人々をして長く生死の苦を離れしめ玉ふ御方と語る時、須達いよく信仰の程度を高め、忽ち一道の光明かゝりて白日の如し、即光明を知邊として、佛所に詣づる道に天神の社あり、之を拜して頭を擧ぐれば光明消へて闇となる、立所に怖を生じて歸らんとするに、一りの天神空中に顯はれて勸めて曰く、汝佛所に至らば大利益あり、譬へば七寶を以て閻浮提に滿つるとも、一度發心して佛處に詣でたる功德に如かず、我は是れ婆羅門の子なり、汝が昔時の善知識なり、我舍利弗目連の出家せしを見て歡喜心を生せり、此功德に依て北方毘沙門天王の子と生れ、専ら此王舍城を守護すと、須達之を聞いて又信を生ずれば、又光明あつて明かなり、故に佛所に至り直に佛を禮し奉れば、佛爲に説法し玉ふ、聞て即ち須陀洹果を得たり、須達佛に白しく言く、願くば世尊我國へ來り説法し玉へと願へば、佛黙して許すとて打ち點頭かせ玉ふ、須達曰く、道場伽藍を建立の事私不案内なれば、御弟

(71)

子の中一人を遣はされて、御指南を蒙り建立仕り度と申せば、如來則智慧第一の舍利弗を遣はし玉ふ、須達嫁を貰ひに來りながら、其事は捨て置き舍利弗と同じ車に乗て遠路を歸るに、佛の神力に依て唯一日一夜にして舍衛國に歸る、扱て何れの處を寺地に定めんものぞと案せしに、先づ祇陀太子の園に過ぎたる好地なれば、何卒あの園を私に御譲り下されよと願ふ、太子は常に遊び玉ふ大切の園なれば惜み玉へり、須達強て之を願へば、太子も今は此事を遁れんとて、汝彼地面に黄金を敷きつめたらば譲らんと宣へば、須達忝なしと御請け申、即日より園一面に黄金を布く、此園大にして東西十里(六丁一里なり)南北七百歩、是れに段々黄金を并べ布く事半に至る、太子之を見て眼を驚かし、斯く夥しき金を惜まざるを感じて、太子も又歸依の心を發し、いや是れ長者(須達)汝に黄金を布きつめと云ひしは、一時の戯れ言なり、もう黄金を敷くに及ばず、又汝に譲るも煩はし、我自ら伽藍を建て、佛に供養すべしと云へば、須

達色を改めて云く、君子に戲言なし、太子は大王の譲りを受けて、追つ付け此國の王となり玉ふ御身に非ずや、綸言は汗の如く、戲と云ふてすみませうか、黄金は布きます御受取下されよと承知せぬ所で、太子も詮方なく、然らば樹木はせめて我に寄附させて呉れよと申され、須達これ難有とて請けられたり、されば精舍建立一日も早く急ぐ所へ、善事に障り有るは穢土の習ひ、昔も今も變る事なし、此椿事を舍衛國の外道等が聞て各々、國王(波斯匿王)に怒つて曰く、長者須達太子の園を買ふて瞿曇沙門の爲に精舍を建立せんとす、我國古代より傳はりし法を捨て、更に異法を弘めば、先王の國政を破るに非ずや、希くは沙門(舍利弗)の神力と我等が神術と比べ合し、勝負の上にて決し玉へと、大王最の事と思召、長者須達を召され勝負に依て決行せん、沙門勝たば精舍を建立せよ、若し沙門負けなば我國へは入るべからずと仰せ出されたり、須達承はりて大に驚き、相手は大勢あり味方は舍利弗尊者一人、迎ても勝つ譯

(72)

には運べまい、一層今の内に思ひ止まつて仕舞はねばなるまいか、嗚呼難義な事が出来たと、案じに案じて内に歸れば、舍利弗須達に對つてどうぢや、長者きつう心配な顔付ぢやのう、今日の用事は外道と我と神力の勝負で、精舎建立なるならぬと云ふ事であらうと云ひ玉へば、須達もう夫れを御存じか、右の次第故きつう心配と云ひかくれば、其言葉取つて舍利弗、いや心配には及ばぬ、假令三千界に滿つる外道が一所に集つても、我足の毛一本動かす事はならぬ、却つて佛法を弘通する動機となる、加之多のよき弟子を得らるゝ事なれば、早く日限を定められよ、大丈夫だ、と言はるゝに長者も落ち付き、早速此由を大王に申上げ、日も定まり場所も定まり既に其日となりければ、大王太子朝臣を初め、國中より見物に出る人雲霞の如く集りける中へ、外道の頭領勞度叉なるもの夥しき弟子を引連れ、今日を晴れと飾り立て、出る、舍利弗須達は唯二人、すごとくと其場へ出らるゝ所でモ一負けの様に見へて、須達は傍で氣の毒そ

うな顔付をして見て居ると、外道は手に印を結び口に呪文を唱へかけると、外道の術で空中より大木矢を射る如く、舍利弗微塵になれと落ちかゝる刹那、舍利弗は從容として手に持つ扇子で招き玉へば、忽ちびらん風吹き來りて此大木を吹き散す、外道は之を見て唯事ならずと思ひながら、又呪文を誦すれば、此度は毒龍現はれ鱗を逆立て眼を怒らし、今にも舍利弗を一呑みにせん勢ひ、舍利弗又天を招けば金翅鳥飛び來り、此毒龍を一呑にして去れり云々、所で外道又術を以て呪文を誦すれば不思議なるかな、舍利弗の兩脇へ大山が出來てじりじりとしめかける、危ふき事見るに忍びず、然るに忽ち天より金剛夜叉神下りて、金剛の杵を以て此大山を微塵に打ち碎き玉ふ、之を見て外道の頭勞度叉を始め其座の外道も、悉く佛法の威力に感伏せり、既に其術に盡きたる外道は負けて、神力自在の佛弟子勝ちたる故、舍利弗はいよく外道に説法して聞かせ玉ふに、利根なるもの多ければ其座で初果を得たり、依て王太子を始め見物

(73)

の輩、佛法歸依の心を起し深く讚嘆しつゝ、家に歸る、先づ是で外道の障礙も打ち拂はれたれば、愈々長者と尊者と相議して精舎建立の繩張り杯を仕かける、舍利弗莞爾として笑を含む、長者故を問ふ、舍利弗曰く、汝此精舎を建立せんとするの功德表はれて、六天の宮殿出來たり、(四王、忉利、夜摩、都率、化樂、他化自在)然れども汝肉眼なれば見る事能はじ、我天眼を汝に與へん、六天の有様を見て生處を撰べとある故、斯は難有とて、長者六天の状態を拜見するに、何れも玉を鏤め光を放つ結構なる宮殿、何れを何れと選びも付かねば、尊者に御指圖をと願ふ、化樂と自在との二天は傲慢を生ず、四王、忉利、夜摩の三天は、五慾に染着して宜しからず、唯中央の都率天は、少欲知足にして常に一生補處の菩薩が、此内院に在て説法し玉ふと宣へば、長者然らば第四都率に生を受けんと思ふて都率天を望むと、餘の五天は忽ち滅して都率の宮殿のみ明淨なり、又繩張りする内に、尊者面に哀憐の相を生じ玉ふ、長者又其故を

問ふ、尊者曰く汝此處に居る蟻を見よ、此虫昔時毘婆尸佛の時より今日迄、九十一劫の間蟻の形を受けて居る、扱も遁れ難き生死海の有様ぢやと示し玉ふ云々、夫より繩張りも濟み、終に一百二十箇の寺院を建立し成就しければ、長者大に悦び遠く如來の在す靈鷲山の方に向ひ、慇懃に請じ奉りければ、如來即ち請に應じて大衆と共に一刹那の間に舍衛國に來り、精舎の中へ入り玉ふ、直に侍者阿難に告て曰く、此精舎をば祇樹給孤獨園と名くべしとの佛説なり、是れが祇園(上下の二字を取る)精舎の傳來なり(本文大意)

此傳に就て、人々の心得となる義を示し、又念佛者の貴き身となりし事を示さば、須達嫁もらいに行て、佛道に入り種々の因縁ある事知るべし、長者信仰の念を起せば、釋尊知見の光明を以て照し玉ふ、我等本願を信じ助け給へと思へば是を知り、南無阿彌陀佛と申せば是を聞き、攝取護念の光明を以て照し玉ふ、此の光益を蒙れば、三毒の熱惱は次第にさめ臨終には來迎に預り奉る云々、天神は

(74)

他人(目蓮舍利弗等)の出家隨喜の功德によりて、毘沙門天王の子となる云々、他の出家を不隨喜障りをなす等、是に纏じて知るべし、(親が子の出家を障へ、子が親の出家を障へ等云々)況や大善の念佛隨喜と不隨喜と、申すと申さぬとの差別云々、外道の障り云々、修行中に障あり能々はからい、堪忍して退くまじき事云々、外道發心すれば初果の聖者となる、人々は是れ迄申さず或は謗りをなすとも、早く回心念佛すれば定んで往生を得ん、導師は謗法闍提回心皆往と宣へり、別して心得べきは、須達佛所に參する道にて、天神を拜し餘縁にわたる、佛光忽ち隱沒せり、佛殊更に光明を攝め玉ふには非らず、心雜起する故此の失あり、故に遺教經には、心を一所に制すれば、事として辨せずと云ふ事なしと宣へり、物事は總べて一筋ならでは利益なき事知るべし、是れを以て今一向專修勸進の義を知るべし、若し專修に背きて夫れよ此れよと修し交へば、忽ち佛の本願に背き、攝取護念の光益に漏れ、暗き道に入りなば後悔の涙如

何ばかりならん、此の得失の間をば、須達が雜起の失縁を見て唯一筋に往生を願ひ、此の一行ならでは一向專修の操を立て、今世も後世も心光護念の光明中に遊泳する大果報の身とならるべし、又々思ふべし、須達長者は性得の善人、佛法に入らぬ前から給孤獨の德號を附せられ、佛弟子となりてよりは、東西六十町南北七百歩と云ふ地面へ黄金を並べ、百二十箇の精舍を建て別れたる善根なりしが、此果報の表はれし所が漸く都率の宮殿なり、(三界の内、餘行で果報を得る分齊を知るべし)然るに人々此長者の眞似が出来ようか、(彼は性得の善人、是は性得の惡人、彼は長者、是は貧者、彼は清淨喜捨、是は不淨執着、故に彼は生天、是は三惡道が定宿なり、)斯く淺間敷ものなれども、本願の法門に逢ひ奉りし故、行住座臥分々に唱へてさへ居れば、界外報土の宮殿へ往生を遂ぐる事は、實にありがたき極りに非ずや、斯の如く格を離れたる超世微妙の法門故、常途の見

では信じ難し、故に難信の法と説き玉へり、我見是利二故説此言と云々、六方諸佛同讚同證し玉ふ云々、然れば功德の大なるを見ては、疑はしきに似たれども、又三佛の御手當を見れば、毛頭疑はなき事なれば、往生の一まきには慮ふべき事なれば、此悦びに眼を付けて夢の中なる此世の事、假令心に叶はずとも必ず心を奪はれず、正宗の利益を序分に説く所、祇樹給孤獨園で顯はす、報身報土往生を悦び進み、稱名を專修一行一筋に相續が肝要。

第八席

從來、序分の中、如是我聞一時佛在舍衛國祇樹給孤獨園と云ふ迄を辨じ己る、是れで六成就の中五成就はすんで、今席より第六大衆成就の下を談するなり、其六成就とは前辯の如く、即ち信、聞、時、教主、處、大衆、の六つなり、此の六つが揃はねば佛も法を説き玉はず、勿論聽衆の方にも聞く事能はず、今其の故を耳近く示せば、聽衆がなくて

は法は説かれぬ、(家や柱の非情を、相手に説ても利益はなきなり、)大衆が有つても會所がなくてはならぬ、(野原、町中、深山では、云々)大衆が、會所へ集つても、教主の説き人がなくては聽かれぬ、大衆もあり會所もあり教主もあつても、時が至らねばならぬ、(太平の世なればこそ、法話を成し、或は兵亂或は飢饉水火の難の中では説けぬ云々、)此四つが(時、教主、處、大衆、)揃ふた處で法を聞く事を得るが聞成就、前の五つが揃ふても疑をさしはさめば、益なきのみか罪を重ね、其聞く法を疑はず信するが信成就、信は道源功德の母、信の一つが入眼と知るべし、然れば今我等は此六つが揃ふたればこそ、説いたり聞いたりする身の上と成りたる事なれば、疎かに思ひ忽せに心得て、得益無窮の時節を失ふべからず云々、此六成就が序分の内にある譯を云へば、如是の二字が信成就、我聞の二字は聞成就、一時の二字は時成就、佛の一字は主成就、在舍衛國祇樹給孤獨園の十字は處成就なり、此五成就は從來辨じたる如し、正

(75)

しく今席より第六大衆成就の下を辨せんとす、其大衆成就とは即ち文に、
 與大比丘衆、千二百五十人俱、皆是大阿羅漢、衆所知識。大とは稱美の語なり、大に就て大多勝の三義あり、今此大は龍樹大士の論判に依れば、五義あり、謂く一には數大とて、千二百五十人と大勢なる故に大と云ひ、二には離大とて、此千二百五十人は皆煩惱障を離れたる人故に大と云ひ、三には位大とて、皆是れ大阿羅漢とある故に、初二三果より位が大なる故に大と云ひ、四には名大とて、名が遠く聞へて誰れでも知つて居る故に大と云ひ、五には識大とて、大衆に所知識故に大と云ふ、故に今の大は勝ると云ふ義なり、比丘とは二百五十戒を持つを比丘と云ふ、(女の五百戒持つを比丘尼と云ふ、此道理を知らず、死前の樂刹比丘云々、伊勢の比丘尼色比丘尼云々悲むべし)、此比丘とは梵語なり、何故翻譯なきぞと云ふに、具に云へば五義を含み、要を取て云へば三義を含む、其三義を含む事を譯すべき事なければ、止む

を得ず梵語の儘にて用ゆるなり、強て義を以て云へば三義あり、其三とは即三徳なり、謂く一には乞士、上は佛に法を求め乞ふて、法身の惠命を養ひ、下は衆生に食を乞ふて、色身を養ひ、出家相續するが故に、比丘の事を乞士と云ふ、二には怖魔、此三界六道は魔界にして、其内に居るものは皆眷屬なり、然るに人有て初めて出家する時は、眷屬が無くなる故、魔王大に怖れをなし魔の宮殿振ひ動くとなり、實に然るべし、一人出家すれば一人滅するのみか、其出家得脱すれば、其人に化益せられ生死を出る衆生夥しきなり、故に魔は怖れ悲しむべき道理なり、依て比丘のことを怖魔と云ふ、三には破惡、漸々に修行して煩惱を滅する故に破惡と云ふ、此三義ある故に比丘と云ふ、衆とは僧なり、多僧和合より衆と云ふ、與とは物を並ぶるを云ふので、今は佛と比丘とを兼ね並べたるを與と云へり、俱とは合也、佛と千二百五十人の比丘と和合して、一所に居玉ひたと云ふ意なり。偕て此の經を説き玉ふ時、大比丘衆千二百五十人

のみ有て、外にないかと云ふに然らず、此千二百五十人は常隨の内衆なり、他方來の衆はいかほどもあるべし。

古來この内衆を、三迦葉の弟子千人、舍利弗目連の弟子二百五十人とを合して、千二百五十人と云ふ、外道より佛道に入れば、佛恩を報せん爲に常隨すと云ふを、慈恩大師の小經の疏に斥けて、即ち羅睺羅、大迦葉等の如き、豈に彼の徒ならんやと宣へり、羅睺羅は佛子、大迦葉は豪富家の子、難陀は佛の弟、阿難は佛の從弟等云々、破斥は聞へたが、其の會通所立はと云ふに、長阿含(卷一)を引て、佛言、劫將欲未則諸物減損也、如前迦葉佛一會說法、弟子常有二萬人、今我釋迦牟尼一會說法、弟子有千二百五十人云々、と基師所釋分明なり、然れば此千二百五十人の方々の常に佛に隨ふて居玉ふは、在家の五欲に耽りし身が佛教に逢ひ奉りしを喜び、又は外道より佛道に入りし類などは、別して練磨本宗、先聞爲種とて、本來の癖の出ぬ様にと思召して、常に佛の御側を離れず

に付き隨ふてござる、是れ跡戻りせぬ爲の用心なり、上代上智の方々ですら斯く用心し玉ふ、況や末代下劣の我々猶以て用心すべき筈なり、其用心とは、是まで餘法餘行を修したる人、又は後世の事は捨て置き現世祈禱の事ばかりにかゝりし人、多くは今迄五欲の境界に迷ふて居たる身なれば、隨分其れが爲に念佛を奪ひ取られぬ様に用心する也、在家なれば其の境界を離れ、出家でもするが極めたる用心なれども、そうこそなるまいが、せめて斯様に因縁のある時は、馴れぬ事ゆへ退屈であらうとも、寺に身をよせ法に心をよせて、隨分近づぐ様にすべし、後世浮沈の堺なれば、これ位の用心は有るべき筈なり、(其用心あれば、一分千二百五十人の先達方の行狀を、學ぶものと云ふべし)。

是より其比丘の徳を擧げて、皆是大阿羅漢と云へり、阿羅漢は梵語、此に又三翻あり、聲聞の極果、第四果の聖者を大阿羅漢と云ふ、大とは稱美の語、初果二果三果に超勝する故に大と云ふ、其の三翻

(78)

は、比丘の三徳の因より顯れたる果を云ふなり、
 一には應供、俱舍論に云、供養阿羅漢得現在
 福報、是人天直福良因也、受施無慚故曰應供、
 文、此意は、阿羅漢に供養すれば現に利益に預る、
 譬へば善き田地へ種子を下す様に、一粒萬倍にて
 還ると云ふ、斯く人天の供養を受くるに堪ゆる徳
 ある故、應供と云へり、是れ初の比丘と云三義の
 中の、乞士の果の顯はれたる所なり、二には殺賊、
 盗人を殺すと云ふ文字なり、賊とは煩惱の事、こ
 の煩惱の賊が功徳の財を盗み智慧の命を破る、前
 三果では見惑(三界の八十八使、貪、瞋、痴、慢、
 疑、身見、邊見、邪見、見取見、戒禁取見、云々)
 をば斷すと雖も、思惑は尙ほ存す、然るに今は三
 界九地八十一品の思惑を斷盡する故に、殺賊と云
 ふ、是れ前の怖魔の果報なり、初めは魔を怖れし
 め今は魔王の手引をする煩惱の盗人を殺し盡した
 る故に、大阿羅漢の事を殺賊と云ふ、(善根は修す
 れども自力故に、五欲六塵の賊に盜まれて仕舞ふ
 なり)、三には無生、凡夫は生死無量なる故に、無

生とは云はれぬ、初果の聖者も欲界へ七遍生れぬ
 ばならぬ、二果は一たび欲界へ生れ、三果は不來
 とて欲界へは還り生れねども、猶ほ色界へ生ず、
 今此四果大阿羅漢の聖者は、生れるといふ縁を斷
 盡して居る故、無生と云ふ、これ比丘の破惡の果
 の顯はれたる所なり、初は惡を破り今は破し終つ
 た故に、無生と云ふ、千二百五十人が各々此徳を
 具足したる四果の羅漢故、皆是大阿羅漢なりとあ
 る也、衆所知識とは、法華論に云、諸王太子大臣
 人民、帝釋天王梵天王等、皆識知故、又復聲聞菩
 薩等、是勝智者彼勝智者、皆悉善知、是故名爲
 衆所知識云々、(略して文を解すべし)
 是よりは其中で、格別に肝要の對告衆、舍利弗及
 び十五羅漢の別名を列ね、其次に菩薩の別名を擧
 げ玉ひたるなり、然れば時こそ違へ二千餘回の先
 に、天竺で御説法を成されたた經が、今日迄傳つ
 たればこそ、此の逢ひ難き法に逢ひ奉り、六成就
 揃ふて諸漏已盡の大阿羅漢、地上等覺の大菩薩と
 同じ聽衆となると云ふものなれば、實に喜びの

(79)

極みなり、若し此世の事にて、此の百分の一程の
 事あらば、如何ばかりか悦ぶべきに、斯る身の上
 と成りながら、夫れ程に思はれぬは情けなき迷ひ
 様なり云々、扱て此の皆は大阿羅漢衆諸知識と云ふ
 文に就て、雲棲大師の表示釋あり、稱理則自性無
 漏是羅漢義、云ふ意は、一筋に淨土に歸する是れ
 羅漢の義なり、其所以は羅漢は無生の義とて、三
 界に生るゝ縁の煩惱は盡き果てたるなり、念佛し
 て往生を欣ぶ人は、三界へ生るゝ縁は盡きたるが
 如し、還來穢國は意樂に隨ふと云ふとも、煩惱に
 くるはされて生るゝ縁に非ず、されば此三界に生
 るゝ縁の盡きたる所は、大阿羅漢と同じ事なり、
 自力聲聞の修行では、三界の生を斷するばかりで
 すら三生六十劫を要するなり、然るに唯申したば
 かりで、三界生斷の上に報土に生じ、無爲の法樂
 を受け無生法忍の悟りを開く、再往云へば羅漢に
 超ゆること、言語に述ぶべからず云々、自性無迷是
 知識義、云ふ意は人を良導する義にして、此の經
 の教に隨ひ一筋に往生を願ふて念佛する意になれ

ば、萬の惡念皆それに導かれて淨土に赴くなり、
 其の姿は三毒の上にて云へば、貪欲のほしいは
 しいと貪る心で、淨土へ往生したいと願へば是れ
 善欲、所謂ほしいの財色二欲の惡貪の念が、
 いつの間にやら往生を願ふ、善欲の念と入り替り
 て居る也、(淨土を貪欲せざるは、無生解脫の障な
 りと) 瞋恚は違境に依て起る、人がつれなき仕む
 けをすれば、悪くや腹立恨めしいと、うけ太刀を
 止めにして、淨土に往生してあらば、斯る憂きめ
 に逢ふべきか、嗚かし菩薩の付合はと、助け給へ
 南無阿彌陀佛といふ時には、早や瞋恚の惡念がい
 つの間にやら、生死を離るゝ善心と轉するなり、
 愚痴とは是非の差別を知らず、思ふたどて云ふた
 どて叶はぬ事を、何返もく、繰り返してくどく
 ど思ふ惡念を、惡趣はいやちや極樂へと欣ぶ思ひ
 を繰り返し、本願は南無阿彌陀佛の一行なれば、
 何返もく、申される程申すなれば、愚痴の迷ひ
 の惡念がいつの間にやら、精進の善心に轉じたる
 なり、されば銘々に具へたる三毒の煩惱に因て、

(80)

三惡道へ行くべき惡念が、皆悉く往生を願ふ善心に、いつの間にか導びかれてあるのは、皆是れ此經の教に隨ひ、一心不亂執持名號の故なり、唯一筋に往生を願ふ心は、萬の煩惱惡念を善心になす善知識と云ふものなり、然れば此經の教に隨ひ、行は一行一筋に往生を願ふ心となりし人、其一心は取も直さず大阿羅漢にして、衆所知識の大善知識と云ふもの也、故に觀經に遇善知識とあるは、出家であらうが、在家であらうが、男でも女でも、念佛する人を善知識と説き玉ひたるなり、豈に貴きに非ずや、斯した貴き事になるのは、何か六ヶ敷ことでもあるかと云ふに、濃くも薄くも極樂往生を願ふて、分相應に念佛申す迄の事なり、爾らば何れの人か是れ程の事の出來ざらん、出來さへすれば從來の果報。

第九席

從來講說の小經、序分に六成就ある中五成就已りて、前席より第六大衆成就の下を辨じかけたり、其

大意は、大衆と云に聲聞菩薩雜衆の三を擧げ玉ふに、先づ聲聞衆を擧ぐるとて、與大比丘衆千二百五十人と數を示し、其衆は皆是れ大阿羅漢なり、衆に知識せられたりと、其德を歎じ玉ふ迄を談じ、尙ほ此下にて雲棲大師の表示釋を出して勸進せり、今席より第六大衆成就の中、聲聞衆の列名を辨せん。長老舍利弗摩訶目犍連、長老とは德重く臘高し、故に長老と云ふ、此長老の言は、舍利弗のみの事ではなく下の各々の羅漢へも被むるなり、舍利弗とは梵語なり、此に鷲鷲子と翻す、鷲鷲と云ふ鳥は、至つて涼しく彼の鷲の眼の如し、故に鷲鷲の子と云ふ意で、舍利弗の事を鷲鷲子と翻するなり、又身子とも云ふ、此義は正宗分に至て辨せん、此舍利弗は佛弟子の中にて智慧第一なり、其譯は分別功德論に云、舍利弗所以稱智慧第一、世尊方欲知身子智慧多少者、以須彌山爲硯、四大海水爲墨、四天下竹木爲筆、滿四天下一人爲書師、雖欲寫身子智慧、猶不能盡焉、況凡夫五通

(81)

能得測量乎、故稱智慧第一已上、又智慧第一は大般若の所説なり、龍樹菩薩の大論十一に曰、問云、般若波羅密是菩薩摩訶薩法也、佛何以故、告舍利弗、不告菩薩耶、答云、舍利弗於一切弟子中智慧第一也、如佛偈説、一切衆生智慧、只除佛世尊、欲比舍利弗之智慧及多聞、則於十六分中不及其一分と、佛より外の十方一切の衆生の智慧は、舍利佛の智慧を、十六に割たる一分にも及ばぬとある、斯様に智慧の勝れたる尊者故、諸經の會座では種々の問を立て玉へり、然るを今經の信願持名、一向專修の御説法の時は、一言をも出し玉はず、唯打ち守つて聞いて居られたるなり云々、摩訶目犍連、摩訶は梵語、此に大と翻す、目犍連は姓なり、姓を直に名としたるなり、目連此に采菽と云ふ、菽は豆の事なり、此目連の先祖は仙人にして、常に豆を喰ふて居られた故、采菽と云ふが姓となりたる也、大とあるは采菽氏數多き故、嫡庶を以て分ち、嫡流の人なれば、大の字を添へて簡別したるものなり、(本家、未家、オモ

ヤ、別店)此尊者は神通第一なり、釋尊登天の時も(悲母の慈恩を報ひん爲に、一夏忉利天に登りて、説法し玉ひしなり)、毒龍障得を爲せし時、外の聖者降伏せんと願ひたれども、佛許し玉はず、然るに目連の願ひ出づれば直に許し玉へり、故に神通を顯はして佛登天の路を開く、又提婆新學の比丘達五百人を、たぶらかして象頭山へ連れ歸りしをも、此尊者の神通にて提婆を眠らせて佛所に連れ歸り玉ふ等數限りもなし、故に神通第一の名を得玉へり、何れを何れといはふ様もなければ、斯様な聖者が沈黙して子供の様になつて此聽聞なされて、終りには歡喜し信受なされ禮を作して去りきとあるが、各々も此度この經説を聞かれば、即小經の同聞衆の中間に入る、神通第一智慧第一など云ふ歴々の聖者方と、弟子兄弟となる云ふものなれば、歡喜すべき極りなり、相互の心といふものは自由になるもの也、此心の向け様で、畜生の中間にも成るものなるに、斯る聖者と佛弟子中間となりたる事、返すくも喜びて、

(62)

今經の御教一向專修の趣を歡喜し信受して稱名相續が肝要。

偕て是より舍利弗目連の傳、發心の來由を談せん、先づ此舍利弗は智慧第一の筈なり、母の胎中に居玉ふ内より其驗あり（此事は、俱絺羅の下で出る事ゆへ、今は略す）身八歳にして、十八部の經を誦すとて空に覺はられたり、（此經は佛經に非ず、古來より傳りたる、外道の書なり）此尊者の生國は摩迦陀國なり、然るに此國に龍王兄弟あり、一をば吉利と名け、二を阿伽和羅と名く、雨を降すに時を以てし、國民豊かなりしかば、諸人其徳を感じて神にいはひ、一年に一度づ、祭禮を行ふに、仲春の時を以てすとて、春の半に大會を結び、龍神の祠の前にて一日音楽をなして慰め、又學者が多く寄り合ふて問答をする事あり、舍利弗八歳の時、親に連れられて彼の祭禮に行くに、祠の前に四つの高座がある、一は國王、一は太子、一は大匠、一は學者の中の先生の乗る高座なり、此座の事を八歳の舍利弗が聞くので、右の譯を親は語つ

て聞かせると、舍利弗群集せる座中を見渡して、我に勝つものは有るまいと云ふ様な顔付で、彼の先生の乗るべき高座へ上り安然として座す、是を見る群衆の人の中には、或は小兒の無智ゆへ云々と云ふもあり、或は一概には云へぬと云ひ、或は小兒唯人に非ず、眼光するごとく宛然偉人の如しと云ふものあり、然るに大王よりは、小兒の幼きにより上りたるならば下せ、但し其才智ありて上りたるものならば、集る學者と問答せよとの御意に依り、下りよと云へども、小兒は巖然として動かす、止むを得ず問答に及ばねばならぬ事に成つた、所が白髮交りの宿學の徒來りて、あのチツボケと大人氣なく問答もなるまじと、弟子のものに云ひ含め、小兒に問はせたる所が、小兒の答ふる辯舌、滔々として瀧の如し、再問を立つるの餘地なし、依て諸先生大に驚き、中々教へた位ではあゝいふ風にはゆかぬと、自身に問を試みた所が、いつかなく云ふべき所もなく答へきる故、皆恐れ入て其日の先生と仰ぐに至れり、此趣きを

(63)

し玉ひて殊の外悦び、我國へ斯様な智慧者の生るゝは、國の安泰に治まる瑞相なりとて、直に一聚洛を賜ふとて、知行處を下されしとなり、時に大目健連と云ふ發明なる人、同時代に出生せり、目連は高貴の子なり、舍利弗と互に睦じく、行く時は共に遊び、歸る時は共に止まると云ふ様にして、無二の親友なり、此の二人世を厭ひ共に出家せんと相議り、（此の出家は、佛法ではなく、外道で道果を得るを云ふ）、家を捨て眷屬を離れ住處を立退きて、刪闍那士と云ふを師として道を學ぶ、既に一年を経過すれども何んの功驗もなき故、師匠梵士に尋ねらるゝには、道果と云ふは無きやと、又我等其機に應せざるにやと、師の曰く、短氣に云はずとも随分修行せよと、故に又修行を繼續しつある内に、程なく梵士病に臥す、兩人看護云々、病急なるに及で、梵士莞爾と笑を含む、兩人問ふ、梵士答て云く、世俗無眼にして恩愛の爲に侵さる、我金地國王の崩するを見るに、夫人名殘を惜み同じ所に往かんとして、火に入つて死す、死して同じ

所に往く事のならぬを、知る眼なきを笑ふと、其後やがて命終、兩人此虚實を知らん爲めに此事を記し置く、此金地國へは摩迦陀國より、日本の里數にすれば三百里程の遠方なり、爾るに其翌年金地國より商人來る故、是れ幸ひと去年何月何日其國の王崩せりや、又夫人追慕に堪へず火中に入て死せりやと尋ねしに、商人共に然りと答ふ、兩人之を聞て、扱ては道果はあるべきものぢやと決信し、何卒よき師をと尋ぬる折しも、釋尊が三迦葉及千人の弟人を度して、専ら化益し玉ふ事を聞て、扱ては此人に依てと思ひを定め、先づ其實否を窺はんとて、王舍城へ舍利弗一人立ち越し、様子を伺ふ中に宿の表てを、阿説示と云ふ出家が行乞するを見て、御出家は名を何と云ひ、師は何と云ふぞと尋ねければ、我師は釋種の太子、生老病死の苦を厭ひ、出家學道して、阿耨多羅三藐三菩提を得て、専ら衆生を濟度し玉ふ、釋迦牟尼如來即ち我が師なりと、舍利弗然らば汝の師の教授の仕様を、我が爲に説かれよと、答て云く、我は年

(84)

未だ幼稚にして受戒の日淺ければ、師の教の趣きを述ぶる事を得ずと、舍利弗云く、爾らば其要を略説し少しなりとも聞かせられよと強て望む故、爾らばとて、偈を説き示して曰く、諸法從緣生、是故說因緣、說是緣及盡、大師如是説、と語らるるを聞くと、舍利弗言下に活然として旨が開けて初果を得られた、そこで舍利弗大歡喜を生ずるに付て想へらく、是より直に佛處に詣すべきなれども、目連と約束して、誰れでも早く法を得しものが、必ず之を傳へんと約せし事なれば、先づ此由を目連へと早速に行かれた所が、目連一目見るより、扱てこそ甘露の法を獲玉へるよと云ふ、舍利弗さればとて阿説示の示されたる偈文を傳授するに、目連今一遍と望む、舍利弗又偈文を誦すると、目連も又初果の聖者となられた、最早二人共に凡夫ではない、依て二百五十人の弟子を連れて、佛の住し玉ふ竹林精舎へと指して詣ず、此事早や釋尊は存知し玉ひ、大衆に告げて曰く、今此處へ來る者を汝等見るやと仰せらるゝ時、恰も大衆兩人及

び弟子の來るを見て、あれは何ものでござると、釋尊曰く、あれは我弟子の中で智慧第一神通第一となる、舍利弗目連と云ふ者なりと宣ふ、内に兩人は弟子と共に、如來の御前へ出で、三拜をなして云く、世尊我等佛法中に於て出家授戒せん事を欲す、願くば佛許し玉へと願ふと、佛即ち善來比丘との玉ふ、兩人及び二百五十人の者、殘らず落髮する上に自然の法衣が肩にかゝり、其時三果を得られ、半月程過ぎて四果の羅漢となられしなり、先づ是で舍利弗目連の傳あらく、畢れり、如是智慧第一神通第一の舍利弗目連が、今經所説の會座では明いた口つむりも得せず、唯打ち仰いで子供の様になつて聞きて、終りに歡喜信受して禮を作して去り玉へり、歡喜とは此經を聞く事を喜び、信受とは眞うけに信じて聞きうけるを云ふ也、此二人の尊者已に如此、況や今日の凡夫に於てをや、然れば相互に先づ此經に逢ひ奉りし事を歡喜と打ち喜び、信受とは是より段々、正宗分にある極樂の樹林の莊嚴より打ち立て八功德池も宮

殿樓閣も、皆七寶を以て莊嚴し玉ひ、生るゝ程の者の壽命は無量にして、位は一生補處の高きを極めて、諸の善人と一處に會する、御國の快樂は自由自在にして言葉にも及ばぬ事なり、斯様の結構なる國へ生るゝには、如何なる修行ぞ、諸の少善

所説の趣きをなほざりに聞きなされぬ様に、受けた日課を怠らず、進んで相續せらるゝが何より肝要。

第十席

(85)

根餘行餘法の因緣位では往けぬ程に、さつぱりと拂ひ捨て、此大善根南無阿彌陀佛の一行を勧めてさへれば、外に何にも支度はいらぬ、臨命終の其時には、阿彌陀如來が無數の聖衆を引連れて御來迎なし下され、觀音の蓮臺に勢至菩薩にかき乗せらるれば、如彈指頭とつまはじきする内に、報身報土へ往生すると説き玉ひたが、此經の所詮なり、餘り大きな事故に、衆生が疑を起さうかと思召て、六方恒沙の諸佛は、御舌を舒べて證誠し玉ひたれば、露ちり程も間違ひないと云ふ道理を、眞うけに信じて唯一筋に念佛するのを、歡喜信受する人と云ふなり、さあ此事が出来まいか、素より平等不簡釋三佛大悲の教なれば、如何程無智文盲でも、勤まらぬと云ふ事はなき事なれば、從來

從來講説の小經、序分に六成就ある大衆成就の下、舍利弗目連の名義を辨じ畢りて、今席は迦葉尊者の下なり、然るに茲に一つ穿議せねばならぬ事あり、(前席餘り長座になりし故辨じ殘せり) 其穿議とは、今經列衆を擧げ玉ふに、何故に聲聞羅漢を先にして、菩薩を後に擧げたるぞといふ穿議なり、次の次第を見るべし、舍利弗目連より羅漢を列ねて、次に文殊等の大菩薩を擧げ玉へり、是れ不次第なる事なり、是には譯のある事なり、且く淨影大師の御指南に依るに、三つの譯がある、一には近遠分別、聲聞は常に佛に従ふ故近し、菩薩は化他の爲めに緣に依りて諸方に遊化し玉ひ、常隨に非ざれば遠き故、近き聲聞を先きにして、菩薩を後に擧げ玉へり云々、二には形相分別、聲聞は一種の僧形

(86)

なり、菩薩は或は僧形或は俗形にして一邊に定まらず、故に聲聞を先として、菩薩を後に列ぬ云々、三には顯密分別、祕密と内證を論ずれば、菩薩は徳高く聲聞は劣れども、顯示と表むきで云へば、羅漢は煩惱を斷盡して佛の無漏に近し、菩薩は無明を一つ残して衆生に交り玉ふ故、聲聞を先とし菩薩を後にすると、是が淨影大師の御義にして、諸師共許の説なり、何れの經でも比丘衆の前にある處は、皆此通りに取扱ふなり、通途で云へばそうなれども、今經では此次第に就て別して貴き譯あり、則經の本意を列衆の次第にて顯はし玉ひたるなり、先今經の所詮と云ふは念佛なり、其念佛は彌陀如來の本願なり、其本願は本爲凡夫兼爲聖人にして、劣るを先として立て玉へり、其本願の心を今經の序分に顯はして、劣機の聲聞衆を先に擧げて、勝れたる菩薩の列名を次にし玉ひたる也、是は別して今經に約して談するの義なり、(編者云、聲聞菩薩不次第の義を、本爲凡夫兼爲聖人の顯説なりとは、牽強附會なり、何者今經列衆は聲聞菩薩雜衆

「人天」也、果して説の如くなれば先づ極劣の人天を擧示して、今經の所詮の本意を表し玉はざるや、蓋し後人の添説歟) 先是で不次第に譯のある事も知れたる也云々、夫に就ては人々機を考へて、此經のた勧め一向專修の念佛を唱へて、必ずわきひら見ぬ様にすべきなり、外の法では人々の出離し得らるゝ道はなきなり、外に無いと云ふ證據は、天台止觀の^{二十}九^丁、妙勝定經を引て云、佛滅百年には十萬に九萬得度、二百年には十萬に一萬得度と云ふ、今之を以て計るに、佛滅二千七百餘歲過ぎたれば、十萬に一人も得度する事を得ぬ道理なり、是で一つ自力の行者になつて云へば、其天台所引の妙勝定經に依れば、今時の得度のない事は聞へたが、念佛すれば今何として得度し得らるゝぞと難じて見るに、大經に其證あり、經文明かに、我以慈悲哀愍、特留此經、止住百歲と宣へり、此經を留むるとは、此念佛を留むるとの事なり、是れ今時にても出離するとの金言ならずや、然らば、何故に餘行にては助からず、念佛すれば助かるぞと云ふに、

此事耳近く譬喩を以て示さん。

藤の花と云ふものは、一莖の内にも本は色鮮かに心よく開き、中程になると開くは開いても、花形も小さく本程にはない、末になると苔みの儘にて、開かずには落ちるものなり、然るに之を快く開かせるには、前年十月の頃に酒の糟を其根に埋んで置くと、翌年の花は末迄快よく開くそうぢや、今之を以て準するに、藤の花の本とは、佛在世と正法の時の如く、中程は像法の時の如く、末の苔ながらに落ちるは、末法今時の衆生の如し、謂く在世正法上代の衆生は、證りの花も快よく咲けども、早や像法の中程は、證果の花も衰へ、末法の今に至りては、證りを開くべき佛性の花はあれども、未曾一人得者として苔みながらに一生を暮し、終に證りの花も開き得ずして命終るなり、嗚呼悲いかな、爾るに此念佛の行者ばかり、出離得脱すると云ふは、元來彌陀如來の善巧を以て、因位初地の菩薩の時、皆や我等に成り代つて、無量無邊の善根を拵へ、十方衆生の根性の根元へ埋め置き玉ひし

故、念佛さへ唱ふれば色鮮かなる往生の花が咲く事なり、其上に釋尊は二千餘年の前、我以慈悲哀愍、特留此經、止住百歲と示し玉ひ、又我見是利、故説此言の大悲をも添へ、六方恒沙諸佛の舒舌證誠護念の大悲等を埋み添へ玉ふ故、去年から酒の糟を根元に埋みし藤の花の如くで、各々や我々が如きも口に念佛さへ唱ふれば、六道生死の苦海を出で、無漏報身の淨土へ生れ、無生法忍の麗はしき悟りの花を開く事、一點の疑もなき事なり、是れ何故なれば、本爲凡夫兼爲聖人、元來劣れる者を目がけ玉ふ、大慈大悲の本願なればなり、然らば此法に基きたるは、恰も地獄の上の一足飛びと心得、又假初にも自分愚なりとて疑はぬがよい、其愚な者を所詮として助け玉ふ大悲を顯はして、聲聞を先に擧げ勝れし菩薩を後に列ねて、今經の本意を顯はし玉ひたる事なれば、此大悲の深重なる事を知らんには、打傾いて一筋に稱名相續せずしてはあらぬ事なり、次に摩訶迦葉の名義を辨せん。

(87)

(88)

摩訶迦葉、摩訶は梵語此に大と翻す、迦葉此に飲光と云ふ、此尊者の先祖は、仙人にして身に光明ありて餘の光を飲む、(身光勝れたれば餘光隠るゝなり)時の人號して、飲光仙人と云ふ、依之飲光を姓とせり迦葉則ち其子孫故飲光と云ふ、實の名は畢撥羅と云ふ、又此尊者出生の時からして光明を具して物に映じたると云ふ、大とは、此飲光氏に數家ある内大家故大と云ふとも云ひ、或は智徳すぐるゝ故、(名義集)とも、或は五事勝ある故(基師疏)ともあり、何れも違害なし云々、又此尊者は佛弟子の中に、第一の上座にて佛も座を分て持ち玉ふ尊者なり、されば佛涅槃の後、金棺に火を發せんとせしにも、迦葉尊者來り玉ふを待ち玉ふ故火うつらず、頓て尊者來着して、金棺に向ひ拜をなし玉へば、世尊則ち御足の千幅輪相を示し玉ひし等、其徳勝れ玉ふ事知るべし、斯く聞ても、つい迦葉此者の御徳ぢやと、思ひはなしにしては利益が少ない、又此上座の迦葉尊者が我等が爲には兄弟弟子と云ふものなり、其所以は此尊者も阿彌陀經を信受さ

れたる釋迦の弟子なり、我々も少善根では往けぬ大善根の南無阿彌陀佛で往生し得ると聞て疑はず信じて往生せばやと思へば、即ち釋尊の弟子なり、されば迦葉尊者と我々とは弟子兄弟也、極樂へ往生しては觀音菩薩を兄とし、今此上で釋尊の弟子となりし上は、此尊者迦葉は我等の大兄なり、既に大兄とすれば大切に思はねばならぬ、依て其因縁を辨する必要がある、先づ此迦葉尊者の根本を尋るに、往昔毘婆尸佛入涅槃の後、弟子塔を建て金色の毘婆尸佛を安置せしに、漸々年數を経る中に、塔中の佛像の面相闕け損じたるに、其頃一人の貧女ありしが、此者持てる物としては金錢只一文あり、此女つくづく思ふには、我れ過去にて慳貪なりし故に斯く貧苦を受く現在既に是の如し、未來は如何様の事にならん、此金錢一文位にて食を求めても後の續く事でない、見奉れば塔中の本尊面相の金色損じてあれば、是を何卒なほして上げたものと思ひ、直に鍛金師とて箔屋のありし家に至り、何卒此金錢で塔中の本尊の御面相の落

(89)

ちたる箔を付て玉はれと云ふ、箔師之を見れば乞食體の女なり、此者思ふには、扱は有り餘つてさへ佛へとは志しかぬるものに、食は腹に滿たず、衣は形を隠さざる底の貧女、我身の事には用ひずして佛の箔を置てくれとは、さてく殊勝なる事かなと、隨喜に堪へずして云ふ様には、金錢一文では其料に不足なれども、汝が志の貴とさに、不足の所は我足して再興し奉らん、此因縁を以て汝と我と生々世々夫婦となり、佛道の修行をして、終にはあの塔中の佛の如く成佛に至らんと云へば、貧女は之を聞て大に歡喜し別れて去れり、其後二人其命終り、其次の生より二人とも色身金色にして、或は天上或は人間に生れ快樂を受けし事、九十一劫の間也、最後に梵天王の家に生る云々、咄が入組む故、暫く鍛金師は、梵天に生れて居ると云ふ迄にして置て、更に摩訶陀國に尼狗律陀と云ふ長者が在つた、此人聰明叙智にして、福徳無量なり、金銀七寶、牛馬田宅、奴婢車乘等、國王頻婆沙羅に勝るゝ事千倍なり、然るに唯悲むべきは子が一

人もない、(三度炊く飯さへこわしやわらかし、ねもふまゝにはならぬ世の中)時に此の長者の屋敷内に、一つの尼狗律陀樹あり、此樹殊の外の大木なり、(得名、樹に依る大なる事、可知)長者此樹神に告げて一子を得ん事を欲す、樹神四天王へ願ふ四天王は帝釋天に白す、帝釋は普く閻浮提を觀見するに、彼が子となるべき福徳果報のものなければ、梵天王に告ぐ、梵天王遍ねく天衆を透觀するに、一人の梵衆ありて命終に臨む、即ち夫れに生處を教へて、長者が妻の胎内に託生せしむ、十月滿じて生ず、顔貌端正にして身金色なり、光明の耀く事四十里に及ぶ、(二百四十丁なり)依て長者大に歡び、相師に見せしむるに、此幼兒福甚厚必ず出家すべしと云ふ、(外道の出家道果を得るを云ふ)長者夫婦は之を聞て大に愁ふ、謂く子を祈るは家を建てんが爲なり、若し出家せば世襲を絶んと、故に之を防ぐの計を求めつゝある、時に迦葉年甫めて十五、人心を繫縛することは美色に若かず、早く美女を迎へて附隨せしめ、是に耽着し

(90)

て家を出づるの思ひを断せしめんとせしに、迦葉色をなして云く、我更に色に貪せず志出家を求むと、父母更に許さず大に此事を愁へ悲む、迦葉孝心厚き故、更に考ふるに妻を厭へば兩親の命に背き、之を迎ふれば出家の障りとなる、進退途を失ふ中に、一つの計事を設けて父母に語て曰く、我が如き金色の女あらば、妻に迎へんと云ふ故に、父母一家中相寄りて相談する中に、一人云く、茲に好き方便あり、黄金にて天神の像を鑄て聚洛を引き廻り、此金神を拜する女は、器量勝れし夫に配偶せしむと呼び廻れば、金光ある女を見付けける事もあらふかと云ふ、皆尤とて金神を鑄て引き廻り、開帳の繪説する様に云ふてあるく、さあ女が出ることもく種々様々の女が出る、されど未だ金光のある女は一人も無き故、こんどは迦毘羅衛城の方へ引て行くに、城中に長者あり迦毘羅衛長者と云ふ此長者に娘あり妙賢女と云ふ、此女端正無比にして身色金色なり、光明四邊を輝かして出でて金神を拜まんとするに、金神の色消へて眞黒と

なる、折角持ち廻はり縁起を辰巳上りに説き立て居る金神が、忽ち眞黒になつた故、參詣人は取り違へて妙賢女を拜む有様、時もなき次第となれり、金神を引き廻る人達、此有様を見歸りて、尼狗律陀長者に告ぐ、父母は之を聞て大に喜び、早速迦毘羅衛長者の屋敷に行き、何卒御息女を下されよとて其より、迦葉望み通りを語り告ぐるに、私しの方の娘も其通り、豫て望みを申居る折柄なれば、速かに差遣さんと相談一決して、頓て婚禮もすめば、迦葉妙賢女に云はるゝには汝一房に住するとも、梵行を修して道を求めんと思へば、我妻とせんと、妙賢女此事元より願ふ所なればとて、夫婦と云ふは表面計り、互に警策を加へて道を修せんと約束して、共にく修行する内、迦葉の兩親も命終せられたれば、彌々修行に因縁ありて、釋尊の御化導を受け佛弟子となり、直に四果の阿羅漢果を得られしとぞ、扱て此妙賢女とは、古の貧女の僅かに持ちし金錢をもて、毘婆尸佛の箔をたき直せし女、其時隨喜し力を合せて再建なせし鍛金師とは、

(91)

今の大迦葉尊者の前身なり、先づ尊者の略傳擧る。此事實に依て、我等が往生の慥かなる事を知るべし、既に貧女も鍛金師も、凡夫同志の願なりしが、其願虚しからずして共に金色身を得て、終に佛の弟子となり、大阿羅漢と成られたり、況や大慈大悲の阿彌陀如來、超世微妙の本願を御成就ありて、念佛申す者をば極樂へ引取り、金色身の大菩薩とせんと、十劫以前より待ち受けて居給へば、ほとくしながらも往生を願ひ、僅かながらも念佛を唱ふるものゝ往生すまじき道理はなき事なれば、人々も追付娑婆の報命つき次第、悉皆金色の身、金剛不壞の大菩薩となるは、必定なりと尊信すべし、又我等如き下劣の凡夫なれば願心こそ弱くて、二人の願の勇猛なるには似るべくもあらねども、相手に成り給ふ如來の願力の強さは、彼の二人の願力には、百千萬倍無量無邊心も言葉も及ばぬ程、超へ勝れ玉ふ故、如來の大願業力に引立られて、往生せん事秋毫の末ほども疑の容れ所がない、されば唱ふるものは必ず往生せねばならぬ云々、猶此

上に念佛の利益の頓速なるを悦ぶべし、彼二人も發し難き願は起したれども、三界に滯る事劫數を重ねしなり、(九十一劫の間と云ふ)然るに我等は唯一世、至て短い所で云へば、此座で初て念佛申て此座を去らず命終しても、直に界外の淨土に生れ、直に十地を究竟する大菩薩となる、此わかれめを思ふて見るべし、實に不思議微妙の本願、實に不可思議微妙の果報を受くる身の上となりし事なり、知らぬ先こそ、それよこれよと願ぎ廻るは無理もなければ、知つての上にも未だ專修の行者となる志も立たぬは、是れ如何なる業障ぞや、心あらん人々は、上來の譯を聞くにつけても、彌々專修に志を堅め、受けた日課を怠らず、順次に淨土に往生を遂げ、金剛不壞の大菩薩と成らるゝが肝要。

(92)

佛說阿彌陀經講說卷二

第十一席

從來講說の小經、序分に六成就ある大衆成就の下なり、釋尊此經を説き給ふ時、其座に列り給ふ大衆を擧げ給ふが大衆成就なり、此に四段あり、聲聞、菩薩、天上、人間、其聲聞も數々あれども、常隨の聲聞千二百人を擧げ、其中別して對告象の舍利弗を始として、十六羅漢の別名を列ね擧げ給へり、其列名を説きかけて、舍利弗目連迦葉の三聖が前三席迄に擧りて、今席は其次の迦旃延の下なり。

摩訶迦旃延とは梵語、此には文飾とも翻じ又た不定とも云ひ、眉垂とも好眉とも云ふて、翻名數々ある中、先づ文飾と云ふ義を談せん、文飾とはいろどりかざると云ふ義で、はなやかなと云ふこと也、何がはなやかであるかと云ふに、辯説が勝れてはなやかなり、人と論議をするに、辯説爽か

にして道理に叶ふて聞き違はぬ故に、論議第一の名を得玉へり、凡そ通途の人は、二つながら揃はぬものなり、辯がよければ理を云に味がなく、物の理が面白ければ辯がまわり兼ると云ふ様にし、兎角揃はぬものなり、然るに此尊者は二つながら自由自在なる故、文飾と翻す、蓋し其人の徳に依て名を得給へり、今試に尊者が常に論議し給へる一例を示さば、或時外道と問答の事あり、外道云、此世で死んで彼の世で地獄天上の苦樂あると云ふ事は聞こぬ事なり、身既に死すれば火の消た如くで、苦樂は更にない筈、其證據には終に地獄から便りの有たと云ふ事は聞かないと、迦旃延即時に答へて、汝偕々愚人なり、今世で惡事を作して地頭に捕はれ、牢屋に入れられたる者が、妻子に逢ひたいとて勝手に遇はれ様か、傳言する事が出来ようか、丁度夫れと同じ事で、今世に惡を作して地獄の牢屋へ押込まれた者が、どう便りがなるものぞ、能く思案して見るべしと云はれたれば、外道は成程左様ぢや、そう云ふと一通

(93)

り、地獄から便りのないのは聞けたが、天上は樂な所ぢや、樂な天上からは便りが無ければならぬ、夫れに無いのは偽りの證據ぢやと云へは、尊者曰く、偕も汝は愚なものなり、若し其方が誤つて廁へ落て後、先日雪隠の虫に近付になつたからとて、一寸往て逢ふと思ふか、否な、夫れ見よ天上から見れば、此世界の不淨なる事は、人の廁を見る如くぢや、我々誤つて此廁へ落ちたれども、天上へ上りて後は、人間の臭氣を嫌ひ、四十萬里遠ざかると云ふ、然るを天上から便りがあり相なものと思ふは、丁度雪隠の虫が先日落ちられた人は、もう見へそうなものをと、待つ様なものと示されたれば、外道も理に伏したと云ふ、此等の問答、所用なきに似たれども、聞いて置くべき事なり、古來此外道の如く、地獄も天上もなし、人の死するは火の消いた様なものと評するは、唐の朱子韓退之等を始め、日本でも徂徠の太宰のと云ふ類は、書にも著はして居る、又當世はやる心學者流は、皆な此の邪見に墮して居る、其餘通途の人

でも現に我眼に見ぬもの故、慥に信する者は希なり、其故は若し信する心あれば、此念佛を申さずに居らるべき筈はない、然るをうつかりとして徒らに年月を送るは、地獄あり極樂ありと云ふ事を信せぬからの事なり、かう云ふ輩には、此外道の話が適切に當る事なれば、此の問答を聞て、立所に疑を晴らし念佛に基づくべし、又此尊者を不定と云ふは、有に著して居る者には空と説きて濟度し、空に著して居る者には有と説て利益を與へると云ふ様に、縦横自在にして所説定まらぬ故、不定と云ふ、又此尊者を扇繩とも云ふ、扇繩とはあふぎなわと云ふ字なり、之が此尊者の發心因縁の根元なり、此尊者は小兒の時に父に別れ、母一人の手にて養育せられたる人なり、或時小兒の手を引て町を通らるゝに、天竺は至て暖國故、家の軒に扇を釣り置て、往來の人に貸して暑さを凌がせる、(此土で、暑の時麥湯を振舞ふが如し)然るに此母、軒の扇の風に吹れて動き乍ら落ぬを見て、小兒に問ふて云、汝あの扇の動き乍ら落ぬをどうし

(94)

て落ぬと云ふ事を知つて居るかと思せば、小兒七八つ斗りの愛らしき口で、あれは上から繩が付けであるから落ちませぬと云ふた、母は之を聞いて打ち喜び、最早そなたはそう云ふ譯をも合點し、利口な事を云ふ様になつたか、今迄父が居られたら、定めて子の成人を見て悦ばるゝであらうと、涙ながらに言葉をついけ、そなたを産で程もなく、夫に死に別れてよりも、度々再嫁を勧むる人も多かりしが、そなたと云ふ繩が付て居た故、これ迄女の貞操を立て、猥れ心を起さず暮して来たが、若しことづまを重ねなば、我身ばかりかそなたに迄そしりの耻を與ふべきに、子と云ふ繩にからまれて、操を守り果せられたれば、そなたも是より出家して堅固に相續しかほせて、二人の親をも濟度してと、涙をこぼして教訓せられければ、元より利發な幼兒故に、母の教訓神魂に徹し、入門して佛弟子となり、修行を凝して、終に十大弟子の隨一、論議第一の佳名を得玉り、此因縁に依て、此尊者を扇繩と號くる也、此縁を以て勸進せば、此尊者

母の教訓を守り玉ひし故、終に十大弟子の一人となり、論議第一の佳名を得られたのである、人々も其如く、慈悲の父母たる釋尊の御遺言を守るがよい、其御遺言とは、即ち此阿彌陀經なり、已に釋尊は一切衆生を悉く是れ我子を思召て、此經を説き、先づ正宗分の初には、極樂淨土の依正の莊嚴の勝れたる義を説き聞かせ、斯う云ふ貴い淨土なれば、應當發願願生彼國と、願生の心を勧め、其往生の爲には一向專修の念佛すべしと、慇懃可憐に勧め玉へり、此御勧めの旨を守り一向專修に勤むれば、順次に淨土に往生を遂げ、智辨無窮の本願に乗じ、辯説と云ひ道理と云ひ、此尊者には遙に勝れたる、地上諸位の菩薩となる事なれば、慈悲の父釋尊の御遺言の、一向專修稱名相續せらるべし、又彼の尊者の母の云はれし如く、兒と云ふ繩が付て居た故、兩夫にまみへぬ貞女を守り、不義の穴には落ちなんだと、我々も又其如く、此世に居る内は、妄念の風に吹かれ靜心なく散亂すれども、大悲本願の繩が付てある故、三惡四趣の惡道に落

(95)

ちす、臨終の間際になれば御來迎に預り、極樂に往生して神通自在の身の上と成り、涙に咽び泣き別れた、生々世々の親兄弟妻子眷屬に至る迄、心の儘に濟度を爲し、其に微妙の快樂を受る身の上と成る事なれば、勇み進んで相續が肝要。次に摩訶俱絺羅とは梵語、此に大膝と云ふ、形に従つて名を附たり、舍利弗の叔父なり、舍利弗の母鶯鶯と姉弟にして大膝は弟なり、此人外道の内でも論議第一の名を得たる人にして學者なり、姉の鶯子も又博學多才の女なり、故に常に姉弟して論議をするに、どうしても女だけで鶯子が負けられたり、然るに此鶯子或外道の處へ嫁入せられて程なく懷妊せられた、(此子が即ち舍利弗)懷妊後姉弟論議するに、是迄と違ふて大膝が負る、依て熟らゝ思ふに、我も出精して學文して居るのに負ると云ふは、姉が懷妊してからの事なり、定めて胎内の子が大智人に違ひない、胎内に居る中から此通りなれば出世の後には必ず我に口を明かせまい、甥に負けては面目ないと思ひ、北橋薩羅國の

郷國を出で、出家して梵士となり、南天竺に行て博く四韋陀の典に眼をさらして、爪を取る間も時を惜みて學ぶ事、十六年の間なり、十六年も切らぬ爪なれば、長く延びたること一尺餘もありし故長爪梵士とも云ふた、然るに鶯鶯子舍利弗を安産した所が至て惻發なり、大膝は十六年過て本國へ歸り、諸の梵士外道と論議するに一人も及ぶものなし、譬へば犬の中へ狼の出でし如き有様なりき、偕て彼姉の子はどうして居るぞと尋ぬれば、是れは幼少の頃より發明にして八歳の時、諸人と論議をして勝たれし故、大王より一聚洛を下されしが、今は釋尊の弟子になられしと云ふを聞き、長爪梵士大に驚き且つ怒りて、我甥は瞿曇沙門にたぶらかされしか、我れ是を取り返さずして置かれようかと、直に佛所を指して出立せり、長爪梵士頭には火盆を戴きて火を點じ、身には鐵衣を著し、髪は十六年も剃らぬ故垂れて地に引く、爪は一尺餘りもあると云ふ體で、佛所に到り大衆の真中に立て佛を見て居る故、大衆も驚きて不思議に

(96)

思ひつゝありしに、佛梵士に問玉はく、汝は何れの法を以て宗とするぞと、長爪答て云く、我は一切の法を受けざるを以て宗とすと、是れ餘程立ち越へたる答なり、流石外道の中で論義第一の名を得た學者だけの事あり、されど佛は、究竟の智なるが故に、反問して宣く、汝今一切の法を受けざるを宗とすといへども、夫は究竟の道に非ず、其一切の法を受けぬと云ふは、不生不滅の涅槃の法を云ふのであらう、去れば汝が宗は一切法を受けぬと云ふ、法を受けて居るではないか、夫で究竟の法とは云はれぬが、どうしたものぢやと仰せになれば、長爪梵士今迄虚勢を張りし者が、忽ち此處で誤るも耻かしく、道理を聞けば最もにて、直に返すべき詞も無ければ、唯黙して目をまじろきじとして居る故、又どうぢやと問ひ玉ふ、佛三度まで押て問ひ玉ふに黙して答へねば、御定りにて金剛密迹力士が責める、佛又汝問へども答へざるか、汝の頭の上を見よとの玉ふ故、梵士仰ぎて見れば、力士金剛の杵を以て梵士が眞甲を微塵に

なさんと打ちかけ玉ふ勢ひなれば、梵士大に怖れて汗を流し、心に佛に歸伏し佛弟子と成らん事を請ふ、佛則ち佛法を示し玉へば、元より利根の長爪なれば、佛理を悟りて即座に阿羅漢果を得たりといふ、(舍利弗の出家より、十五日目の事なり、舍利弗も其座で四果の羅漢と成れり、大論之説) 此長爪梵士の如きは、性來勝れし智者なる上に、十六年が間爪をも切らで、學智を研かれたる人なれども、舍利佛目連には及ばず、實に智慧と云ふものは限りのなきものなり、然るに佛法修行の中、聖道は智慧を窮めて生死を離れ、淨土門は愚痴に還りて往生すると、云ふが元祖大師の定判ぢや、今此俱絺羅尊者杯の事實に因て見ると、其智慧を究ると云ふ事は、我々の身の上にては思ひたへたる事なり、されば我等相應の法は愚痴に還りてと仰せられたる、淨土の法門を、是ならではと信受して、一切の之乎者也分別を離れ、唯往生の爲と志し、南無阿彌陀佛と唱ふべきなり、併し斯く聽て智慧を磨く聖道は勝れ、愚痴に還る淨土門は劣

る杯と思ふべからず、俱絺羅に勝る、舍利佛さへ釋尊此阿彌陀經を説く對告衆とし給ふに、智慧も言葉も及びなき難思議の法門なれば、一言一句の問をさへ得し玉はず、あきれた顔で聞て計り居玉へり、然れば諸教は思議の法、念佛往生の淨土門は、微妙難思議の法なれば、其超絶せる事知るべし、所詮難思議の法なれば、思慮を離れて愚痴に還り、但信稱名する所が則本願に契當する故、順次に淨土に往生を遂ぐる也、往生を遂げさへすれば、直に無漏の眞智を發し得るものなり、されば聖道の捨ぬは捨る、淨土の捨るは捨ぬにある云々、斯く立ち超し法門なれば、脇ひら見ずに愚痴々々と、但信稱名相續が肝要。

第十二席

大意斷辨如例、上來四段ある中、聲聞衆の下を説きかけて、五聖(舍利弗、目連、迦葉、迦旃延、俱絺羅)を辯じ畢れり、今席は離婆多尊者と、樂特尊者の事を談するなり、離婆多とは梵語、此に

(97)

星宿と云ふ又假和合とも翻す(大論の説)、先づ此假和合とは、假りに和合すると書た字なり、總て人の身は假和合で假り物なり、五蘊を法界より借り集めたるなり、死すれば又法界へ返す(引よせて結べば柴の庵なり云々)、譬へば此扇子を以て知るべし、骨と紙と集めたるに依り、扇と云ふ體が出来たもの、之を取り離せば扇の體はなし、人の身も是の如し云々、時に此尊者未だ出家し玉はざる時、遠方へ行とて途中にて雨に逢ひ、難義して傍にある辻堂に入り一宿せられしに、雨は彌々降り人通りは一向なし至つて物淋しく、夜は漸々に更けて最早丑滿頃と思ひし所へ、鬼が二つして人の屍を持ち來り、さあ是から樂しまうと云つて、どつさり下すを見て頗りに恐しくなり、そつと片隅にかゝみふるひながら様子を見て居らるゝと、今度は前の鬼には拔群勝れて大なる、角は枯木の如く、牙は劍の如く、眼は日月の如く、總身憤怒を顯はして來り、汝等は我食を盗みしよ、不屆者め早く還へせと喚り立てる、小鬼の云く、是は

(98)

私共が今持ち来りし物なれば、お前様の物ではない、否やそれがおちやと、水かけ論を始め、暫時は分けもつかざりしが、小鬼の云く、此屍がお前の物か私共の物かと云ふことは、明白に存じた證人がある、夫は此處に、宵より此辻堂に宿りし人ありて能く存じて居る、然らば夫を呼び出せと云ふ、さあ彼旅人先きにこそ、我此處に居るを知らねばよかれ、どこぞ逃げ道はあるまいかと、こわさの餘り色々と思案も致したが、今鬼共の嘶を聞くと、所詮此場を免るゝ事は出来ない、一層胸をすへて此方より言葉をかけ、いやお出には及ばぬ、夫れへ参りませうと出るや否や、大鬼は牙を立てて、やい汝知るや此屍は我の物ぢやな、小鬼、此れは我等が二人して持て来たのでござるなと云ふ故、旅人は進退茲に谷り、どちらに定めても一方は瞞るに違ひない、所詮宵限りの我命なれば、捨てるからには誠の事を述べて判断せんとして、いや是れは大鬼殿が無理で小鬼殿が道理、持つて来たのは小鬼ぢやと判断すれば、小鬼二人は悦べども、

大鬼は以ての外の大怒り、憎い己れ虚言をつく奴ぢや、其代りにはおのれをと、取つて引寄せ手足を抜て、かみがみくとしてやり、舌打ちし乍ら出て行きたり、小鬼は悦び、先づ此屍は我等が物ぢや、さあまいれと互に挨拶、喰て居ながら二鬼が相談する様には、斯く我々が喰ふ様になつたは、全くあの旅人のお蔭ぢやが、あの人の手足は、今の大鬼先生が喰て仕舞ふたが、實にあの人は氣の毒ぢや、我々は之を見ながら捨て、置のは不實だ、如何にしても恩を知らぬと云ふものなれば、此屍の手足を殘して、あの人の胸體についてやらうではないか、成程と二人が同心して直ぐ繼ぐと、不思議にもついたのである、其内に夜もほのくくと明ける故、小鬼も何處へか還る、旅人は儲もく、恐しき事なりと思ふて我足を見れば、片足は九文位の白い足、片足は十二文位の大なる、ひげの生へた眞黒な足(手も又同じ様な片端)故、つらく思ふには、抜かれる時は痛たかつたが、繼ぎし時は何とも覺へず、今は痛みもなく常の通りなれば、

六十四

(99)

是で立てるかしらん立てる、歩めるか知らん歩みも出来る、偕てく不思議な事かなと思ふより疑が起つて、既に我父母より受けたる手足を、鬼に取られ又鬼より授つたが、此身は我身かと思ふて、手足を見れば他の身なり、故に狂氣の如くに成つて、此身は我身なりや他の身なりやと、市中を駆け廻り乍ら人に尋ると、皆人は氣狂ひぢやと云ふて相手にならぬ、偶々或精舎に狂ひ入て老僧に問ふ、老僧云く、何故に左様に尋るぞ云ひたれば、上來の次第を語る、老僧御示しに、汝が身本來四大五蘊假和合より成りたる者なり、何ぞ今繼ぎ合せたる時初めて之れを怪しむや、と述べ玉ひたれば、言下に假和合の空理を悟り、佛所に出で來りて出家となり、遠からず四果の大阿羅漢と成れり、此れが離婆多尊者の傳來なり、人々此事實を聞くに就ても、實に我身は假り物同様、いつ何時取り返さるゝも知れぬ事なれば、少しは我所の念を離るゝがよい、然るを此身が大切ぢやと、滅多無生に執着し、衣食住の事のみ日々かゝり果てるは、

皆借り物の爲に奉公するのぢや、故に成實論に、前世妄執、招今四大、圍於虚空、成假名身矣と有て、我も無きを我と迷ふて居る、此身は影法師の如し、然るを眞の我ぢやと、皆昔時から妄心が相續して自他の隔情を起し、業因を斷絶させぬ、若し迷が止み業が盡きれば、自ら法身平等の四大に歸し、心源空寂永く苦惱なき身にならるゝなり、之を眞我とて誠の我と云ふもの也(眞の我が爲になる事を、つとめるがよい)、今商賈が大切ぢや、仕事が大事ぢやと云ふは、皆迷ひの假り物へ奉公するのぢや、此身は焼けば灰、埋めば土となるが、夫れより外に眞の我と云ふものあつて、何れへなりとも行かねばならぬ、こゝへ氣がついたものは一分の眞我を見出したと云ふものなり、其の眞の我に苦を受け様と、樂を受け様と自由にして、今の心の振り向け様にあるなり、然れば樂を受けたいものぢや、其樂を交けるには本願念佛一行と決信して唱ふるがよい、斯く心得ると後世迄も待たず、此世から此心が安樂になる(此身は假り物執

(100)

着の苦なし、貧福は業因に依る、富貴を無理に求めぬ心、即安樂なり。若し此道理に暗ければ、假り物の爲に執着つよき故（貪欲熾盛人と争ひ、夫ではすまぬ斯うではと、晝夜苦に病み暮す）世間の人皆此通り云々、然るに在座の衆は、眞我の假我のと名目は分らずとも、此世は夢の世にて、追つ付け捨て、行く事なれば、未來は必ず極樂へと、心を定めて念佛を唱へらるゝ事なれば、最早生死の迷ひ納め、遠からぬ内往生して眞我を悟る地上の薩埵、有がたい身の上なれば、返すくも後戻りして假り物に執着せず、一期不退に相續せらるべし。

周利槃陀伽とは梵語、此に路邊生と云ふ、譯は此母他國にて槃特を懐胎し、臨月に我國へ歸る途中、路のはたで誕生せり、故に路邊生と云ふ、此槃特の兄も路の邊で生れし故、兄弟共に槃特と云ふ、去れど弟には周利の二字を加へて、兄と弟とを分つ云々、此兄弟の兩親早く死す、依て兄の槃特は家を弟に譲り、出家して佛弟子となり道果を得、弟

も亦兄を慕ふて出家して佛弟子となる、然るに此周利槃特は性得の鈍物なり、佛是を知ろし召して、五百人の佛弟子羅漢方へ仰せ付られて、鳩摩羅の一偈を教へさせ玉ふ、其偈とは守口攝意身莫犯、如是行者得度世、と云ふ二句なり、五百の羅漢日々此偈を教ゆれども、槃特覺を得ず、遂に一夏九十日の間入り替り立ち替り教へ玉ふに、槃特上の句を覺ゆれば下の句を忘れ、下の句を覺ゆれば上の句を忘れ、どうしても全く覺得ざるの鈍物なり、是の如きもの覺の無きは宿業ある故なり、其宿業とは、槃特過去世に豕を買ふて川を渡すに、口に水の入らぬ様にと思ふて、繩にて口を縛りし故、豕は息する事ならずして川中に死せり、此罪因に依て斯く闇昧なり、又昔し智者にて偏く經論に通せしかども、之を秘藏して一生人に教へず過されしが、命終の時之を悔み悲しみ、我所解人の爲に説ざれば益なし、秘惜の罪來世に其報を得んと、悲しみながら命終せり、此法を惜みし咎に依りて、今二句の偈文が覺へられぬ、されど臨終に

(101)

悔まれし故、終には此偈を誦し得られたるなり、之に依て見れば善惡二業共業力と云ふは強いもの也、死際に僅かに悔みし善念に依て、一偈を覺られたも善の業力、豕を殺し法を惜みし惡業で、愚鈍に生れられたも惡の業力なり、之を聞ては我々の身に引合せて思ふべし、過去の事は暫く置いて、此世の事計りでも生れてから今日迄、善か惡かと調べて見れば、唯惡事のみ多くて善とては至て少ない、されば當來の惡趣は争ふ事なき身の上、然るを此度本願に逢ひ奉り、南無阿彌陀佛と唱ふる身となりたれば、地獄の上を一足飛びにして極樂へ行く、是れ又何の業力か、大願業力爲増上縁と、阿彌陀如來の大願業力に引立られての往生なれば、怠りなく相續あるべし、偕て槃特一偈を九十日に得覺へぬ故、兄の槃特より大に呵責せらる、汝は何の爲に佛弟子となりて此精舎に居る、全體心得が惡いから一句の偈文をも覺へる事が出来ぬ、總じて人には夫れく業務がありて、武家なれば君に仕へるが業務なり、農民なれば耕作、町

民なれば商賈、皆夫れく所作のある如く、出家なれば法を聞て臆持し、人にも教へるが業務なるに、汝は一向其業を欠く、樂を得ん爲に來たものならん、夫れでは精舎止住は叶はず、早く古郷に歸りて還俗せよと云はれた、そこで槃特是非なく寺を出で、門外に立ち、熟らく思ふ様には、兄の意見も尤もぢやけれども、我無精で覺へぬでもなく、覺へ様と思へども性來愚鈍の生れつき故、覺へられぬを如何せん、折角出家したのに又俗に還るとは情ない、どうしたらよからうと、涙にくれて居らるゝ所へ、釋尊が御出に成つて、其所に泣て居るは槃特か、左様でござります、何故に泣て居るぞと宣へば、兄に迫ひ出され、斯様くの譯と申上ぐれば、成程兄の云ふのも尤なり、夫れでは彌々鳩摩羅の偈が覺へられか云々、爾らば此偈を覺へよと差出して、此は何ぢや忘る、是は偈と云ふものぢや、はい偈々、これで斯うするを掃くと云ふ、覺へよ、はい掃く、これは掃く、掃くを覺へば偈を忘れ、偈を覺へば掃くを忘れると

(102)

云ふ様に、百返程も教へられて、漸く掃掃くと云ふ事を覺へた、夫れを覺へて精舎の掃除をして居れば、寺に置くぞと仰せられたれば、悦んで掃除をして一年も過ぎて、樂特思惟するには、世尊此を教へ玉ひしは、塵を掃けば清淨になると云ばかりではなく、我身も智慧の簾を以て諸の煩惱の塵を掃ひ除けよ、清淨になると云ふ御示しかと觀じたれば、廓然として道果を得られたと云ふ、故に兄も悦び敬はる、時に世尊重ねて、守口攝意の偈を傳へ玉ふに、今度は即座に臆持せり、依て佛は此文の道理を示し玉ふ、守口とは妄語、綺語、惡口、兩舌を云はぬ様にすること、攝意とは貪欲、瞋恚、愚痴を起さぬ様にして、隨分意を攝し守れとのこと、身莫犯とは身で造る罪、即ち殺生、偷盜、邪淫をなすな、此十惡を守れば得度世とて、人も濟度する事を得るぞと云ふことを示し玉へば、立所に阿羅漢果の道を得られた、然るに祇園精舎の近邊に尼寺有つて、此寺へ月に幾回と定めて、佛の御名代に羅漢方が更代にて、御說法に御出で

になる、樂特も四果を得られたれば、順番の御代説云々、所が樂特のは、俗に云ふ姥の一本針で、外に代りの趣向も無ければ、幾度でも守口攝意の御文、尼達寄合ふて説法の評判、誰れには辨があるの無いのと云ふ内に、一人が嚴しくて聴けのよいのは、舍利弗様ぢやと云へば、一人はいやもう落ち付て味のあるのは、迦葉さま、いや富樓那様の辯舌に及ぶものはない杯と云ふ内に、又惡るぢやれな若い尼が、中にもつまらぬ説は樂特尊者、何遍でも鳩摩羅の偈計り、此後見れたら守口殿を、此方から讀んで仕舞たら、彼人の談義はなからう、平生いやな談義の代り、難義をさせてこまらさうかと小聲で云へば、耳さとい若い同士が分別なく、夫れは一興よからうと、以の外の相談をする、兎角する内、樂特尊者の番になり御名代、さあしてやつたと尼共は顔見合せて笑ふ、御齋も濟んで時刻となり、高座に登りて此方は御存じの通り、愚鈍な者でござるなれども、今日は如來の御名代の順番に當れば據なく參つた、併しながら外にも存

(103)

せぬ事なれば、いつも變らぬ鳩摩羅の偈文を法談せん、即ち其文にと、既に訓讀せんとし玉ふを、高座の前に待ちかまへて居る尼共、口を揃へて守口攝意と云はんとて、守と迄は云へたが跡が出ず、舌根すくみて物云ふ事が出来ぬ、是れ樂特尊者の神通に押へられたものなり、時に尼達口がきけぬ様になりし故、互に顔見合せ眼をばちくくさせて涙をこぼし、心に深く懺悔したれば、漸やう物も云はれる様になつた、樂特尊者は説法を始められ、守口とは今の如く、我説法の害をせんとて、守と云ひかけたが口を守らぬのぢや、心の働く儘に云ひ妨げようと思ふは、攝意と心を引しめぬと云ふもの、我こそ妨をせんとて高座の前に來りしは、身で咎を犯すと云ふものぢや、此惡を翻じて屹度守れば、道を得るぞと道理をつめて宣べ玉ひ、此三業が善なれば天に生じ、惡なれば淵に沈む、悟れば涅槃の城に至る、と分別解説し給ひたれば、其日の説法は舍利弗目連等よりも立超わたる利益ありて、聞く人歡喜信受せりと云ふ、又聰じて此

尊者は愚鈍なりし故、多くの人侮りてこまらせたる事度々あり、彼の舍衛國波斯匿王、一日佛及び大衆を請ず、樂特無智なりとて守門の者入れず、門外より臂を伸べて佛に鉢を捧ぐ、王驚て佛に問ふ云々、佛偈を説き給ふ、雖誦千章一句義不正、不如聞一法句一行可得上道、雖多誦經不解何益、解一法句一行可得上道、と時に二百の比丘此偈を聞て阿羅漢道を得たりと(法句經述千品)此因縁を以て勸進せば、此尊者第四阿羅漢果の證を得玉ひしは、至つて求法の心の深きに因るものなり、寺を放り出され乍ら門に立て泣いて御さるは、どうぞ出家が遂げたい故の事(宿業で臆持はできねども、もとむる心は甚深なり)である、此鳩摩羅の偈は一遍で覺ゆる智慧は有つても、求むる心の淺ければ、逆も第四果に至ること能はざるべし、智慧と愚痴とは依らぬ、求むる心の深いと淺いとに依るなり、提婆は六萬の法藏を諳んじて居たれども、生きたら地獄へ落ちた、此尊者は愚鈍で

(104)

あつたれども、是の如く證りを得て人にも利益を授ける、是れ佛法を信ずると信せぬとの相違なり、然れば今小智ありてもあてにならぬ、又愚かで一文字を知らずとも、佛の教を眞うけにすると、往生を遂ぐるなり、それ隨分律儀に聞て、平信じに信じて佛の教に隨ふべし、樂特は幕で掃くと云ふことを、律儀に聞て守られし故、第四果を得られた、各々や我等は唯申せば生ると云ふ事を、律儀に心得て申して居れば、朝夕作りし罪業の塵は何程あらうとも、一念大利の南無阿彌陀佛の誓で、八十億劫の罪塵を拂ひ除けて清淨になる故、臨終には御來迎に預り、往生を遂ぐる事間違ひ無ければ、此經の御教一向專修稱名相續が肝要。

第十三席

大意斷辨如例、上來十六羅漢列名の下にて、第七樂陀伽尊者迄終りて、今席は第八難陀と、第九阿難と兩尊者の事を談ず、(上にも云ふ通り、此經を聞くに、序分の内は往生の爲になる事もない

様に聞ゆれども、聞き様で大に念佛の進みになる、其故は此經を聞く身の上となつたは、各釋尊の木弟子と成つたと云ふものなり、爾れば此列名の方々は云ふに及ばず、一切の大衆とは弟子兄弟と云ふもの、其兄弟子方の發心なされし譯を聞ては、我々は夫れ程に求むる心がないとは、情ない事と、我身を見下し、其中からも此度此法に逢ひ奉りし事を、悦びてた念佛の資けとするがよい)難陀とは梵語、此に翻じて喜と云ふ、即ち釋尊の御母摩耶夫人の妹君、橋曇彌と云ふ方の生み玉ひし御子なり、故に釋尊とは腹替りの兄弟なり(摩耶死し玉ひて、橋曇彌が淨飯王の后と成りて、生み玉ひし也)、偕て此尊者を喜と云ふは、淨飯王の御子は、悉多太子一人にて在せしに、發心出家し玉ひし故、位を嗣ぐべき太子なければ、大王常に此事を憂ひ思召る、中、難陀出生し玉ひ、殊に容貌兄の悉多太子に似て威高き故、大王大に喜び玉ふて、喜と名命し玉ひき、此尊者發心の由來は、未だ太子にて在す時は愛欲熾盛の人にて、則ち后を孫多羅女

(105)

と云ふて、天竺にても並びなき美人なれば、甚だ之に愛着深し、佛は何卒難陀を出家させ度と思召せども、難陀は一向愛欲に耽りて露も其心なき故、佛方便を以て、王宮へ行乞に御出ありし時、佛は難陀の兄君と云ひ、殊に成道して佛となり玉へる事なれば、太子自ら種々の寶を持ち出で、敬ふて侍者阿難に渡さんとし玉へば、阿難の云く、直に佛に奉り玉へと、太子實にもと思ひ敬ひて佛に捧げ玉へば、佛は後しざりにしざり玉ふ故、夫れについて往く程に、いつしか太子は門外迄出で玉へり、佛は弟子に仰せて佛所に連れ歸り、いやがる太子を無理無體に剃髮をさせ玉ふ、難陀太子、今一應王宮へ歸りたいとの玉へば、佛大に呵責し玉ふ、次の日長者の請に依て佛及五百の比丘御供あるに、難陀は剃髮したるのみにて未授戒なれば、留主に居て寺を守り掃除をもし、堂塔四方の戸をも立てよとの仰付なれば、是非もなし、されど難陀は内心大に喜び、此御留主の内を幸に王宮へ逃げて歸らんと思ひ乍ら、先づ仰付けの通り掃除を

せんと、簪を取て掃き玉へば、風が吹て跡より塵が出来、是は期はない戸を立て、と、西を立つれば東が明き、南をさせれば北が開き、いつ迄さしてもはてし無ければ、一向に打ち捨て、木歸なき間に、王宮さして走り玉ふに、早や向ふより佛の木歸り、行き合ふては叶はぬと、側に繁茂せる大木に攀ぢ上りて隠れ玉ふ、折節頻りに風吹き來り、木の葉を殘らず吹き散らせば、難陀の身形あらはる、故、佛は夫れと御覽ありて、汝何とて其所に居るぞ、急ぎ下りて供せよとの仰せに、詮方なく亦佛の後に隨ふて歸り玉ふ、其後佛の仰せに汝雪山を見たく思はざるやと、難陀見度しと答ふ、此雪山と云ふは、北天竺の北にて四季共に雪のある山なり、難陀佛に従ふて彼山に至る、道の傍に瘦せ衰へたる老猿の居るを見て、佛曰く、汝が王宮に残し置く孫多羅女と、此猿とは何れが勝れりやと問ひ玉へば、難陀の答に、相對も物にこそよれ、五天竺第一の孫陀羅女と、此の老猿と比べものになるべきか云々、又其後に汝三十三天の様子を

見度は思はずや、難陀云々、諸天を見せ玉ふ内に、一の宮殿に天女計りありて天男なし、難陀其故を問ふ云々、佛の御答に、此天女は先世の戒行に依て天に生ると雖、猶宿業に依て天男なし、汝此天女の夫に成れかすと仰せければ、難陀大に喜び、如何様にして彼の夫になれ候やと問ふ、佛曰く、五戒十善だに能く持ちたらば、なるべしと仰せければ、難陀は急に戒を授け玉へと乞ふ、其の時佛問ひ玉はく、汝が王宮に置たる女と、此天女とは何れが勝れると、難陀云く、中々相對ならず、先きの猿と孫多羅女と相對いたせしが如く、此天女に比ぶれば我女は猿よりも見にくしと云々、又其後佛汝八大地獄を見度や云々、則諸の地獄を見せ玉ふに、何れにも罪人ありて劇苦を受ける中に、一つの地獄あり、唯火焰計りにて罪人なきより、難陀何故ぞと佛に問ひ玉へば、佛の曰く、幸に獄卒どもあり、汝彼れに問へと仰せらるれば、難陀たぢながら獄卒に其故を問ふ、獄卒云く、此地獄に罪人なき事は、釋尊の御弟に難陀と申す人、姪欲熾盛

の人にて、五戒十善を持って天女の夫と成らんと希はる、其天上の果報盡きて、此地獄に墮せらる、故、今は人なし、此地獄の主は難陀なりと申ければ、難陀此由を聞て大に怖畏し、未だ天女の夫と成らざる前にすら、是の如く定まりあるものを、若し天男と成り欲樂に耽りし後は、其責を受くる事いか計りならん、嗚呼誤てりと、忽ち愛欲の心を翻し、道心堅固に佛道を修行し、竟に阿羅漢の證りを得たり、此因縁を聞くに、佛の御化益は自在なるものなり、敵の刀を以て敵の首を切ると云ふの御化益なり、難陀は孫多羅女に執着せし故、夫れに勝る、天女を見せ玉ひて天を願はせ、地獄を見せては執着を捨てさせ、竟に眞の佛道を修行させ、大阿羅漢の果を得させ玉へり、實に貴き事に非ずや、是に就て思ふに、阿彌陀如來の我々を御助け下さるゝも眞に此の如く、全體佛法では執着する事を誠むるが定りなれども、我々は無始より以來、物事に執着するが癖に成つて居れば、所詮出來ぬ事なり、故に如來は、其身其儘で助け様

とて五劫に思惟し、十方に淨土も多けれど唯西方の一土を欣はせ、其淨土へ往く修行は南無阿彌陀佛の一行に取り付かせ、我淨土へ迎へ取らんと思ひ定め玉ひて建て玉ひし、御本願なり、其本願の念佛は、阿彌陀如來の法性眞如の證りより顯はれたる南無阿彌陀佛、此名號に取り付さへすれば、其取り付く法が悟りなる故、我知らず不覺轉入眞如門で、悟道の場所に到るなり、元來我々は物に取り付き執着する癖なる故、とりつく物を拵へて取り付かせて、助け玉ふが超世の本願、阿彌陀如來の善巧方便と云もの也。

●●●
阿難陀とは阿難の事なり、是は斛飯王の御子にて、釋尊の從弟提婆達多の弟なり、阿難は梵語、此に歡喜と翻す、歡喜とは歡び喜ぶと云ふ事、其よるこびよるこぶとは、どうした譯なれば、此尊者の誕生は大吉日で、則釋尊の成道と同時に生れ玉ひし也、佛成道なされし時、御父淨飯大王の御前へ、唯今成道仕りましたと、優陀延を以て奏し玉へば、大王大に喜び玉ふ所へ、又御弟斛飯王より、只今

太子誕生と告げ來る、大王又悦び玉ふ、僅かの内に喜び二つなる故、生れし太子の名を阿難と付けよと、淨飯王より仰せ越された、是れ得名の因縁なり、偕て阿難段々成人して、二十五の年出家し佛弟子と成りて、佛の侍者を務め玉へり、誠に此尊者の縁には種々の事ありて、一旦に述べ盡されぬ尊き御方なり、特に阿難は多聞第一にして、臆持強記の方なり、併し佛の成道と同時に生れて、二十五年過ぎての出家なれば、佛弟子と成り玉ひてよりの法は、隨侍聽聞して明かなれども、阿難の出家以前、即ち佛成道し玉ひてより、二十五年の間に説き玉ひたる法門は、御存知なき筈なり、然るに一代の御說法傳持の人とは、甚だ心得ぬ譯なりといふ疑あれども、是は最初佛の侍者と成り玉ふ時、四願を建て玉ふ隨一にして、未出家以前二十五年間の御說法を、我が爲に重説し玉へと願ひし故、佛は特に阿難の爲に重ねて説き聞かせ玉ひし故、御一代の御說法は残らず聞き取りたまへり、(多義あれども略して此一義を述べ云々)故に佛

滅後一千人の大阿羅漢、如來の教法を未來に流通し、弘く衆生を濟度せんと談じ合ひ、結集堂を作りて集會し玉ふ、爾るに一千人と云ふ内、九百九十九人に成さんと云ふ折柄、阿難我れ此衆に加はらんとて、堂内に入らんとするを、餘の羅漢肯ひ玉はず、阿難はまだ有學の人なれば叶はずとて、戶外へつき出し玉へり、阿難ひよるくとして倒れんとし、頭が地に付くか付かすの間に電光定に入り、忽然として阿羅漢果を得たり、是に於て阿難堂内の衆に對て、我れ今四果に至れば堂内に入れられよと云ひ玉へば、堂内より答へて、汝羅漢の聖者とならば戸を開くに及ばず、其鍵の穴より入り來れよと云はるれば、阿難神通に乗じて鍵の穴より入り、結集の列に加はる、其時一會の大衆穿議して申さるゝには、阿難は常隨の侍者殊に多聞第一の嘉名を得たれば、一代の法を能く聞持し居らるゝ筈なれば、高座に登りて說法せられよとある故、然らばとて直様高座に昇り玉ふに、其

粧ひを見て大衆に三つの疑が起つた、一には釋尊が再び出で玉ふたかと思はれ、二には他方の佛が來り玉ふたかと思はれ、三には阿難が佛に成り玉ふたかとも思はれたり、されども阿難開口一番、是の如く我聞と云ひかけたるに依り、漸く疑が晴れて阿難尊者なりと思ふたとなり、夫れより段々如來の御說法の通りを、一字一句の違ひもなく御演說なされた、其有様如來の御說法かと思はれたと云ふ、故に迦葉尊者は讚して、面如淨滿月、流入阿難身と云へり、是の如く徳ある尊者故、釋尊も一代の御說法を附囑し玉へり、されば如來に次での大切なる阿難なることを知るべし、故に佛滅後百年程過ぎて、西天の阿育王の頃、言語比丘と云ふ人あり、山路を通らるゝに、一りの鬼神古墓を禮拜するを見て、比丘其故を問ふ、鬼神答へて云く、是は阿難尊者の墓なり故に禮拜すと、比丘又云く、佛弟子の墓多き中に、唯阿難の墓を禮するは何故ぞと、鬼神答て云く、末世に於て到る處に佛法の沙汰ある故、思はず知らず佛縁を結んで利

益を得る事、偏に阿難尊者が結集なされたた經の御蔭なり、故に今之を禮すと、然らば我々が此度超世微妙の本願に逢ひ奉り、生死の苦患を通れ、忽ち地上の大菩薩となる果報を得るも、偏に此阿難尊者の御蔭と云ふものなり（いつ迄云ふても盡きぬ、有難き尊者の事なれば、先づ是で傳來を止めん云々）斯の如く多聞第一の御徳の在す尊者へ、淨土宗の正依經とする觀經を附屬して、汝好持是語持是語者、即是持無量壽佛名と宣ひ、大經の會にては、南無阿彌陀佛を唱へよと勸め玉へば、阿難仰せの如く、佛勅を信受し玉へり、されば皆や此方と御念佛の同行と云ふものなり、其經文はと云へば、大經に阿難起て衣服を整へ、正身西面して恭敬し、合掌して五體を地に投じ、無量壽佛を禮し上るべし云々、是を委しく説いてあるのが、同本異譯の平等覺經なり、佛言、若汝起更被袈裟西向拜當日沒處、爲無量清淨佛作禮、以三頭面著地、言南無無量清淨平等覺云々、是れ念佛を以て阿難の所作となされたるなり、既に

一代經傳持の人が、如何なる法を修行ありしぞと云ふに、即本願の念佛なり、然れば念佛の餘行に超過せる事、論を俟たず、實に出世大慈悲本懷の法には相違なきなり、故に今經の正宗分にて、餘行を拂ひ捨て、振りすゝいだる一向專修念佛の一行を勸め玉へり、若し念佛唱へて往生すると云ふに間違ひがあらばとて、六方の諸佛が證誠に立ち玉ひたるなり、斯かる微妙の大法なればこそ、一代諸經結集の阿難尊者も勸め玉ふ事なれば、況や下智の我等は此法ならでと、脇ひら見す專修念佛が肝要なれ。

第十四席

大意斷辨如例、前席迄に第九阿難尊者を辨じ畢れり、今席は羅睺羅尊者の事なり、か様に日々羅漢方の事計りでは、直に念佛を勸める様には無けれども、此羅漢方は則我々の兄弟子なれば、其因縁を聞けば心得にもなり、又は因果の道理を信する便りにもなれば、序分でも、心の向け様で利益は

得らるゝなり、偕て羅睺羅とは梵語、此に覆障と云ふ、覆障とは覆はれ障へると訓じて、此尊者は釋尊の御子なり、母の胎内に六年居玉ひし故、日月にも照らされず、覆はれ障へられ玉ひし故、御名を覆障と云ふ、此尊者の御父悉多太子は、淨飯大王へ出家致し度と願ひ玉ひたれども、許し玉はず、猶ほ其上に出家の念を止めしむるには、色欲に如くは無しと、其頃天竺にて第一の美女と云はれる、善覺王の娘耶輸多羅女を迎ひ玉ひたれども、太子は更に欲行に染み玉はず、故に大王汝出家を求むるを許さぬではなけれども、世繼ぎの太子がなければ、許されぬと仰せられしかば、太子則ち耶輸多羅女の右脇を指し、隔後六年汝生れ男と仰せられたれば、直に懐胎し玉へり、夫れより太子は王宮を抜け出で、檀特山にて御修行あらせられたり、偕て羅睺羅六年胎内に居玉ひしは、因縁のある事なり、謂く尊者の前生は王で有て、其時或る出家に御齋を供養せんと約束なされし事あり、出家は其日に王宮に至りしに、王は此事を忘

れて楽しみに耽り、六日の間何も供養せず過ぎたり、是れ全く悪心で仕玉ひし事ではなけれども、出家を飢させた罪に依て、王は命終ると直に黒繩地獄に落ちて、苦を受る事六萬年の間なり（六日延した報が、六萬年の苦報とは、實に因果は怖しきものなり）されど七日目に御齋を供養された善根に因て、地獄から直ちに人界に出で、殊に佛の御子と生れ玉ひしなり（善惡共に、業は強いもの）佛の御子とは生れ玉ひたれども、前生地獄の等流果が残て居て、六年が間胎内には生まれ、日月の光をも見る事が叶はせられなれど云ふ、故に覆障と名づく、扱て此尊者母胎に六年居て生れ玉ふ故、釋氏皆疑を起して悉多太子の太子には非ず、外の人の子ならんと疑ふ故、耶輸多羅女は大に耻ぢて恨みには思ひ玉へども、云ひ分けの便りなければ誓ひを立て、出産の時に大なる火坑を掘て火を盛にし、此子若し太子の御子ならば、縦ひ火に投すとも死すべからず、若し餘人の子ならば、必ず死すべしと云て、火中に投げ入れ玉

ふに、不思議なるかな火坑忽ち蓮華池と變じて、蓮華則其子を受けし故、釋氏殘らず疑を晴らして、太子の子と云ふ事を信せしとなり（耶輸多羅女、過去世の時一つの鼠あり、匣筒の中に入りたるを知らずして、蓋を覆ふ事六時の間なり、其報に依て六年在胎の苦を受けたりと云ふ、用否は時に隨ふべし、胎内に久しく居ることは例あり、脇尊者は六十年〔付法傳〕老子は八十年、季泌は三年〔鄴侯傳〕本朝相馬將門は三十三年にして生る、偕て此尊者へ佛記前を授け玉ふ事あり、則法華經の授記品にあり、此授記品と云は五百人の御弟子方へ記前を授け玉ひし故、五百弟子授記品と云ふ、其中に羅睺羅への記前はと云ふに、踏七寶華如來と號すべしとあり、踏七寶華如來とは七寶の蓮華を踏む如來と云ふ事なり（羅睺羅出生の時、火坑に投せられ玉ふに其火坑忽ち蓮華と變じ、華臺を受けられて其上に生れ出で玉へば、果上の嘉號に應ず）此縁をつくぐ考ふれば、今我々の生涯も能く似よりたる所あり、謂く羅睺羅出生の時火坑に

投せられしに、猛火忽ち蓮華となりし如く、皆や我々が日々起す所の、身三（殺生偷盜邪淫）口四（妄語綺語惡口兩舌）意三（貪欲瞋恚愚痴）の激しさは、恰も猛火の燃へ上る如くにして、必墮無間の種蒔き計りをして居る中へ、南無阿彌陀佛と唱ふれば忽ち阿彌陀如來の御子と成り、是れまでの悪業力で、枕の元へ引よせたる火の車も、忽ち跡なく消へ失せて、御來迎の蓮華に乗じ直に極樂往生を遂ぐる事なれば、踏七寶華の記前を得玉ふ、羅睺羅尊者の御身の上に劣らぬ果報の身の上と、歡喜し信受して稱名相續が吳々も肝要。次に橋梵波提とは梵語、此に牛呵と翻す、此尊者は牛の如くに常にネリカム（鬪）癖あり、其譯は此尊者の前生は、五百生が間牛でありしと云ふ、其又前生は沙門でありしが、或年の秋の頃田中の道を通りかけ、兩側に出來てある稻の穂先き傾きてあれば、もう米も實のりしかと一と穂を抜き取り、一粒喰つて残りの穂を路ばたへ捨てられし咎に依り、死して五百生間牛と成り重き荷を負ひ田を耕

やし、主人の意に従ふて苦を受けつゝありしが、最後牛の苦を離るゝ前に、或る寺の邊りの垣に繋がれて在りしに、寺内にて僧が袈裟を洗濯して竿に干して置たのが、風に吹き散らされて此牛の角にかゝる、これが因縁となつて福田衣に觸れし利益にて、人間に生を轉じ殊に佛弟子と迄なられた、されど猶ほ牛の餘習で常にねりかみ、又足も牛の如くである故、人が見て笑ふのも無理ならぬ事なり、されば如意を拵へて口を覆はせ、襪子と云ふて先きの割れぬ足皮を拵へて匿させ玉へども、世人は内徳を知らず外相を見て笑ふて罪を造るので、佛は常に切利天上戸利沙樹苑の内に住ましめ玉ふ、蓋し天人は外相を言はず、解律第一の徳義を稱し恭敬供養するを以てなり、時に此尊者天に在て定に入り、釋尊御入滅の事を知らずして居玉ふ所へ、諸經結集の事ありて迦葉尊者より、結集の衆に入り玉へと次座の比丘を便に遣はしたれば、尊者使の比丘に對して世尊の安否を問ひ玉へば、使者答へて、佛は既に涅槃に入り玉へりと云

ふ、さらば我が和上の舍利弗尊者は如何にと問へば、使の比丘答へて、舍利弗尊者は佛の御涅槃に先き立つ七日前に涅槃に入り玉ふと云へり、之を聞て尊者大に嘆息し、象王去れば象子隨ふ、大師既に入滅す我れ又滅せんとして、忽ち虚空を指して上り、十八變の神通を現じて、火燒三昧に入り滅度し玉ふと云ふ、先づ略して傳來は畢る、各々此尊者の由來を聞て身を顧みらるべし、尊者は既に一穗の稻を抜き取つて捨てたる咎に依り、五百生牛の報を受け、最後の人間に生れてもねりかむの癖ありて、牛のひづめの様な足で有たとある、是れ惡因惡果の現證なり、又角に袈裟が觸れたので佛弟子となる、是れは善因善果である、此因縁不味の所を信じて我身をわたり顧みるべし、稻一穗位の事が斯くも恐ろしき業報を受くるものと承知すれば（是は稻の穗を盗みて、無益に噛み捨てたからである）僅かな事でも充分注意して、油斷なく稱名相續せねばならぬ、殊に出家の隱居のと云ふ人は尙更の事、在家の人も此世の營みをなす

中には、隨分これ位の事これ位の事と油斷をせし、念々の作惡に依り當來惡趣の苦果を受けん事、何の疑かあらん、然れば定まつた三塗を離れ、順次極樂往生と轉じ變る本願念佛の法門をば忘れぬよう、日課の稱名が肝要。

賓頭盧波羅墮尊者、波羅墮は姓此に利根と翻す、賓頭盧は名此に不動と翻す、此尊者は案内の通り諸寺に安置する尊者なり、何故に餘の尊者を安置せず、此尊者を安置するぞと云ふに、此尊者は不調法ありて擯出せられ玉ひ、長く滅度に入る事ならぬ様に仰付られて、今現在西衛耶尼に有り、専ら人天の供養を受け世の福田となり玉ふ、此尊者擯斥せられし譯は、佛在世に樹提長者と云人あり、此長者或時梅檀香木を以て鉢を作り、長さ棹の上に置て諸人に告て云く、此木鉢を取るに、梯を用ひず杖竿を用ひず、神通にて取る者あらば與へんと、故に富蘭那尼、健陀等の諸の外道集り、何卒取り得たいと思へども取ること能はず、皆頭を掻きつゝ出る時、賓頭盧尊者我神通を顯はして此木

鉢を取り、諸の外道を驚さんと思ひ、樹提の内に來り神變にて虚空へ登り、何の苦もなく木鉢を取り、遙に下を見たらし汝等之を見るや、此鉢誠に愛しつべしと云ひながら、又神通を現して大地を震動し、又空を凌いで、日の光を覆ふて眞の暗となす、城中の男女驚き恐れて孕婦倒れて胎を墮せし故、佛大に呵責し玉ひ、汝一個の木鉢を得んとて人に過ぎたる神通を顯はし、世人を驚かして墮胎せしむる事其罪輕からず、今より後我に従ふ事勿れ亦入滅する事勿れ、又此界に住する事を許さず、西衛耶尼州に往て衆生を教化せよと勅し玉ふ、又來世の福田となれとの佛勅を受け玉へば、十方の施主の供養には必ず來りて受け玉ふとなり、昔時一人の長者此事を聞いて法の如く大會を設け、至心に賓頭盧を請す、清淨の花を座に敷き若し賓頭盧來り玉へば此花萎ますと念じ、懇に大衆を請じて齋食を行ふに花皆萎めり、長者志の薄き故ならんと大に悲み、重ねて大會を設くる事又前の如くするに、花同じく萎めり、増々悲しみ復大會を開

(114)

き、百餘人の僧を請じて罪障を懺悔するに、上座の僧云く、汝三たび我を請する故我れ度毎に來れども、汝が奴門に在て雜人をさねざり、我年老て衣服の弊れたるを以て門内に入れず、されど汝が志堅固なるを以て我れ強て門に入りしに、奴入れずと拒み杖を以て我頭を打ち破る、右の額の角の瘡則是なりと告げ終ると見れば、其僧の所在を失す、長者は即ち賓頭盧なりと知り、願望を遂げたる事を悦びしと、(賓頭盧經の取意也)人々此事を聞て思ひ見るべし、大會を設けて賓頭盧を請するに、正しく其供養を受け玉ふ現瑞あらば、施主の心如何ばかりか悦ばしからん、然れども直ちに賓頭盧を供養したりとて、直様生死を離るゝと云ふ程の事は出來ず、唯善根を植ゑ功徳を積む分齋なり、然るに四威儀を簡はず往生の爲に南無阿彌陀佛と申せば、「南無と呼ぶ二字を聞くより阿彌陀佛、枕の元に影うつすなり」と、毎日千遍影向護念云々、順次の出離極樂是れ貴き限りに非ずや、羅漢の來儀ですら人の上では羨しく思はるゝ程なるに、況

や菩薩の階位をも超へ、應身の佛でもなく、報身の佛の御來迎を拜んで、往生遂ぐる大果報の身の上と成る事が好もしくあるまいか、假令肉眼は盲て現に拜む事こそならずとも、日々千遍も來り玉ひて攝取護念に預る事は、喜ばしくはあるまいか、されど日々來り臨終の來迎好もしくは思ふとも、難修難行を勤めてと云ふ事ならば後ざりもせよ、唯僅にも極樂へ往生と思ひ、細々ながらも南無阿彌陀佛と、行住座臥の簡びなく唱へさへすれば、受けらるゝ大果報なれば、必ず〳〵畢命臨終の日課極名相續が肝要。

第十五節

大意辨釋如上、前席にて第十二賓頭盧尊者迄濟んで、今席よりは第十三迦留陀夷尊者を談せん、迦留陀夷とは梵語、此に黒光と翻す、其色至て黒き尊者なり、今の齋食とか晝から行乞せぬとか云ふも、皆此尊者の縁より起りしもの也、都て托鉢をするには、熟食とて其儘で喰はれる物を施すが本法に

(115)

て、清淨に食物を調へて佛弟子の來り乞ふを待ちて與ふる也、時に此眞黒な迦留陀夷尊者、日暮に或家の門戸に立て食を乞ひ玉ふ、其家の女懷胎なりしが用事ありて外へ出るに、折節日暮でもあり空はかき曇りて、頻りにいなびかりせしに、其光の中に眞黒なる人が、手に鉢の如きものを持て居るを見て、黒鬼と思ひ驚き倒れければ、臨月に非ざれども墮胎せり、此有様を家内の者見て驚きあわてながら、水を與へてどうして倒れて斯く墮胎せしぞと問へば、あれ見玉へ黒鬼が其處に立つて居ると云ふ故、其方は鬼か何しにそこに立つて居るとぞ聲をかけたれば、我は鬼に非ず佛弟子の迦留陀夷と云ふ者の行乞するなりと、聞くなり大に惡口を吐いて辱かしめけり、佛此状態を知り玉ひて、已後佛弟子は齋食せよ、齋食すれば日中後行乞するにも及ばず、行乞せざれば如此失敗もあらざらんと誠め玉へり、猶此の迦留陀夷尊者、慳貪の女を化益し並に其夫をも教化し玉ふ事あり、其外種種の利益を施し玉ふ事多けれども、今は略す、又

尊者の因縁を聞て至て心得に成る事もあれば、其中の一を談せん。

昔時舍衛城に婆羅門ありて、此尊者の大檀那となりて常に供養す、家に一子あり此れに婦を迎ふ、婆羅門臨終に其子に命じて我れ死すとも、尊者を供養する事、我が存生の時の如くせよと遺言せり、其子も復た至て篤信家なれば、父の命を守り尊者を敬ひ供養する故、尊者も常に此家に来りて受け玉ふ、或日婆羅門の子他行するとして、妻に尊者供養の事を云ひ付けて出でしが、此日五百の群賊の中に端正の美男ありしに、妻此男に愛著して招き入れて密通す、尊者が若し夫の歸りし時、此事を告げ玉はんかと恐れを懷き、姦婦と賊と心を合して尊者を殺し、馬糞の中に埋み藏せしかど、藏すより形はなるは無しとて、此事波斯匿王の御聽に達せしかば、婆羅門家並に左右十八家を殺し、五百の賊を探り捕へて手足を斬り棄て玉へり、諸の比丘即ち此事を如來に問ひ奉るに、告げ玉はく、過去に迦留陀夷は大天祠の祭主となる、五百人あ

(116)

りて一つの羊を牽いて來り、四足を截り之を殺して、天祠を祭り祈願し玉へと云ふ、祭主即ち之を殺す、此罪に依りて地獄に墮ち無量劫の苦を受く、昔の祭主は今の迦留陀夷なり、羅漢果を得ると雖も、餘殃猶ほ盡きずして今此報を獲、其時の羊は今この姦婦なり、昔の五百人既に羊の四足を截りし報にて、今大王の爲に手足を斬られしなりと、此因縁を以て人々心得らるべし、生類を殺して邪神を祭るの罪なる事は元より、たとひ業障で肉類を好むとも、未來未劫の苦報を思ひて慎しむべし云々又病身な故の貧を故のて、神や佛に無理な願ひや祈りは、決して爲すまじきなり、今世の果報は善くも悪くも、過去に蒔きたる種次第で現はれて出るものなれば、祈つてもはたいても貧が富貴にも成られず、病身が健かにもならぬ、若し夫れが叶ふ位なれば、此迦留陀夷は四果の羅漢神通自在の御身なれば、五百人や千人位の事か幾百萬の軍兵でも、鼻息き一つで他方世界へ吹き飛ばす事も出來得れども、其處が前世の因縁にて僅か二人の

姦婦惡賊に殺され玉へり、此等の因縁を聞ては、た互の身に引受け病身なものも貧乏なものも、其外心に叶はぬ事のあるものも、皆我が過去世に爲せし報いぞと、祈つて益なき願をかけず、願ふて得らるる當來の往生極樂の爲の、御念佛を進んで唱へる様にすべし、餘の事で願ふさへ厭欣心なき不安心、ましてや唱ふる念佛で祈らば三心不具の不往生、能く心得へ置くべき事なり。次に摩訶劫寶那とは梵語、此に房宿と云ふ、此尊者初め出家して僧房に在て宿するに、一人の老比丘來りて共に宿し、終夜說法し玉ふを聞いて道果を得玉へり、老比丘は佛の化現にて在せしと云ふ、爾れば佛と同房に宿すると云ふを以て、房宿と云ふ也、此尊者機縁熟するを以て佛來りて化益し玉ふ、佛在世は羨ましき事なり、然れども立還つて思ふに佛來りて說法し玉ふども、劫寶那之を信せずば道果を得る事能はず、今も又佛の説き置き玉へる、本願念佛の法門に逢ひ奉り、信じて行すれば順次に往生する事なれば、直に佛世に生れ逢ふ

も同前、されど此法門に逢ひながら聞まゝに信せず、我が了簡を交へて加減する故、再び三途に歸るなり、(我が了簡とは、二世安樂、祈念祈禱、御禮報謝云々)然れば佛教祖釋に任せ、唯往生の爲に念佛一行をさへ修すれば、順次に往生を遂げ、我身の快樂は云も更なり、三明六通自在の身となる故、釋尊の如く衆生濟度に自在を得るなり、今は貧家の一族で聊かの施さへ心に任せぬに、神通自在の妙用を顯はして、生々世々の親兄弟、妻子眷屬有縁の者を、化益する當來の果報を喜び、專修稱名勇みあるこそ頼母しけれ。

薄拘羅とは梵語、此に善容と翻す、形色至て端正なる故に名とす、年は百六十歳迄生き玉ひて長命也、其間に風一つひき玉はず、生涯藥一服飲み玉ひたる事なき尊者也、其上幼少の時、五回死に玉はねば叶はぬ事ありしに、夫れを何事なく遁れ玉へり、五死を免れ無病長命なるは何故ぞと云ふに、過去世に一つの不殺生戒を持ち、其上病僧に藥を與へ玉へり、是等の善因に依て九十一劫の間惡趣

に墮せず、諸の患に遇はず今世も又長命無病なり、不殺生とは生き物を殺さぬ戒なり云々、藥を施すとは、或比丘頭痛にて難儀せられしに、一つの阿梨勒果を與へられしを云ふ、此果は勝れし藥なる故、頭痛頓に平癒せり、此二善根に因て右の果報を得玉へるなり、又五死を遁れ玉ふとは、此尊者の母は産み落して直に死に玉へり、(其一)故に後妻を入らるゝに、繼母心だて惡しく先妻の子を惡む、或時後妻夫の留守に餅を焼て居ければ、此尊者三歳の時なりしが餅を食はんと乞へり、繼母腹を立て餅を與へぬのみか、此子を餅網の上にあけて、火を扇ぎ立て、焼き殺さんとするに、餅は炭となれども、尊者の身には少しの痛みもなし、(其二)又繼母或時肉を煮るに、尊者頼りに之を求む、繼母益々怒りて釜中に投げ込みたるに、肉はこげつきたれども、尊者の身は恙なし、(其三)又繼母衣服を洗はんとて河へ行きしに、尊者後を慕ふ、繼母惡み怒りて水中へ投げ込む、幼き尊者は出る術もなく浮きつ沈みつ流れ行くに、大魚來り

(117)

(118)

て尊者を吞む、(其四)爾るに此魚漁師の網にかゝりて捕はれ、漁師は市に出して之を賣らんとす、時に尊者の父族より歸りに此所を通りかゝり、此大魚を見て久しぶりに我家へ歸れば、留主中世話になりし人々をも招きて、御馳走の料にもと思ひ、此大魚を買求めて家に持ち歸り、留主中無事か薄拘羅は如何にと問ひ王へば、繼母泣き乍ら夜前迄未歸りを待つて居りましたが、待ち兼てや日暮方に外に出で、歸らぬ故、諸方を尋ねても知れず、今にまだ歸りませぬと云ふ故、父もびつくり驚き、迷ひ子になつたら尋ねにやならぬ、近所の人も頼んで捜して貰はん云々、さて此魚斯くして置ては腐る故、先づ腸を出してと、庖丁を手に取て魚の腹を刺きければ、中より小兒出る、見れば我子の薄拘羅なりつ、(其五)父はびつくりしながら、其方はどうしてと尋ねれば、薄拘羅有體の儘を語る、父は彌々驚き、偕ては汝を不便に思ふ體をなすは我に見せかけ計り、其實殺さんとまでしてをるのか、偕てく頼みにならぬ人心、聞くも五月蠅き浮世

かなど、無常を思ひ志を起し繼母を去り我子を連れ、如來の御許に詣で、佛弟子となり出家せられたり、薄拘羅尊者如此危き場所を遁れ命に別條なかりしは、皆是れ前生不殺生戒の善根力也、これ程の遁れ難き死を五度までも遁れ、値ひ難き佛に遭ひ、得難き阿羅漢果迄を得玉ふ程の善因のあるに、何しに繼母にかゝり玉ひたぞと云ふに、是れ又譯のある事なり、此尊者の前生は比丘でありしが、願を立て、云く、女は諸道の妨げなれば今日より女の形を見まい、又女の拵へた着物は着まい、又女の調へた食物は喰ふまい、と云ふ願を立て、山寺に引籠りて居玉ふに、實母ありて我子の比丘に、久しく對面せざればなつかしく思ひ、漸く或家を聞き合せ、はるく道の唯一人山寺へ尋ね至り、侍者に右の譯を云ひ入れられたるに、比丘の答に我に願あり、總じて女人には逢ふまじと誓ひ居れば、母といへども、對面致されぬゆゑ、未歸り下されとの事なり、されども母はなつかしさに遙々尋ね來りしことなれば、唯一と眼對面させ

(119)

て呉れ外の女とは違ふ實母の事なりと、呉れく云ひ入れられしが、一度佛に誓ひし事、佛法修行の爲には代へられぬとて、強て逢はれぬ故、母は詮方なさに門口に倒れ伏し泣き悲み居られしが、歎きの餘り母を捨てるは悪人なりと思ひ、惡願を立て、曰く、此世で吾れに斯くつれなくするからには、未來で妾れ汝が繼母となり、此恨みを報はんと、泣きさげ乍ら歸られたと云ふ、此母の惡願に因て、今世で繼子繼母と生れ合せ玉ふ、左すれば願と云ふものは強いものなり云々、此母未來で報はんと云ふて、五度迄殺しにかゝつた、其元はと云へば母の瞋恚の一念惡願ゆゑの事なり、夫れ迄はなつかしいと思ふたが、恨めしいと云ふ念に轉じ、殊に凡夫の事なれば、左程の事はあるまじき様なれども、願と云ふは強いもので望みの通り繼母となれり、之を聞くにつけても、彌々佛願力の強縁を信仰すべし、所以は如何ん、法藏菩薩の因位より、五劫に思惟を盡し兆載永劫の御修行なされ、何卒衆生が助けたいと思ひに想ひを重ね、

建て玉ひたる本願の南無阿彌陀佛なれば、唱ふる者は悉く願力に引立られて往生を遂ぐるに、何の疑ひかあらん、又薄拘羅の五死を遁れ玉ひたるに能く似よりたるが、我人の身の上なり、其危き事校量して知るべし、我人日々起る瞋恚の煩惱、憎くや恨めしやと發すは、燒網へ上つて居るも同前、是れ地獄の火を焚きつけて居るのなり、又嫉ましい妬ましいと思ふは、三界の鍋の中で煮られて居るのぢや、又日々夜々見るにつけ聞くにつけ、惜しい欲しいと發すのは貪欲の煩惱にして、生死の海を流れて居る有様、又魚に吞まれては、外に居るとは違ひ難儀であらう、今我々五濁亂滿の惡世に生を受けて居るは、三界六道の大魚に吞まれて、苦んで居るも同前、又刀で割かれる時は嘸や危い事ならん、夫れよりもまだあぶないは我人の身の上、惡事を爲しては慚愧もせず、若し少しの善根でもすれば、我なればこそ斯う云ふ事をと、我々所の念に皆盜まれて仕舞ひ、當來は刀山劍樹切り割かるるに違ひはあるまい、何と皆さん危ふき事ならず

(120)

や、我々此危ふきを遁るゝは何ぢや、唯助け玉へ南無阿彌陀佛の一行で、三塗を遁れ安樂淨土へ往生するので、彼の薄拘羅尊者、若し過去世に於て不殺生戒を持ち施薬の徳が無ければ、何に依てか此危き難を遁れ玉はん、纔か世間の少善根でさへ此難を遁れ玉へり、今我々出世大善根の念佛の法門に逢はずば、地獄の苦患を何しに遁るべきや、危きを遁れ快樂を受け、薄拘羅の得玉へる羅漢果を超へ、地上無垢の大菩薩となるは、偏に超世別發の本願力の不思議と云ふものなれば、危き所で有難き法門に逢ひ奉りし事を喜び、脇平見すに一向専修稱名が肝要。

第十六席

大意辨斷如例、前席に十五薄拘羅尊者迄すみて、今席は第十六阿菟駄尊者の下なり、(阿那律とも云ふ、梵語の異なり)此尊者は釋尊の御從弟にして甘露飯王の御子なり、此に翻じて無貧とも、或は無滅、又は如意とも云ふ、九十九劫の中天上人

間に生じ、常に其功德無滅にして能く如意の樂を受け、更に乏しき事なし、故に此三の(無貧無滅如意)翻名あり、如何して夫云ふ果報を得玉へるぞと云ふに、過去弗沙佛の末法の時に、大に飢饉して諸人飢へ疲かるゝ事大方ならず、餓饉滿野とて、其處も此處も餓死する人多く淺間敷世なりしが、折しも縁覺の聖人が行乞に來り玉ふに、誰れ有て僅かの物をも御供養申す人なければ、鉢を空くして歸り玉ふを、一人の貧人此の様子を見て、聖人は世の福田なり然るを誰れも供養する人なし、我れ今何か御供養申度と思へども施すに物なく、漸く稗の飯が少し計ありしを、我れ之を食ふとも外に蓄へたる物なければ、終には餓死に及ぶべし、今斯く乏しき身となるは前生の慳貪の報ならん、されば此食を聖人に供養し、當來の功德を得んには如じとて、招きて供養す、聖人之を受け食し畢て、十八變の神通を現じて歸り玉ふ、偕て夫れより日のたけるに従つて空腹となる故、少し計の刈殘せし稗のあるを思ひ出し、畠へ稗刈りに行

(121)

しに何所よりかは知らねども、兎飛び來りて背に飛び付き離れぬ、故に汝も飢に疲れて我に食を求むるのか、氣の毒ながら我は何も食物を持たぬ、他へ行て求めよと云へども、兎は體を離れず、唯さへひだるくて歩行六ヶ敷に、汝が負はれてはきつい迷惑離れて呉れいと云ふ、内にどつしり重くなる故尻もちついて、と見返ればいつの程にか死人となつて居る、仰天して拂ひ落そうとすれども、いつかな離れず、離れねば稗も刈られず、詮方なさに歩んだりいざつたりして、我家に歸りつきたれば忽然として死骸が落ちた、やれ嬉しや、併しどんな死骸ぢやと能くく見れば、死人ではなく黄金で造りし人形なり、偕も結構な物でありしよ、先づ人形の指を一本取て通金に代へんとて、折り取れば跡へ亦出來る、いつ迄も其通りなれば、餘り不思議の事なる故、此事地頭へ聞ひしかば、取り寄せて見らるゝに、黄金ではなくて死人である、而も臭氣至て甚しければ、早々に持ち歸れとある、故に我家へ持ち歸れば、復元の黄金の人形と成る、

如是なるを以て澤山に遣つて一生不自由なく終れりと云ふ、是が富貴の受け初めであるといへば、衰へるも榮へるも共に定數のある事にて、過去で蒔た種次第なれば、いこう驚くに足らずして慎しむべき事なり、又如上の徳は出家以前の事、出家なされて後の徳を云へば、天眼第一と名を得玉ひし尊者なり、此事は次に談すべし、先づ聲聞衆の下を辨じ畢らん。
如是等諸大弟子、是の如くとは上の十六人を指す詞なり、等とは等集の等にして、即ち千二百五十人を指すなり、大とは臘高德勝れたる故に云ふ、弟子とは、南山云、學在我之後三名之弟、解從我生名之子、即因學者以父兄事師、得稱弟子と、弟子とは「木とうとごと」と書た字で、弟子は學文師の後にあり是れ弟の義なり、子とは親より生るゝものなり、弟子は師に依て解了を生ずる是れ子の義なり、爾れば師には親と兄との義ある故に、以父兄事ふるに因て得稱弟子とある、此所では師は釋尊にして親の如く、千二百五

(122)

十人の大衆は、釋尊の御教化に依て解を生じ玉へば、是れ子の義なり、又今皆が此經を聞て信すれば、御弟子の仲間へ加はつたと云ものなれば、相互に此勝縁を空しくせぬがよき也、猶此師弟の間の事を、長阿含經に説き玉へば、之を示さん、經曰、師長以五事視弟子、一順法調御（心の立て様四威儀作法）二誨未聞、三隨其所聞令善義解、四示其善友、五盡已所知誨授不慳云々、是が師の弟子を教育するの義なり、又弟子の師に隨事しようも説けてあり、經曰、夫爲弟子當以五事敬事師長、一給事所須、二禮敬供養、三尊重戴仰、四師教誨敬順無違、五從師聞法善持不忘（隨文略解）、凡そ弟子の師に事ふること、人々なれば彌陀如來を師とし、釋迦如來を師とし、善導大師を師とし、元祖大師を師とする等、所に依りて左右あれども、今は小經講説なれば、釋尊を師とするの義を示さん、彌陀を師とする義を云へば、釋尊兩祖を師とするの義を含み、兩祖大師を師とするの義を云へば、彌陀釋迦兩尊を師とする

の義を含む云々、兩尊兩祖一轍一義なればなり云々、先づ釋迦五事を以て我々を教授哀愍し玉ふ事を云へば、娑婆は無常穢惡の境なれば此を厭へ、極樂は無爲常住微妙の御國なれば彼を欣へ云々、と教へ玉ふ、是れ第一の順法調御の義なり、娑婆を厭ひ極樂を欣ふ、欣ふに付ては稱名すべし、稱名するに付ては三心を具せよ云々、是れ第二の未聞を誨るの義なり、是の如くの御示を聞て成程厭ふべき娑婆、欣ふべき極樂ぢや、教に従ひ念佛申せば、未來惡趣の苦報を免れ、地上無垢の大菩薩となり、永劫無爲の快樂を受くる事なれば、御誨に背くまじと思ふ意が起る、是れ第三の隨其所聞令善義解の義なり、水は方圓の器に隨ひ、人は善惡の友に依ると云ふ如く、凡夫の心は移り易きものなれば、惡友に馴れるな云々、邪人の説をば聞く耳つぶし百由旬去て、善友念佛の同行に睦じく助け合ふて相續せよ、一生不退に相續すれば極樂に往生し、同行舊往の菩薩を初め、觀音勢至爲其勝友、諸上善人俱會一處、尊き身の上となるぞこの御教、

(123)

是れ則ち第四に其善友を示すの義なり、上來の通りに心得て相續すれば、往生一まきに殘る所はない、決して疑ふ心を起すな、我見是利故説此言と懇叮嚀に示し玉ふ、是れ第五の盡已所知誨授不慳と云ふ義なり、世尊は我等を一子の如く憐みて出現し、惡い濁世に出で、五事も十事も具足して、懇に教授し玉ふ大恩、なんと有難こと、は思はれずや、既に難有と思はるゝならば、此方よりも五事を以て敬事し奉らねばならぬ、給仕所須、禮敬供養、尊重戴仰の三つを縮めて云へば、尊み敬ひ掃除供養し奉る事になるなり、娑婆を厭ひ極樂を欣へ邪見に住せず念佛唱へよと有るを、眞受けに信じて其御教に背かぬが、第四の教誨は敬順にして違ふ事無しと云義なり、其御教の通りを一生守り果せて忘れぬが、第五の從師聞法善持不慳と云ふ義なり、師の弟子を視る五義は圓滿して缺ける事なれども、弟子の師に事ふる五事が仲々調ひかぬるもので、一向念佛申さぬは論にならねども、少々は念佛申ながら、厭へとある娑婆

に執着し、欣へとある極樂往生をば思ひも出さず、息災延命の子孫繁昌の、又しても現世祈禱の二世安樂のと、横筋違ひの迷信に流れて、眞實佛の御教に順はぬが、世間に甚だ多い様である、既に佛教に順はねば佛弟子にあらず、佛弟子で無ければ往生しやう道理はないのみならず、永く生死の苦海に漂はねばならぬ、實に淺間しき極みなり、我人は決して夫いふ流轉仲間へ落ち入らぬ様、佛祖の教示を守り安心起行誤らず眞の佛弟子となり、順次往生ゆるぎなき身の上とならねばならぬ云々、偕て此尊者は、御弟子の中にて天眼第一の名を得玉へり、其天眼を得玉ふ種因は、過去毘婆尸佛入涅槃の後に、一人の盜賊あり、或る精舎に入て莊嚴の具を盗まんと欲し、堂の内に入るに佛前の燈明消ぬかゝりてある故、此賊手に持ちたる箭を以て之を挑ぐ、其光に依て佛の相好莊嚴巍然たるを見、忽ち身の毛いよ豎て心に思ふ様には、人は能く財寶を捨て、福を求め、奇麗莊嚴の佛塔を建立さへするに、我はいかに建立供養の志もなく、刹

へ之を盗んで身命を資んとするは、全く多生に功德を積まざる悪業の報ゆへ、今此の貧賤となりしか、今若し他の信施を破り佛物を盗まば、死して必ず地獄に落ち苦を受くる事決定なるべし、いざ去らば是より、永く盜賊を止めて餘の生業を爲さんと、慚愧して出で去れり、此燈明を挑げたる因縁に依て、大衆の中にて天眼第一の報を得玉へりと、(譬喩經の取意) 正しく天眼を得玉へる事は、増一阿含經に出づ、世尊給孤獨園にて衆の爲めに説法し玉ふに、阿那律座に在りて睡り玉へり、佛偈を説きて呵責し玉ふ、偈に云、咄々何爲睡、螺螄蚌蛤類、云々夫より佛阿那律に問ひ玉ふに、汝は王法を畏る、故に出家せしやと宣へば、尊者の答に、生老病死を厭ふ故、出離解脱の道を求めて出家せりと、佛重て言く、然らば何ぞ説法の所にて眠るや、是れ放逸懈怠の所爲ではないかと責め玉へば、尊者大に慚愧して座より起て佛に向ひ奉り、今より後は假令此の躰は融爛と、とろけたれやうとも再び佛前にて眠るまいと誓て、夫れより七日の間晝夜眠り玉はざりしかば盲目となり玉へり、然るに佛弟子の習ひにて、自身に袈裟を縫はねばならぬこと故、さぐり乍ら袈裟を縫ひ玉ふ、折しもふと針を取り落し尋ね玉へども知れず、眼あきでさへ見ぬ兼るのに、盲人なれば一向に知れかぬる故、誰れぞ功德を好む者あらば、我に針を取て與へよと呼び玉ひければ、いづこともなく聲ありて、爰に功德を好むものあり、針を取て得させんと玉ふは、正しく世尊の御聲なれば、阿那律三拜合掌して佛へ申上げらるゝには、如來は三覺圓滿にして功德に不足なき事にて在すに、猶功德を好み積み玉ふは如何なる故にて候ぞと、尋ねらるれば、我れ斯く正覺を成せしは、功德を好み積みし故なれば、功德を積むに飽く事なしと、仰せらるゝを聞き、阿那律歡喜せらるゝ一念に、盲いて久しき眼が開いた、所が是れ迄の目とは違ひ、則ち大千世界を明了に見る天眼を得玉ひたり、是れ則ち尊者が天眼第一の佳名を得玉へる因縁なり、先づ是で聲聞衆の下は畢る、今此事を以て勸

進せば、總じて物は窮れば則ち變ずるといふのが、天地自然の道理なり、陽極りて陰を生じ、陰極つて陽を生ずる也、冬の寒の陰氣が募り極まると、春になり段々陽を生じ、夏の暑の陽が段々増上し窮ると秋となり、冷氣の陰に移るなり、窮風還て猫を噛み、百姓地頭の手に合はずと云ふ様になる、此尊者も、過去に天眼を得玉ふ因はありながら、一度盲て後に天眼を得玉へり、是れ勝れたる天眼を得玉ふ事ゆへ、一旦つぶれ切ての後に開發し玉ひたるなり、則ち陰窮りて陽を生ずる義なり、今我等が信相も亦如是、所謂導師の釋に機法二種の御説あり、初は我身の上を出離無縁の大罪人と見限り果てるより外に仕方のない所へ、阿彌陀如來の本願は如何なる罪業深き人も申せば必ず往生と聞くより、無疑無慮乘彼願力定得往生と、必至と信じて脇ひら見ず、順次決定往生の大果報を得る人となるなり、若し我身を惡人と見限りはてぬと、本願と聞ても頼もしく難有思ふ心も發らず、此心發らずばいかで順次に往生するを得んや、

陰窮つて陽を生ずる如くに、見限りはてた所で本願も難有稱名も進む善なり、既に本願に縋り念佛する程のものなれば、往生せぬ道理はなきなり、爾れば此尊者の一度眼がつぶれ切て、後に天眼を得玉ひしと云ふ縁に準へて、機法二種の御釋を信じ、順次決定の行者とならるゝが肝要。

第十七席

小經列衆の下、前席迄に聲聞衆の下を畢り、今席は夫に相次で菩薩衆の下なり。
 並諸菩薩摩訶薩、並とは唯だ聲聞衆のみに非ず、菩薩衆も席に列り玉ひしと云ふ心で、并にと云ふ、菩薩とは梵語具には菩提薩埵と云ふ、此に道衆生と翻す、摩訶も梵語此に大と翻すれば、摩訶薩とは大菩薩と云ふことなり、此の會に集まり玉ふは小菩薩ではない、名十方に振ひ、位上位に居する菩薩ちやと云ふ事なり、偕て今經の列衆の次第、聲聞菩薩雜と次第するは恐らくは不次第ならん、故は聲聞は菩薩より劣るなれば、先へは上げられ

そもないものと云ふに、此の次第が淨土宗の心に
して、佛の本懷を顯はすに便りなる義あり、故は
宗の故實は本爲凡夫兼爲上人なり、今も此の意で
劣れる聲聞を先きに擧げて、勝れる菩薩は兼ねて
顯はして、大悲の目をかけ玉ふ劣機の聲聞を先き
へ擧げ玉へり、是れを以つて知るべし、善人は助
け惡人は捨て玉ふと云ふが諸佛なみくの事な
り、然るに阿彌陀如來は其善人を傍にして、三世
諸佛の持あぐみ玉ふ惡人、男よりは女と云ふ様に、
劣るもの程を目かけて立て玉ふたが、南無阿彌陀
佛の超世本願なり、其念佛の行を、上來の如き大
衆の列の上で説き玉ふなり、世間の事でも御老中
一人の仰よりは、御列席にて仰出されたと云は、
重く思ふべきなり、夫を思へば、如し是歷々諸大聲
聞、諸大菩薩御列席の上で、佛の仰せ出されし念
佛往生の法門なれば、此教法を聞く程重き事はな
い程に、謹で聽受し、順次往生の一大事を思ひ堅
むべし、偕て菩薩衆無量なれども、今は其中より
四菩薩の名を擧げ玉ひたれば、之を談すべし。

文殊師利法王子(曼殊と文殊とは、梵本楚夏)爰に
翻じて妙徳と云ふ、又妙吉祥と云ふ、妙徳とは淨
名疏に云、若見佛性即具三徳不縱不横也、故
名妙徳焉、妙吉祥とは靈芝疏云、妙即彰其
證、吉祥即美其利物(妙徳と云ふに義異なる事な
し)又此菩薩御誕生の時も、十種の吉祥とて目出
度瑞相あり、其誕生の十種吉祥とは、一には光明
其の臺に躍き、二には甘露降りて庭に盈ち、三に
は地より七珍の財寶湧出し、四には神あり形を現
じて地中の伏藏を開き、五には鴻鷄鳳凰の雛を生
ず、六には猪龍馬を生み、七には馬は麒麟を産み
八には牛忽ちに白澤を生じ、九には倉中の米穀變
じて金粟となり、十には畜所の白象既に六牙を生
ず、此十種の吉祥ある故に、翻じて妙吉祥と云ふ、
(通贊の文意)「妙と云ふ字は若き女のみだれ髪、
ゆふにいはいれずとくにとかれず」、又此菩薩に無
類の徳あり、心地觀經に曰、文殊師利大聖尊、三
世諸佛以爲母、十方如來初發心、皆是文殊教化力
云々、この菩薩を三世諸佛の母と定むるなり、十方

の諸佛は文殊菩薩の教化に逢ふて修行し玉へばな
り、是れ超世の徳なり、茲に一つの不審あり、三
世の諸佛の母ならば、教化を受け玉ひし御方々は、
願に成佛し玉ふに、なせ又教化する程の文殊は、
今に菩薩でござるかと云ふに、其譯は普超三昧經
に詳しく説けてある、今その經に曰く、佛の言く、
我今佛を得る事は、皆文殊の恩なり、本是れ我師
なり過去の無央數劫の佛は、皆其弟子なり、當來
の者も亦是れ恩力の致す所也、文殊は乃ち佛道中
の父母なりと、爾の時衆念すらく、文殊既に佛前
に在りて何ぞ成佛せざるや、佛の言く、文殊深く
善權に入り廣く衆生を化す、故に未だ道を取ら
ず、成佛し玉はぬは衆生濟度の爲めなり云々、未取
道とは仰せらるれども、一向成佛せぬと云ふ事
は無し、是は應化の菩薩とて實は佛なれども、假
りに菩薩の形を現して利益を施し玉ふなり、故に
楞嚴經には、龍種上尊如來と云ひ、央掘魔經には
歡喜藏摩尼寶積如來と云ひ、悲華經には寶藏如來
と云ふ、皆此の菩薩の本地の佛名なり、佛となり

て利益弘ければ佛身を現じ、菩薩で利益多ければ
菩薩の身を現じて、衆生を濟度し玉ふので、今こ
の文殊は菩薩にて化益弘き故、態と本地を現はさ
ず、下位に居して化益し玉へり、されば三世諸佛
の母と云ふ善なり、總じて往生したい佛に成りた
いと云ふ心の發るは、最上智の發つたと云ふもの
なり、其智はどこから起る、文殊菩薩の智恵から
起るなり、我人の常に智恵ちやと云ふのは、眞の
智恵ではなくて迷の邪智と云ふものなり、今極樂
往生せばやと云ふ心の發つたのが眞の智恵で、即
ち文殊の教化力と云ふものなり、故に上にて談せ
し如く普超三昧經の當來の者も、亦是れ恩力の所
致なりとあるは此義なり、然れば皆は此恩力を蒙
つて、極樂を欣ひ念佛唱ふる身となられたれば、
順次往生掌を指す如く明かなれば、必ずく懈怠
すべからず云々、次に法王子とは、世間でも大王の
子を王子と云ふ、故は王の後を繼ぐべき人なれば
なり、今も其の如く佛は法王なり、菩薩は法の王
位に入り、佛位を補繼する器なれば、法王子と云

(128)

ふ、佛の跡繼ぎと云ふ義なり、偕又此處に不審あり、夫れは十地究竟の菩薩は渾て法王子と云ふべきに、何ぞ此菩薩のみを法王子と名づくるぞと云ふに、是れに就て天臺の荆溪大師の御釋あり云、稱文殊爲法王子、其諸菩薩何人不法王子耶答有二義、一於王子中德推文殊、二諸經中文殊爲菩薩衆首云々、初の德を文殊に推るとは、文殊一菩薩に法王子の德を蒙らせてある、例せば聲聞列衆の初めに長老舍利弗とありて、余は長老となきが如し、此事を譬へば、村中の總代町内の總代と云ふには、智惠のあるものを選びて公議へ出すなり、一村一町内の事を其人一人に任せるが、今も又其の如く菩薩の御中間の中で、文殊菩薩に佳名を蒙らせて法王子と云ふと、是が一義也、又の一義は、諸經の中に文殊を常に爲菩薩首とは、諸の法王子の中でも、三世諸佛の母と云はれて、最上なる菩薩、故に常に諸經の首にたくと云なり偕て又今經菩薩衆の首に、文殊菩薩を列ぬるにつき、雲棲の疏に又首に擧文殊者、例せば前の舍利

弗の義と同じき也、此釋の意は此經の列衆の次第は、聲聞衆の初めには舍利弗を擧げ玉ひ、菩薩衆の初めには文殊を擧げ玉へり、皆是れ智惠の勝れたるを選んで初に擧げ玉へり、舍利弗も實は菩薩にして内證は計り難き也、(此事舍利弗の下、見合すべし)文殊は古佛三世諸佛の母と云はる、智惠の元じめ、如是智惠超勝なるを選んで擧げ玉ひたる故はと云ふに、今經は難信の法なる故なり、一毫未斷のあら凡夫が、南無阿彌陀佛と唱へだにすれば、報身報土へ往生すると云ふ、頓中頓の妙法ゆへ、小智の者は信する事は置て、却て疑を生ずるなり、是れ小因大果の不思議乘、淺智で信が立ちにくい故、舍利弗文殊の智惠の勝れたるを選び出して、上首となされたものなり、外の者が合點行かすとも、舍利弗文殊が信すれば、夫れに任せて信する様と思召されての事なり、奉行所で入組んだ云ひ渡し、皆は合點ゆかねども、町の總代智惠のある者が、難有仰付と御受け申せば合點はゆかねども、あの人難有と受けらるゝからは氣遣

(129)

ないと任せて、信すると同じ事なり、斯う聞くと濟む様なれども、茲に一つの不審が立つ、之を立て論ずると正意があらはるゝなり、其不審と云は先に談せし如く、善導大師教起所因の釋、(般若讚釋迦來眞報土の文)畢竟して謂は釋尊八相を示現し玉ひてより、二乗の法を説き涅槃の因を説き、或は漸と説き或は頓と説き、或は空或は有と説き玉ふを聞て、利根上智の機は悟りて生死を離るれども、鈍根無智は開悟し難し、萬劫を経ても生死を離るゝ事はならぬ故、不如走入彌陀界、外に助かり様の無いのが鈍根無智の一類なり、(其助り様の無い鈍根無智とは誰なるぞ、皆や此方の事なり)故に釋尊悲憐して此經を説き玉ひしなり、茲を以て遙かに遐代を潤すと導師は釋し玉へり、然れば今でも此經の本意に任せて、一向專修に唱へてさへ居れば往生に疑ひはない、すれば此經は鈍根無智の爲の經なり、然るに智惠の勝れたる舍利弗と文殊とを上首としての御演説は、函蓋不相應ではないかと云ふに、之が即ち善巧濟凡、

其鈍根に被る經を最上の智惠の舍利弗文殊を上首として説かせ玉ふに、深意のあることなり、其譯に二義あり、一には小智を拂却し、二には信する荷擔人となされたるなり、是れ皆難信の法なる故の御手當なり、初に小智を拂却するとは、如是の極智者を選んで擧げ玉ふに因て、此法は小智を働かせては、邪魔になると云ふ事が顯はるゝなり、此法は小智を働かせては信じられぬ程に、愚痴に還り小兒の様になつて信せよと、の玉ふ道理が含んである、(小智の障となること、廣略宜しきに隨て辨すべし)さればこそ勢至の化身智惠深遠の元祖大師、此事を窺ひ得玉ひて、たとひ一代の法をよく學すとも云々、烏帽子も着ざる法然房愚痴の法然房が念佛して往生せんとする、等と仰せられ、小智で往けぬ大法なれば、愚痴に還りて念佛し往生せよと勧め玉へり、(還愚痴仰信の辨、廣略可隨宜云々)此愚痴に還ると云ふが一大事の故實、淺いと見えて甚深の法門、大愚還て大智と同するなれば、實は舍利弗文殊の上智が、我々の身に乗り移

(130)

つたと云ふもの也、二に舍利弗文殊を上首とし玉
 すが、信する荷擔人になると云ふは、假令吞み込み
 悪い事でも、智恵のある人が吞み込み事になれば、
 人皆其人にもたれて合點し易き也、今舍利弗文殊
 の二人上智なれども、今經所説の會上では、一言
 のいらへもなく、小兒の様になつて、最初依正の
 莊嚴から小善根では往生し難い、大善根の南無阿
 彌陀佛を一日七日唱ふれば往生遂ぐるぞと仰せら
 れ、猶夫れを疑ふな、我見是利と佛の知見を述べ、
 夫れより六方諸佛の證誠を説き玉ひたれば、終り
 には歡喜信受して禮を作して去り玉へり、餘經御
 演説の會上では、審問討議し玉ふた舍利弗文殊な
 れども、此經一會の内には小兒の様になつて聞き
 玉ひしなり、此趣を聞ては小智ある人も愚痴に還
 りて、素より愚かなる人にも信じ易からしめん爲
 に、聲聞の中では舍利弗、菩薩の中では文殊を擧
 げ玉ひしなり、如是我々が信じ易い様の御手當あ
 る事なれば、小ざかしき人は小智を拂て信じ、本
 より愚かなる人は猶幸ひと打喜びて唱ふべし云々、

今一つの心得あり、今經の目的は鈍根無智に蒙る
 大悲なれば、是を僻さまに心得て、動もすれば餘
 の法より劣る様に思ふなれば、其大罪を防がん爲
 に、一つの事實を示さん。
 文殊善財童子を、功德雲比丘の所へ遣はし玉ふ事
 あり、華嚴入法界品、近くは説法因緣集に出。

第十八席

大意斷辨如例、前席より菩薩衆の下で文殊菩薩迄
 を辨じ、今席は彌勒菩薩より講ずらなり、阿逸多
 菩薩とは梵語、又彌勒菩薩とも云ふ、爰に翻じて
 慈氏菩薩と云ひ、又無能勝とも云ふ、此菩薩は至
 極慈悲心深くして生れ玉はぬ前、母の胎内に居玉
 ふ時から慈悲心の深い事が顯はれたる也、是れ何
 故なれば、過去世時、遇大慈如來、發菩提心、我
 當來の世には我師の如く慈悲の勝れたる尊號の佛
 に成らんと云ふ、願を立て玉へり、依て御名を慈
 氏と申奉るなり、今は兜率の内院に在り則ち釋尊
 の補處の菩薩にして、是れより五十六億七千萬歳

(131)

過ぎて龍華樹の下にて正覺を取り玉ふなり、され
 ば雲棲大師の釋に云、彌勒既に此經を聞き龍華に
 必ず此經を説く、當知此經の流通盡きる事なし
 と、此菩薩は此次に娑婆へ出玉ふ如來なるが故、
 既に此經を聞き玉ひたれば、出現の時此經を説き
 玉ふ事明かなり、然れば此經の弘通すること盡き
 ると云ふはなき事なりと云々、況や大經に於ては、
 此菩薩を呼び出して念佛を附屬し玉ひしなり、然
 れば此經は念佛の一行を説き玉へば、此を説き玉
 ふ事分明なり、然れば念佛者には別して因縁深き
 菩薩なり、此菩薩御出世の時は、早や人々も淨土
 の聖衆となれば、菩薩の影向衆となつて御化益を
 助けるか、又は佛となつて居るなれば、釋尊の此
 經を説き玉ふ時、六方の諸佛が證誠なされし如く
 に、廣長の舌相を三千界に覆ひ證誠して、汝等衆
 生當信是稱讚不可思議功德と讚する身の上と
 なるは、遠からの事ぢや、今の我等が有様が夫う
 云ふ果報の身の上と成るとは、實に難し有事にあら
 ずや、僅かの浮世の事でさへ、天子になるの將軍

になるのと云は、如何ばかりか喜ぶであらうが、
 夫れとは比べものにならぬ、我々が來世の果報實
 に言語の及ばぬ事なり、夫ういふ果報をかへて
 居る身の上なれば、假令この世で心に叶はぬ事の
 み有ればとて、夫に目をふり懈怠しやう道理は無
 い事なれば、忍び耐へて此一生を恙なく稱名相續
 せらるべし。
 乾陀訶提菩薩とは、此に香象と云ひ又不休息とも
 云ふ、香象とは註維摩經一曰、香象者謂青香象也、
 身出香風、菩薩香風亦如是、(文意可解)偕て又
 不休息とは休まず佛道修行し玉ふと云ふ事なり、
 其の事は思益經に曰く、恒河沙劫を一日一夜とし
 て、是れを三十日を一月とし、十二月を一歳とし
 て、百千萬劫を過ぎて一佛に遇ふ事を得る、如是
 して恒河沙の佛に値ふて、諸の梵行を修し功德を
 修習して、然して後に受記する心休息せざるが故
 に、不休息と名くと云々、斯様な長き劫數の内に休
 息せず勤め玉ひたる菩薩を、列ね玉ひたは深意
 あることならん、斯く勤め玉へる菩薩の名を聞け

ば、懈怠の衆生も心を勵まし、生死出離の爲には夫う迄勤め玉ふ菩薩もあるに、餘の事せよとでもあるか、唱へ易く勤め易き南無阿彌陀佛の一行をば怠るべき筈はないと、心を勵まし勤める様にと云ふ事で列ね玉ひたる也、されば人々此得名を聞くにつけても、分々に進んで勉めらるべし、夫れが法を聞き捨てにせず、専修の道を守り佛教隨順の人と云ふものなり云々。

常精進菩薩、弘決云、無雜故精也、無間故進也、凡所修立一切諸法、若無精進事必不成矣、この意は精とは雜へ事なく精出して、其事にはまつて勤めるを云ふ、進とは退かずして進み勤め懈怠せぬ事なり、若し如是ならざれば一切法成就はせぬとなり、實に爾り六波羅密の中にも別して之を勸め玉へり、今此菩薩の勇猛精進なる趣は、寶積經曰、此菩薩爲一衆生、經無量劫隨逐不捨、猶不受化而無一念棄捨、以身心俱進、名常精進菩薩、(文意略解)如斯菩薩と我々同行が、一往きくと不相應な同行と思はるゝが、有難い事には除

かれた中ではない、なせならば餘行の精進こそできまいけれ、心に往生したいと思ふて、南無阿彌陀佛と口に稱ふる稱名を、怠らず勤めさへすれば、是を精進の行者と云ふなれば、成るだけは進み唱へ、上位の菩薩と同行となるべし、實に我等が如き惡人が、此本願の法門に逢ひ念佛唱ふる身の上となりしも、此常精進菩薩の無量劫を経て一念も棄捨せず、隨逐影護して催し立ち玉ふ御力にこそあるべければ、其御慈悲を無にせぬ様に進で相續せらるべきなり、與如是等諸大菩薩とは是れ總結の文なり、如是等とある等の字の中に、別名を擧げ玉ふた文殊等の四菩薩の外、此會の諸菩薩を納め擧げ玉ふ、此經を説き玉ふ時集り玉へる菩薩は、四菩薩計りではない、何十何萬あるとも難計で、普賢、觀音、藥王、藥上、等の無量の菩薩あるべし、然るを別名をば唯四菩薩のみ擧げ玉ひたる故に、等の字を置て諸餘の多くの菩薩の有る事を知らせ玉ひたるものなり、先づ是で菩薩列衆の段を畢る故、是等と結び玉ひたるものなり。

偕て爰に一つの不審がある、夫れは其數多くの中で纔に此四菩薩のみ擧げ玉ひしは、如何にと云ふに二義あり、先づ一往云へば、其數多の菩薩悉くは擧げ盡されぬ故、唯四菩薩のみ擧げ玉ひしなり然れども再往の義は、此四菩薩に限り別名を擧げ玉ひしには、正宗の大意を顯はすに便り宜しき故なり、其事は雲棲大師の釋に云、就當經則表信願三、成淨土因故云々、此經正宗の所詮はと云ふに、信願の三なり、釋尊愍愍に依正の莊嚴を説き畢て、舍利弗衆生聞者應當發願生彼國土等と繰り返して願生の心を勸め玉へり、是れ往生したいと願ふ心を要とする義なり、爾れば其説き玉ひたる快樂莊嚴、尙その極樂へは念佛で往けると云ふ事を信せいで願生せぬ故、疑はぬ様にと、我見是利の自證、諸佛の證誠を説き信じ易き様にし玉ふ、信ずといへども行がなくては往生ならぬに依て、一心不亂執持名號の行相を示し玉ひしなり、此れが一經の大意、信願の三を具足するが此經の所詮なり、序は正宗の弄引なる故に、此四菩薩

を擧げ玉ふ事なり、所以は文殊の智は信なり、物を信するは正智、物を疑ふは邪智なり、故に人々も子供の如く有りの儘に此教を信する、其れが則ち至極の上智故に、難信の法が信せらるゝなり、然れば文殊の上智は則信なり、依て文殊を擧げて信を顯はし玉ふ、彌勒は慈悲深き菩薩なり慈悲は願なり、されば極樂を願ふは自ら慈悲にあたるなり、法藏の因位法性平等の悟を開き、十方受苦の衆生をみそなはし不便な事ぢや、何卒助けたいと云ふ慈悲から發つので四十八願なり、其四十八願を頼み往生を願へば、直ちに夫れが慈悲に當る、我身計りの往生を願ふてすら、未來で受くる苦報を免がれ、快樂自在の身の上となるなれば、是れ即慈悲なり、願はねば我身を苦毒の中に墮す、是無慈悲なり、還相の心のあるは固よりの事、唯我が爲め計とせまく願ふても往生さへすれば、土徳として廣大慈悲の心は起るもの也、其故は極樂淨土と云ふは、元來阿彌陀如來の大慈大悲より出來たる淨土なれば、往生遂ぐると直に慈悲心が發つ

て、我に縁ある者から段々助けたいと云ふ願が起るなり、依て正宗で應當發願とて願生の心を發せと勧め玉ひたるを、序分で慈悲の深い彌勒菩薩を擧げて顯はし玉ひたるなり、不休息常精進の二菩薩を擧げ玉ふたは行なり、行は懈怠せぬを要とするなり、不休息常精進は懈怠なく、次第に修行を進むといふの御名なり、是れ正宗で勧め玉ひたる一心不亂の一向專修を、此二菩薩を擧げて顯はし玉ひたる也、然れば一々念佛を怠らす分々に進で相續せらるべし、上來の譯ある故、無量の菩薩の有る中で此四菩薩を擧げ、信願行の三法門を表示し玉ひたるなり、細かに氣を付けて見れば、見る程甚深なる事の顯はれ、實に難し有譯なれば能々聽受すべし、されば人々唱ふれば決定と信じ、往生せばやと願ひ、退轉なく勸むる心になれば、即座に文殊の智慧も、彌勒の慈悲も、不休息常精進の行徳も具足すると云ふものなり、斯る發し易き心、唱へ易き念佛にて、各々が直に四菩薩の徳をも一緒に具足するとは、實に難有局に非ずや云、一向願

生の心の無い人は是非なければ、僅かにも其志のあるは不思議の因縁と喜び、分相應に念佛の修行を精進に勤むべきなり。
上來云ふた通り、凡て一切の法に若し精進無ければ、事必ず成せずとある如く、何事でも續いて爲る事はいやになるものなれども、其いやになる所を一つ強て勉むるが、精進に務むると云ふもの也、精進とは物にはまつて勤むる事なり、物にはまつて勤むるとは、此念佛は往生極樂の爲に、是非はまりこんで勤めねばならぬと心得て勉むべきなり、今日限りで濟す人は格別、後生地獄はいやと云ふ人なれば、何は捨て、置ても、念佛は申さねばならぬ事なり、既に念佛より外の修行は出來ぬ我々なり、三學無分は争へぬにあらすや、然ればはまつて唱へねばならぬ事と踏み込むべし、此の心さへあれば此世の仕事は、忙がしき中からも随分つとまるものなり、世間の身すぎ世すぎの事でも我家業大切とはまつてすれば、夫れだけの利益を得て安穩に暮す事が出來よう、家業を大事とは

まつて働くは娑婆に居る内の命を養はん爲なり、今も又其の如く、身すぎ世すぎの中から極樂へ往生したいと思ひ念佛を唱ふるは、後生の家業を勤むると云ふものにして、未來永劫の法身の惠命を養ひ助けると云ふものなり、此世の家業を嫌ひのらくらやると、終には宿無し乞食とならねばならぬ、後世の家業の念佛を嫌ひ五欲にのみ耽り居れば、來世は極樂の宿無し地獄や餓鬼道の乞食同然、されば此世の家業の如くに、一つはまつて勤むるが精進に勤めると云ふものなり、物にはまつて爲るが宜いと云ふに就て、一つのね話がある。
往年京師の所司代に、板倉周防守殿と云ふは、甚だ發明廉直にて、公事捌きなどは負けた人も感心する程の事で、誠に古今稀なる御役人であつたと、今時に至るまで人の語る事なり、其周防守殿御役を蒙り上京し、其翌年御機嫌伺ひに江戸へ下られし時、御老中松本伊豆守殿の云はるゝには、周防守殿歸京の上は京師の様子、別して堂上方の事を委しく謂ふて越されよ、御上にも堂上方の事は御

聽き遊ばされたき思召なれば、叮嚀に申こされよと云はれたれば、周防殿の返辭に成程承知仕りました、併し遠方の事故申上げる内に事の變ずる事もまゝあり、又遠方の事故御上より周防守を差し置かれますからは、恐れ乍ら私、精一つばいに勤めます程に、最早此後は京都の様子委くは申上ませぬと返答し、歸京後暑寒斗りに書狀を差出し、其餘は何も申しては遣はされなだとなり、是れ役義にはまつて勤められし故の事なり、通途の人は如し是はまりが無い、はまりがなき故其事に臨んで才も働かず、途中にていや氣がさしてつまらぬ事にもなるなり、總じて物にはまつて爲ると妙を得るものなり、手を使へば手が強くなる、(桶屋、石屋、鍛冶屋の類を見るべし) 足を使へば足が強くなる、(米ふみ、飛脚の類を見よ) 眼を使へば遠目が利く、(火の見番、魚見の類ひ等) 心も又其通り使ひつけければ才智が生ずるなり云々、我等は後世助かる爲に唱へにやならねとはまつて勤むれば、務むるにつけて念佛の功積りて、如何なる閑しき

(139)

中でも勤まる才智が出来るなり、(阿波介が二連珠
 數の事、隨宜辨すべし)
 評云、板倉は能役義にはまつて務めし人なり、其
 眼の付け所が能く當つて居る、平素唯だうろく
 として居る者が惡事を爲るので、家業さへ能く勤
 むれば亂に及ばぬと云ふが、周防守の見込なり、
 至極尤なる事なり、依之自身は自身の職にはまつ
 て、他の顔色を見ずとめられし故、自ら才も顯は
 れ、公事捌にも奇妙なる取計ひありしなり、或時周
 防守殿下立賣通りを通行せられしに、或宮の神主
 書物を見て居るを見られ、何の本ぞ聞けとある故、
 之を聞けば神書なりと答ふ、其後に通られし時に
 も、前の如く神書を讀でありし故、扱でも能く我
 道にはまつて精を出すものかなと、大は賞美し、
 破壊に及びありし宮殿を修覆してつかはされしと
 なり、自身が職分にはまつて役義を勤められし故、
 人の家業にはまつて務めるをば甚だ喜ばるゝな
 り、今も又其の如く、世事の鬧しい中からも、後
 世往生の爲めの念佛の家業を勤むれば、阿彌陀如

來釋迦如來は固より、六方恒沙の諸佛の御賞言に
 預り得るなり、既に板倉周防守は其職を大切にせ
 らるゝ故、我職を大切にす神主を賞して、宮殿
 の修覆をせられたり、是で能く合點するがよい、
 一切の諸佛菩薩は皆精進に佛道を行じ玉ひし故、
 佛菩薩となり玉へば、後世の家業は念佛と定めて、
 此世の身すぎの中からも懈怠なく勤むる人なれ
 ば、自ら諸佛菩薩の御目に止まり、娑婆に在る内
 は心光攝取護念に預り、臨終の夕には阿彌陀如來
 五々の聖衆を拜み奉り、須臾に極樂に往生し、十
 地究竟の大菩薩となる事は、此本願念佛を懈怠せ
 ず勤めた故の事なれば、分に進んで稱名を相續せ
 らるゝが肝要。

第十九席

大意斷辨如例、前席迄に聲聞菩薩列衆の下畢る、
 今席は雜類衆とて、欲界色界無色界の三界より衆
 會したる、總じての衆を擧げ玉ひたるなり。
 及釋提桓因等、釋提とは帝釋天の事なり、能天帝

(137)

と云ふて則ち忉利天の主なり、等とは等取の等に
 て、上にも下にもある諸天を等取する義なり、無
 量諸天大衆俱、欲色無色の三界より佛道に緣ある
 分は、無量の諸天が一時に此會座に列り玉へり、
 天人は果報勝れて身に光明もあり壽命も長けれど
 も、意には無常は遁れられずして而も五衰の憂あ
 りと云ふ、此れに氣のついた方が皆集會せり、此
 中にも無色界の天人は、小乘には身根なしと立て、
 大乘には無色にも色相ありと立つ云々、それはとも
 あれ、詮は今經を説き玉ふ時は、無色界の中より
 も來りて法を聞く天衆ありしとなり、然るに人間
 の穢はしき身を以て短き壽命でありながら、後世
 に氣の就かざるは淺間しき事なり、無量諸天と云
 ふ中には、何れの天より來下するも皆此中に納る、
 大衆とは天のみに非ず、人間は云ふに及ばず、龍
 神八部修羅界迄も納まるなり、大衆と云ふ二字に
 夫う云ふ類の納まると云ふは、見所あるかと云ふ
 に、同本異譯の稱讚淨土經には、此所を具に譯し
 て、復有二帝釋、大梵天王、堪忍界主、護世四王、

如是上首百千俱胝那由他數也、諸天子衆及餘世間
 無量天人阿素洛等、爲聞法一故俱來會座云々、此大
 衆成就の義を考へ見るべし、如來御說法は夥しき
 聽衆なり、如是集り玉ひたる方々は、頓に極樂へ
 往生遂げて居玉ふならんに、我々は此集會の席に
 も洩れたればこそ、斯く今に生死流轉の身にてあ
 るなれ、其時には我々は六道の中何れの所にか居
 つらん、三惡道の受苦に暇なくて聞かざりしか、
 又は天上に居て五欲に耽り、餘の天人の出席ある
 を、欺き笑ふて居たりしか、或は人間に在ても業
 障深く邊鄙遠境に居たか、又舍衛三億の内であり
 しか、何にもせよ淺間しき身の上でありしなり、
 然るに今此經の至理を聞く事を得るは、出離の時
 節到來と云ふものなり、宿世の善因漸く熟して、
 此經を聞く身の上となりしものを、徒らに打ち過
 すべき様はなき事なれば、つくぐと胸に手を置
 き、聞かで過ぎにし昔を悲み、今聞き得たる事を
 喜び、是非此度は往生をと心を堅めて、脇ひら見
 ず専修相續せらるべし、先づ是で序正流通の三段

(188)

の大科の内、序分を辨じ畢る、是より正宗分なり。爾時佛告長老舍利弗(文)、是より正宗分御説法の始なり、爾時とは六成就の中時成就で、此經を説き玉ふ時なり、舍利弗は對告衆なり、舍利弗の翻名は前に解したるが如く、或は驚驚とも身子とも云ふなり、此尊者今經の對告衆と云ふて相手の尊者なり、偕て大衆の中に、此尊者を對告衆とし玉ふ事は何故ぞと云ふに、四悉檀とて四の譯のある事なり、其四とは一、世界悉檀二、為人悉檀三、對治悉檀四、第一義悉檀なり、世界悉檀とは、舍利弗は如來の左面の弟子にて、諸經の中に多く首に居す、故に次第を超へず此尊者に告げ玉ふ、世間の法主人より臣下に云ひ渡す事あるにも、上座に居る者を先きにして下に及ぼすが如し、今上首の身子に告げ玉ふも世間の法に順する故、之を世界悉檀とて、舍利弗を對告衆とし玉ふと云義なり二、舍利弗は智惠第一にて衆の爲に崇敬貴仰せらるれば、舍利弗此經を聞て願信せらるゝ時は、大衆も又之を信す、此事諸機に契ひて利益廣き故

爲人悉檀と云ふ、三、淨土を信せざる人ある時、舍利弗に告げ玉ふを聞けば、舍利弗の如き智惠第一の人尙ほ之を信す、爾るを我等は味劣の分齊にて、兎角思ふ事は愚の至りと、邪心を轉じて正法に歸す、之を對治悉檀と云ふ、四、小乘を偏執するものをして轉向大乘せしむるなり、總じて聲聞は界外に淨土あると云ふ事を立てず、然るに舍利弗は大智にして一切衆生の智は、唯除佛世尊、欲比舍利弗之智及多聞、舍利弗の智惠を十六に分けて其一分にも一切衆生を束ねたる智が及ばぬとあるが、大論の説なり、如是大智者を對告衆として説き玉ふ事なれば、外の聲聞も界外に淨土ある事を信じて轉回大乘するなり、此利益ある故舍利弗を相手になされたるなり、之を第一義悉檀と云ふ、如斯四悉檀の譯ある故、大衆の中で舍利弗を對告衆となされたる次第なり、偕て又舍利弗は身子と云ふが、此尊者を對告衆とし玉ふは、即一切衆生へ告げ玉ふと云ふ義なり、然れば舍利弗は我々が名代に對告衆となり玉ひたるものなり、其

(189)

事は雲棲大師の釋に、告身子一人、即是告見前一切聲聞、菩薩人天大衆、未來一切諸衆生也云々、因に記す、身子とは身は色身とてからだの事、子は種子と云ふ事なり、我身に具へた佛性を種子と云ふ、されば色心の二法は本來の妙法、本有の智徳なる所を顯はして身子とつけ玉ひたるなり、妙法とは目にも見へず手にも取られぬ一心なり、智徳とは今出來たものには非ず本來の一心なり、それが種子と云ふものなり、各々此色心の二法は具足して居る、例へば、各々が我家で寺院へ参りた

大師は一告一切告と釋し玉ふた譯である、されば舍利弗は我々の名代と云ふも、上來の譯のある事ゆへ諸の大衆の中より呼び出して、舍利弗を對告衆となされしなり、依て人々も直に如來の御前に出て、聞くのぢやと心得恭敬聽受せらるべし。偕て又此に難有る事あるなり、如來大悲の深き事を信知すべし、總じて何れの經にも發起ありて説き玉ひたるに、今經に限つて無問自説なり、是れ至極の慈悲なり、依て是をも雲棲釋し玉く、佛告等とは經無發起、佛自説故、良由此經救世最急、不俟請故云々、佛の自説とは諸經皆有通別二序、通とは則證信、別とは則發起なり、如法華則白毫放光啓一乘教、維摩則毘那示疾開不二談、圓覺金剛以及諸經、多問因有先、然後佛説法云々、今經不然故無發起、已上、發起なきは甚急なる場なり、依て既に妙にたとへあり、救世最急とは末世衆生、根鈍障重、解脫禪定甚難、可得、佛以大悲出此一門、橫截生死、急救衆生、唯恐くは及ばざらんとを、故に請待たざるなり、譬へば人有て

(140)

卒に惡病を患て命呼吸に在る、頃ほひ良法あり之に依て修製す、日時を延緩して藥未だ成るに及ばずして命既に先づ殞つ、現に成藥あり口に入れば即ち活るが如し、仁心ある者即速かに與ふべし、尙ほ何ぞ其禮聘慇懃を待て然後に劑を投せん、佛救衆生意亦如是、この譬の意は、人有て煩ふ時醫者を頼みに行と、來て病體を窺ひ藥を拵へて與ふるが常なり、時に急病で道にたをれて苦しむを見乍ら呼びに來ぬ故にと、捨て、置けば死んで仕舞ふなり、又此急病人を見て藥を拵へて與へんと思ふても、拵へて居る内に早や死んで仕舞ふもある、其時には常藥の氣付を直に與へるが仁心と云ふものなり、然るを療治して呉れいと頼まねば、藥與へよう筈はない杯と云ふて、時宜を知らぬは無慈悲と云ふものなり、此理を以て今考ふるに、常の病人なれば醫師を迎へて來てから、行て藥を與ふる如く、大衆の方から問はせて、夫れを縁として法を説き玉ふ故、諸經には發起と云ふものがある、此の發起して法を説き下されと願ふも病

人なれども、此は通途の病人にして急病でなく、而も上代上根の少病人なりゆゑに、諸經には發起がある、今經の無問自説なるは、至て急病人を助け玉ふ爲の專持名號の一行を説き玉ふ場なれば、問を待たずして自ら説き玉ひたるなり、其急病人と云ふは則我々が事なり、鈍根重障にして三學無分の大惡人なり、地獄へ行べき種は日々夜々に造れども、善根とては曾無一善なり、然るに死は念々に近づきて今とも知れぬ身の上なるに、唯うつかりとして暮して居るゆゑ、釋尊の大慈大悲之を憐み急に救ひ玉はん爲めに、振りすゝるだる一向專修念佛の一行を以て、十惡の凡夫五障三從の女人を助け玉ふ爲なれば、發起を待たず演説し玉ふ、是則齒をくひしはり斃れ臥して居る者に、常藥氣付を與へると同じ意なり、末代愚惡の急病人なれば何卒助かる法を御説き下されよと、發起の願ひ人もなきに、彌陀の本願なる南無阿彌陀佛の一行を唱へよ助かるぞと、無問自説し玉ふ釋尊の大慈大悲、氣付けを飲て生きかへりし如くに、我々は

(141)

極重惡業の者なれば、すは臨終と云ふになれば生世々の罪業の報ひ、七轉八倒して苦しむ枕元へ、牛頭馬頭阿防羅刹が焰々たる火車を引かくるに相違なき事なれば、甚だ危き急病なるに、豫て服する日課の靈藥にて氣を吹きかへし、極樂へ往生を遂ぐる事なり、如是急病人を助け玉ふ南無阿彌陀佛の一行を説き玉ふ故、發起を待たず説き玉ふなり、尙ほ此上に詮議すべき事あり、其故は雲棲大師の釋に云、問諸經無論、只如三本教二經、又有發起、今經何獨不然耶、答意彌切故、亦是不發起之發起故云々、此意は諸經は論せぬが、三經は一轍なるに、觀經大經には發起あり、(大經は世尊顔色和悅常に異り、依て阿難問て曰く、世尊顔色悅豫未曾有なるは、過去當來現在の諸佛の勝妙の事を念じ玉ふかと、佛此發問を喜び玉ひて、善哉阿難能く聞くべし、汝が問に依て諸天人民乃至輿動の類まで、皆得度を得るなりとて、大經を説き玉へり、是れ如來の現相に依て阿難の發起せるなり、又觀經は韋提希夫人我子の逆惡を傷み惡世を厭ひ淨土を求

めて、我れ清淨の世界に生せん事を願ひ、此閻浮提濁惡の世を欣はずとあるを縁として、觀經を御演説なされた、是は闍王母子を發起とするなり云々、) 兩經共に菩提心の、或は起立塔像飯食沙門の、或は十三の觀法のと云を説き玉ひたれども、是れ廢の爲の諸行なり、本意は南無阿彌陀佛なる故に、附屬に至ては諸行を廢し、念佛は立の爲なれば、南無阿彌陀佛を持せよとの附屬なり、所詮は本願念佛なる事は三經一轍なれども、二經は廢立の爲にもせよまだ諸行を交へ説き玉へば、今經に對すれば急中に緩を含み、今經は諸行の事は一字も交へ説かず、唯念佛の一行のみにて急中の急なれば無問自説なり、發起もなきに自ら進んで説き玉ふ所より見ると、彌々無上の法と云ふが明かなるなり、されども一切の法の發るには、發起の縁が無うては起らぬ筈、あらはに此法をと請問する發起はなくとも、發起の縁由は無うては叶はぬと云ふに、成程それは無うてはならぬ、然らば何がと云に、今經を説き玉ふは佛の大慈が發起ゆへ、雲棲大師

は是を不發起の發起と釋し玉へり、實に佛の御慈悲の深い事は言には述べられぬ、諸佛の出世し玉はざる五濁の惡世に出現し、發起もなきに自ら進で本願念佛一行の此經を説き玉ひ、惡人女人も擇びなく、申せば順次往生すると説き置かせ玉へばこそ、必墮三途の我々が易々往生することなり、釋迦佛の開悟に依らずんば、彌陀の名願何れの時か聞かん、斯く迄深き御慈悲をも知らぬ内こそ是非なけれ、今日斯う云う道理を聞きながら、又徒らに日月を送るべき筈は無い事なれば、未入は日課已入は増進云々。

佛說阿彌陀經講說卷二終

佛說阿彌陀經講說卷三

第二十席

前席より正宗分にかゝり、如來舍利弗に告勅し玉ふ迄を講じたり、其大意は一時祇園精舍へ聲聞菩薩よりして諸天人民集會の時、佛舍利弗尊者を對告衆として此經を説き始め玉ひたるなり、大衆の中に於て舍利弗を呼び出し玉ふには、段々譯のある義をば前席に委しく談じ畢れり、中に於ても舍利弗に告るは即一切衆生に告るなりとあれば、云はゞ身子は我等が名代なり、然れば今經は正しく我等が爲に説き玉ふ事なれば、心を靜めて佛説を聽受し、心願持名増進すべきなり、次で今席は從是西方過十萬億佛土有世界名曰極樂一文中は依報總標の文なり、從是西方とは是れ極樂の方角を擧げ玉へり、極樂は此方に當てあるぞと教へ玉へり、是れ至て大事なり、此方角を教へ下されし故我々が願ふ方が定まるなり、爾れば我等

の願ふ極樂は西方に在るなれば、西をば敬ふべきなり、依て道師釋して、涕唾便利不向西方とて西に向て不淨を爲すな、若し止む事を得ずして爲すならば、轉方轉心とて西でないと思ふて爲よとなり、斯く心得て居ると恭敬修が調ふと云ふものなり、故に熊谷入道は東へ下る時には、馬に逆に乗りにて行き乍ら詠じて云く、「淨土にも剛の者とや沙汰すらん、西に向ひてうしろ見せねば」と、是れ元祖大師の御教を眞平に信じ、順次往生をひしくと思ひ堅められし故、至て西方を大切にし玉へり、是程にこそゆくまいけれ、分には敬ふ心を生ずるがよい、未來永劫の樂を得させ下さるゝ阿彌陀如來のござなさるゝ所なる程に、西に向て不淨などは用捨せいでかはなはぬ云々。過十萬億土とは極樂へ往く行程を擧げ玉ひたるなり、是は後席にゆづり、今日は方角の義を委しく辨せん、今此西と云ふは實に少でも北へも南へもよらぬ正しき西なり、天王寺の西門が正しく極樂の東門に當ると云々、西門の類に、釋迦如來、轉法輪處、極樂國土、

東門中心、とあり、一心寺日觀堂の事、古代行幸の事、公家方參詣、家隆郷の詠歌夕陽庵の事、太子西門にて七日別時を勤め玉ひし事。

偕て此從是西方と云ふに就て不審あり、既に彌陀如來は報身佛にして、盡十方無碍光如來とも申奉る、然れば報土も十方に徧滿すべし、報土十方に徧滿せば十方の内望み次第に來れど、有りて然かあるべきに、限て西方とあるは云何と云ふに、是れには至つて譯のある事也、佛土章に、隨宜而現何得定方、別指一處、欲令衆生起勝欣心と有て、十方の内何れに淨土を構ひ玉ひても宜けれども、衆生の心を專一ならしめん爲に一方を指し玉ふ、(西方と定め玉ふには深き心あり、至下知れ)爾れば心を專一にすると云ふが肝要なり、斯様に一筋にと云ふのはかたくなの様なれども、是が甚だ入用の事なり、後の世の行處は西方の一方と志し、勤むる事の肝要は南無阿彌陀佛の聲ぢやと心得て、一筋に唱へねば往生はならぬ、故に一筋になれと勤め玉ふなり、明遍僧都へ弘法大師が夢定中

に告げ玉ふにも、只心を一筋にして西へ赴け、正行を五種に分つは一行に入らしめん爲なりと告げ玉ひしなり、然れば極樂は西方と一方に構へ玉ひしは、衆生の心を一筋にする爲め、其極樂へ往生する爲の行も、二筋三筋と分かれては往生は出來ぬ故に、身を本願に打任せ專修一行南無阿彌陀佛とのみ唱ふる所で、往生を遂ぐるなり云々、まづ是で餘の九方に構へずして、西方に構へ玉ひたる義は知れ畢れり、されば諸方に構へては專一ならぬ故、西方を限て一方とあるは聞いたれども、十方の内何れの方でも、一方であれば其義は同じ事なるべきに、西方に限り玉ひたるは如何なる故ぞと云ふに、是に又譯のある事なり、餘方に構へず西方に構へたまひたるは、十方衆生を導き玉ふに便りがよき故なり、其便りのよき義は次に辨せん。總じて諸の事に便りの善し惡しは大事なり、例へば世間で店を開き別家をさせる時に、其商賣に人よりのよき所を選ぶ、(米屋、宿屋、船問屋、櫛栳香寺の門前云々)若し其便宜の不相應なる所へ店を



出せば繁昌はせぬ、今も其如く、西方に淨土を構へ玉ひたるは餘方に勝れてたよりよき故なり、先づ一應密教に就て其故を辨せば、五行を四季に配當するに、必ず西でなければならぬ道理がある、其五行とは木(春にして東)、火(夏にして南)、土(中)金(秋にして西)、水(冬にして北)、此の五行を東西南北に配するに西は金に當る、金は不變の徳を具するものなり、故に西方に構へ玉ひたる極樂は、一立古今然とて、いつ迄も古くなるの損するのと云ふ事なく、變らぬが極樂世界の有様なり、淨土計か教主は無量壽如來云々、教主計か往生する者も無量壽にて、いつ迄も變らぬ

計か悉皆金色金剛不壞の身を得る事なり、五行にあてゝみれば西は金に當る、斯うして見れば餘方に構へずして西方に構へ玉ふ道理顯然たり、(淨土も不變、壽命も無量、受くる體は悉皆金色云々、と

唱へぬ者は離れ、唱ふる同行は永劫不離云々)偕て又四季に配當する時は西は秋に當る、字書に秋は收なりとありて、(先づ五穀の收るが第一にて、其餘は準じて知るべし)今阿彌陀如來平等に衆生を憐み玉ひて淨土を構へ玉ふ事故、一切殘らず收め取り玉らんと思召して、秋に當る西の方に淨土を構へ玉ひたるなり、故に大經でも、十四佛國の菩薩が皆極樂へ往詣なさるゝなり、餘土では修行速かに成し難き故、早作佛國の極樂へ往生して速かに成就せんとて、十方の菩薩も果上の仕上げは極樂へ收つて佛となりて出玉ふなり、(三世諸佛依念佛成等正覺の文)然るを人々は凡夫の泥足で直に極樂を願ひにかゝつたは、實に悦ぶべき事なり、又五智(大圓鏡智、平等性智、法界體性智、妙觀察智、成所作智)の中では、妙觀察智に當りて即風大所成の佛と云ふものなり、(說法を第一に司り玉ふ佛也、說法即ち風也)故に淨土を西方に構へ玉へり、西は秋に當り秋は風を司る、總じて一年中風は吹けども大風は重に秋に

(146)

吹くものなり、(秋聲の賦、或は秋來ぬこの歌の事引例最も妙なり)如是譯ある故、十方の中で西方を選びて淨土を構へ玉へり、(其風大所成の西方往生を願ふ事なれば身持や心持で往かず、唯南無阿彌陀佛の息風一つで往生すべし)先づ是れが密教で云ふ一義なり、次に本宗で云ふ義を辨せん、安樂集云、以閻浮提、云三日出處名生、沒處名死、藉於死地、神明趣入、其相助便、是故法藏菩薩、願成佛在西、悲接衆生已上、是れ西は死に當るなり、この死ると云ふ事を思ひ出させたいと思召て、西に構へ玉ひたるなり、頓て死ぬる身と思へば自ら念佛が申せるものなり、又娑婆の憎愛の心も薄くなる、譬へば虎に追はれたる犬に肉を與へても喰はず猫に追はれたる鼠に油揚をやつても取らぬが如し、我々も日々に無常の殺鬼が追かけて居る昨日より今日はそれだけ壽命が縮まつて、今をも知れぬ命なり、若し虎が一つかみと爪を張つて居るに、肉を食て居る犬が其まゝ食ひ終る事が出来やうか、又猫がいかみと眼をすへ飛び

かゝらふとして居るに、鼠が油揚を喰ふて居られるであらうか、其場で噛み殺さるゝは知れ切つた事なり、人々は是を見て、ア、愚なもの嗚呼危いことと思はぬ人はあるまい、是が他の寸を見る智はあつても、我が尺を見るの限のない輩で、所謂陰陽師身の上知らずと云ふ類なり、犬や鼠は油斷して噛み殺されても、其生の命を失ふ計りなれども、人は無常の殺鬼に逢ひながら此娑婆に執着して、妻子の肉財寶の油揚に噛み付いて居るのであるから、遂に時をかまはず無常の殺鬼に噛み殺さるゝと、未來未劫惡趣に落ちて明くる眼もなき苦報を受くる事なれば、犬や鼠に比べては、いか程の愚かいか程の危さと云ふか、實に比べものにはならぬ、此危うさを抱へながらうっかりとして居る者はと云ふに、世間十に八九は皆此つらなり、故に涅槃經に大地の土と爪上の土との譬あり云々、然らば猫に追はれた鼠の油揚を喰ぬように、我身の無常あやうさを知つた人もあるかと云ふに、古來より三國に涉つて往生せし人は、皆此あやうさを知

(147)

つて用心せられし人々也、其傳充棟汗牛今其一を云へば、江戸の靈巖島の伊勢屋太郎右衛門と云ふものは越前の太守の御用達なりしが、至て御用の多い時には打捨て、二階へ上り、夜具を引被りて念佛申さるゝ事度々なりし故、家内の者も初の内は不快の氣味ならんと思ひしが、度々の事故御用多く問へる時には何故二階へ上りて寢玉ふぞと問ひたれば、餘りに御用重なる時は身心錯亂する故死んで見るのである、いか程大切の御用でも此世限りの御用なり、御機嫌を損じた所が、身上仕舞て乞食になるばかり、それに來世の事を捨て、どう用事が務めらるゝものぞ、用事が多と若し此中で死んだらば地獄へ落ちるならんと思ひ出すと、恐ろしくなる故、急に二階へ上りて寢るは死にならうのぢやと云はれたとあるが、斯く用心せられし人なれば、臨終も正念に往生を遂げられたとある、(詮要編に出)此死ぬると云ふ事を知るが一大事のことなれば、此事を教へん爲に餘方に構へず、西方に淨土を構へ玉へり、さればこそ國府の阿彌

陀堂の柱に、蟲のくいたるあどあるゆへ、能く能く見れば悉く文字にて、「月も日も西へく」と入相の、鐘で知らせる極樂の道」といふ歌なりしなり、日月の東より出で、西に没するも、極樂の西に在る事を忘れさせぬ爲となり、死は日々に近づくなり、其近づくは極樂へ生るゝのが近づくのぢや、死の一字さへ忘れねば往生は遂げ易い、故に二祖鎮西土人の御法語に云、六念八念十隨念等あれども、予が所存の如きは念死念佛の二念にあると仰せられた、此二念さへあれば大乘の法門皆具はると宣ひしなり、依て御弟子の記主禪師は先師一代の名言ぢやと讚嘆し玉ひしなり、されば此二念を我がものにするが肝要云々。

上來の如く深き譯のある事ゆへ、十方の中で西方に構へ玉ひたる事なれば、日月の西に没り玉ふを見るに付け、今日も暮れぬと入相の、鐘を聞くに付ても死の近づくを思ひ、念佛を唱へさへすれば、釋尊の教を信じ、彌陀の本願を頼み、宗祖の指揮に隨ふと云ふものなれば、南無阿彌陀佛と吹き出

(146)

す風で、目出度極樂往生を遂げ、悉皆金色の身と成る事、疑なきことなる程に、勇み進んで退轉なく稱名相續せらるべし。

第二十一席

其土有佛號阿彌陀今現在說法文、前席には正宗分の中極樂の方角迄を辨じ畢る、今席は依報正報の總標と、其國の教主の尊號を擧げ玉ひたる下なり、文に從是西方過十萬億佛土有世界名曰極樂迄は依報の總標の文なり、又其土有佛號阿彌陀今現在說法迄は正報の總標の文なり、先に依報の中で從是西方と云ふ方角の譯はすみしゆへ、今席は過十萬億佛土より辨せん、曰く十萬億土とは何の事ぞと云ふに、佛昇初利爲母說法經曰、佛告目連、此三千大千世界、百億日月、百億四大海、百億須彌山、百億四天下、是名三千大千世界一佛國土と有て甚だ廣いことなり、此通りを一つとして十萬億の佛土を中にし、其先きが西方の極樂ぢやと云ふ、十萬億とは百を十合すれば千となり、

千を十合すれば萬となり、萬を千合すれば億となり、此億を十合したる所が十億と云ふ様に、口でも云ひ悪い位の數なり、假りに一須彌世界と云てふも廣い事なり、常に云ふ通り須彌山の四方に世界がある、此日本(天竺唐土)などは南閻浮提とて南の方なり、北東西と合せて是が一須彌世界なり是を百億合せたが三千大千世界にして一佛の領地なり、我々も追付此三千大千世界の教主と成るので、其行末立身の程を思へば、何も此世の事を物がましよう思ふ様はなけれども、是を必至と信せぬ故、少しの意に叶はぬ事でもあれば、又ない事の様に思ふて唱へにかゝりし念佛も止めたり、祈念祈禱にかゝつたり、甚だ亂脈になるが多い、若し其うろたゑの來た時は、此立身の事を思ひ出して、彌々念佛の進む様に爲るがよい、是が常から法を聽くの利益用心の要と云ふものなり、十萬億とは積り上て見れば遠い事なり、ざつと云ふにさへ時間のとれる事なり、如是遠い極樂なれども、念佛を唱ふる身になれば又甚だ近いのである、故に

(140)

觀經には阿彌陀佛去此不遠とある、すれば觀小の兩經相違と見ゆる様なれども不爾で、小經の十萬億土と説けてある極樂が、即ち觀經で去此不遠と仰せられた極樂の事なり、是に就て古來より異解論判まち／＼にして、禪宗などでは迷わば十萬億土、悟れば去此不遠と云ふけれども、經意に叶はぬ私の了簡なり、此相違を和會なされたのが、善導大師三不遠の妙釋と云ふがある、其三不遠とは、分齊と觀成と去時となり、初に分齊不遠とは、釋に從此超過十萬億刹、即是彌陀佛國なりと、此意を譬て云は、京都より大津へは三里なり、尾州へは三十七里あるとすれば、尾州は大津より遠くして、大津は尾州より近し、既に尾州は大津と比べた時には遠いが、之を江戸の百三十里と比べる時は、又江戸は遠くして尾州は近くなるのも同様で、極樂は十萬億土と云へば遠い様なれども、夫れが佛土の終いではなく、華嚴經には百億那由佗の佛土などある、此等は十萬億土から未だ何程遠いかも知れぬ、夫れより見れば十萬億位は誠

に近いので、觀經に去此不遠と仰せられた、是が分齊不遠の義なり、次に觀成不遠とは、觀經に説けたる如く、觀法を修すれば寶地寶池蓮華を拜見したり、宮殿樓閣地上の莊嚴、六十萬億那由他恒河沙由旬の阿彌陀如來を、歷々然と眼前に觀じ顯はして拜見する、水を掬して月を握るとて、遙か天上の月なれども水にうつせば近くなる如く、觀法さへ成就すれば生身の如來を眼前に拜む事になる、是れ甚だ近い故、觀經に去此不遠と仰せられた、是が觀成不遠の義なり、後に去時不遠とは、皆や此方が心に助け玉へと存じ、口に南無阿彌陀佛と唱へてさへ居れば、臨終間際には阿彌陀如來が大光明を放ち、五々の菩薩ともる共に御來迎なされて、如彈指頭とつまはちきする間に、極樂淨土へ連れ歸り玉ふを云ふ、是れ即ち此娑婆を去つて極樂に往生する時刻の速かなるを見よ、甚だ近いなり、故に觀經で去此不遠と仰せられた、最も我々に入用なのは此義なり、是を去時不遠の義と云ふ、導師の妙釋實に貴ぶべし。

(150)

此三義畢竟して謂へば、弘明集に道合則萬里懸應、勢乖則肝膽楚越、と云ふが如し、唱へぬ者の爲には十萬億土よりは猶ほ遙かなりで、若し地獄へでも落ち行かば彌々遠くなるが、唱ふる者の爲には如彈指頭に往生すれば、道合ふ時は萬里懸かに應じて、甚だ以て近いのである、(我家の門口よりも近し)例へば當寺へ遠方からでも毎日參詣すると、日々の事を知て自然と近くなるが、つい一二町の處からでも參らねば、近くても遠くなる様なもので、我人が念佛だに唱へて居れば、極樂は近いのであるけれども、唱へぬと地獄へ行くゆへ、今の所よりは又遠くなる、されば念佛を唱へる身の上となつたは、誠に難し有事なり、今唱へて居る念佛が即念々に往生して、一聲一聲が皆極樂へ達するとあれば、此念佛に依て遠い極樂が眼の前の如く近くなるとは、返すくも喜ばしき事なり、彼の智旭大師の釋に云、一念相應則一念生、念々相應即念々生、妙果不離一心、如三秤兩頭低仰即事、只今信願持名、蓮華光榮金臺影現、便非娑婆界内

人と、又法照禪師は、此界一人念佛名、西方便有一蓮生と云々、上來の譯ある故に、極樂へは毎日便りがあるぞや、地獄はいや極樂へと、細々にも心がありて南無阿彌陀佛と一聲申せば、直に極樂の八功德池に蓮華が生じ、それから次第に相續すれば、蓮華光榮すると有て蓮華が榮ね、其人の命終際には觀音菩薩が捧げて御迎ひ、夫れへ乗るや否、すぐに曲たる臂を伸べる間に往生を遂ぐる故、去此不遠と仰せられたなり、先づ是で極樂は十萬億の西に在れども至て近い、又易し往と云ふ譯は知れ畢る、此近い極樂へ我方から遠ざからぬ様にすべきなり、人の處へ無沙汰すると言ふは、去る故、却て悪しく云ひなすものなり、念佛も其通り自身に怠れば、人の邪魔まで仕度なるとうぢやから、隨分無沙汰せぬやうに勤むるこそ肝要なれ、已上十萬億土の義は畢る、次に名曰極樂とは、極樂は梵語で須摩提と云ひ、此に安樂と翻す、亦云、安養、清泰、妙意と、名は少し異なれども皆極樂と云ふに同じく、至極の樂みある國と云ふ義なり、(其極樂

(151)

と名ける義は下に至て説き玉へり、其所にて辨すべし、其土有佛號阿彌陀今現在說法、是れ正報の總標也、阿彌陀とは梵語、此に無量壽と翻す、今現在說法とは此の現在と云ふのは盡未來際の際世なり、釋尊の前から現在して法を説き玉ふ、斯く永々現在し玉ふ譯は、既に御名をも無量壽如來と號し、國はと云へば常住不變の淨土なり、されば我々も一旦極樂に往生すれば、直ちに阿彌陀如來の御說法を拜聽する事なり、早く往生を遂げて御說法を承はらんと、欣求の心を起すべし、然れども芝居があると云ふのと違ふて、說法を常に聞くと云ふても、夫れ程に欣求心が起らぬものなり、されど此土で同じ凡僧の勝解作意で説くをば聞いて眠たくもなるが、佛の御說法は有難く樂しく、聞いて功德を積む事廣大にして、退屈など、云ふ事は露もなき事なり、說法の功德を具へ在す、妙觀察智の阿彌陀如來の御說法なれば、其樂しきこと量りあらんや、其趣きは、大經に、無量壽佛、爲諸聲聞菩薩大衆、宣法一時、都悉集會七寶講堂、

廣宣道教、演暢妙法、莫不歡喜心解得道、已上甚だ樂しき事ならん云々、去程に十四佛國の上位の菩薩方さへ各々極樂へ往詣し玉ふ、斯く尊き法を説き玉ひし經なるゆへ、二祖上人も此本經を念持して入滅し玉へり、人々も今聞くを縁として、彼土では直に如來の御說法を聞くと、思ひを堅め勇み進で唱へらるべし、斯ふ云ふ尊き往生を願ふ心のないは、實に淺ましき事なり。

此趣きを雲棲大師釋して云、所惜萬里百城、爲參知識、梯於山、航於海、云々禮道場、豈可萬德如來現在說法、漠然不顧耶、墮城東、是則名爲可憐愍者、萬里とは、壁巖に或僧が何不去と云ふ三字が合點ゆかぬゆへ、萬里を巡り知識を尋ぬるに、漸く知識に逢ふて大悟せし事を云ふ、百城とは善財童子が知識に逢はんとて、百十一の城下を巡りて知識に逢ひ玉へり、其逢ふには嶮しき山路をば、梯を架けて通り荒き海をば船渡しにて越し、艱難辛苦をして法を求め玉へる事、華嚴經に説けり、斯くしても知識を尋ね、法を聞き解脱

(152)

を求むべき筈なるに、唯申てさへをれば順次に往生し、現に佛の御說法を聞く事が願はずにはをられぬぞよ、爾るを欣はずしてうつかりとしてをるは、甘じて城東に墮すると云ふものなりと誡め玉へり、此の城東に墮すると云ふは故事なり、是れは城東の婆々として甚だの悪婆々なり、天竺波斯匿王の城の東の方に、須達長者（波斯匿王の大臣なり）とて佛に歸依せし長者あり、此長者の所に古く仕へた婆々あり、其婆々は甚だ邪見者にて佛を嫌ふて拜まぬ、長者が招待して佛の來り玉ふときは、我部屋へ入り内からしめて外の人をも入れぬなり、此事流布して波斯匿王の御聞に達したり、此王の后未利夫人より須達の妻を召されて仰せらるゝには、其方の内には佛を嫌ふ婆々があるげなが、早く暇を遣はしたがよい、油に水の害あれば、外の者の信をも妨げるものぞ、と仰せられたれば、順達が妻の答に、老婆業障深重にして種々と勧めますれども、兎角佛を嫌ひまする、私の所でさへあの通りなれば、外へ行きましたならば猶以て嫌

ふならん、去ればあの者は地獄より外行き先はござりませぬ、久しく使ひしものゆへ、それが不便さに得出しも仕りませぬと云へば、夫人はげにげに其は慈悲の深いことよ、菩薩方は一人の衆生の爲めに、生々世々つきつまとひつして、御化益なさるゝと云ふが、其方が心は即ち菩薩の心なり、それならば如來を御招待申す時、内々にて知らせ様ほどに、其老婆を使いによこされよ、一度拜まば縁となりて又志もたごろうと云れたれば、左様ならば使はしませうと云ふて、須達が妻は歸りたり、其後やがて知らせありしゆへ、須達が妻は老婆を呼び出し、夫人様の御殿へ之を以て上れと云ひ付られ、文箱を持って王宮に到り差上げて、歸りに門を出かけたれば、向ふより釋尊阿難を始め多くの御弟子方を従へさせられ、城中へ入り玉ふ様子、是を見て老婆これは悪い人がやつて來ると思ひ、餘の門から歸らうとて他へまわつて見れば、何れの門も残らず閉ぢてあるから是非に及ばず、さらば扇子をかざし顔を隠してすり違はんと思ひ、扇

(153)

をかざして門へ來るに、佛は直ぐ其目前に來かり玉ふ所ゆへ、死ぬる思ひにてすれ違はんとするに、かざす扇は水晶の如くすき通りて如來が拜まれ玉ふ故、此れは情ないとして後を向けて通らんとすれば後ろに拜まれ、仰向けば上に拜まれ、うつむけば下に拜まれる故、どうぞ見まいと兩手を目に當れば、十の指が皆釋迦如來と拜まれ、どうにもこうにもならぬ故、今度は目を閉ぢ大地に顔をすり付て居る内に、通り過ぎ玉ひし故に立上り、扱てく／＼今日は生涯にない難儀な目をしたと、つぶやきながら内へ歸りしと云ふ悪婆々なり、是れ如來の御手にさへ及ばぬ悪人なり、今でも念佛を忌々しいなど云ふものは、此悪婆々と同じきものなり、依て雲棲大師は憐愍すべきものと釋し玉へり、佛を嫌ふは其者の業力なり、是非に及ばぬ、今でも念佛を嫌ひ死に際にくいしばかりてゐても、死ぬると云ふ事を云へば、忌々しい事に思ふ者は、皆此婆々に同する、道理を推せば欣ぶまじき事はなきことなり、阿彌陀如來は我々を助けん爲に五劫云々

又臨終には御來迎かく迄隣れみ玉ふ者をば、信する心もなくぬけつかくれつ佛法を嫌ふ者は、城東の婆々に異らんや、(世間に多く此類がある)爾るを其悪人の多い中で人々の如く、經説を聞き念佛唱ふる身の上となり、臨終には御來迎、往生遂げては直に阿彌陀如來の御說法を聞き得らるゝは、此上なき果報なれば、此勝縁を取りはづさぬやう、十萬億土も去此不遠、如彈指頭に往生を遂ぐる稱名相續が肝要。

第二十二席

舍利弗彼土何故名爲極樂其國衆生無有衆苦但受諸樂故名極樂文、從來極樂の依報正報の總標の下で、國の名と教主の名を擧げ玉へる下を前席に辨じ已る、今席は略して極樂の名義を演べ玉ふ下にて依報の細釋なり、極樂は廣大なることなれども、總じて云ふのに依正の二つなり、宮殿の池の花の樹のと云ふは皆依報の莊嚴なり、阿彌陀如來及諸の菩薩等は正報と云ふ、(非情は依報、有

(154)

情は皆正報なり、今席の下は厭欣心を勧め玉ふ一段、舍利弗彼土を何が故に極樂と名くるぞと云ふは、問の心なり、是は元來舍利弗が問ふべき筈なり、然るに佛が問ひ玉へば、舍利弗が答へられさうなものなるに、佛自ら問ふて其國衆生等と答へ玉へり、是れ佛の自問自答と云ふもの、是れが則ち無極の大悲の顯はれたる所なり、幼き子には親が氣をつけて、寒ければ着せ暑ければ脱がせなどして、子の方から云はずとも親がよいやうに取扱ふてやる、今の佛の自問自答も其の如く、智惠第一の嘉譽を得玉ひし舍利弗さへ、斯やうに子供の様になつて聞き玉ひしは、此經が實に甚深微妙の難信の法門なる故なり、他方本願を頼む身は必らず智惠だてするなと云ふ所を、此所にて心得たくべし。

其國衆生とは、是れ迄に往生を遂げたる極樂の菩薩衆なり、無有衆苦とは總じて娑婆の苦みを擧げて衆の苦と仰せられたので、是を聞いて厭ふ心を起させ玉ふなり、苦と云ふものは數多きもの故衆苦

と云ふ、是娑婆に對しての玉ふ言葉なり、娑婆の苦相は云ひ盡されぬ事なれども、四苦八苦等と云ふが先づ知れ安きなり、(委しくは後に辨せん)三界皆苦とありて我等が今まで迷ふて居る所は、どこでも苦界ゆへ苦を離れると云ふ事はない、此苦の事を知らせて厭ふ心を起させんとて衆苦とある、實に衆苦充滿の娑婆なり、故に導師は之を釋して、歸去來魔郷不可停、曠却以來流轉、六道盡皆經、到處無餘樂、唯聞愁嘆之聲、等と云々、六道の苦とは、地獄では熱い寒い之苦と云ふ唯愁嘆の聲、餓鬼はひだるい喰いたいと云ふ苦の聲、畜生はこわい怖ろしいの苦の聲、修羅は憎い痛いの苦の聲、人間は四苦八苦の苦の聲、天上は五衰の苦の聲、六道皆苦いやな所ではないか實に厭ふべきなり、云々、極樂には斯かうの苦みは一つもないぞ、早く厭ふ心を起せとて無有衆苦との玉へり。

但受諸樂、故名極樂、文偕て又樂と云ふも數々なり、大經には諸樂無量にして説き盡すべからずとある、依て諸樂と仰せられた、往生すれば樂みは

(155)

かりにて、苦みたくても苦まれぬ身の上となつて、諸の樂み計りぞと云ふ意で、故名極樂とて略して極樂の名義を擧げ玉ひて、厭欣の心を起さしめ玉へり、(苦を擧げて厭はせ、樂を擧げて欣はせらる)是れが則ち總安心で大切なる所なり、(了譽上人の破邪顯正の義云々)偕て此下で娑婆の苦と極樂の樂とを對して辨せん、是を聞いては厭欣心のなきものは起し、有るものは益々増長する爲と心得らるべし。

娑婆の苦みと云ふもいひ盡されぬが、又極樂の樂みと云ふもいひ盡されぬ、群疑論には三十の樂を明し、萬善同歸樂には安國鈔を引て二十四樂を擧げ、惠心の僧都は往生要集に十樂を擧げ玉ひたれども、九牛が一毛で中々云ひ盡される事でない、實は如來の無碍辨にさへ盡されぬ樂たる故、諸樂と計りあるなり、是に反して娑婆は實に苦なり、如何なるものが是れ苦ならん、經には三界皆苦とありて三界六道總じて皆苦なり、其中の人界なれば貴賤品かはり男女形異なれども、苦患なき者は

一人もなきなり、「憂き事の品こそかはれ世の中に、物を思はで住む人はなし」とて苦は色が變る計りに、無心の人や大悟の方はいざ知らず、其他の者は皆苦ならん、其の苦の状態は一々陳べ盡し難けれども、目前近き苦相を示さば、三苦四苦五苦八苦等の差別ありて、是れ又際りもない廣き事なり、それ故今且く八苦を略説せん、(尤も此の苦相を聞いて厭離心を起し、樂相を聞けば欣求心を生ずるやうにと、云ふ心を先として聽受せらるべし)一に生苦とは、正法念經に曰、佛説如是なれども人は是を知らず、爾れども見聞して知るべし、生るゝ時の苦は覺へねども、胎内の體は甚だ柔かにして謂はゞ熟柿の如し、是れが生れ出づると此世の風が觸る、其の時恰も劍にて割かるゝ如く、又牛の皮を剥ぎて茨荊の中へ追ひ込まゝる苦の如く、又龜の甲をはなす如きの苦しみやとある、故に生るゝと直に泣き聲を出す、是れが生苦と云ふものなり、二に老苦とは、人毎に覺のあると、又これから覺ぬのつく事なり、先づ幼きより漸く

生ひ出で、年既に長大になり身健かに力逞しく、軽く荷い重きを負ふても疲れたることをも覺へざりし身が、いつしか頭に白毛を生じ、つやはかなりし姿も骨高になり、肉消に筋はれて色黒く、面に皺をたゝみ力衰へ氣あふぎ、百節疼痛し立つにも居るにも呻吟と聲を立つるなり、物忘れして愚痴をこぼし、只待つ事としては次第に姿の見苦しくなるを待つ計り、斯う云ふもの故年若き者が嫌ふも道理、(若い者の中へ出ぬのが老ての嗜の第一なり、別して色欲財欲を慎しむべし) 何れも皆若き時には、相應に人にも用ひられたるものなれども、年よれば人に嫌はるゝ是れを悲むが通塗なれども、實は間違ひで其の人に用ひられ交つた事をよく顧みれば皆惡事のみなり、「いづくにか身をばよせまじ世の中に、老を厭はぬ人しなれば、(爲頼中納言)それが年よれば人に用ひられず、其の罪造る交りに嫌はれ省かるゝほど、善根後世の勤を進み佛前へ出る事が自由に出来る、されば老苦は却つて厭欣心を起すの善知識となる、

爾るを心得が違ふて人に嫌はるゝ己ではないなどと、りきむ心になると厭欣心は消えて罪業を累ぬ、三に病苦とは、維摩經に曰、一大増損する時は百一病生ず、四大増損するときは四百四病同時に俱に生ず、此身は地水火風の四大種の所成なりと、(増損云々)是れが増損なく等分なれば無病なれども、外に寒暑風濕の四氣にあたり、内に喜怒哀思悲驚惶の七情に破れて、思ひもよらざる苦しみを發し、自身の苦みのみか看病人生で苦ませるなり、四に死苦とは、人の死せんとする時はふしも離るゝ如きの痛みなるに、八萬四千の塵勞門より無量の病競ひ起り、無數の鋒劍を以て分々段々に切り刻まるゝ苦み甚だ堪へ難きなり、故に多くの人が夢中の様になる、最早追つけ臨終と云ふ前になると、額には粟粒の如き油汗をちりゝと流す、舌根すくめば言ひ度ことも言へぬやうになる、此所が則斷末摩の苦みと云ふものなり、(此斷末摩の苦みを軽く仕度は、人を苦しめす惡口し罵らぬやうにすべし、されど上にたつ人は、少し

づゝ人に心づかいさせねばならぬ事もあるなり、惡口を以てせず其が爲にする云々) 往生する人は此苦を免る云々、是が四苦にて下の愛別離苦、怨憎會苦、求不得苦、五陰盛苦を加ふれば八苦となる、五に愛別離苦とは、いとしいの可愛のと云ふ中でも、一度は別れねばならぬ、夫婦兄弟朋友の中何ほど親しくても、一度はばらゝくなる、死んで別れる計りでない、貧苦にせまり互に涙をしほり乍ら別るゝとあり、又勤仕の身杯は公用に用て據なく別るゝ人もあり、中には難風で船を流さるゝの旅立の別れのと、いろゝゝ生き別の苦みもある(彼の佐用姫などの如き、石となつて苦むもあり) 是等を總じて愛別離苦と云ふ、六に怨憎會苦とは、嫁姑、隱居當住、犬と猿、同じ家職に相役の中とて、中の悪い者なり、嫁が憎いとて姑が去りもならず、姑が嫌いなりとて小姑の處へやられるものでない、時に依ては互に瞋毒を懷き苦しむ云々、(雲説上人の傳、火を吐く嫁の事)七に求不得苦とは、何事も欣ひ求むるやうにはならぬ世界なり、

身代相應なれば何卒子が欲いと欣へども石女、そうかと思へば十三を頭に年子が十二人、やくざ柿に種子多しと、盆帷子も人並に着せたいと思へども、貧乏なるに十二人前は出来ぬと苦しむもあり、或は病身で本復を欣ふに藥鍋は常釜同前、脊長け延びた娘をいつ迄も内にたいてはいかず、何卒早く嫁らせたいと思へども、とうゝのいかす後家、是れ等は皆求むるに得られぬの苦み、八に五陰盛苦とは、此身がある故に總じて苦しみを受ける、よしもなき地水火風をかり集め、我と思ふぞ迷ひなりけり、皆大事ゝとする身なれども、此身が苦みの根本なり、是等を初として衆苦充滿の世界なり、此内に若死すれば老苦を除く計り、其外は一種として遁れらるゝ事はなし、其場に至らざれば知れぬども、實に衆苦充滿の世界あらそへぬなり、此處を合點すれば大に利益ある事なり。偕て上來の苦相に對して極樂の樂の事を示さば、此土には生苦あれども彼土には生苦なし、蓮花化生なれば御來迎に預りて往く、直に觀音の開華三

味の御説法を聞く時に生れると云ふ、(汚穢と清淨と、臭氣と異香と、生れ様の勝劣)又紫摩黄金の膚なれば老苦なし、金剛不壞の身なれば病苦なく、無量壽を得れば死苦も無し、死苦なき故に愛別離苦もなく、菩薩計りの寄合なれば怨憎會苦もなく、能令速満足の土なれば求不得苦もなく、病苦等なければ五陰盛苦も無し、是等はほんの大海の一滴一寸比較して見た計り、見聞覺知悉く樂み計りの事故に、略して但受諸樂故名極樂と御演なされしなり、然れば人々此苦樂雲泥の差別を聞いては、いやな娑婆ぢやと穢土を厭離し、往生したいと極樂を欣ふ心を、もりたて、日課稱名退轉なく進て相續。

第二十三席

又舍利弗極樂國土七重欄楯七重羅網七重行樹皆是四寶周匝遶是故彼國名曰極樂。文從來小經の正宗分依報別釋の下にかゝりて、前席には略釋名義の段を辨じ畢る、今席よりは廣く勝相を明すと

て、依報莊嚴を委しく御演説ありし下なり、又舍利弗七重行樹、是は樹木の莊嚴を演説し玉へる所なり、初に樹木の莊嚴を擧げ玉ひたるは譯のあることなり、娑婆でも樹木を目に於てあれば城下、あの林の處は河と云ふ所など云ふやうに、最初に目にかゝるものなる故なり、偕て前席に斷はる事を失せり、夫は其國衆生無有衆苦、但受諸樂故名極樂と云ふ十六字は、是より先き一段々々に入て見るが、今經講談の習ひなり、(末に至て知るべし)七重欄楯とは、七重は滿數々多きを云ふ、或は横或は豎(舊解まら)なり、經に豎と説くも一遍なり、横と説くも一遍なり、實は欲見即現、適意淨土、局るべからず、豎と云ふは樹の枝の間に七段ありと云ふ、是は當麻曼陀羅の寶樹の如し、横と云は且く一重に組みたるにてはなし、七重に組み上げたると云ふ義なり、欄楯はをばしま(檻)らんかんの事なり、是を横豎に配して、欄は豎楯は横と云ふは、戒度の聞持記説にて、合讚之に依る、又欄は横楯は豎と云は、慈恩の作通贊及同作の彌

陀經の疏の説なり、通贊は直に横豎を配釋し、疏は體用を以て分つ、或人楯は直に和訓、たてと訓すればとて基師の釋による、洲云く、横豎を分たば基師の釋勝れたる如し、併し欄楯二字にてをばしまと云ふにて可ならん、其故は次の羅網も二字ともに、あみと云にて横豎を分たす、同字を二字並べて一物を顯はず例多し知るべし、此事講者の心得迄を云ふ、是を辨せば愚俗聽くに倦まん、七重羅網(七重或は横或は豎舊解まら)羅網はあみなり、妙眞珠の網が或は欄干に入り交つてかゝり、或は樹上をも覆ひ、其美しき事言葉には述べられぬとなり、其網の下には風鈴の如き重り下りて、此樹や風鈴に風が度れば法音を出す、之を聞くもの皆無生法忍の悟を得ると云ふ、七重行樹とは並木なり、此七重を樹相とて七段づゝの樹が列りてあると云は、靈芝寺の大智律師の義なり、又之を樹體とて根莖枝條葉華菓の七重と云ふは、導師の義なり、(樹相樹體の二義知れ易し云々)成程導師の御義勝れたり、極樂の樹が七段に限ては面白

くない、五段の木もあり七段のもあり、又百段千段萬段ある木もなければ窮屈なり、根莖等の七重と云ふが勝れるなり、皆是四寶周匝遶せり、四寶は金銀瑠璃瓔珞の四なり、(是も一通りなり、大經には七寶諸樹とあり云々)此等の樹が一所や二所でない、極樂中に徧滿して宮殿寶池佛菩薩の居所を圍み繞りてあるとなり、是を極樂の寶樹莊嚴と云ふ、上來文を追ふての講述なれば、莊嚴が切れなく成て聞に悪くからうなれば、大意を取り連續して謂は、極樂の寶樹七重行樹の並木の高さ八千由旬ありて、其樹は金銀瑠璃瓔珞等の寶を以て合成し、根も莖も枝も條も葉もいさぎよく榮ね、花も咲き葉もみのりたる樹に、至極の上には寶天蓋が懸り、其周には、七段に寶を以て合成せし欄楯あり、一段毎に妙眞珠の網が掛つての莊嚴也と云ふが上來の大意、之を文に又舍利弗極樂國土七重欄楯乃至名曰極樂と御演説し玉へり、扱て又結文に不審があるは、寶の樹を見た計りで彼國を名けて極樂と云ふは、どうかばつとした様など

(160)

云ふに、前きに云ふた其國衆生無有衆苦但受諸樂、故名極樂と云ふ文を入れて見る也、然れば極樂の樹は、苦はなくて樂ばかりの樹也と云ふてもまだ底すみはせぬ、物は對待せねば解らぬ故に、樂ばかりと云ふ樹を此世の樹に對待して見るべし、さすれば成程と得心ができる、總じて此世の樹は我樂みにして、寵愛する木は必ず苦みとなり、甚だしうしては三塗の因となる、其事は専心僧都の釋に云く、桃李之開春風、翫之則成輪回五趣因、蘭菊之綻秋露、愛之則亦結流轉三有業云々、實に然り一向愛せぬ木は各別、我愛する植木なれば其が爲に種々の苦みがある、其姿は随分榮わさせんと思ふにつけては、土かひ肥料を施し花咲くを待ち散るを惜み、盛りには風雨の爲め心を傷める類、「世の中に絶わて櫻のなかりせば、春の心はのどけからまし」、(業平朝臣)或は梨子柿柑子の類の菓を愛する鳥を追ひ、圍をなし甚しきは數をかぞへる云々

如斯此世の樹には苦勞があり、花を惜み菓を惜む甚しきに至ては惡趣の因となる、其現證は橘の佐國夫婦は花を愛して蝶となりし事、(托、事實部卷八)又橘の蟲と成りし婆々の事(發心集に出)是皆樹に就て畜生道の蟲となる、然れば此土に於ては樹さへも、斯の如く惡趣に墮する因縁となる、是に就ても厭ふべき世界なり、然るに彼土の樹には是の如き苦みの縁はきれば、居る故に、無有衆苦但受諸樂故名極樂と仰られたり、又彼土の樹には種々の樂みあると云ふことをば、父子相迎に(諺註下本六丁)次に寶林寶樹會に入らしむ、みれば七寶をみがきて(光りある心なり)七重たがひにいろへたるうへき、ひかりをつらねて(一樹より各衆色のひかりを出す)立ならぶかげ、をのがなみく(樹のさま、をのれとよきほどに立ならびて、つきくしく見ゆるを云ふ)みだりがはしからず、枝には春秋をならべて花もあり菓もあり、(花には春の色あり、菓には秋の艶あり)葉には露色をまじへて青葉にも似たり紅葉にも似たり、(其葉は千々の色

(161)

にして、脈に百の繪あり、天の瓔珞の如し)此の寶花寶葉の妙なるだにもあるに、長風や、林をつたひて過ぐれば、音樂ほのかに梢をわたたりてゆく、(唯眼に妙なる色を見るのみにあらず、耳に又法音を聞く、樹毎に寶の網をかけ、網に寶の鈴を垂れたり、風の吹く毎に妙なる音を出すこと、宛然百千の音樂の同時に奏するが如し、遙に天樂に勝る草菴、今ぞ聞く松吹く風の音ならで、梢に琴のしらべありとは云々)こゝろ妙法を説く、(常の音樂に非ず、能々さけば皆妙法を説く)聞けば無生を證す已上、(觀經曰、光明寶林演說妙法、聞已即悟無生法忍と、長水云、眞如實相名無生法、無漏眞智名之爲忍)如斯極樂の寶樹は花も菓も枝も並べて見る、見れば自と功德を得る、又其寶樹に清風が度れば、百千種の音樂奏する如くなる故、心を留めて聞けば其音甚深の妙法なり、斯は有難しと聞く内に無生法忍の悟を開くとなり、如是の得益は皆願力所成の徳なり、僅かに植木を作るとても、なり格好のよいと思へば大體の苦勞ではな

い、況や斯の如き寶樹を植る玉ひたる、彌陀如來の御苦勞の程を考へて見るべし、音樂を聞いて居れば甚深の妙法が聞ゆる、夫をきけば我知らず無生法忍を得ると云ふ、樹がどう云ふ譯で出來たと云ふに、法藏因位の大悲誓願より顯はれたる極樂の寶樹なる故に、無有衆苦但受諸樂故名極樂とて、樂み計りの樹ぢやとなり、如是仕立玉ふ御苦勞は、そも誰が爲になし玉へるぞ、爾れば其大慈大悲を空しうせぬやうに、往生の爲に南無阿彌陀佛、この御念佛さへ止めねばいつでも命終り次第、上來の通りの寶樹をながめ、無量の樂を受ること一點の疑もなき事なれば、日課稱名怠りなく相續。

第二十四席

又舍利弗極樂國土有七寶池、八功德水、充滿其中、池底純以金沙、布地四邊階道、金銀瑠璃玻瓈合成、上有樓閣、亦以金銀瑠璃玻瓈磲磔赤珠碼碯而嚴飾之、文、小經正宗分依報別釋の下、廣明三勝相に四ある中、前席に寶樹莊嚴の段を辨じ、今席より

(162)

第二池閣蓮華莊嚴を辨ずるに、先づ池の莊嚴より辨せん。
 有七寶池八功德水充滿其中。文七寶とは上の如し、此池は結構なる池なり、文の面は此池一つ有るやうにきこゆれども、極樂の中にはいくつもあるなり、其數々の池悉く七寶に限ると云ふには非ず、或は一寶二三四寶云々、今は滿數に依りて七寶の一を擧げ玉へり云々、扱て其中に湛わたる水は、一點のくもりもなく、澄淨とすみ切たる水なり、故に曇鸞大師の論註に、如無水と釋し玉へり、是れ甚深の釋なり、一點でも濁りあれば水の體が顯はるゝなれども、澄淨とすみ切たれば、唯金銀等の七寶が映徹する故、水の形は無きが如くに見ゆるとなり、然れば經にも、淨若無形寶砂映徹とあるなり、八功德水とは八の徳を具へたる水なり、稱讚經曰、何等名爲八功德、一には澄淨、清淨にして澄み切たる水なり、二には清冷、清く冷しく熱惱をさますの徳あり、三には甘美、味ひ甘きなり、四には輕軟、此水軽く和らかなり、娑婆の水は重いけ

れども軽いのが實の清水なり、五には潤澤、うるをしつやゝかにする徳あり、六には安和、するどになくて觸るゝに甚だ柔かなり、七には除飢渴等無量過患、飲めば飢渴病等を除くの徳あり、八には飲已定能、長養諸根、増益四大、種々殊勝善根、多福衆生常樂受用、飲めば六根明了になり善根を増長する無量の徳あるとなり、曼陀羅に新生の菩薩の池中に遊戲せらるゝ所あるが、則諸根明了になり、四大増益する徳のあらはるゝ姿なり、(念佛者は此樂を受くるの身の上となれば喜ぶべし)爰に八功德の水に就て不審あり、所以は極樂の八功德水は別に超過に非ず、彼の天竺の阿耨達池の水にも八徳あり、又北鬱單越洲の水にも八徳ありと云へば、此界にさへある徳なれば、さのみ珍しからぬ事には非ずやと云ふに、假令八徳の名は同じきにもせよ、有漏界内の無常にして勝善根なき水と、無漏界外の常住にして無量の患を除く勝善根ある水と勝劣あるまじきや、大經に曰、開神悅體蕩除心垢、たとへば絹木綿藥品等同名にて勝劣のある事云々。

(163)

偕て此八功德水は極樂に何の爲にあるぞ、飢渴等の障りなく、又病も治る徳あると云ふからには、極樂でも煩ふ事や飢渴等有るかと云ふに、往生すれば、金剛不壞の身を得るなれば、煩ふなぞと云ふやうなる事は決してなければ、此所が則ち能令速滿足の淨土の徳なり、(入用になき物まであるが、物に欠けめなき所なり)娑婆では貧福貴賤品異にして貧賤は欠ける事ばかりなり、極樂の何一つ欠けたる事なき上に、入らぬものなれども病氣の治る水まであると云ふやうに、重りくゝて結構なる事計りある故に、能令速満足と云ふなり云々先づ是で七寶の池に八功德水の湛わたると云ふ事は知れ已る、今殊更に此水の八功德を念佛に託事して辨せば、中々萬徳所歸の名號なれば、八つの徳位で、大海の一滴ほども、讚嘆なるものでもなけれど、少分を合勸すべし。
 一には澄淨、純一無雜に澄みわたりたる水なり、念佛も斯の如し、先づ念佛の外の法は皆雜行と云はるゝなり、行體に雜はる事ある故に、戒行で云

は、持ち様心の用ひ様で人天へも生じ、十方の淨土へも生るゝと云ふ様に、漏無漏果報定まる事なし、是れ行體に雜る處ある故なり、何れの行も此通りである、然るに念佛の一行は淨不智愚の簡びなく皆極樂へ往生する、其果報を得る事純一にして、往生の一事に片付たる念佛故に、是れ澄淨の義を具へたるなり。
 二には清冷、すゞしく熱惱をさますの徳あり、念佛も亦然り、往生したさに南無阿彌陀佛と申せば、心光に照さるゝ光照を蒙むれば、三毒消滅の益を得る、欣求以前の我には似るべからずと仰せられたる如く、(記主上人の釋)念佛唱へばかゝらぬ前と思ひくらべて見ると三毒微薄になりて居る、近く例を引けば、無常迅速追つ付け死ぬるものと思へば、腹のたつ事もなく、假令一應嘆つてもやがて思ひ返す云々、是れ念佛を唱ふれば熱惱のさめる徳なり、爾れば念佛に清冷の徳ありと知るべし。
 三には甘美、味ひ甘き徳なり、念佛も亦爾り、餘法は人選びあれども念佛に限りて人選びなし、誰

でも唱へらるゝに非ずや、(唐辛も好く人あれども、其人少なし) 誰でも唱へらるゝが則ち口に合ふと云ふものなり、口に合ふものは味ひ甘き甘美の如し、然れば甘美の徳も具はれり。

四には輕軟、かるく和かなる徳なり、念佛も又然り、一聲十聲に往生の出来る法は、三世諸佛の法の中に又となく、至て輕く和かなる法と云ふものなり、誦經陀羅尼杯は急の間にあわぬ、又覺ゆるも六か敷、覺ててからが心をわさめ、句義に思を運ばねばならぬと云ふ様に、甚だ六ヶ敷なり、六かしきは則ち重いなり、念佛は覺ゆる易く唱へ易く、然も四威儀と身の淨も簡ばねば、是れ則輕軟の徳を具へたるものなり。

五には潤澤、寶樹を注ぎ潤すの徳なり、念佛も亦爾り、功徳と云ふ功徳、善根と云ふ善根、残らず六字の中に收めてある故、一念に三祇を超ぬ片言に諸聖を調ふとて、一聲に往生して劫敷を重ねて難行苦行を勤め玉ひし上位の菩薩と、等同の果報を受る利益あるは、是れ則群萌をうるほす徳なり。

六には安和、するどになくて和らかなる徳なり、念佛も亦爾り、總じて成佛するには六度萬行を修するが定りなれども、其するどなる事をせず手痛い事もせず、唯口打ち明いて南無阿彌陀佛と唱へる計で佛になると云ふは、即ち安和と柔かなるの徳を具へたるからの事なり、一つ出世するには、必ず危険な關所を超るねばならぬ、蛭が蜻蛉、地虫が蟬になるにさへ、背中で割れるの苦みをせねばならぬ、人間が仙人になるさへ難行なり、故に熊谷直實發心して聖覺法印の許に至り、私如きの者でも後世助かる法がござりませうかと問はれたれば、元祖大師(法然上人)に聞けとある故、吉水に參りて御由を尋ね申されたれば、大師の御示に、如何なる惡人でも心に助け玉へと思ひ、口に南無阿彌陀佛と唱ふれば、往生遂ぐるぞと仰せられたれば、熊谷聞くより大聲あげてさめぐと泣かるる故、元祖大師何故に左は泣くぞと尋ね玉へば、御答に私は是迄數度の軍戰に數多の人を殺害致せし惡人なれば、定めて夫れに報ふ程の手強い事を

爲すは往生はなるまいと存せし故、刀をこぎすまして持參仕り仰せに任せ手なりとも足なりとも切斷し、假令生害してなりとも往生せばやと存じさむらいしに、つい唯申せば往生すると、餘りに心易き仰せを承り、如來大悲の深重と往生し易き喜ばしさに、感涙止め難しとて詞にあやもなく申されたと云ふ、誠に生涯泣くの涙をこぼすのと云ふことはせられぬ人なれども、餘りに和かなる法ゆへ扱も有難いと心肝にしみ入りし爲に泣かれしならん、爰が則ち、するどになくて和らかなる徳の具りたる、南無阿彌陀佛と云ふものなり、然るを申易ひを咎にして、念佛でもと云ふは恩を仇の大罪、空怖ろしき極りに非ずや。

八には飲已長、養諸根四大等、飲めば則六根明了に也、善根を増長する無量の徳ありと云ふ、念佛も亦爾り、念佛せぬ者の六根は罪業の上のみに働かけば是れ不明了なり、念佛すれば六根皆善根の上働かくが故に明了なり、且く意識の一を云はば、念佛せざる者は意識が眠つて居るなり、所以は是はあつこい此はつめたいと云ふ事を知つて居り乍ら、來世地獄に落ちて八熱のあつこい、八寒のつめたいと云ふ事を知らずに居る故唱へぬので、其知らぬは無明の眠り深き故なり、然るに皆の如く地獄の寒い熱いはいや、極樂の快樂を受たいと心付き、南無阿彌陀佛と唱ふるやうになつたは、無明の眠り醒めて諸根明了になつたと云ふもの、唱ふれば此世に居る内さへそう、況て往生遂げて諸根明利、三明六通自在の身となる時は、いか計りの得益ならんと思ひ見るべし、是が則ち念佛に諸根四大を増益する徳の具りたる所なり。先づ是で極樂の池水に具へたる八の功徳を以て、念佛の功徳の少分を準へ示す事を已る、之を聞くに就て

(166)

も念佛の行者となりたる事を喜ばるべし。
 池底純以金沙布地。是は黄金の一色を以ての
 莊嚴なり、觀大兩經は雜色の莊嚴と説かれたり、
 謂く觀經の如きは、定散二善に諸行を説き、終り
 に念佛を附屬なされたる説相故、雜色金剛以爲底
 沙と説けて雜色の莊嚴なり、大經の如きは、起立
 塔像飯食沙門發菩提心等の諸行を雜に説き玉ふ經
 なる故に、或一寶二寶乃至七寶乃至底沙非一と種
 々の寶を以ての莊嚴なり、然るに今經は無問自説
 大悲徹底の經なれば、餘行とは一行をも交へ説
 かず、不可以少善根と拂ひ捨て、一日七日執持名
 號一心不亂と專修を勧め玉ふ説相なる故に、黄金
 一色を以て莊嚴となされたるなり。

此下にて專雜の得失を細談せば、托事辨(事實
 部卷一)に出づる烏津四郎と陳不占との二の事

實を以て辨すべし。

四邊階道金銀瑠璃玻瓈合成文四邊とは池の四方の
 岸なり、階道とはきざはしなり、其の階が金銀瑠
 璃玻瓈等の寶を以て交へ成したるなり、其の寶の

階を段々上へ登れば、五歩に一樓十歩に一閣と云
 ふ様に並べる宮殿あり、依て上有樓閣亦以金銀瑠
 璃玻瓈純赤珠碼磲而嚴飾之とあり、此は池の邊
 りにある宮殿のかざりなり、追付け此の寶を集め
 て成せし宮殿樓閣を住居處とする御互の身の上
 云々、此世で僅かな家一軒を求めすら大抵の事に
 非ず、漸く求め果せても火災水害の恐れあり、偶
 に之を遁れても又朽滅に至る、況や其中に住居す
 る人はと云へば、老少不定生必滅永く止まる者
 はない、畢竟して云へば此界の事は住居する人も、
 住まわるゝ家も無くならぬものはない、既に釋尊
 の御住居なされた舍衛國の祇園精舍すら、今は莽
 々たる野原となつて居ると云ふ、佛の住み玉ひし
 所さへ其通り、況や凡夫の住所何ぞ永く止まらん
 云々、然るに南無阿彌陀佛と唱へてさへ居れば、命
 終り次第極樂に生じ、七寶を以て建たる宮殿樓閣
 を我住居所として、無量無邊の樂を受くる身の上
 となる、能住の身は無量の壽、所住の殿は一立古
 今然無衰無變の淨土、彼此比べて得失を知るべし、

斯うした先きの見わた有難い事のあるのに、唱へ
 ずに居る業障の程悲むべし云々、然れば此世の住處
 は、造立するにも金銀がなければならず、拵へ果
 せても長くは持たず、其間の造罪も又幾くぞや、
 然るを念佛の行者はつい申た計で、一立古今然の
 七寶所成の宮殿樓閣を住居處とする身の上となる
 は、偏に此本願に逢ひ奉りし御蔭なれば、喜ぶ思
 ひに懈怠なく、進んで稱名相續せらるべし。

爲醫造宅 (托、事實部卷一)

先づ醫師の手柄とは、我等が念佛なり、王より宅
 を造るとは、如來我等が住居する宮殿を莊り玉ふ
 なり、醫者の御褒美なきを恨むは、我家を見ぬ故
 なり、(是れ己が根性の狭き故なり)我等念佛申せ
 ば何ぞ現益の證もあるべき事など思ふは、未だ極
 樂を見ず根性少き故なり、王の心では五拾兩や百
 兩位の事は禮とは思召さぬが如く、如來の御心で
 は此世で好いの現益のと云ふ位の事は物の數とは
 思召さぬのである、偕又醫師は不足ながら國境迄

歸りたれば、肝のつふる、行列で迎ひに來りし如
 く、我等濫々ながらも唱へて居れば、此世彼世の國
 境になると、阿彌陀如來を先きにたて、多くの菩
 薩御迎ひに來り玉ふ、彼の中小性が手を取りて駕
 に乗せた如く、觀音のさしよせ玉ふ蓮臺へ勢至菩
 薩が抱き乗せて下さるゝなり、夫より醫師が本國
 へ歸つて見れば結構なる家宅のありし如く、御來
 迎に預つて極樂へ往生して見れば、七重の行樹等
 光を争ひ、八功德池の堀水湛々、其上には七寶の
 宮殿が在て、其所を我等の住居所とするので、其
 時には彼の見馴れた女房の迎ひに出でし如く、別
 れし兩親妻子にも對面するなり、そこで醫師が内
 へ歸つて王の御恩を有難き事と知るなり、醫者の
 不足ながら王城に逗留して居た内が、國で結構な
 普請最中なり、されば人々見ねはせねども斯ふ唱
 へて居る内が、極樂で我住居所の宮殿樓閣の出來
 る最中なる程に、追付け結構な屋移りをする身の
 上となり得る事を打ち喜んで相續し、上來所説の
 寶林寶池寶樓を遊び所とする様にせらるべし。

(167)

第二十五席

池^レ中^レ蓮^レ華^レ大^レ如^レ車^レ輪^レ青^レ色^レ青^レ光^レ黃^レ色^レ黃^レ光^レ赤^レ色^レ赤^レ光^レ白^レ色^レ白^レ光^レ微^レ妙^レ香^レ潔^レ舍^レ利^レ弗^レ極^レ樂^レ國^レ土^レ成^レ就^レ如^レ是^レ功^レ德^レ莊^レ嚴^レ文^レ上^レ來^レ小^レ經^レ依^レ報^レ莊^レ嚴^レの^レ下^レに^レ樹^レの^レ莊^レ嚴^レより^レ始^レめて、前^レ席^レは^レ其^レ次^レ、池^レ閣^レ蓮^レ華^レ莊^レ嚴^レの^レ段^レを^レ辨^レず^レる^レ下^レに、五^レ節^レあ^レる^レ中^レ、一^レに^レ池^レ二^レに^レ階^レ道^レ、三^レに^レ宮^レ殿^レの^レ三^レ段^レを^レ辨^レじ^レ已^レれ^レり、今^レ席^レは^レ第^レ四^レ蓮^レ華^レ莊^レ嚴^レより^レ辨^レせ^レん、(此^レ下^レは^レ念^レ佛^レ者^レの^レ至^レて^レ肝^レ要^レなる^レ所^レな^レれ^レば、別^レして^レ心^レを^レ止^レめ^レて^レき^レく^レべ^レし)雲^レ棲^レ大^レ師^レ釋^レして^レ云^レは^レく、又^レ蓮^レ華^レ者^レ、往^レ生^レ彼^レ國^レ托^レ質^レ之^レ處^レ、念^レ佛^レ之^レ人^レ特^レ宜^レ知^レ此^レ云^レ々。

池^レ中^レ蓮^レ華^レ大^レ如^レ車^レ輪^レ文^レ上^レに^レ説^レく^レ如^レく^レ七^レ寶^レを^レ以^レて^レ莊^レる^レ階^レを^レ登^レり、宮^レ殿^レより^レ下^レを^レ見^レ下^レせば^レ七^レ寶^レの^レ池^レに^レ八^レ功^レ德^レ水^レなん^レく^レと^レ湛^レひ^レて、底^レに^レは^レ純^レ黃^レ金^レを^レ布^レく、其中^レに^レ蓮^レ花^レが^レ咲^レき^レ亂^レれ^レて^レ居^レる、其^レ大^レさ^レが^レ車^レ輪^レの^レ如^レし^レと^レあ^レる、偕^レて^レ此^レ蓮^レ華^レは^レ何^レ故^レに^レ出^レ來^レる^レぞ^レと^レ云^レふに、南^レ無^レ阿^レ彌^レ陀^レ佛^レと^レ唱^レへ^レた^レ者^レの^レ往^レ生^レして^レ乘^レる^レ爲^レの^レ蓮^レ花^レなり、依^レて^レ五^レ會^レ法^レ事^レ讚^レに^レ云^レ、此^レ界^レ一^レ人^レ念^レ佛^レ名^レ西

方便有^レ二^レ蓮^レ生^レ、但^レ使^レ三^レ生^レ常^レ不^レ退^レ、此^レ華^レ還^レ到^レ此^レ間^レ迎^レ、と^レて^レ南^レ無^レ阿^レ彌^レ陀^レ佛^レと^レ唱^レへ^レた^レなら^レば、直^レに^レ極^レ樂^レの^レ八^レ功^レ德^レに^レ一^レの^レ蓮^レ華^レが^レ生^レじて、夫^レれに^レ標^レ名^レと^レて^レ金^レの^レ札^レに^レ名^レが^レ記^レさ^レれて^レ立^レつ^レと^レなり、斯^レく^レ聞^レくと^レ疑^レが^レ起^レり^レた^レが^レる^レは、此^レ土^レで^レ唱^レへ^レた^レ念^レ佛^レに^レ依^レて、彼^レ土^レへ^レ直^レに^レ蓮^レ華^レが^レ生^レへ^レると^レは^レ合^レ點^レが^レゆ^レか^レんと、此^レ疑^レを^レは^レら^レさん^レ爲^レに^レ道^レ理^レを^レ以^レて^レ示^レさん。

總^レじて^レ心^レと^レ云^レふ^レもの^レは、人^レ々^レの^レ胸^レの^レ中^レ計^レり^レに^レあ^レる^レと^レ思^レふ^レは^レ迷^レひ^レなり、心^レとい^レふ^レもの^レは^レ法^レ界^レに^レ遍^レ滿^レして^レ居^レて^レ目^レにも^レ見^レへ^レず、長^レ短^レ方^レ圓^レの^レ形^レな^レく^レして^レ而^レして^レ法^レ界^レに^レ滿^レち^レて^レ居^レる^レ故^レ、華^レ嚴^レにも^レ三^レ界^レ唯^レ一^レ心^レ々^レ外^レ無^レ別^レ法^レと^レ説^レか^レれた^レり、其^レ心^レに^レ迷^レ悟^レの^レ異^レあ^レれ^レども^レ如^レ々^レ同^レ一^レなり、依^レて^レ迷^レへ^レる^レ我^レ々^レが^レ心^レにも^レせ^レよ、往^レ生^レしたい^レと^レ思^レふ^レ心^レにも^レせ^レよ、皆^レ法^レ界^レに^レ遍^レ滿^レして^レ居^レる、又^レ悟^レり^レ玉^レふ^レ佛^レの^レ御^レ心^レに^レ不^レ便^レや^レ助^レけ^レ度^レと^レ思^レ召^レ御^レ心^レも、同^レじ^レく^レ法^レ界^レに^レ遍^レ滿^レして^レ在^レす、依^レて^レ迷^レへ^レる^レ心^レが^レ悟^レれる^レ心^レに^レ引^レ立^レられ、心^レが^レ通^レ徹^レして^レ助^レけ^レ玉^レへ^レ南^レ無^レ阿^レ彌^レ陀^レ佛^レと^レ唱^レふ^レると、直^レに^レ極^レ樂^レへ^レ蓮^レ華^レと^レ驗^レが^レ顯^レは^レる^レなり、依^レて^レ此^レ界^レ一^レ人^レ等^レと^レ釋^レせ^レられた^レ、是^レれ^レ心

の^レ通^レ徹^レせ^レると^レい^レふ^レもの^レなり、此^レ趣^レき^レ例^レして^レ云^レは^レく(五^レ經^レと^レ程^レ明^レ道^レの^レ事^レ托^レ事^レ實^レ部^レ卷^レ一^レ後^レ妻^レの^レ妬^レ念^レ先^レ妻^レの^レ墓^レより^レ炎^レと^レ立^レ上^レる^レ事^レ等)是^レれ^レ皆^レ心^レの^レ通^レ徹^レす^レる^レ姿^レなり、言^レは^レざる^レに^レ自^レ然^レと^レ通^レず^レる^レは^レ不^レ思^レ議^レなり、其^レ不^レ思^レ議^レは^レ一^レ里^レ隔^レつ^レも^レ十^レ萬^レ億^レ土^レを^レ隔^レつ^レも^レ同^レじ^レ事^レ、程^レ明^レ道^レも^レ五^レ經^レの^レ事^レを^レ聞^レて^レ床^レし^レく^レ思^レひ、五^レ經^レも^レ又^レ明^レ道^レの^レ大^レ儒^レなる^レ事^レを^レ聞^レて^レ常^レに^レ逢^レ度^レ思^レひ^レ居^レた^レる^レ故^レ、自^レら^レひ^レき^レし^レなり、既^レに^レ凡^レ夫^レの^レ中^レで^レさ^レへ、五^レ經^レが^レ方^レで^レ明^レ道^レの^レ事^レを^レ思^レふ^レて^レ居^レり^レしか^レば、明^レ道^レが^レ思^レひ^レつ^レくと、其^レ心^レ直^レに^レ通^レじて^レ待^レち^レ受^レけ^レ茶^レを^レ求^レめ^レに^レ行^レき^レし^レなり、況^レや^レ十^レ劫^レ以^レ來^レ「頼^レめ^レ人^レ頼^レむ^レ人^レに^レは^レ頼^レま^レれ^レん、頼^レまぬ^レ人^レも^レ頼^レめ^レぞ^レと^レ思^レふ」と^レ念^レじ^レに^レ念^レじて^レ待^レち^レ玉^レへ^レる^レ如^レ來^レの^レ淨^レ土^レな^レれば、僅^レか^レにも^レ思^レひ^レつ^レか^レば^レ其^レ心^レが^レ届^レか^レい^レで^レい^レか^レす^レべき^レや、其^レ届^レいた^レ姿^レが^レ蓮^レ華^レとな^レつ^レて^レ往^レ生^レを^レ待^レち^レ設^レけて^レ居^レる^レが、則^レち^レ此^レ池^レ中^レの^レ蓮^レ華^レな^レり、先^レづ^レ是^レで^レ道^レは^レ隔^レて^レども^レ心^レの^レ届^レく^レとい^レふ^レ道^レ理^レは^レす^レむ、時^レに^レ今^レ一^レつ^レ詮^レ議^レせば、其^レ心^レが^レ届^レけば^レ何^レ故^レに^レ蓮^レ華^レが^レ生^レず^レる^レぞ、餘^レの^レ花^レでも^レ生^レじ^レそ^レう^レな^レもの^レぢ^レや^レが^レとい^レふ^レに、是^レれ^レ亦^レ蓮^レ華^レで^レな^レければ^レなら^レぬ^レ道^レ理^レあ

り、其^レ道^レ理^レとは、心^レと^レ云^レふ^レもの^レは^レ我^レ身^レの^レ中^レに^レ於^レて^レ強^レて^レ貌^レを^レ云^レふ^レ時^レは、肉^レ團^レ八^レ葉^レと^レ云^レて^レ八^レ葉^レの^レ蓮^レ華^レと^レ定^レむ、此^レ事^レは^レ醫^レ家^レの^レ針^レ灸^レ聚^レ會^レと^レ云^レふ^レ書^レにも、未^レ敷^レの^レ蓮^レ華^レの^レ如^レし^レと^レあ^レる、如^レ是^レ心^レの^レ形^レは^レ一^レ應^レ云^レふ^レ時^レは^レ蓮^レ花^レの^レ如^レき^レもの^レなり、其^レ蓮^レ花^レの^レ如^レき^レ佛^レの^レ御^レ心^レと^レ衆^レ生^レの^レ心^レと^レ間^レに^レ髪^レを^レい^レれ^レず、必^レ至^レと^レ合^レした^レ所^レより^レ生^レず^レる^レもの^レな^レれば、い^レや^レでも^レ蓮^レ花^レで^レな^レければ^レなら^レぬ、依^レて^レ此^レ界^レ一^レ人^レ乃^レ至^レ此^レ間^レ迎^レと^レ釋^レし^レ玉^レふ、則^レち^レ此^レ蓮^レ華^レ、臨^レ終^レに^レは^レ觀^レ音^レ菩^レ薩^レの^レさ^レし^レよ^レせ^レ玉^レふ^レに^レ打^レち^レ乘^レて^レ往^レ生^レを^レ遂^レぐる^レなり、先^レづ^レ是^レで^レ局^レて^レ蓮^レ花^レの^レ生^レず^レる^レ義^レも^レ知^レれ^レ已^レる、上^レ來^レは^レ且^レく^レ疑^レを^レ拂^レはん^レ爲^レに^レ道^レ理^レを^レ述^レべ^レた^レり、是^レより^レ下^レは^レ別^レして^レ彌^レ陀^レ大^レ悲^レの^レ徹^レ底^レを^レ開^レ示^レす^レる^レ事^レな^レれば、彌^レ々^レ心^レを^レ用^レひ^レて^レ大^レ切^レに^レ聞^レく^レべ^レし、十^レ住^レ毘^レ婆^レ婆^レ論^レに^レ云^レは^レく、疑^レ則^レ花^レ不^レ開^レ云^レ々、雲^レ棲^レの^レ云^レは^レく、此^レ方^レに^レして^レ念^レ佛^レす^レれば^レ華^レに^レ即^レ名^レを^レ標^レす、勤^レ惰^レ纒^レに^レ分^レれば^レ榮^レ枯^レ頓^レに^レ異^レなり、是^レを^レ感^レ應^レ冥^レ符^レ妙^レと^レ爲^レす、と^レあ^レつ^レて^レ勤^レむ^レれば^レ其^レ蓮^レ華^レが^レ榮^レぬ、退^レ轉^レす^レれば^レ枯^レる、と^レ釋^レし^レ玉^レへ^レり、又^レ聖^レ覺^レ法^レ印^レの^レ云^レは^レく、我^レ等^レ不^レ念^レ佛^レ則^レ彼^レ池^レ荒^レ廢、我^レ等^レ不^レ欣^レ求^レ則^レ其^レ國^レ衰^レ弊、

(170)

國賑佛樂以念佛爲本、人願我望以念佛爲本、(略解すべし)と人々此所に於て佛の御意を思ひやり、進で念佛せらるべし、其趣き聞ゆ易きやう、父子相迎に和解し玉へり(諺註下末四丁)

さて此界に念佛するものできぬれば、必ずかしこにひとつのはちす生ず、念佛をこたらざれば花ひびにひらけ、すたるれば又むなしくしほむ、(上の釋の如し)ひらくるをりは聖衆ごぞりて(彌陀如來を始め奉り、海會の菩薩方を指すなり)往生近づきぬとよるこび、しほむをりは流轉のびぬと悲しみいます、大悲のかぎりなさは、いかばかりげに思ひ給ふらん、と實に此時の御喜びと御悲みは思ひやらるゝ事なり、例へば人々思ひ付て佛華にせんとて、瓶に蓮根を植ゑ置くに一葉二葉と日々勢よく葉を出す時は心地よく嬉しく思ふ、然るに若し此生に出たる葉が空しく枯るゝか、或は鳥の類にくわへ出さるゝか、又子供でも取れば腹が立て、可愛い子なれども頭の一つ位は叩くであるう、僅かに思ひ付たる事さへ榮枯に心の悲喜は各

別、これから推して見るべし、如來は五劫に思ひを盡し兆載永劫の御修行は、我等を蓮臺上に迎へ取り玉はん爲ばかり也、其我々を助け玉ふ印の蓮花の枯れしほむを、みそなはず御嘆きはいか計りならん、又此本願を成就し玉ひて八功德池をかまへ、念佛者が出來ると其乗るべき蓮華の生ずる様になし置て、十劫以來待ち詫び玉ふ所に、思召の儘に蓮華の生ずるを見玉は、いか計りの御喜びならん、去れば萬一生きたる花の空しく枯るゝを見玉ふ時には、人々の一子を失ひたるより百千萬倍勝りて悲しく思召さるゝなり、然れば大恩ある佛を歎かせ奉らうと喜ばせ奉らうと人々の心次第なり、誠に人間の心あらば久しく御苦勞をかけ奉りし替りには、如何やうなる事をしてなりとも、喜ばしめ奉り度と思ふべき筈に非ずや、(其心なきは人間とは思はれぬ)此道理を能々思ひ明めて念佛申にかゝりし輩は、生ひ出でし花を榮ゑさせ、佛を喜ばせ奉らんと思ふにつけても、随分進んで唱ふべきなり。

(171)

大如三車輪とは是に古より論のある事なり、車輪は漸く四五尺位のものなり、然るに今經には車輪とあり、觀經には十二由旬とあり、大阿彌陀經には百千由旬ともある、今は相違に非ずやと云ふに、今車輪と喩へ玉ふたは此土の車に非ず、輪王所持の車に喩へ玉ふたのなり、其轉輪聖王の所持の千輻金輪と云ふ車にすると、極樂の蓮華に一分譬へらるゝなり、其車の大きさは十住毘婆沙論に依るに、周圓十五里とあれば大きな車なり、此車の出來た事から申と合點が行き易いから、大略を示さう、先づ轉輪聖王と云ふは、須彌の四天下を領し玉ふ王なり、輪王に四種ありて一天下を領するあり、二三四を領するあり、四天下を領するを轉輪聖王と云ふて、餘の三人は聖の字を除いて唯輪王と云ふ、此四人の王各々輪寶と云ふ車を帝釋天より授り玉ふ、其車の眞木を敷と云ひ、中の矢傘の骨の如きを輻と云ふ、(輪寶とは輪王七寶の第一なり)此の輪王に四種あり、鐵輪王は一天下に王として鐵の輪寶二百五十輛あり、銅輪王は二天下に王

として銅の輪寶五百輛あり、銀輪王は三天下に王として銀の輪寶七百五十輛あり、金輪王は四天下に王として金の輪寶千輛あり、云何輪寶成就するとならば、轉輪聖王閻浮提に在るに、卽位灌頂已て十五日の満つる時、香湯を以て沐浴し高樓の上に登つて坐するに、天の金輪頓に目前に現じ、千輪及光色具足して天匠の造る所世にある所に非ず、王見已て自ら轉輪王なることを知て則車に指さし、汝四天下を回り來れとの玉ふ時、輪寶飛行して一念の頃に四天下を回り已て、又輪王の頂上に住す、若し轉輪王東方に往んと欲する心發る時は輪寶東に行く、高山左右に分れて道を開き海水四方に散して金沙の道を現す、行く所に隨て萬國の諸王皆臣と稱して歸伏し供養し已て、十善業の教化を受て、各々其國を平治す、南西北方亦復如是、此輪寶は帝釋天、毘首羯摩に勅して造らしめ持して毘沙門天に附す、毘沙門天持して飛行、夜叉に附して云く、汝常に輪王の爲に此金輪を以て王の頂上に中て、其壽命の終るまで半に棄る事を

得され、此夜又常に之を持して進止去來聖王の意に隨ふ、其壽命盡れば持し還て毘沙門に附す、毘沙門は毘首羯摩に附し、毘首羯摩は持し歸て帝釋寶藏中に入れ置く云々、已上の説、長阿含並樓炭經、仁王經、譬喻經等に依る、洵に是れ自在なる車に非ずや、四天下を巡らんと思召せば一念の頃に回り、山に向へば山分れて平地となり、海に至れば金沙の道を現すると云やうなる奇妙不思議の車ゆゑ、極樂の蓮華を是に譬へ玉へり、猶此事を篤と合點するには、三段三義を立て、談すると明白に分るなり、其三段とは一には數量を譬へ、二には形相を譬へ、三には徳用を例へ玉へり、第一數量に譬ふとは、此事は大さ十五里とある、然るに極樂の蓮華に團圓正當十二由旬(四十里)のもあり、又大本稱讚經等には或は一由旬乃至百千由旬と大小不定なり、大とも小とも説てあれば、此經には小の方を譬へ玉ひて車輪の如しと、數量の似よるに就て示し玉へり、第二形相に譬ふとは、此車は天帝毘首羯摩に仰せ付られて、金を以て作る所

の團圓正當なる車なり、其上に此車よりは百千無量の光を放つ、極樂の蓮華も又其如く、團圓正當にして、金色等の百千無量の色あり、其色より無量の光明を放つ蓮華なり、其形相一分相似である故、車輪の如しと譬へ玉へり、第三徳用に譬ふとは、此事は常の車に異なりて聖王乗り玉へば天下を巡り、諸王へ十善業の教法を授け玉ふ徳のある事なり、極樂の蓮華も又然り、往生遂て蓮華に乗れば衆生を自在に化益する、其本はと云へば南無阿彌陀佛と唱へた其印が、極樂へ蓮華と形れた故なり、然れば化益の自由に出来るは蓮華の徳なり、斯く徳用の似よりたる故、車輪の如しと譬へ玉へり、偕て此徳用と云ふに付て又三義あり、一には輪轉の義、この聖王の車には油さすにも及ばず、上が下になり下が上になつて速疾に轉じて四天下を回る云々、今此蓮華にも此徳あり、謂く我々念佛は唱ふれども未だ凡夫の事なれば、天上聲聞菩薩の下にあれども、臨終には觀音菩薩のさしよせ玉ふ蓮花に乗ると、直に此不淨の身が金色不

壞の身と轉じ、迷ひの心は悟りの心と轉する故、天上聲聞等の上になる云々、地獄の下へ落ちむべきものが、極樂の上へ登る、是れ輪轉の義、大如車輪云々、二には碎破の義、此車の通る時は海水も散じ高山をもきしり破の義あり、今此蓮花にも其義あり、蓮花に乗るや否、天魔の山煩惱の海をもきしり破りて妨ぐる事叶はざるなり、依て經には閉塞諸惡道等とある、三塗戸ほそを閉づるなり、譬へば將車御上洛の時は脇道を塞ぎ戸に目張をする云々、盜賊等の妨あらんや、蓮華に乗る時は其如く、天魔も退散業繫も引く事能はず、障難の脇道は悉く塞り、唯往生の金沙の大道のみが通する云々、依て聖王の車に譬へて大如車輪云々、三には飛行の義、聖王の車は一日の中に四天下を巡る、誠は是れ程早き事はない、此蓮花も亦爾り、我々は觀音のさしよせ玉ふ蓮臺に乗るやいな、如彈指頭とつまはじきする内に極樂に往生を遂る云々、上來の如く數々の徳ある車故、是を極樂の蓮花に譬へて、大如車輪と御演説遊ばされたり。

青色青光黄色黄光赤光白光微妙香潔文池中を見れば無量の蓮花あり、青色には青き光あり白色には白き光あり、今此四色を出し玉ふは、且く純色のもの、みを説き玉ふ、則ち四色を擧げて餘色をすべ顯はしたるにて、實には衆色あり、依て大本には無量種色と標して、且く青白玄黄朱紫の六色を出し、觀經には七寶の蓮花と説き、唐釋にも種々雜色の蓮花と標して四色を擧ぐ、然れば彼此照し合ふて見れば百千萬種の色あり、其色毎より百千無量の光を放つ蓮花ぞと云ふ事を、且く四色を擧げて顯はし玉へり、微妙香潔とは、微なり妙なり香なり潔なりと、四通りに讚歎なされたので、微とは精微の義にして委く細かな事を云ふ、蓮を微と讚歎なされたは華の色どり甚だ細やかなれば也、其事は觀經に一々葉上八萬四千脈ありて八萬四千の光を放つとありて、其細やかなる事得も言へぬ事なれば、微と譽め玉へり、妙とは言語同斷不可思議を妙と云ふ、華葉光色の超勝せるを云ふ、妙の字は少(若)き女の亂れ髪、いふにいはいれ

すどくにとかれず、(又其不思議を云は、極樂へは十萬億土の道を隔てたるに、此界にて念佛すれば其花に名を標し、又其蓮花が我々の臨終の夕には、迎に來ると云ふは不思議中の不思議といふべし)香とは蓮は花の君子とて此界のだからがい薫りなり、況や極樂の香氣に於てをや、故に大本には芬々馥郁不可勝言とあり、寶池蓮華不可勝言、故に香と讚歎なされた、潔とは潔白とつゞきて潔きと云ふ義なり、此土でさへ衆花に勝れて潔きものなり、七寶池中の金沙より生へ出づる蓮花なれば、其潔き事いか計りならん、故に釋尊池中蓮華乃至微妙香潔と讚歎なされたり。

舍利弗極樂國土成就如是功德莊嚴、是は第五結成莊嚴なり、如是とは總じて上の七重の寶樹より七寶池七寶宮殿七寶蓮華等の莊嚴をさす、成就とは俱舍論に、得已不_レ失成就と云ふと、今は十劫已前に本願を成じ、夫より今に至り猶ほ是より未來際を盡して、極樂の莊嚴の變ると云ふ事なきを成就と云ふなり、功德とは彌陀如來因中に發し玉ふ所

の大願、及び願後に修し玉ふ所の大行、無量の功德を以て成就し玉ふぞと云ふ事なり、此功德を積集し玉ふ事はなみ大抵の事でない、無央數劫の久しき間の御苦勞なり、其御苦勞は何の爲ぞ、皆我等を助けん爲め我等に快樂を與へん爲めに非ずや、(時宜に依りて此間に眞珠帶の因縁を入れて辨せよ)〔托、譬喻之部卷三〕其御苦勞を餘所に思ふ道理はない事なれば、身に引請けて御恩を知り、若し此度本願に逢はずは地獄に墮すべき我々が、斯くまで結構なる莊嚴の淨土へ御迎へ下さるゝ事の有がたさよと心を進め、なるだけは勇で稱名相續。

第二十六席

又舍利弗彼佛國土常作天樂、黃金爲地晝夜六時而雨曼陀羅華、其國衆生常以清且各以衣被盛衆妙華、供養佗方十萬億佛、即以食時還到本國、飯食經行舍利弗極樂國土成就如是功德莊嚴、是は第五結成莊嚴なり、如是とは總じて上の七重の寶樹より七寶池七寶宮殿七寶蓮華等の莊嚴をさす、成就とは俱舍論に、得已不_レ失成就と云ふと、今は十劫已前に本願を成じ、夫より今に至り猶ほ是より未來際を盡して、極樂の莊嚴の變ると云ふ事なきを成就と云ふなり、功德とは彌陀如來因中に發し玉ふ所

には池閣蓮花莊嚴の段を終り、今席は金地樂華の段を辨す、文に又舍利弗彼佛國土常作天樂とある、極樂には常に音樂が聞けるとなり、天樂と云へば天から音樂が聞けると云ふ様なれども、此天と云ふは虚空の天に非ず、天竺の詞で勝れたるを天と云ふ、(天は稱美の言葉なり)然れば今の天樂と云ふは微妙の音樂と云ふ事なり、偕又常に音樂が聞けると聞いて、此界に準じて常住になれば物に飽くものなれば、如何と思はれまじきものに非ず、境界が違へば此界には準へられぬ、彼界にては常に天樂を聞くに、其樂みと云ひ又功德を得る事はかりなり、故に稱讚經に云、常有無量無邊衆妙伎樂、音曲和雅甚可愛樂、諸有情類聞斯妙音、諸惡煩惱悉皆消滅、無量善法漸々增長、速證無上正等菩提、已上、如是功德を成就する音樂なれば、聞ても聞ても聞たいと云ふ心になつて、いやなと思ふ心は毛頭なき故今舍利弗彼佛國土常作天樂と説き玉へり。

黃金爲地、とは極樂の地は黄金を以て地とする

なり、是に就て論あり、所以は觀經には瑠璃地と説き、大經には七寶の地と説き、今經には金地と説く、三經一轍なるものを何ぞ如是區々なるぞと云ふに、三經別説は影略互顯と云ふて、片よらせぬ爲に説き玉ふ也、極樂の地に種々の色ある事を大經にて説き、其種々の寶色が映徹することを觀經にて顯はし、今經は其寶の中の最上を顯はし玉ふ所なれば、是れ甚の巧説にて之を影略互顯と云ふ、又互顯ならば、大經觀經にて金地と説き、今經にて衆色と説き玉ひても宜しかるべきに、純金地と説き玉ふに其いはれありやと云ふに、此の難は不盡の難なり云々、去れども強て謂は、其所以なきにあらず、彼兩經に七寶と映徹とを説き玉ふは、大經には三輩章に諸行を説き、觀經には三福九品定散の諸行を説き玉ふ故、七寶或は映徹を説き、今經には諸行をば一句一字も説き交せず、専ら本願念佛の一法のみを説き玉へば、純一の金地を説き玉ふなり、又金は衆寶の最上、念佛は諸行の中の最上、餘寶を説かず最上の金地と説き、諸行は不可

以少善根と拂却し、唯本願念佛の一行のみ萬徳所歸の大善根ぞと、上なき微妙の^一法を御演説の經なる故、黄金爲地と説き玉ふ、晝夜六時とは晝六時夜六時を合して云ふ、極樂には光明常に照して日月なしといへば、何を以て晝夜を分つぞと云ふに、(此に晝夜六時と云ふは、且く此方の機に順じて説く)諸佛菩薩禪定に入り華も合し鳥も聲を収むる其間を夜と云ひ、其外を晝と定むるなり、(悲華經の意、小經合贊に出)而雨とは此而の字義理者難し、異本には而の字なし、今流行は慈覺大師將來の本なるに、是に而の字あり、(或か云く、^天字を而に寫し謬れるかと、しかれば天雨なる筈也)。曼陀羅華 是れ且く一華を説き玉ふ、實は衆華を雨す、故に下に盛衆妙華と云ふ、曼陀羅華此には適意華と云ふ、光潔異光聞く者心身適悦し道情を長するが故にと、又大方廣寶篋經曰、曼陀羅華、無風之時、香氣普遍、滿一由旬、有^一麝香者、一切病癒、無^一諸苦患と、又稱讚淨土經云、常雨種種上妙天華、光澤香潔細軟雜色、雖令見者身心

適悦而不^一貪著、増^一長有情殊勝功德已上、斯やうの花ふれども貪著の心なく功德を得るなり、其状態思ひやつて知るべし、耳に聞く所は常住妙へなる音楽にて心を悦ばしめ(此界では常住耳に聞くは、我他彼此云々愁歎の聲)住所は七寶の宮殿(此界の住所は朽破常ならず)外へ出づれば大地は黄金、(此界の大地は、泥土瓦礫に糞穢を交ゆ、糞の小路を歸の小路と改名の事云々)及び衆寶間錯して光を争ふ所へ、天より種々の妙華は芬々と降り下る、(此界にて天より降るは、雨露雪雹霧霧等云々)地上に積りて莊嚴を重ね、其の上を歩行すれば陷下四寸と柔軟にくぼみ、足を擧ぐればもとに復す、其華の香をきけば自然に殊勝の功德を得ると、斯く一端を云ふにさへ取り集めたる樂みに非ずや、斯る功德の華なれば而^一曼陀羅華と説き玉へり、其國衆生 己往の菩薩を指す、既に念佛して往生を遂げ、今や快樂を受用し玉ふとは、實に羨き事に非ずや、我等は常に生死の苦を受け、夢にも其境界を拜んだ事のなきは、悲しき極みに非ずや、

然れども此度本願を信じて念佛するからは、今にも目を塞ぎ次第其境界に至る身の上なれば、必ず退轉せず、其國衆生の仲間に入るべきなり、常以^一清旦 清旦とは晨朝なり朝早々の事を云ふ、是より下諸佛供養の段なり云云、各以^一衣鉢 衣鉢とは華を盛るの器にして、箱の蓋の如きものなり、盛^一衆妙華 是れ天より雨る曼陀羅華等の衆の妙華を衣鉢に盛るを云ふ、供^一養他方十萬億佛 他方諸佛國の佛を供養する事なり、餘佛さへ如^一是、況や教主の阿彌陀如來は彌々の事なり、されば斯く朝な^一佛を供養するが極樂の所作なり、此土の營みは苦因苦果とて惡業のみをなして、又來世に其報ひをつぐなふ苦を受くるなり、去れば人々南無阿彌陀佛くと分々に唱へてさへ居れば、來世は供佛の營みを爲す身の上となる事なれば、唯一筋に稱名せらるべし、又此所で一行を専らにせよと勧める事をも能く合點するがよい、一筋に念佛して脇平見す往生を願へと云へば、偏屈な杯と

云ふ人あり、是れ大なる誤りなり、非本願の行を修しては出離がならぬ故、十方の佛土へ往く事はならぬ、本願の稱名なれば順次決定往生を遂ぐる極樂へ往生すれば右の如く十方の佛土へ自由自在に往詣して供養をなす、此の得失の別れめを合起點すると、一行とは偏屈な杯と云ふ様な僻見はらぬなり。(法澤律師の解嘲) 即以^一食時 還^一到本國 飯食經行 十方の諸佛を一念の間に供養して、極樂に歸り御齋を受用するなり、其飯食の事は、大經に曰く、若欲^一食時、七寶鉢器自然在^一前、百味飲食自然盈滿、雖^一有^一此食、實無^一食者、但見^一色聞^一香意以爲^一足とありて、食時に至れば七寶の鉢自ら前に在りて、百味の飯食其中に現するなれども、是を此方の様に喰ひはせぬ、唯其色を見其香を臭げば自然に飽足す、もうよいと思へば鉢器又自ら去ると云ふ、此の様子を此界の有様に比べて思ふべし、一食の造作安排から食し已て、洗拭收擧其勞繁いかばかりぞや猶求め、

(478)

て得られぬ類の困難は言にも述べ難し、假令得られたにしても「三度喰ふ飯さへこわしやわらかし、思ふまゝにはならぬ世の中」の類多かるべし、然るに一旦極樂へ往生すれば、食せんと欲するもの自然に前に現じ、食し訖れば自然に去る更に心を煩はすことなしと、此得失よく考へ見るべし云云、經行とは齋食訖つて池の邊り或は寶地宮殿等のあたりを行道する事を云ふ、上にも云ふ如く、此世の業は思ひと想ふ事爲しと作す事皆苦の因計りなるに、往生しての所作は唯佛を供養し悟りを進むことのみなれば、頓て成等正覺に至る、其果報得益の本はと云へば、唯一向に南無阿彌陀佛と唱ふる計りで得る事なれば、人々進で相續が肝要、舍利弗極樂國土成就如是功德莊嚴（是れ結文にて上の如し、上よりざつと文を讀むべし）偕て上來の如く結構なる所が我々の住所なり、朝な夕な諸佛を供養する樂み、見るにつけ聞くにつけ思ふにつけ證りを進む喜び、中々千萬億の一分も言葉に述べらるゝ事に非ず、問ふ一念の頃に十方諸佛を

供養して歸るとは、合點のゆかぬ事ぢやと云ふに、是は彌陀如來の願力に依るが故なり、則ち四十八願の中の第二十三は供養諸佛の願、文に曰く、設我得佛、國中菩薩承佛神力、供養諸佛一食之頃、不能徧至無量那由他諸佛國者、不取正覺也、此願は他國の菩薩の諸佛を供養する事の自由ならざるを見玉ひて、我國の菩薩は諸佛を供養せんと思はゞ、佛の威神力を得て一食の間に徧く諸佛の國に至る事を得させんとなり、成程願力なれば十方の諸佛を一食一念の頃に供養するならん、されど餘り早いので引札か供養袋でも配るやうであらう、却も叮嚀に供養は出來まいと云ふに、早卒佛を供養する法には非ず、至て叮嚀に出來得る也、今此事を示さば、凡そ一心は實相なり、實相は無相にして定相なし、長短方圓の數量に度らず法界に遍滿して居るので、法界中のもの一として心を離れたるものなし、されば時にも定相なし、定相なければ早い早いにもあらず遅いが遅いにも非ず、其證は往者定光如來、法華經を六十劫の間説

き玉ふに、聞くものは漸く一日一夜の様に覺れたとある、是れ定相なき證據なり、猶手近く云はゞ誰も知つて居る盧生が事云々。

べきなり云々。

第二十七席

此の縁に由て時々定相のなき假立の姿知るべし、猶この縁に就て人々の心得あり、實に此世の事は盧生が發明した通り、どの様に出世したからとて夢の世の事なり、死して後何の益かある、爾れば念佛するもの貧窮或は病氣にても苦むは、大名が乞食になりたる夢を見る如く、又念佛嫌に吹きつける程幸のあるは、乞食が大名になつた夢を見る如くなり、善きも悪きも夢中の戯、夫れに心を奪はれて念佛怠るなどは、實に淺聞敷事に非ずや、憂きもつらきも今暫時、御念佛さへ唱へて居れば、今にも命の終り次第、極樂に往生遂げなば、苦と云ふ苦は夢にも見ず、朝な朝なに妙華を捧げ十方世界の諸佛を供養し、見聞覺知見るにも聞くにも無量百千三昧を得る營み計りして、我に縁ある者を先とし無縁の衆生も誘引して、苦を抜き樂を與へんものと、後の果報に眼を就て稱名勇進せらる

復次舍利弗乃至功德莊嚴文上來講する阿彌陀經、正宗分依報莊嚴の下、前席までに寶樹、寶池、寶樓宮殿、蓮華、天樂飯食等の功德莊嚴迄を辨じ已りて、今席は化鳥風樹の莊嚴とて、極樂の諸鳥の轉る事と、寶樹寶林を吹き渡る風の聲との事を説き玉ふ下なり、先づ初に論じて置ねばならぬ事あり、總じて生のあるを正報とし非情を依報とするが定りなれども、爰に説きたる諸鳥をば依報に屬する故は、八功德池の底に摩尼珠あり是より光を放つ、其光より顯はるゝが極樂の諸鳥なり、依て正報に收めず依報に屬するなり。

復次舍利彼國常有種種奇妙雜色之鳥、文常とは常住とて絶へまなき事なり、此界は雁の秋來て春歸るが如く、常住になきとは事かはり、極樂の鳥は來るの歸ると云ふ事なき故常と云ふ、種々とは

(179)

(180)

品類を顯はすとて數々なる事を云ふ、奇妙とは淨土の鳥は娑婆の鳥とは事かはり、あやしく妙に勝れたる故、奇妙と云ふ、雜色之鳥とは慈恩の云く、毛色異故云雜、已上は衆鳥を標す。
 白鶴文鶴の如くにして其脚短き鳥なり。
 孔雀文尾の長さ六七尺綠色にて花彩あり云々。
 鸚鵡文人言を爲す鳥云々、五色なるもあり純白なるもあり。
 舍利文或は鶯鷺或は春鶯鳥と云ふ、至て目のすゞしき鳥なり。
 迦陵頻伽文別に翻名なし義を以て翻すれば、妙音鳥或は好音鳥と云ふ、至て聲の勝れたる鳥也、よく聲がよければこそ、卵を出ぬ先から其音已に衆鳥に勝るとあり、況や卵を出て、後に於てをや。
 其命之鳥文此は一身兩首の鳥なり、玄義一に云く、二頭一身乃至即二有情也、若一死即二共死云其命也、已上別名六種の中、前四名の鳥は唐土日本にもあれども、後の二は天竺にのみあり、此六種の鳥此界の鳥と極樂の鳥と同じきにはあらねど

も、少々似よりたる所ある故此土の鳥によそへて示し玉ふなり、譬へば風を知らぬ所で風と云ふ事を教るには木を動かして見せ、月を知らぬ所では團扇を以て知らせるが如し、風が一本の木の木のみ動かすものでもなく、團扇が光るものでも無けれども、一分似よりたる所ある故に譬とするが如きなり、此に六種を挙げ玉ふは一分にて實は無量百千の鳥あり、而も此方の鳥に勝れて種々の奇麗なる雜色の鳥なり、實際の現物は極樂に往生して見ねば知れぬ筈なりしが、今は義解の分齊を以て講ずるのみ、稱名怠らず唱へてさへ居れば追付け見らるゝ身の上となるべし。
 是諸衆鳥晝夜六時文此は上に述べし故今は略す。
 出和雅音文和とは鳥の聲の和らかなと云ふ事、雅とは訛りのなき正音を云ふ、此土の鳥の鼻のと云ふ様に聞悪い聲でない、聞て樂しき愉快な聲にて呂律亂れず調子相調ひたる故、和雅の音を出すどあり、音とはもの云ふ所は聲、あやある所は音、又譯を云ふを音と云ふ、餘は推して知るべし。

(181)

其音演暢文五根五力七菩提分八聖道分如是等法文三十七品等の法を轉づる鳥ぢやと云ふ事なり、其五根 根とは能生義にて一切善を生ずる基となる意、或は物の爲に動かされぬを根と云ふ、就之而有五一には信とて、物を疑はざるを云ふ、是佛法にはなければならぬものなり、二には精進根とて、懈怠せぬ事、三には念根、此は念求とて願ふ心を云ふ、四には定根とて、心浮動散亂せざるを云ふ、五には惠根、此は正邪を簡擇し正惠を修するを云ふ、五力とは上の五根を具へると、其力用を具するを力と云ふ、其力用とは業障を排ひ除くを云ふなり。
 此五根五力等の三十七品、佛法にはなければならぬ法と云ふに就て、人々我等は念佛するのみにて、夫等の法を具へもせまじと思はれん、依て一行の念佛者は既に具へ盡して居ると云ふ事を示さん、一に信根とは疑のなき事也、念佛は佛の本願なれば申せば往生と信じて疑はぬは、信根の最上と云ふもの、二に精進根とは其佛の本願念佛を怠らず進み唱ふる所の無間無餘長時修等に當る、是

念佛者の最要なる也、三に念根とは西方淨土へ往生せんと願求するを云ふ、四には定根、此は諸行の中で唯本願念佛のみ往生の決定業と決心して、心浮動散亂せざるを云ひ、五には惠根、諸行は非本願なれば往生不定なれども、此念佛は佛の本願十即十生百即百生とあるからには、得あるを取りて失あるものを捨てる所は、簡擇智惠の最上と云ふべし、若此五根を具せざれば往生叶はず、其所以は本願を疑ひ、念佛を怠り、西方往生を願はず、心散亂浮動して願非願の差別を知らぬ輩となれば、いかでか往生を遂ぐる理あらんや、我等は五根の名目をも知らねども、往生の爲につい念佛申て居るものには自然に具足して居るとは、實に喜ぶべき極み也、此五根を具するが故則ち五力を具するの力、其力用とは業障を排ふ、業障を排ふ故往生を遂ぐる事になる、されども是等は我力にて往生すると思ふべからず、念佛すれば自ら五根五力を具へさせて極樂へ迎へ玉ふ、皆願力の然らしむる所なれば、全然我力にてする往生に非ずと知るべし、又